

アンコールは異世界で

ヤマガミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

稀代のミュージシャン櫻崎シゲルは、死病によつて38年の生に幕を閉じた——かに  
思われたのだが。

『アンコールよ、櫻崎シゲル!』

弁天様の声に導かれ、たどり着いたのは不思議な世界。

男女比1:20!?原因不明の奇病が蔓延!?平均寿命は35歳?!

人類滅亡一步手前!絶望的な世界だけど、シゲルは知つたことじやない。  
「もう一回音楽がやれるなら、地獄だろうとご機嫌だぜ!」

どん詰まりの世界で、シゲルの快進撃が始まる。

※あんまり主人公が出てきません。別視点でストーリーが進むことが多いのでご注意下さい。

目

次

第一話 第二話 第三話 第四話 第五話 第六話 第七話 第八話 第九話 第十話 第十一話 第十二話

128 115 110 101 83 77 58 46 33 27 19 1

第十三話 第十四話 第十五話 第十六話 第十七話 第十八話 第十九話 第二十話 第二十一話 第二十二話 第二十三話 第二十四話 第二十五話

333 321 296 280 252 237 223 199 188 173 162 145 137

618	番外編	渋滯知らずの精靈馬	5 (完)	594	番外編	渋滯知らずの精靈馬	4	577	番外編	渋滯知らずの精靈馬	3	554	番外編	渋滯知らずの精靈馬	2	538
-----	-----	-----------	-------	-----	-----	-----------	---	-----	-----	-----------	---	-----	-----	-----------	---	-----



# 第一話

自殺行為です、と、その医者は言つた。

——貴方の身体は、もう立ち上がるのすらままならない。今生きていることですら奇跡的なのです。ステージの上でギターをかき鳴らし、歌を歌い続ける——それにどれだけエネルギーを必要とするのか、貴方に分からぬ筈もないでしよう。

あのホールに響き渡る声量を、今の貴方に出来ようはずもない。蚊の鳴くような声で歌が歌えれば、それで満足ですか。櫻崎シゲルは、そんな半端な音楽を許せるミュージシャンですか。

いや、そもそも会場までたどり着くことすら難しいでしよう。

断言します。生命維持装置から離れてコンサートに向かえば、一曲も歌い終えることもなく貴方は死ぬ。

医者として、みすみす死に行く患者を止めないわけにはいかない——

「ははは」

黙つて話を聞いていた患者は、枯れ木のような体をゆすって、楽し気に笑つた。  
「死に行く？おかしなことを言うなあ、センセイ」

「俺は『ライブ』に、行くんだぜ——」

18でデビューしてから、20年。思えば遠くに来た。

ひたすら音楽を愛し、情熱に浮かされたまま走り続けた結果、ミュージシャン櫻崎シ  
ゲルの名前は今誇張抜きに世界中に響き渡つている。

そう、とても有名なのだ。

世界的ミュージシャンとして。

——あるいは、末期の難病患者として。

音楽は俺にちよつとうんざりするほどの富と名声を与えてくれた。別にそんなもの  
を目當てに音楽をやつていたわけじやない。金や人気がなかろうと、音楽さえあれば俺  
の人生に不満はなかつた。

——だが、病は俺からその音楽を奪つた。

病院のベッドに縛り付けられて、治療だけが続く日々。

一番大事な物から奪っていくんだから、病つてのはタチが悪い。金なんか幾らでもやるから、死ぬまで音楽だけは奪わないでほしかった。

そうだ。

もう一度だけでもライブをやれるなら、俺は他の全てを諦めてもいい。

——命すらも。

どうやら治る見込みがないと分かつてから、俺は延々とそう訴え続けた。  
そして俺のしつこい説得に、遂に周囲の人間が折れる時がきた。

一曲限り。それが事務所と主治医との約束だつた。

たつた一曲のライブの為に一流のコンサートホールを押さえてくれた事務所には感謝しかない。その一曲すら歌いきれるか怪しいポンコツの為に、随分と骨を折ってくれた。

チケットの値段は、いつもの値段だ。音楽活動を休止する前の値段である。

くたばりぞこないのライブに大層な値段をつけるものだと笑つたら、社長に『櫻崎シゲルのライブチケットを、二束三文で売れるか』と笑い返された。ほとんど詐欺だ。もつともチケットにはきちんと『公演時間五分』の文字がプリントされているので、これを買うのは余程のバカだ。

そんなわけで売れ行きは大いに心配だつたが、当日でソールドアウトしたらしい。世の中バカばっかりだ。ありがてえ。

ともあれ、ラストライブへの道筋は立つた。

だが実際問題、俺には練習をする体力どころか、リハーサルをする体力すら無かつた。一曲を歌いきれるかどうか当日まで息があるかも大いに怪しい。

だが、諦めたくない。

音楽への執念だけを支えにして、俺はどうにかライブ当日を迎えることが出来た。

「ふう……」

ため息を吐いて椅子に凭れ掛かる。

ライブはまだ始まつていないというのに、恐ろしい疲労感だつた。

正味の話、半死半生の有様だ。全身が痛みを訴えている。

「センセイ、痛み止めもうちよい足せねえ？」

傍らには主治医のセンセイ。これもライブを行うための条件の一つだつた。

センセイは血圧計の弾き出した数値に目を眇め、ゆるゆると首を横に振つた。

「これ以上投与すると意識を保てません」

「じゃあ、しようがねえな」

「——シゲルさん。今からでも中止するわけにはいきませんか」

センセイが、これ以上ないつてくらい眉間に皺をよせ、何度も目になるか分からぬ提案をしてきた。

「耳タコだぜ、センセイ」

俺は肩を竦めて答える。この期に及んで退くつもりはなかつた。  
自分の体のことは自分がよく分かつてゐる。

ここで退けば、次は無い。冷たい確信があつた。

「……シゲル、無理すんなよ」

低い声が傍らから響く。

俺はそちらに視線を向けた。

あらゆる音楽ジャンルに手を出している俺は、決まつたバンドを組んでいない。故に公演の度にバックバンドの面子は変わる。

とはいへ、今日やるのはロツク。俺がガキの頃から親しんできた音楽で、公演回数も一番多い。

だから、そこにいたバックバンドも、馴染の面子だつた。

「次の機会を待つてもいいじゃねえか」

ドラムの武一が、低い声でそう続けた。

「そうつすよ、シゲルさん。おれ、シゲルさんとのライブなら、いつだってどこからだつて駆けつけますから。何も、今日にこだわらなくとも」

ベースのタツヤ青年が、泣きそうな顔で訴えてくる。

「声、でてないわよ。ファンに無様な姿を見せてもいいの？」

キーボードの麗が、厳しい口調で、しかし優しく諭そうとしている。

ありがたい。得難い仲間だ。

だが、俺は、

「——俺を誰だと思ってんだ。心配すんな、絶好調だぜ」

そんな誰が聞いても分かる強がりで、三人を一蹴した。

長い付き合いだから、こうなつた俺がテコでも動かないことを、こいつらは良く知つてている。

全員が揃つて諦めのため息を吐くのを確認すると、俺はポケットに入れてあつたお守りを引っ張り出した。

ずっと昔、水天宮で買った弁天様のお守りだ。友人の付き合いで購入しただけのお守りである。どうせ買うなら女の神様のお守りがいいや、という浅はかな理由で選んだものだつた。

後に弁天様が音楽の女神でもあることを知つてからは、ゲン担ぎに持ち歩いている。 よれよれになつたお守りを見ると、思わず笑みが浮かんだ。 この期に及んでも、『健康長寿のお守りにしておけばよかつたかな』などとは思わない。

音楽を選んでよかつた。悔いのない一生だつた。

そう思える。

だが――

御守りを握りしめ、俺は祈つた。心の底から神に祈るというのは生まれて初めてかも しれない。

無論、願うのは一つだけ。

――願わくば、ただこの一曲をやり切る力を。

『――少しだけ、サービスしてあげるわね』

女性の声が聞こえた、ような気がした。

「……？」

麗の声ではない。

辺りを見回すが、いるのは男性のスタッフばかりだ。

——幻聴まで聞こえるようになつたか。いよいよヤベエかな。  
俺は内心冷や汗をかくが、表にはださない。這つてもこの一曲だけはやりとげるつもりだつた。

スタッフの一人が、時計を確認して口を開く。

「時間です。シゲルさん、」

——行けますか？

その言葉は飲み込んだようだが、表情を見れば櫻崎シゲルを心配しているのは明らかだつた。

俺は笑みを浮かべる。

「おうさ」

行けるに決まつてゐる。

ライブが待つてゐるのだから。

ステージに上がったは良いものの、正直に言えば死ぬ寸前だった。

脚は鉛よりも重く、一步踏み出すことに眩暈がした。全身の苦痛はピークに達してい

て、息をするのも精一杯で、一秒ごとに神経がノコギリで挽かれているようだ。

どうにかギターを構えようとして、愕然とした。

指先が細かく震える。弦に狙いが定まらない。

あれほど愛し、あんなに練習した、ギターが弾けない。

半身のように一緒にいたのに。

どんな肉体的な苦痛よりも、その事実が死ぬほど悲しかつた。

——ちくしょう。

絶望が全身を浸す。足から力が抜けていく。

段取り通りなら、もうじきスポットライトが俺を照らすはずだ。そこから演奏がスタートする。

だがこの分では、スポットライトが照らすのはぶつ倒れる俺の姿だ。

唇を噛む。生ぬるい血が滲んだ。

——結局、最後の一曲すら弾けねえのかよ。

意地と一緒に膝が折れたのは、スポットライトが俺を照らす、まさにその瞬間で——

奇跡が起きたのも、その瞬間だつた。

「――？」

降り注ぐ光と共に、ポケットの中に妙な温度を感じた。

陽だまりのような穏やかな暖かさだつた。それが、どんどん体中に染みわたつてくる。

同時に――全身の痛み、関節の強張り、目の霞み――あらゆる心身の失調全てが、熱に溶かされるように消え去つた。

萎えた足に、力がみなぎる。

――魔法のように。

震えが止まつた。

ギターが弾ける。

理由はさっぱりわからないが、そんなことはどうでもいい。

俺の最期の一曲に選んだのは、デビューカーの『Everybody』だ。一番売れた曲ではないが、一番思い入れのある曲だつた。

スラップ奏法。指先が神がかつた滑らかさで動く。難易度の極めつけに高いイント口だが、何の問題もない。

俺の作つた曲だ。俺が弾けないワケがない。

正体不明のエネルギーが、後から後から湧き上がつてくる。心から、全身の隅々まで行き渡つたそれが、ギターの音に力を与える。

超絶技巧を目の当たりにした観客たちの歓声が響き渡る。ドームを揺るがす大音声。負けじと歌声を上げる。

素晴らしい声が出た。マイクなんか要らないんじやないかというほどの、どこまでも伸びる声。

全盛期の声だ。

間違いない。今の櫻崎シゲルは絶好調だ。

夢見心地のライブが始まつた。

約束の一曲は、熱狂的に、瞬く間に過ぎ去った。

万雷の拍手もやがて収まる。

一呼吸置いてから、俺はマイクに口を近づける。

演奏中の熱狂が嘘だつたかのように観客は静まり返っていた。  
言いたい言葉が次々と浮かんできた。  
来てくれてありがとう。

聞いてくれてありがとう。

こんなぼつたくりのチケットを買つてくれてありがとう。

浮かぶのは、そんな感謝の言葉ばかりだ。

だけど口に出たのは一言だけ。

俺は、ずっと――

「――逢いたかつたぜえええええツ！」

――大歓声が返ってきた。

俺は口上を続ける。

「医者は言つた。『一曲限りです』と！そのことを伝えたら、社長はなんて言つたと思う！」

「たつた五分で大儲けだぜ。ボロい商売だ』だとよ！」

観客の笑い声が聞こえる。

「だがよお、社長の思う通りにやさせてやらねえ！ そうだろお前ら！？」

『そうだー！』

力強いレスポンスに、嬉しくなる。

ファンの感情が、直に叩きつけられる。これだからライブはやめられない。

そうだ、だから――

「だから――一曲目だ！ 行くぜ、『ロケット』！」

――たつた一曲じや、物足りない！

バックバンドを振り返る。

困惑している。元々一曲の約束だつたからだ。

だが、空白は僅かな時間だけだつた。

武一のドラムがビートを刻みだす。

心臓が動けば、手足も動く。一糸乱れぬ見事な演奏が始まる。

俺はにやりと笑つて、イントロにギターを乗せた。  
ライブは、これからだ。

「楽しんでいこうぜえ！」

たつぱり一時間のライブを終えて、シゲルは舞台袖に引っ込んでいた。

「シゲル！ 最高だつたぜ！」

「余命僅かとか絶対嘘でしょシゲルさん！ 完全復活じやないですか！」

「本番までは三味線弾いてたつてわけ？ ギタリストのくせに」

バックバンドの面々が喜色満面でシゲルを取り囲む。誰も彼も紅潮した顔で、稀代のミュージシャンの復活を心から喜んでいた。

シゲルは不敵に笑つて見せる。

「喜ぶには、まだ早いぜ。あの声が聞こえねえのか」

観客席から鳴り響くアンコールの声は、一向に止む気配がない。櫻崎シゲルの最高のパフォーマンスを目の当たりにして、ファンたちは熱狂状態にあつた。

「……だけど、身体は大丈夫なのかよ。一時間前までは息も絶え絶えだつたじやねえか」  
　　ドラマードの言葉に、シゲルは腕組みしてふんぞり返つてみせた。

「俺は本番に強いんだよ。な、センセイ。櫻崎シゲル、見ての通り全盛期だぜ」

「——」

舞台袖から食い入るようにシゲルの様子を観察していたその主治医は、今はぼろぼろ泣いていた。

「……なあーに泣いてんだよ、センセイ」

「涙も出る。奇跡を目の当たりにしているのだから」

主治医は眼鏡をはずして涙を拭うと、何かを諦めた目になつた。

「貴方の歌は、私を主治医からただのファンに戻してしまつた。もう私には、貴方を止めることは出来ない」

「元から俺は誰にも止められねえぜ。ずーっとそうやつて生きてきたからな！——よおし！」

シゲルは拳を掌に打ち付けた。乾いた威勢のいい音が鳴る。

「五分休憩したらアンコールだ！氣合入れてけよ、お前ら！」

「おう！」

「了解よ」

「任せといて下さい！」

頼もしい三人の答えに、シゲルは安心して椅子に凭れ掛かる。

——凭れ掛けた瞬間、

(——あ)

(——終わりか)

奇跡が売り切れたのが、分かつた。

「しかし、今日のシゲルはすげえよ。歌もギターもキレイッキレイだぜ」

「間違いなく最高のパフォーマンスね」

「ええ、ほんとに。——シゲルさん、今日がラストライブなんて勿体ないですよつ。身体きつちり治して、またやりましょう。俺、シゲルさんのライブ、もつともつと見てみたいですよ！」

熱っぽく語るタツヤ青年の瞳は、憧憬にきらきらと輝いている。

「ああ——そう、だな」

楽しそうに笑みを浮かべたシゲルは、眠るように目を閉じる。

「次は、どんなライブに、しよう、か、な——」

次のステージに思いを馳せて——夢見るよう、穩やかに。

「——おい?」

「シゲル……?」

「シゲルさん?」

「——! 退きたまえ!!」

櫻崎シゲル。享年38歳。

日本を代表する偉大なミュージシャン。彼が死に瀕しながらも決行した最後のライブは、後世まで語り継がれる伝説となつた。

ライブ後の控室で椅子に凭れ掛かつて絶命した彼は、その時既に死後硬直を起こして  
いたらしい。

——死して尚彼を動かしたものは、いったい何だつたのか。  
観客の声援？音楽への情熱？あるいは神の奇跡？

最早知るすべは無い。唯一それを語れる者は、もうこの世にはいないからだ。  
だが——

人々は、生涯を音楽に捧げたこの陽気な天才を。  
その数多の名曲と共に、いつまでも愛し続けた。

## 第二話

彼の意識は、白い空間を漂っていた。

——なんだ、此処。

上下の感覚も定かではない。しかしごるりと辺りを見渡せば、星のような輝きが、道するべのようすに彼方に続いているのが見えた。

何とはなしに、その方向に進んでみる。

一つ目の輝きに辿り着くと、その輝きは一層強くなり、あたりに懐かしい光景を浮かび上がらせた。

頬を紅潮させた小学一年生の姿が見える。幼い手でしつかりと搔き抱いているのは、父から貰つたお古のギターだ。

見覚えのある顔をした子供だった。

——何だつて、ギター覚えようとしたんだつけな——

彼は考えた。きつかけは些細な事だつた気がする。テレビで見たロックバンドがカツコよく見えたとか、当時流行つていた漫画の主人公がギターを弾いていたとか、確かその程度のものだ。

だけど彼はギターにのめり込み、音楽に心を惹かれていた。他の何も目に入らないくらい音楽を愛した。

それは、何故か。

同年代の友達がハマっている漫画、アニメ、ゲーム——そんなのが一切目に入らないほど、楽しかったからだ。

それだけのことだ。

次の輝きにたどり着く。

浮かび上がった光景は、中学校の文化祭だ。体育館で行われた、初めてのライブ。拙い演奏だった。今の彼からしてみれば、まさに児戯だ。当時はベースを弾けるメンバーがいなかつたので彼が担当している。ギターに比べれば一段も二弾も落ちる演奏だが、本人は実に満足げだ。

何しろ——文句の付けようもないほど、楽しかったから。

次の輝きにたどり着く。

高校二年生の夏だ。

路上で弾き語りをしている。最寄りの駅の、割と寂れたアーケード街に一店だけあつた楽器店の店主と意気投合し、客引きがてらスペースを貸してもらつたのだ。演奏するのはギターが一番多かつたが、興味の湧いた楽器は手あたり次第に触らせてもらつた。

楽しかつた。

定期的に行われる路上ライブはどんどんと観客を増やしていき、最終的に警察官に注意される規模になつたところでお開きとなつた。その後も彼はまったく憲りず、あちこちで弾き語りをしたりライブハウスを借りたりしているうちにスカウトの目に留まることになる。

次の輝きにたどり着く。

初めてのレコードティング。

次の輝きにたどり着く。

プロとしての初ライブ。

次の輝きにたどり着く――

どれもこれも音楽に関する記憶ばかりで、どれもこれも輝いていた。

だから――

「――そうだ。俺は櫻崎シゲルだ」

最期のライブにたどり着いたとき、彼はすっかり自分を取り戻していた。  
シャツの上に着古した革ジャンをひつかけ、くたびれたジーンズを履いて、そして使  
い込まれたギターケースを担いでいる。

いつもの櫻崎シゲルが、白い空間にしつかりと立っていた。

『――流石ね、シゲルちゃん。こんなに早く『自分』を取り戻した魂は初めてよ』

どこからともなく声が聞こえた。

美しい音色だつた。今まで聞いたことがないほど――いや。

ごく最近、一度だけ聞いたような――

「……アンタ、誰だい？」

シゲルが問う。

『あら、つれない返事。貴方もよーく知つてははずよ?』

「知つてる? こんな天使みたいな声の持ち主を、俺が忘れるはずが――  
ジーンズのポケットが、きらりと光つた。

「……?」

首を傾げたシゲルは、ポケットに手を突っ込む。

触りなれた感触があつた。

弁天様の、御守り。

「……なるほど。天使じゃなくて、女神様か。道理でいい声してら  
『うふふ。天下の櫻崎シゲルのお褒めに預かり光榮でござりますわ』  
ころころと笑うその声が、耳に心地いい。

考えてみれば、突如体調が戻つたのはこの声が聞こえてからだつた。  
「もしかして最期のライブ、手を貸してくれた?」

『余計なお世話かも、と思つたんだけれどね』

「とんでもない。感謝感激雨あられ。何かお礼をさせてもらいたいくらいだぜ」

『あら、ホント?』

「もちろん。俺にできることなら」

『嬉しい! 実は貴方の魂をここに呼び寄せたのって、頼みごとがあつたからなの』

「ありや、そうだつたの? えつと、俺はくたばつちまつたみたいなんで、豪華なお供え物をするとかはちよいと無理だと思うんだが……」

『いらないわよ、そんなもの。……いやちよつとは欲しいけど。ちよつとだけよ』

「はあ」

『頼み事つていうのはね、貴方に救世主になつてもらいたいの!』

「きゅ、救世主?……えーと、キリストさんの真似をしろつてことか? 迷える子羊を救う、つてのは、俺にはちよいと向いてないような……信心深くもないし」

『キリストみたいに復活してもらうのは間違つてないわ。貴方の生まれた世界とは別の世界になるんだけれど』

「別の、世界?」

『ええ。力ある神は、世界を跨いで遍在しているもののなの。わたしもいくつかの世界に存在しているんだけれど——そのうちの一つが、今とても逼迫した状況にあるの。そこ

を貴方に救つてもらいたい、つてわけ!』

『はあ……いや、そりやおれもできるかぎり頑張りたいとは思うけど、身体もボロボロだし、世界を救うなんて大層な真似ができるかどうかは……』

『身体に関しては問題ないわ。っていうかもう貴方って死んじゃってるし、向こうの世界用に身体は捨ててあるから安心して。私好みで百年動くスーパー・ボディだから。それに、世界を救うつてことに関しても貴方なら大丈夫! っていうか貴方以上の適役は——あつ! ヤバ!』

突如、弁天様の声が上ずつた。

「どうした?」

『——見つかっちゃった! めん、巻きでいくから!』

「見つかつたつて、何に——』

『分からず屋に、よ! んもー、普段無気力なくせにこんな時だけ——あつダメだほんと時間無い! ケツカツチンつてやつね!』

弁天様の焦燥と共に、周囲に光が溢れていく。白を塗りつぶすほどの光に、シゲルの身体がかき消されていく。

——『移動』が始まっているのが、シゲルは感覚的に理解できた。

しかし、大事なことが聞けていない。シゲルは声を張り上げる。

「べ、弁天様や！結局のところ俺は何をしたらいいんだ?!」  
答えは即座に返ってきた。

『簡単な事よ！そもそも貴方が出来ることなんて一つしかないじゃない！』

アンコールよ！櫻崎シゲル！

貴方の音楽を、もう一度――

沈んだ世界に、響かせて！

その言葉を最後に、シゲルは眩い光に飲み込まれた。

## 第3話

安アパートの一室で、『昏睡病の兆候アリ』と書かれた診断書を、一ノ瀬和美はさしたる動搖も無く眺めていた。

来るべき時がきたな、という感じだった。二十二歳というのはやや早いが、別段驚くほどのことでもない。男性は十歳にもなれば軒並み発症しているのだから、御の字といつたところだろう。

昏睡病。現代人の死因ぶつちぎりのN O 1。二百年前の悲惨極まる世界大戦の最中、突如湧いて出た死神。

その正体は、生きる力そのものを奪う原因不明の氣鬱の病だ。世界大戦を終焉に導いたこの死神は、今人類そのものを滅ぼそうとしている。

罹患率において比肩するものは無く、防ぐ手立ても判明していない。1対20という異様な数値に陥っている男女出生比率も、この病が原因だとされている。

医者たちは小難しい理屈でなんとかこの病を解明しようとしているようだが、無駄な

努力という気がする。

どう考へても、昏睡病は理論や常識を超越したところにある。細菌でもウイルスでもない。女性も男性も、遺伝子に変異は起きていない。

こんな病が存在するはずがない。

比喩ではなく、本当に死神の手が人類に伸びているのではないだろうか。

——とはいへ、人類の全員があつという間に昏睡病に倒れるわけではなく、その発症タイミングにはかなりの個人差が存在する。

確固たるエビデンスがあるわけではないが、何か熱中できることがある人間は発症が遅いらしい。ゆえに政府は『国民総趣味人化』なるけつたいな政策を打ち出してまで一人が最低一つの趣味を持つことを推進しているが、成果が上がっているようには見えない。

強制されている時点で趣味ではないし、趣味人が昏睡病発症が遅いというのも、趣味に没頭するような気力が残っているだけなのではないだろうか。

趣味があるから昏睡病にならないのではなく、昏睡病から遠いから趣味に打ち込めるのだ。

——最後に笑ったの、いつだつたつけな。

少しだけ考へてみたが、思い出せなかつた。

——なら、怒ったのはいつ？悲しんだのは？  
思い出せない。

高校を卒業してから一年が経つ。その一年で、心が動いた記憶が無かつた。

在学中についたかといえばそれも怪しいが。

それが別段珍しいというわけでもない。右を見ても左を見ても、今の世界はそんな社会人ばかりだ。

時計のアラームが、13時を告げた。

直ぐに停止させ、部屋の片隅に立てかけてあるヴァイオリンケースを手に取る。  
日課の時間だ。

今日は『芸術の日』。蓬莱における数少ない祝日の一つだ。

日曜日と祝日は、13時から歩行者天国でヴァイオリンの演奏をする——学生時代から変わらない習慣だった。

別に楽器の演奏が好きなわけではない。国民総趣味人化が実施されてから、楽器の購入にあたって補助金が降りるようになつたのだ。今音楽を『趣味』にしている人間の大半がこの程度の理由だろう。

——昏睡病が普通に進行すれば、このルーチンワークも数年で終わりかな。  
そんなことを考えるが、別段思うところはない。心は凧いだまま、さざ波一つ立ちは

しない。

いつものように右足から靴を履き。

いつものようにアパートのドアを開け。

いつものように歩行者天国へ向かって。

——いつもの定位置に、見たことの無い人がいた。

特徴的な人だつた。

まず、背が高い。

180センチ弱はあるだろうか。成人女性の平均身長が160センチほどであることを考えれば相当な高さだ。バスケットボールなんかを趣味にすれば優秀な選手になりそうだ。

次に、肩幅が広い。

水泳を趣味にしている人の中には肩回りの筋肉が発達している人もいるが、それとはまた違った筋肉のつきかたをしているように見えた。

——そして、胸が小さい。

小さい、というのには少々語弊があるだろうか。胸囲はきっとかなりの数値だと思わ

れるが、凹凸にかけているのだ。あまり見たことの無い体つきだつた。がつちりしていつて、逞しいと言える。

最後に、顔立ちが凜々しい。

極めて整つた、信じられないくらいの美形だけど、美女というのとはちょっと違う。じつと見ていると、不思議な気持ちになつてくる。

ばーっと見とれないと、その人が口を開いた。

「なあ、お嬢さん。ここ、演奏しても大丈夫?」

——失礼な話だが、目を見開いてしまつた。

『声が低い』。ハスキーボイスとか、そういうレベルの声ではない。ハツキリと低い。

まるで、現代では失われて久しい『成人男性』のように——

「……参つたな。場所代とか必要だつたりするのかい? 生憎一文無しなんだが』

その人は困つたように眉尻を下げた。

わたしは慌てて口を開く。

「い、いえ! 誰にでも無料で開放されます!」

自分のものとは思えないくらい大きな声がでて驚く。

「お、そうなの? そりやよかつた」

その人はそういうと、見たことの無い楽器をケースから取り出した。

弦楽器だ。ヴァイオリンに似ている。

ひどく優しい目でその楽器を眺め、心底嬉しそうな笑みを浮かべてから、その人は楽器を抱きかかえた。

精妙な指捌きが、魔法のように音を紡いでいく。

今まで聞いたことのある音楽とはまるつきり別のメロディだ。  
激しく、賑やかで、聞いていると何だか――

とつても、『楽しい』。

今まで一度も感じたことがないくらい、胸が高鳴つていく。

ぎゅっと胸を押された私は、笑みを浮かべたその人が、大きく口を開くのを見た。

## 第4話

櫻崎シゲルは、気が付けば見知らぬ公園のベンチに横たわっていた。

ナップザックを枕にして、ギターケースを抱きかかえながら。

イマイチ状況の把握できないシゲルは、身体を起こすと何気なくポケットに手を突っ込み、そこにお守りがあることを確認し――

覚えのない手触りに、眉を顰める。

御守りとは別に、何かがポケットに突っ込まれている。

「……なんだ？」

取り出してみれば、何の変哲もないメモ用紙であった。走り書きにも拘わらず、素晴らしく上手いと分かる字で、何かが書き連ねてある。

シゲルちゃんへ。

時間が無くて説明不足になっちゃってごめんなさいね。とりあえず、近くにあった貴方のギターと荷物を一緒に送つておきます。身体の方はばつちり健康にしておきます。っていうかまったく別の身体なので、しばらくはちょっと違和感があるかも知れないけれど、じきに慣れると思います。

それと、伝えきれなかつた注意点を幾つか書いておきます。

まず、そちらの世界は極めて男女比が偏った世界です。昔は違つたんだけど——今は具体的には男1対女20くらいね。ついでに今は男も女も、シゲルちゃんのいた世界に比べるととっても大人しいの。だから前の世界のノリそのまんまで生きてると、ちょっと面食らうこともあるかも。

犯罪率なんかも滅茶苦茶低いわ。治安、っていう点では間違いなくぶつちぎりで勝つてるから、事件に巻き込まれる心配なんかはしないでいいと思います。

あと言語に関してだけ、その島でならおおむね問題なく日本語が通用すると思います。といつてもその島国は蓬萊っていうから、蓬萊語だけどね。

そうそう、大事な注意点。

私がシゲルちゃんをそつちに送つた、ってことは口外しないでほしいの。神々にも色んなしがらみがあるものだから、禁則つてやつなのよね。てなわけでシゲルちゃんの素

性に関しては何とかうまくまかしてちようだい。記憶喪失とかね。その世界は男性には甘々だから、そんな感じのテキトーな理由でも多分大丈夫。……だと思います。——で、注意点というか、大問題が一つ！

そちらの世界の人間は、皆潜在的にある病気を抱えてるということ！

これが極めて厄介で、悲しいことに男性は20歳を待たずして軒並みこの病に倒れます。発症すると、ほぼ死と同義です。女性の方は少々猶予があるのですが、それでも平均して40歳ほどで限界が来ます。生命維持装置に繋げば死までの時間を延ばすことはできますが、それだけです。

でも、この病に対する特効薬こそ貴方なの。  
とにかく貴方の音楽で——

文字はそこで途切れている。おそらくこのメモを書いている最中にも、何かの邪魔にあつたのだろう。

メモを読み終えたシゲルは、枕になっていたナップザックを眺める。

「……」れ、俺の荷物じやねえぞ」

病院から直行したシゲルの荷物はギター・ケースだけだ。どうやら弁天様は、シゲルの最も近くにあつたバッグをシゲルのものと勘違いしたらしい。おそらくはベースのタツヤ青年のものであろうそれを、シゲルはしばしの逡巡の後に担ぎ上げた。

落とし物として交番に届けても、持ち主の元に返る確率はゼロだ。それなら有効活用させてもらつたほうが良い。

「しかし、結局俺が何すりやいいんだかイマイチわかんねえんだが……ええと『とにかく貴方の音楽で』つて書いてあるんだから——あれだな。うん、前と同じだな」

シゲルはやりと笑う。

「好きに音楽をやって、皆に聞いてもらえばいいんだろ!」

即座に立ち上がりつたシゲルの腹は既に決まつていて。

シゲルは難しいことを考えない。素寒貧で宿も無いが、健康な身体と楽器さえあればどこでだつてご機嫌だ。

何しろ、もう一度音楽ができる。

それだけで、シゲルは踊り出したいような気分だつた。

「ま、ちよいと稼がねえと飯も食えねえしな。つてことでまた頼むぜ、相棒」ギター・ケースに語り掛けると、シゲルは見知らぬ土地に意気揚々と乗り出していつた。

人通りの多そうな場所を探して歩いていたシゲルは、ほどなく『神楽町歩行者天国』の看板を見つけた。

ホコ天。人がいないうヶが無い。あるいは弁天様はここを狙つて送り込んだのかもしれなかつた。シゲルは足取りも軽く歩行者天国へと乗り込み――

「なんだ、こりや……」

困惑した。

それはまるで、葬式のような歩行者天国だつたから。

目抜き通りなのだろう。道は極めて広く、人通りも多い。手作りと思しきアクセサリーを売っている者もいれば、パントマイムをしている者もいる。樂器の演奏をしてい

る者もちらほらと見受けられた。

日本と違つて、路上販売などの制限はないらしい。ちらほらと警備員らしきものの姿は見えるのだが、売り子に注意をする様子はない。

これほどの規模の歩行者天国は、日本ではあまり見なかつた。ちょっとした祭りの域に達している。

——にも関わらず、ここには笑顔と喧騒が無かつた。

弁天様のメモにあつた通り、見渡す限り女性ばかりだ。それも見目麗しい女性が多い。だというのに誰も彼も無表情で、マネキンの街に迷い込んだかのような不気味さがあつた。

アクセサリーを売るものは呼び込みの声を上げることもなく、ジャグリングをしている者の動きは淡淡としていて、観客をまるで意識していない。楽器を演奏している者たちも同じで、ひたすら音を外さないことを重視しているようだつた。

直ぐ近くのフルート奏者の音に耳を傾ける。

聞いたことの無いクラシックな曲だ。しかし、メロディは良い。

一定の抑揚で音が鳴り響いている。難しい運指も問題なくこなせている。  
しかし、シゲルは悲し気に顔をしかめた。

——本来、未知の音楽に触ることはシゲルにとつて大きな喜びである。知る人ぞ知

る民族音樂を求めて秘境のような場所を旅したことは一度や二度ではない。

だが、この曲はまるでつまらなかつた。

非常に整つた、美しいメロディラインをしているにもかかわらず、である。理由は明らかであつた。

まつたく不思議なことだが——この奏者は、これほどの技量を持ちながら、音樂のことが少しも好きではないのだ。

音色からそれが伝わってきて、シゲルは悲しくなる。奏者がこれでは、いかなる音樂も虚しいだけだ。

同時に、理解した。

——なるほど、理由はわからんが確かにこれは世界の危機だ。

演奏者が音樂を楽しめないなんて、これ以上の悲劇はない。

女神は言つた。『アンコール』だと。

櫻崎シゲルの音樂を、もう一度世界に響かせよと。

ならば、やることは一つだつた。

いや、仮に女神の言葉が無かつたとしても、シゲルのやることは変わらない。

この静けさではアンプもスピーカーも必要ない。大き目のエレアコなので、音量は十分だろう。

ヴァイオリンケースを持つていた近くの女性に尋ねてみれば、演奏に許可は要らないらしい。

お膳立ては整つていた。

ギター・ケースを開ければ、相棒の姿が現れる。

万感の思いがあつた。

だが、様々な感情が頭を過つたのは一瞬のこととで、心の奥からあふれてくるのはただ

ただ『喜び』であつた。

——ああ。音楽が、またやれる。

シゲルの感動とは裏腹に、周囲の奏者は相変わらずつまらなそうに演奏を続けてい  
る。

まったくとんでもないことだつた。音楽のイロハのイを教えてやらなくてはならな  
い。

シゲルはにやりと笑うと、

「——音楽つてのは、」

愛しのギターを、高らかに歌わせた。

「笑顔でやるもんさ！」

弦を弾き、旋律に歌を乗せる。鍛えた技と抑えきれない情熱が、櫻崎シゲルの音楽を創り出していく。

——なんて、なんて楽しいんだ！

シゲルは殆ど陶酔していた。

億を優に超える財産も、世界的なミュージシャンとしての名声も、全て前の世界に置いてきてしまった。

だが、まったく惜しくない。

素寒貧だろうがホームレスだろうが、健康な身体と音楽さえあれば、櫻崎シゲルは機嫌なのだ。

通りを行き交う人々は悉く足を止め、夢遊病者のようにシゲルの元へと集まつてくる。

誰も彼も目を見開き、ついでにぽかんと口を開けている。

歌つて いる曲名は『いつの日か』。

最期のライブで弾きそこねた曲だ。音楽とファンへの感謝を籠めて作った曲だったのだが、アンコールで演ろうとしたのが仇となつた形だつた。

この際、こちらの世界で仇を取らせてもらうことにする。

世界も超えよと言わんばかりに、歌に力を込める。

我ながら全く素晴らしい声が出て、ますます笑みが深くなつた。

一曲分の時間は瞬く間に過ぎ、ギターが最後の音を鳴らし終える。

シゲルは満足げに頷いた。おおむね納得のいく演奏だつた。肉体は少々変わつていたが、声はそのままだしテクニックも据え置きだつたらしい。とはいえた指の長さなどが少々変わつてるので、そのあたりは徐々に慣れていく必要があるだろう。しかし、妙に静かだつた。

辺りを見渡してみれば、シゲルを中心に異様な分厚さの人垣が形成されているものの、観客はしわぶき一つ立てていない。

——考えてみれば、通りで演奏されている曲はクラシックじみたものばかりで、シゲルのポップスはひどく浮いていた気がする。もしかすると、これはこちらの世界では全く新しい音楽なのかもしない。

——やべーな。もしかして今の曲すげー場違いだつたか？ジャズとかの方が良かつた？

と、シゲルは一瞬考え込んだが、

——ま、今はポップスの気分だし！やりたい曲やるか！

あつさり思考を放棄して、次の曲に取り掛かるうとする。この男は、いつだって好きな音楽をやるだけなのだ。

拍手の音が聞こえたのは、その時であつた。

ヴァイオリンケースを持つていた女性が、目をキラキラと輝かせ、ぱちぱちと懸命に手を叩いている。

——頬を紅潮させ、笑みを浮かべて。

その拍手を皮切りに、観客たちは一斉に手をたたき出した。  
万雷の拍手が目抜き通りに響き渡る。

少々面食らつたシゲルだつたが、すぐににやりと笑つて観客たちに手を振つてみせ  
る。

「わはは、センキュー・センキュー！」

「あ、あの！おひねりは、この楽器ケースに入れればいいんでしようか？」

一人の女性が振り絞るように声をあげる。

「おお、そうそう。気持ちだけでも入れてくれると嬉しいぜ」

「わかりました！」

女性はそういうと、財布をケースの上でひっくり返す。

硬貨と紙幣が小山をつくつた。

シゲルは目を丸くする。

「……へ？」

思わず女性の顔を見つめるが、女性は頬を赤らめて首を傾げた。

——え？これ大した金額じゃないの？財布丸ごとといったように見えたけど。

観客たちは驚くべき行儀の良さでもつて列を作ると、次々とシゲルのケースに有り金  
を突っ込んでいく。

「——ま、待つた待つた！」

呆気にとられていたシゲルだつたが、流石に五人目あたりで正気に戻り、慌ててギ

ターケースを閉める。

「お嬢さんがた、こりやおひねりつてレベルじやねーぞ！おーい財布ひつくり返してつた奴ら戻つてこい！用法容量を守つて正しい金額を入れろ！」

「すみません、今はこれ以上は持ち合わせが無くて……」

「逆うー！こんなもんはな、ジュース一本分ももらえりや十分なんだよー！」

渋る観客を納得させるのには、かなりの時間を要した。

## 第5話

夜の砂浜に立ち尽くす女性を、堤防の街灯がぼんやりと照らしている。

女性は海の彼方を眺めて微動だにしない。

夜闇を映した暗い波が、女性の足元を舐める。

それでも女性は佇んだまま、ただ昼間の出来事を思い出していた。

『唄子さん。残念だけど、やつぱり今回で――』

――唄子は自らがパーソナリティを務めるテレビ番組『唄子の部屋』の本格的な打ち切りを、蓬萊TVの遙局長直々に通達された。

原因は視聴率の低迷。ぐうの音もでない正論だ。

遙局長は謝罪と共に頭を下げていたが、唄子こそ申し訳ない気持ちで一杯だった。

二年前、『唄子の部屋』は昏睡病の打破という目標を掲げ、鳴り物入りで放映が開始された。当時歌手として『天才』の呼び名も高かつた神奈唄子をメインパーソナリティに迎えての、政府肝入りの一大プロジェクトである。

しかし、結果は振るわなかつた。

当初、唄子は音楽の力を信じていた。当時18歳だった唄子は確かな情熱を胸にして、自らが愛した音楽を蓬萊の人々に伝えんと精力的に活動した。実際に、放送が開始されてから数週間の間は、昏睡病を発症する患者が僅かに減ったというデータもあつた。

だが、やはり昏睡病は手強かつた。

効果らしきものが見えたのはごく僅かな期間だけで、関係者の喜びをあざ笑うかのように昏睡病患者は増え続け——唄子は半年経つとスランプに陥り、一年経つた時には情熱を失い、二年経つた今は笑い方さえ忘れてしまつた。

加速度的に進んだ昏睡病は、いまやレベル2に達している。

——そもそも、どうして音楽の道を志すようになつたのか、それさえももう思い出せない。

「——かなしい、な」

唄子はぼつりと呟いた。

番組の打ち切りが決定したことが悲しいのではなかつた。

かつてあれほど情熱をもつて臨んでいた歌が、今は『さほどでもない』ことが悲しくて——くやしい。

遙局長は、後進への歌唱レッスンの為に今後も唄子を雇い続けると言つてくれたが、

唄子はその場で断つていた。

レッスンも、もうおしまいだ。歌を好きではないものが、歌を教えるなど——かつて

自らが愛した音楽への冒涜だとと思うから。

唄子はしばしの間目を閉じると、すうつと息を吸つた。

潮風は喉に悪いというが、この期に及んでは関係ない。

唄子は朗々と歌い出した。

子供の頃から大好きだった、思い出の曲を。

——誰も聞いていないし伴奏も無い。でも、きっと私にはお似合い。

『夜霧にけぶる、三日月の——』

——これが私の、最後の歌。

『幽かな光をしるべにし——』

——音楽への別れを告げる歌。

『——朝の陽ざしを、探しに行こう』

美しい歌声が響き渡る。

だが、前向きな歌詞も、唄子の類稀な歌唱も、夜の海が全てを飲み込んでしまう。夜空の雲はあまりに分厚く、砂浜には星の光すら届かない。たつた一曲だけのコンサートは、ほんの数分で終わってしまう。

「ああ——」

吐息と共に、涙が一滴だけこぼれた。

別れの涙だった。

もう自分は、音楽に携わることはないだろう。唄子にはそんな虚しい確信があつた。

——突如、拍手の音が背後から響くまでは。

唄子が慌てて振り返れば、堤防に腰かけている人影が一つ。

「痺れるソプラノだな、お嬢さん！」

楽しそうに語り掛けたその人は、それこそ『痺れる』声をしていた。

唄子は慌てて涙を拭うと、しげしげとその人影を眺める。

逞しい体つきに、耳に心地よい低い声——信じがたいことに、『大人の男性』の特徴を備えている。

「だ、男性のかた、ですか？」

まさかと思いながらも恐る恐る尋ねる唄子に、その人は当然のように頷いてみせた。

「おう。正真正銘の男だぜ。——音楽好きの、な」

言うや否や、彼は堤防から飛び降りた。

危ない、と思わず声が出そうになる。三メートル近い高さの堤防だ。下が砂浜だとはいえ、貴重な男性に飛び降りさせていい高さではない。

しかし彼は軽やかに着地を決めた。

逞しい所作だった。私の常識の中の男性とは、なにもかもが違う。

なんらかのケースを持つたまま大股で歩みよる男性が、気軽な口調で語り掛けてく

る。

「今になんていう曲なんだい？」

「え、あ、は、はい！『夜霧』と言いまして、14世紀半ばにエウロペの鬼才ヒルトスターインが残した一曲です！ひ、ヒルトスターインはこの『夜霧』を一晩で書き上げたという逸話を残しております——」

緊張のあまり、聞かれてもいないうんちくを延々と話してしまう。絵画ですら見たことも無いほど美形の男性を前にして、唄子は半ばパニックに陥っていた。まとまりのない長広舌はひどく鬱陶しかつたろうに、赤ら顔の彼はにこにこと機嫌よく相槌を打つてくれた。

「なるほどなあ。——いい歌だつたからチップを渡したいんだが、ちよいと酔い覚ましの散歩に出てたところでな。財布をホテルに置いてきちまつた」

「ほ、ホテルにお泊りなんですか？男性なのに？！」

「おう。そこのビジネスホテル。昼間にホコ天のネエちゃんに場所だけ教えてもらつてよお、安めのビジネスホテルだつてえから期待してなかつたんだが——晩飯がちゃんとついて酒も出たのよ！それが結構いけたんだ、これが！」

受付嬢にはツチノコみるような眼で見られたけど、と言つて男性は笑う。心を溶かすような笑みだつた。

「それにしても、ポケットに小銭くらい……あー、やつぱりねえや。わりイな」

「い、いえ！お気持ちだけで結構ですから！」

「そう言うなよ。お嬢さん、プロだろ？」

「——え？」

「お嬢さんの歌は、音楽で飯を食つてるヤツの歌だ。ま、お仲間つてやつだな！」

男性はそういうと、ケースを開けて見たことの無い弦楽器を取り出した。

「さて、金がねえからコイツで礼をさせてもらうぜ！」

「え？え？」

「えーと、曲は、そうだな……海だしアレにするか」

混乱する唄子をよそに、男性は楽器を構えると、高らかに声を上げた。

「『ビッグ・ウェーブは逃せない』！」

唄子は溢れる涙をこらえきれなかつた。

感激が波のように押し寄せてくる。心臓の鼓動は早鐘のようだ。  
歌が終わつても、胸が詰まつて何も言えない。

だから、唄子は精一杯手を打ち鳴らした。

渾身の拍手だ。

男性はそれを見てからからと笑う。

「わはは　ありがとよ！」

またしても恐ろしく魅力的な笑顔だつた。唄子は思わず見とれかけ、慌てて気を取り直す。

聞きたいことがあつた。

「い、今この曲は、どなたが作つたのですか?!」

テレビ番組を持つていてるだけあつて、唄子は音楽に関しては一家言ある。その唄子をしても、いまの曲は一度も聞いたことが無いものだつた。こんな音楽を一度でも聞いたことがあつたら、生涯忘れることはないはずだつた。

「おお、ビッグ・ウェーブは逃せない？作詞作曲櫻崎シゲル。つまり俺だ！流石に一晩で書き上げたわけじやねえけどな」

男性——シゲルは当然のようにそう答えた。

「ゞ自身で——」

唄子は、がつん、と頭を殴られたような衝撃を受けた。  
作曲。

それは二世紀前に失われたはずの技術だつた。昏睡病が蔓延したことで、人類は創作の力を大きく損なつてゐる。精神の働きに病のくびきをかけられ、人という種自身の想像力が衰えているのだ。

故に今の人類にとつて、『今あるものを発展させる』のは何とか可能でも、『新たに生み出す』ことは容易ではない。何とかそれらしいものを作り上げても、愚にもつかない駄作であつたり、クラシックの劣化版だつたりする。

——だが、今聞いた曲は、名曲などという言葉でひとくくりにしていい音楽ではなかつた。

かつて感じたことの無いほどの感動が、唄子の胸を満たしてゐる。  
しかし、その感覚にはどこか覚えがあつた。

一つの思い出が甦る。

まだ小学校に上がる前、初めて『夜霧』を聞いた時のこと。

もう、すっかり忘れていたはずなのに。

思い起こされる。母に手を引かれて初めて行つたコンサートホールで、胸にこみ上げ

た感情が何だつたのか。

喜びだ。

そうだ。 そうだつた。 幼いころ、 何故歌を歌おうと思つたのか。 音楽の道を志すようになつたのか。

(――樂しかつたから)

それ以外に、 理由なんてなかつた。

また涙がこみあげてきて、 咲子は堪えようと夜空を見上げた。

いつの間にか、 雲がすつかり晴れていた。 三日月の光が砂浜を照らしている。無論、 晴天の夜空など珍しくも無い。

――だが。

「あ――」

その珍しくも無い夜空を見て、

「――すゞい」

唄子の口から、感嘆のため息が漏れた。

数えきれないほど見たことのある夜空が、今この瞬間、なにものにも代えがたいほど美しく見えたのだ。闇に瞬く星々は等しく宝石であり、中天に位置する三日月は輝ける黄金であった。

その星々の煌きが、見上げる唄子の瞳に宿っている。

最早十分前までの唄子はどこにもいなかつた。音楽を捨てようだなんて考えていたことが不思議でしようがない。

いじけていた過去の自分は、後ろ足でかけた砂で頭の先まで埋まっている。二度と発掘されることはないだろう。

唄子は輝く瞳をそのままに、視線をシゲルへと戻す。

『絶世の美男子』。それ以外に形容詞が見当たらぬ。

楽器の腕前は神業で、歌声は天上の美声だ。神の化身と言われてもなんの違和感もない。

唄子はこの人物の歌声を独り占めしてしまつたことに仄暗い喜びと、何倍もの罪悪感を抱いていた。

——あの素晴らしい歌を聞いていたのが自分一人というのは、なんとも口惜しかった。

この方の歌は、こんな誰もいない夜の砂浜で歌わせてはいけない。

もつと、ずっと、沢山の人々に――

沢山の人。

瞬間、唄子の脳内に稻妻のような閃きが走った。

「――櫻崎シゲル様。自己紹介が遅れ申し訳ありません。私、神奈唄子と申します。初対面で厚かましいと思われるでしょうが、一つお願ひことがあります」「ん? どんな?」

「明日、わたしと一緒に、テレビに出ていただけませんか?」

驚くべきことにシゲルは二つ返事であつた。これが最終回である、ということを告げるとひどく残念そうな顔をしたが、すぐさま「なら伝説的な最終回にしねえとな!」と言つて唄子の肩を叩いた。

シゲルに触れられた喜びで唄子は失神しかけた。

そして、翌日。

蓬莱から伝説が始まろうとしていた。

## 第6話

蓬莱におけるテレビ放送は、報道・教育・スポーツ中継の三本柱に加え、近年政府がゴリ推ししている娯楽番組（バラエティ）で構成されている。

万年人手不足のテレビ業界において、放送といえば生放送が基本だ。編集作業をして完璧な映像を作り上げるという作業は、ごく一部の高視聴率な教育番組くらいでしか採用されていない。

故に『唄子の部屋』もまた、生放送ということになるのだが――

「ホントにいいんですか、唄子さん。ゲスト出演なんて聞いてないんですけど……」

テレビカメラマンの翠が小声で尋ねるのに、唄子は躊躇うことなく頷きを返す。

「いいんですよ、翠さん。最終回ですから」

「は、はあ」

翠はちらりと壁際に視線を送った。

帽子を目深に被つた、見たことの無い人物がパイプ椅子に腰かけている。

妙に逞しい体つきをした人だった。職業柄一流のスポーツ選手などにも会うことの多い翠だが、その人物の骨格には奇妙な違和感を覚えた。

——何かが、根本的に違うような。

「翠さん」

「はい？」

唄子の声に思考を中断された翠が視線を戻すと、樂し氣な笑みが目に飛び込んでき  
た。

ここ最近まるで見ることの無かつた、懐かしい表情だつた。二年前、情熱に燃えてい  
たころの唄子は同じような笑みを浮かべていて、翠も随分元気をもらつたものだつた。

昏睡病が進んでからはすっかり失われた筈の笑顔が、そこにあつた。  
——いや、よく見ればかつての笑顔ではない。

何か違う。

むしろこの笑顔は、二年前よりずつと——

「録画テープ、あとで焼き増ししてくださいね」

そう言つて茶目つ氣たつぱりにウインクした唄子に、翠は思わず見とれてしまつた。

テレビ欄に記載されている『唄子の部屋【終】』の文字を見て、真美は憮然としていた。梱包されたままの真新しいビデオテープの束が視界に入り、無色のリップを塗った唇からため息が漏れた。

「なに凹んでるの、真美ちゃん」

呑気に煎餅をかじりながら姉の宮子が言う。

姉に会うのは三か月ぶりだつた。宫廷女官というそれなりにやんごとない職に就いた姉だが、社会人になつてもまるで変わつた様子はない。相変わらずのほほんとしていて、話していると力が抜ける。

「……このテープ、どーすればいいかなつて思つてさ」

そう答えて、真美は口をへの字に曲げた。

——ビデオテープというのは安いものではない。おおよそ一本500円という値段は女子高生にとつて極めて重い負担だ。

真美はその安いものではないテープを、先日セールで購入したばかりだつた。一ダースほど。

真美が録画している番組は、唄子の部屋だけだというのに。

「せめて一か月くらい前にさー、番組終了のお知らせしとくべきだと思うんだよ」

「まーまー。腐るものじゃないらしいじゃない。また新しい音楽番組始まるかもよ?」  
「唄子さん以上の音楽家って、蓬莱じやちよつと思いつかないよ」

真美は断言する。

真美は唄子の部屋の熱心な視聴者であつた。数年前母親に連れられていつたコンサートで、その時15歳だった唄子の歌声を聞いた真美は、その声に強く惹きつけられた。

当時既に天才神奈唄子のレコードやカセットテープは発売されていたが、再生機器はどれも高価なものであつた。ごく一般的な母子家庭ではまず手が出ない。

しばらく経つて『唄子の部屋』のテレビ放送が決定したときも、やはりテレビをもつていらない真美はしょげたが——母親が誕生日プレゼントとしてテレビとビデオデッキを購入してくれたので、当時は飛び上がつて喜んだ。大国アステカの開発したそれらの機器は、当時かなりの高額だった。

しかし、その喜びは長くは続かなかつた。

「確かに唄子さん歌上手だつたけど、何か最近はそうでもなくない?」

「う」

姉の言葉に反論できず、真美はがっくり肩を落とす。

唄子の歌の愛好家を自負する真美から見ても、最近の唄子は振るわなかつた。音程を外すようなことはないが、大事な何かが欠けているように聞こえるのだ。

「……一年前まではすつごく良かつたんだけどなあ」

ビデオにとつてゐるからはつきりとわかる。笑みを浮かべながら楽しそうに歌つていたのは最初の頃だけだ。真美がいまだに見返すのもその当時のテープばかりである。最近の唄子には笑顔が無く、歌にも精彩を欠いてゐる。素人目にも昏睡病の兆候を感じさせる様子だつた。

ある意味、元気な唄子をビデオに保存することができたのは運が良かつたのかもしない。今も録画を続けてゐるのは半分が惰性で、もう半分は折角テレビとビデオを買つてくれた母に申し訳がないからだ。

とはいゝ、どうやら今回でビデオデッキはしばらくお役御免となりそだつた。

新聞のテレビ欄は欠かさずチェックしているものの、真美の琴線に触れる番組は唄子の部屋のみだ。こうなれば宮子の言う通り、後釜の番組がまた音楽番組である可能性に賭けるしかないが——音楽番組でこけた蓬萊テレビが二番煎じを試みるかといえば、可能性は低いと思わざるを得ない。

「お姉ちゃん、宫廷女官つて蓬萊テレビとコネないの？新番組情報とか入つてない？」  
「三か月前に女官になつたばかりのペーぺーに何を期待してゐるの、真美ちゃんは。

まあ蓬莱テレビは政府と太いパイプを持つてゐるから、女官長様くらいになれば何か知つてるかもしけないけれど。……むしろそーゆーのは府議会議員の母さんの方が詳しいんじやないかなー」

「そつかあ」

真美は壁掛け時計に視線を移す。

時刻は七時半を回つてゐる。釣られるように時計に目を向けた宮子が、小さくため息を吐いた。

「——母さん、遅いね。せつかく帰つてきたんだから、顔見てから局に戻りたいんだけどなー」

「平日に帰つてくるのが悪い。それもぬいぐるみを取りに帰つてきたなんていうしょもない理由で」

「しようもなくないー」がねまるが居ない二か月間、私の寝つきは平均十分も遅かつたんだから！」

むん、と狐のぬいぐるみを突き出す宮子に、真美は半眼を向ける。

「子供じやないんだから……つていうか、母さん今日は定期健康診断の結果を受け取りに行くつて言つてたから、いつもより遅れる筈だよ」

「んへえー。だめじやーん」

よもやま話をしていると、唄子の部屋の放送時間は目前に迫っていた。

「おつと、いけないいけない」

真美はビデオデッキに手を伸ばす。経済的な理由からいつもの通り三倍録画ボタンを押そうとした真美は、少々考え込んだ後、その隣の標準録画ボタンを押した。

真美が標準録画をしていたのは、唄子に元氣があつた初期の放送時だけだつたのだが

「最終回だし、いいよね」

真美はそう呟き、残り11本の空きテープを眺める。いつになれば使い切れるのか、今この真美には想像もできなかつた。

——唄子の部屋が、始まる。

最初はおなじみのピアノのメロディと共に、唄子のバストアップ。

いつもの始まり方だ。

だが、真美はいきなり違和感を覚える。

「——あれ？なんか唄子さん、いつもより綺麗じやない？」

「え？……言われてみれば、確かに」

「だよね？」

姉妹は首を捻つて、しげしげと画面の中の唄子を眺める。

元々顔立ちの整った女性だが、今日はやたらと魅力的に見える。最終回だからメイク頑張つたのかな、なんてことを真美が考えていると、唄子はおもむろに語りだした。

その声には、不思議な『張り』があつた。

「みなさん、こんばんは。今回が最終回となる『唄子の部屋』ですが——今日は特別なゲストをお呼びしています」

「毎週東西の音楽を扱つてきた当番組ですが、今回皆さんにお届けするのは、ゲストが創り出した全く新しい音楽です。『色んな意味で』、面食らう方もあるかもしれません」

「ですが、どうしてもわたしは皆さんに聞いていただきたかったのです。わたしは——今日のゲストの音楽を聴いて、なぜ音楽に『楽しい』という文字が入つているのか、本当の意味で理解できた気がするから」

これまでにないオープニングトークだつた。大げさなことを言うなあ、と思いつつ、真美は少々興味を引かれる。『全く新しい音楽』。一音楽好きとしては聞き逃せないセリフだつた。

しかし、一度クラシックのアレンジをしているという女性が番組に登場した折、披露したその『アレンジ』とやらが本家の劣化だつたことを真美は良く覚えていた。とはいえる、その時の唄子の顔には『これっていい音楽かしら?』と正直に書いてあつ

たし、今のような大絶賛は一言も口にしなかつた。

「へー。たのしみだね、真美ちゃん」

宮子が言うのに、真美は小さく頷く。

「うん。唄子さんがこんだけ褒めるなら、ちょっとくらいは期待できるかも?」

買い置きの煎餅に手を伸ばしながら、真美は少しだけわくわくしていた。

「前置きはこのくらいにして、登場していただきましょう。——ミュージシャン、櫻崎シ  
ゲルさんです！」

シゲル。女性の名前としては少々珍しい。どんな字を書くのかな、と考えながら、真

美は煎餅を一口齧りとり、

「いやー、どうもどうも！」

顎が咀嚼を忘れた。

画面の中に、信じられない美青年がいた。

「……え？」

真美は目をこすつた。ついでに耳を疑つた。

しかし、画面の中の映像は変わらない。

そこにはいるのは男性である。それもおそらく成人男性だ。

そんなものは病院の生命維持装置の隣か、昔話か、神話にしか存在しない筈だ。

真美の口から堅焼き煎餅が落ちる。三枚目に突入していた宮子の口からもばらばらと落ちる。

開いた口が塞がらない、を表現した姉妹は無意識のままにテレビにじり寄つていた。

「テレビの前のみんな、初めましてだな。俺は櫻崎シゲル。——逢いたかつたぜつ」元気いっぽいにサムズアップする男性の、どこまでも美しい低音が、真美の思考を蒸発させた。

脳が目の前の現実をうまく認識できていない。

「——待つて。ちょっと待つて」

我知らずそんな言葉を漏らしていた真美だが、男性——シゲルは当然のように待つてはくれなかつた。

落ち着く時間を欲しがる真美と、口を開けたまま完全に機能を停止している宮子を無視し、シゲルは楽器を構える。

「さあて、時間は有限だ。自己紹介なんざ名前だけで充分だろ！ってことで、さつそく一曲行つてみようか！」

シゲルが笑う。

見るものすべてを引きつける笑みを浮かべながら、大きな声を上げる。

「——最初の曲名は『ロケット』だ！楽しんでいこうぜつ」  
奇跡の一時間が始まつた。

「——つと、もうこんな時間かよ。名残惜しいけどここまでだな」

たっぷり十曲をやり終えたシゲルが、ひよいと肩を竦める。

「シゲル様、本日は本当にありがとうございました。——最終回にして、私はようやく自分が果たせたような気がします」

深々と頭を下げる唄子に、シゲルがぱたぱたと手を振る。

「わはは、大げさなこというなよ唄子さん、こちらこそ礼を言わせてくれ。最後のデュエット、痺れさせ。また一緒に歌つてくれよな！」

「喜んで！」

「ありがとよ！——おつと、ラスト十秒。じゃーな、みんな！またどつかで逢おうぜつ」「そうですね。また、どこかで！」

太陽のようなシゲルの笑顔と、それを受けて咲き誇る華のような唄子の笑顔が、真美の頭に強烈に焼き付いた。

番組が終わり、天気予報が始まる。

そこでようやく二人は再起動した。

「れつ、冷静になつて真美ちゃん！これは夢だよ！」

「そつ、そつかも！」  
ぐるぐる目の宮子が真美の肩を掴む。

答える真美もぐるぐる目だった。

あり得ない存在を目の当たりにした二人は完璧に混乱していた。

しかし、全身には正体不明のエネルギーが漲つており、じつとしていたら弾けてしまいそうだった。

「そもそも健康な成人男性がこの世にいる確率は0%！その男性が神のごとき完璧な美男子である確率は0・1%！そして最高を突き抜けた歌唱力と演奏技術を持つている確率は0・2%！理論的に三つの数値を合算させてもたつたの0・3%しかない！この数値が、私たちが見ているのが夢か幻覚であることを示しているよ！」

謎の衝動に突き動かされるように、宮子が熱弁をふるう。

「なつ、なるほどつ。なんて的確で冷静な計算式なんだ……！宮廷女官は伊達じやない

んだね！」

赤べこのように首を縦に振りまくりながら真美が追随する。

「もちろん！きつと私たちの食べたあの煎餅に、幻覚剤の類いが——」

ぐるぐる目のまま宮子は立ち上がり、テーブル上の罪なき煎餅へと向けて一步を踏み出す。

しかしテーブルは思いのほか近く、躁状態の宮子の一歩は思いのほか大きかつた。がつ、と鈍い音を立てて、重厚なテーブルの角が宮子の脛にめり込む。

「あっああああーッ！せつ、煎餅めがアーッ!!」

「……少なくとも夢ではなさそうつ」

圧倒的なリアリティのアホがのたうつのを見て、僅かに冷静を取り戻した真美は、録画停止ボタンを押すとテープの巻き戻しを始めた。

夢か幻覚か、それとも現実なのか。もう一度見ればはつきりすることだ。

昭子は家の前までたどり着き、しかし玄関を開けるのを躊躇つた。

手にした封筒に視線を落とす。中には先ほど病院で受け取った診断書が入っていた。  
診断書に書かれているのは、『昏睡病レベル2』の文字だ。

35歳。レベル1でここまで持ちこたえた人は極めて珍しいと医者は褒めてくれた。  
レベル2患者はいくつかの仕事の資格を失う。昭子の府議会議員という職もその一  
つで、引継ぎを終えたら今後はレベル2でも出来る仕事に従事することになるだろう。  
——それもレベル3になるまでのわずかな期間だろうが。

このことを娘に告げるのは、少々気後れした。自分がレベル2になつたという報告を  
聞けば、心優しい真美はきっと悲しむ。

だがこの世界で生きている以上、これは避けられないことなのだ。

考えてみれば、肩の荷が降りたという氣もする。

長女は女官という立派な職に就き、次女も高校生だ。何も心配することはない。  
そう自分に言い聞かせ、玄関を開ける。

少しだけ懐かしい靴が目に入る。

宮子が帰っているらしい。口元にあるかなしかの笑みが浮かぶのが分かつた。

愛娘の顔を見れるのが嬉しい、と思うことができるのも、レベル3になるまで。一日  
一日を大事に生きなくてはならない。

一切ない気持ちを押し隠し、昭子が努めて明るく『ただいま』の声を上げる——

よりも早く。

床板を踏み抜かんばかりの勢いで、二人の娘が玄関まで走ってきた。

「おかれり!!!」

凄いテンションだつた。

「た、ただいま……？」

気圧されたがら声を返した昭子は、咳ばらいを一つ。

娘たちはなにやら興奮しているようだが、大事な話をしなくてはならない。

「丁度良かったわ。母さん、二人に大事な話が——」

「そんな話は！」

「見るもの見てからよ!!」

宮子と真美は阿吽の呼吸で昭子の腕を引っ掴むと、恐るべき力で引っ張り出した。

昭子はつんのめるように前進する。

「ちよ、ちよつと二人とも?」

困惑の声は無視され、あれよあれよという間に居間まで連行された昭子は、

「はいそこに座つて!」

強引に座布団に座らせられ、

「ビデオスタート!」

奇跡の体験をすることになった。

翌朝。

ビデオは10回再生され、一家は眠れぬ夜を過ごした。

しかし玄関に立つ三人の目に宿るのは、眠気ではなく燃え盛る熱情であつた。

靴を履き終えた宮子と昭子は、見送る真美を振り返る。

「あと二十回は見たかつたけど、仕方ない。愛する姉は仕事に出かけるよ、真美ちゃん」「名残惜しいけど行つてくるわ。——真美、ビデオを増やせるっていうのは本当なのね？」

「たぶん。友達の理子ちゃんがいつてたんだけど、だびんぐ？とかいうのをすると同じ映像を空のテープに書き込めるんだって」

「機械のことはさっぱりだから、貴女に託すわ。くれぐれも注意してね。あのビデオの中に入っているのは、人類の宝よ」

「うん」

真美は重々しく頷く。その眼光は戦地に赴く兵士のものであつた。

「真美ちゃん、任せたよ。転んじやだめだからね」

「お姉ちゃんじやないんだから大丈夫。お姉ちゃんこそ徹夜なんだから職場でミスしないでよね」

「徹夜じやなくてもミスはするから大丈夫だよ」

「全然大丈夫じやない」

「この子はまつたく……」

とぼけた答えを返す宮子に、一人はあきれながらも声を上げて笑ってしまう。釣られるように宮子も笑つた。

声を上げて笑い合うのは一家にとつて随分と久しぶりだつた。現代蓬萊の一般家庭においては、どれほど楽しみ、喜んだとて、穏やかにほほ笑み合うのが闇の山だ。

しかし、今的一家は違つた。

他愛もない会話が、無性に楽しい。玄関は『昏睡病』の『こ』の字も見当たらない明るい雰囲気に満たされていた。

「それじゃあ、行つてらっしゃい！」

玄関を開けた宮子と昭子の背中に、満面の笑みで真美はそう声をかけた。

思わず元気が出てしまうような、明るい声で――

「私は通学時間まで余裕があるから、もう一回見てから行くよ!」

そんなオマケのセリフを添えて。

「ぐつ、学生が憎い……!」

未練を振り切るように宮子は足早に去っていく。昭子も苦笑いしながら後に続こうとする。

その時、ひらひらと手を振る真美の目がげた箱の上の書類を捉えた。

昨夜昭子が持つて帰ってきた封筒だった。

「お母さん、その書類は?」

「え?……ああ」

言われて初めて気づいたのか、昭子は足を止めるとちらりとその封筒に目をやる。

診断書が入った例の封筒だ。

昭子は半日前にその封筒を手に『大事な話がある』と切り出したことなどおくびにも出さず、一切の関心を失った声色で言い放つた。

「ゴミよ。捨てといて」

はーい、という愛娘の声を背中に受けて、昭子は玄関を出る。

朝日が眩しい。一睡もしていないのに、気分は最高に爽快だった。

全身にやる気が漲っている。しょぼくれていたタベの自分はもういない。

「んーっ！」

昭子は全身に日差しを受けるように伸びを一つすると、  
「——さて。まずは検査をやり直してもらいましょうか」

弾むような足取りで、病院へと続く道を歩き出した。

昨日知つたばかりの、お気に入りの曲を口ずさみながら。

## 第7話

校門をくぐつたあたりで見慣れた背中を見つけて、理子は『おはようございます』と声をかけた。

クラスメイトにして親友——と自分では思っている——真美の髪はやや明るい色をしており、ほぼ黒一色の生徒たちの中では少々目立つ。人違ひの心配はない。常であれば「おはよっ」という歯切れのいい挨拶が返ってくる。理子はその快活な挨拶が好きだった。自分も元気をもらえるような気がして。

ところが、今日は様子が違つた。

ぐるりと振り返つた真美の顔に笑みはない。それどころか目の下にはくつきりと隈ができており、そのくせ眼光だけは異様に強かつた。

「——理子ちゃん、会いたかったよ……！」

挨拶抜きにそう言つて、バツグを抱きしめながらにじり寄る真美に、理子は露骨に怯んだ。

真美は正体不明のプレッシャーを身に纏つていた。

「ま、 真美ちゃん？ どうかしたの？ なんだか様子が……」

「そりやあどうかしてるよ。 理子ちゃんも今日中にはどうかする予定だよ」「えっ？」

「それはともかく。 理子ちゃん機械に詳しかったよね？」

「え、 えっと、 詳しいってほどじゃないですよ。 ちょっと好きなだけで」「じゃあさ——このビデオ、 増やせる？」

真美がカバンからそつと取り出したのは、 一般的に流通しているビデオテープであつた。 我が子を抱くように慎重な手つきだつた。

「普通のV H S ですよね。 増やすつていうのは、 ダビングするつてことですか？」

「うん、 そうそうそのダビング。 できる？」

「えーと、 外部出力を録画すればいいので可能ですよ」

理子の答えを聞いた真美の眼が、 一層強い光を帯びる。 理子は一步引いた。

「だ、 だけど、 ビデオデッキが二台必要になります。 わたしのうちには一台しかありませんから——」

「ビデオデッキならうちから担いでくから、 やつてくれないかな」

一步詰め寄つて、 真美が言う。

「へ!? か、 担いで!?」

「うん。電車に乗つていくから大丈夫!」

そうは言つても、真美と理子の家は二駅離れている。10kg超のビデオデッキを担いでいくには相当の根性が要求されるのは間違いなかつた。電車の乗客に奇異の目で見られることも間違いないだろう。

「そ、そこまでしてダビングしなくちやいけないビデオなんですか?」

「うん」

何の躊躇もなく真美は頷いた。

そして、さらつと付け加える。

「空きテープが十一本しかないから、とりあえず全部お願ひね」

「じゅういつぽん!? 同じビデオを!?

目を剥く理子だが、真美はやはり平然と頷く。

「うん、お願ひ」

「は、はあ……そ、そんなにすごいビデオなんですか?」

「そりやーもう。ふふふ。このビデオの為に私たち一家は完徹よ。でも、ぜんつぜん眠くないの」

「は、はあ……」

「じゃ、放課後よろしくね」

そう言い残し、真美はやはりバッグを抱きかかえて校舎へと向かう。どうしても気になつたので、理子はその背に声をかけた。

「ま、真美ちゃん」

「ん？」

「そのビデオ、何が録画されてるんです？」

真美は足を止めると、わずかに考えこんでから答えた。

「夢、かなあ」

蓬莱テレビ局は開局以来初の大混乱に陥つていた。

「いえ、ですから何度も申し上げます通り、ゲストの個人情報に関しては開示することが出来ませんので——」

「はい、はい。再放送は行う予定です。いえ、現状具体的な日時までは——」

「こちらとしても対応に困つております……何せ男性のゲストという前代未聞のケースですので、本人の許諾を得ないまま再放送は——」

ネイビーのスーツを見事に着こなした女性が、電話対応にてんやわんやの光景を見て呟く。

「……とんでもないことになつたわね」

「遙局長、もうずーっと電話回線パンクしたままで。アポがとれないってあちこちの取引先から苦情がきはじめます」

白柳遥は、部下からの言葉に肩を竦める。

「回線増やしてもらうよう手配したから、とりあえず今日明日はなんとか誤魔化して頂戴。——ところで、唄子さんと連絡はとれた?」

「十分おきに電話をかけてるんですが、まだ……おそらく、家に帰つていないのでないかと」

「しつこくかけ続けて。他の業務は後に回してもいいわ。最優先で唄子さんを確保するのよ」

空前の視聴率を記録した最終回。もはや『唄子の部屋』の価値は昨夜までとは一変している。

いや、それよりも――

「聞き出さなきや……シゲル様のことなどを……」

「はい……どんな手段を使つても……」

――そして、あの歌をもう一度。

目の下に隈をつくつた彼女たちは、 目と目で通じ合うと、 静かに頷き合う。

その瞳に狂信者の輝きを宿して。

## 第8話

「し、シゲル様……その、おはようございます」

唄子の部屋最終回が放送された翌々日の朝。シゲルはいつものように壇のビジネスホテルから出発しようとして、ロビーで待ち構えていた顔面蒼白の唄子に捕まつた。

「お？ 唄子さんじやねえか、おはようさん」

シゲルはひよいつと片手を上げて挨拶をする。

「これからその辺に弾き語りに行くこなんだが、一緒に行く？」

「是非！——ではなく。申し訳ありません、少々話を聞いていただきたく……」

シゲルの誘いに、ぱあっと表情を輝かせた唄子だったが、その顔は即座に曇る。なにやら問題を抱えているらしい。

「話？ そりや構わねえけど」

「知らない仲でもないし、別段急ぎの用事でもない。シゲルは気前よく頷いた。  
「……ありがとうございます」

深々と頭を下げる唄子は、滔々と語りだした。

「昨日収録を終えた二人は打ち上げと称し飲み屋に繰り出していた。シゲルは店主の許可を得て弾き語りを店内で行い、二人は気分よく飲み食いし、連絡先を交換して別れたのだ。

唄子としては人生最高の夜であった。シゲルの弾き語りは勿論大好評。シゲルの頬みで唄子もデュエットに参加したりして、店の営業時間を超えて騒ぎは続いた。

唄子はしたたかに酩酊し、家に帰るや否や深い眠りについた。

——点滅する留守電のランプに気付くことなく。

「目が覚めたら、留守電にすごい量の録音が残っているのに気づきまして……」「ありやりや」

シゲルは頭を搔く。

唄子とシゲルは、局にゲストの存在を伝えていなかつた。

何しろ男性をテレビ出演させるとなると、その手続きは前代未聞のものになる。正直にゲストにシゲルを招くことを提案すれば、到底唄子の部屋の最終回には間に合わない

と思われたからだ。

結局、使命感に燃える唄子と、ノリ重視のシゲルはサプライズで生放送に登場することを決めてしまったわけだが――

「まー不意打ちみたいなもんだつたからなあ、俺のゲスト出演。プロデューサーに怒られちゃつたか」

「いえ、怒るとかでは……」

唄子はひきつった笑みを浮かべる。

留守電に残っていたのは怒声ではなく、切々とした哀願であつた。

――今日のゲストについてお話をあります。

――お願ひですから今日のゲストのシゲル様に会わせてください。

――ホントお願ひですから。ギャラ10倍上げますから。

――会わせてくれないなら舌噛んで死にます。

――唄子さん。そこにいるんじやないですか。

――ウタコサンウタコサンウタコサン

血の気が引いたのは言うまでもない。

「そんなわけで昨日局長の遙さんと話し合いまして、何とかシゲル様とお話をさせていただけないか、と……」

「へー。いや、俺としちゃその局長さんと会うことに文句はねえぜ」

むしろ渡りに船つてヤツだな、とシゲルは付け加えた。

世界に音楽を響かせる為に、テレビは非常に都合がいいのだ。プロデューサーを説得して何らかの番組に参加させてもらえば、目標にはぐつと近づくだろう。

「そ、そうですか！——良かつた」

どうやらシゲルが悪感情を抱いていないことを知つて、唄子は胸をなでおろした。見ず知らずの女性に引き合わせたい、と言つて喜ぶ男性はまずいからだ。一般的に男性というものは纖細なメンタルをしている。

「で、その話し合いはいつ、どこでやる予定なんだい？」

「……あの、その、」

唄子が口ごもる。

「ん？」

シゲルが首を傾げると、唄子はそつと掌を上に向けて、ロビーの窓ガラスへと差し出した。

シゲルの視線がそちらに向く。

「遥さん、もう、そこに……」

タイトなスーツに身を包んだ美女が、ガラスの外に張り付いていた。

「蓬莱テレビ局長、白柳遙と申します。突然の訪問、まことに申し訳ございません……！」

「お、おいおい、頭上げてくれよ」

「いえ——！わたしは男性保護法を明確に犯しています。この話が終わり次第出頭するつもりです。ですが、どうかこの話だけは聞いていただきたいのです！」

決死の表情で拳を握る遙に、シゲルは笑顔を見せる。

「わはは、バカ言え。歌手の追っかけ一々捕まえてたら刑務所一杯になっちゃうだろ。冗談はさておいて、話を聞かせてくれよ」

感極まつた遙が再び頭を下げる。

「なんという慈悲深さ……！この遙、感動で前が見えません」

「そりやテーブルに額押し付けてるからだよ。つたく」

シゲルは両手を伸ばすと、遙の頭をそつと持ち上げるようにして上に向かせた。

自然、遙の顔面はシゲルと至近距離で向き合うことになる。

「お、美人さんだな。下向いてるのは勿体ねえぜ」

口角を上げたシゲルがそんなことを言う。

絶世の美男子によるこんなセリフに対する耐性を持つた蓬萊女子は、現代には存在しない。

「——はぶつ」

顔を真っ赤にした遙は、ぶしつと鼻血を吹いて白目を剥いた。

「うおあ!?」

「は、遙さん！ 気を確かに！」

「まずはお礼を言わせてください、シゲル様。貴方様はこの度の放送で、視聴者に夢と希望——いえ、生きる意味そのものを与えてくださいました」

大仰なことをきりつとした顔で語る遙だが、鼻に詰めたティッシュが全てを台無しに

していた。

「俺は好きな音楽をやつただけだから、そんなに褒められると照れちまうな。——それよりも」

面はゆそうにそう言つてから、シゲルは軽く頭を下げる。

「連絡も無しに突然出演して悪かつたな。そうしようつて言つたのは俺だから、唄子さんを怒らないでやつてくれよ」

「怒るなどと！ 唄子さんはあの伝説の放送の、いわば立役者。感謝こそすれど、怒りを覚えることなどありえません！」

「お、そりやよかつた」

「そんなことより——あの放送での十曲。あれらの音楽はシゲル様が作曲されたのですか？」

「おう、作詞作曲俺だな」

「今のこの世界においては肯定できるはずの無いその質問に、シゲルはあつさりと答えた。

遥は生唾を飲み込み、恐る恐る切り出す。

「——シゲル様。貴方様のような稀代の音楽家、それも男性の存在を、私は寡聞にして存じませんでした。しかし、私はこれでも蓬萊の芸能事情には精通しております」

遥の眼差しは真剣そのものだつた。シゲルはちいさく頷いて先を促す。

「シゲル様は、いつたいどこの出身なのでしょうか？」

核心を突く質問が出た。

「……うーむ」

シゲルは一つ唸ると、腕組みして黙り込む。

遥の目尻が申し訳なさそうにさがる。

「あの、申し訳ありません。お答えできない事情があるのでしたら、もちろん無理には—

—

その言葉を広げた五指で遮り、シゲルは立ち上がつた。

「ちょいとここで待つてくれるか？」

数分後。

一度部屋に戻つたシゲルが持つて帰つてきた『タブレット』を覗き込み、遥と唄子は驚愕していた。

「俺がどこから来たのか。それを説明するには、まずコイツを見てもらつた方がいいよう気がするんだよ」

タツヤの荷物にや感謝だな、と呟きながら、シゲルがタブレットを操作する。シゲルのいた世界においてはありふれた端末だった。しかし、やつとカラーテレビが開発されたという段階の世界においては、超技術の塊だ。

美麗な映像。タツチパネル。極めてコンパクトで機能的な本体。そこにあるのは、まさにオーパーツであつた。

遥は身体の震えを抑えられなかつた。

——わたしは今、何かとんでもないものを見せされている。

「——うーん、俺この手の機械に詳しく述べから、操作方法がイマイチ……お、でもこれ全国ツアーの時のライブか。これでいいか。懐かしいなオイ」

シゲルの指がささつと画面を撫でると、ノートよりも小さい機械が、恐ろしく鮮やかな映像を映し出した。

殆ど魔法のようであつた。遥は眩暈を覚える。夢を見ているような非現実感であつた。唄子の口は拳が入りそうなくらい開かれたまま閉じる気配が無い。「ちやちなスピーカーだから音は悪いな。ま、しゃあねえ」

画面の中に、熱唱する男性の姿が映る。

二人の女性の視線は、その男性に釘付けとなる。

エネルギーッシュな姿だつた。こんな男性がこの世に存在したら、ニュースになるどころでは済まない。

聞いたこともない素晴らしい歌が、男性の喉から迸つてゐる。

その声は、櫻崎シゲルとうり二つだつた。

「こいつが『前世の俺』だ」

画面の中の男性を指さし躊躇いなくそう言つたシゲルに、遙は生睡を飲み込んで向き直る。

「シゲル様——貴方様は、一体何者なのですか」

遙の声は震えていた。

シゲルは少々考え込むと、椅子に深く座りなおした。

「ちよいと長くなるぜ」

何故、どうやつてこの世界に来たのかという疑問に關しては、弁天様のメモにあつた通り『憶えていない』でごまかした。確かに死んだ筈だが、気が付けば公園にいた、と。

弁天様とのやり取りに關しても話していらない。

しかし、それ以外に關してはシゲルは眞実を語ることにした。記憶喪失の設定を守つ

たまま音楽を広めるというのは、どうにも骨が折れそうだと思ったからである。

「——で、では、その、シゲル様は、『異世界人』である、と……？」

「うーむ。我ながらやべー説明だけど、そういうことになつちやうんだよなあ」  
事のあらましを語り終えたシゲルは、「眉唾だよなあ」と頭を搔く。

しかし、遥は首を横に振ると、

「いいえ。信じられます」

力強く言った。その目に一切の疑心はうかがえなかつた。

「こんなものを、今の科学力で作れるはずがありません」

「そんなに隔絶してゐるのかい？」

「はい。この世界基準からすれば、まさに魔法のような技術ですしだ——この端末は小型化されていて、完成度が高すぎます。そう、技術の『積み重ね』を感じるのです。こんな凄まじいものを開発できる機関がこの世のどこかにあるという世迷言より、『異世界から持ち込まれた』という説明の方がよほどしつくりきます。——なにより」

一息にそこまで言つた遥は、未だにライブ映像を流し続けるタブレットを指す。

前世の櫻崎シゲルが元気いっぱいに歌つている。

「この映像。こんな男性がこんな規模のコンサートを行つていたら、ニュースにならな  
いわけがありません」

「そうなの？」

「ですよね、唄子さん」

「はい、間違いなく世界的なニュースになると思います」

頬を紅潮させた唄子がこくこくと頷く。その眼はタブレットに釘付けだ。

唄子の知識には存在しないバンドミュージックが、小さな画面に圧倒的なパワーで展開されている。

一秒たりとも見逃せない。唄子は全神経を画面とスピーカーに集中させている。

——しかし、映像は不意に途絶えた。

「あれ?!」

唄子が狼狽える。

タブレットは『low battery』の文字を僅かな時間だけ表示させると、完全に沈黙した。

「あ、電池切れか」

「この機械は電池で動いているのですか？」

「充電池だよ。コンセントに繋げば充電できるんだが、どうもこっちの世界とは規格が

違うらしくてな。手持ちの充電器じや充電できねえんだわ」

「じつ、人類の至宝がしつと失われてしまつたのでは……?!」

唄子は顔面蒼白となつた。

「充電器そのものは持つておられるのですね?」

遥が問う。シゲルは頷いた。

「おう。荷物に入つてたな」

「ならば変圧器を用意できれば充電できるやもしれません」

「お、なるほど。電器屋に売つてるかな?」

「おそらくプラグの形状が異なると思われますので、専門的な加工が必要になるかと思われます」

「あー、そりやそうだよなあ。確かにコンセントの形全然違うし」

「するとその機械は……?」

唄子が恐る恐る問う。シゲルは肩を竦めた。

「俺にはその手の技術は無いし、こつちにや何の伝手もねえから当面お役御免だな」

「そ、そですかあ……」

唄子ががつくりと肩を落とす。

「——伝手、ですか」

しかしそう呟いた遙の目は、唄子とは対照的に強く光っていた。

「シゲル様。あの機械は一般家庭に存在するものですか？」

「ああ、人によつては何枚も持つてたぜ。タブレットそのものはともかく、似たような端末は大体の人が持つてたんじゃねえかな？」

「——もし、あれが全ての人々に普及すれば……」

考えをまとめるようにしばし俯いた遙は、やがて顔を上げるとシゲルに向き直つた。  
「シゲル様。この世界には原因不明の奇病『昏睡病』が蔓延しているのはご存じでしようか？」

「おう。厄介な病気らしいな」

「はい。死に至る病ですが、現状特効薬のようなものは開発できておりません。二世紀前にこの病が発見されてから、世界は衰退する一方です。——ですが、私はシゲル様の歌こそがこの昏睡病に対する『特効薬』になるのではないかと思つております」

「私も同じ意見です」

大仰な遙のセリフに、唄子は迷いなく追随する。だからこそ様々な手続きをすつ飛ばして櫻崎シゲルをゲストとして招いたのだ。  
大げさだなあ、と笑い飛ばしたかつたシゲルだが、弁天様の手紙を鑑みるとそうもいかなかつた。

『——この病に対する特効薬こそ貴方なの。

とにかく貴方の音楽で——』

手紙の最後を思い出し、シゲルはふーむと唸る。

「——俺の歌に、病気を治す力があるかはわからねえ。だけどもしそうだとしたら、俺は一刻も早く皆に歌を届けたい」

シゲルはまっすぐに遙を見つめる。

「遙さん。俺をテレビに出させちゃくれないか？俺の歌を、蓬莱に響かせてえんだ」

太陽のように熱いシゲルの言葉を聞いて、しかし遙は俯くと、申し訳なさげに眉根を寄せる。

「——本日はわたくし、シゲル様にテレビ出演のお願いをするべく参りました。ですが、こうしてお話を伺つた今——はつきり申し上げれば、事態はイチTVプロデューサーの手に余ると言わざるを得ません」

「お、おいおい、そんなこたねえよ。テレビ放送してもらえたらすぐえ心強いぜ？」

「あ、いえ、申し訳ありません、少々言葉が足りませんでした。もちろん、蓬莱テレビはシゲル様を全力で手助けさせていただきたく思つております。恐らくそれは、蓬莱人にとっての希望になるでしょうから」

ですが、と唄子は続ける。

「我々ではおそらく力不足なのです。シゲル様、この蓬莱におけるテレビの普及率を存じですか？」

「普及率？……あ、もしかして、家庭に一台テレビ無い？」

「はい。最新の調査では、普及率は凡そ三十パーセント。——シゲル様の歌を蓬莱中に届けるには、テレビの持つ力 자체が不足しているのです」

遥はそう言つてくやし気に拳を握り締めたが、直ぐにその目に闘志を漲らせてシゲルを見上げる。

「しかし！足りない力は他から補えばよいのです！シゲル様を『然るべきところ』がバツクアップすれば、単なるテレビ出演にとどまらず——なにか、もつと大きなことを成し遂げられる。そんな確信があります！」

「然るべきところ？」

「はい。我々は国とのパイプを持つています」

遥は言い切る。

テレビ放送は半分国策のようなものであつた。予算も一部国から降りてゐるし、テレビ番組の構成にも役人が絡むことは珍しくない。

「国とのパイプ？……つてえことはつまり、お役人と話をして、蓬莱っていう国そのものにバツクについてもらうってことかい？」

遥は力強く頷く。

「我々のコネクションを総動員しても、高級官僚クラスを引っ張り出してみせます」

「何だか大ごとになつてきちまつたなあ」

「事実、世界がひっくり返るほどの大ごとであると認識しております」

「はは、なるほどな。——じやあいつちょ、盛大にひっくり返してやろうぜ！」

眩い笑みと共に、シゲルが手を差し出す。

それを遥は目ん玉を見開いて見る。シゲルは首を傾げた。

「……あれ？ もしかしてこつちの世界じゃ握手の習慣とかつてないのか？」

——握手。お互いの手を握り合う挨拶。蓬莱においても古来から友好を示すために行われている。

とはいえそれは、現代においては同性同士で行われる。男性は法律で守られており、みだりにその身体に触ることは犯罪行為に当たるからだ。

しかし無論、男性側が承諾していれば話は別である。

「いっ、いえ！ ございます！ ござりますとも！！」

遥は慌てて右手を差し出す。

男性の手を握るなど、人生初めての経験だつた。恐らく今後も無い。

まるでアル中患者のように震えるたおやかな手を、シゲルの手が握る。

——あつたかい。

「これからもよろしく頼むぜ！」

——こえ、すてき。

「はいウツ！」

遥はまたしても気を失った。

## 第9話

夜九時。なんとかギリギリでスーパーの閉店時間に潜り込むことが出来た。  
手に下げたレジ袋から覗くのは、ポピュラーな固形栄養食——通称『完全食』が一ダース。

文科事務次官になつてから、朝と晩はこれで済ませてしまうことがほとんどだ。我ながらさもしい食生活だが、不満は感じなくなつて久しかつた。

昏睡病を遠ざけるには美味しい食事から!と厚労省は喧伝しているが、役人の自分がこんな食生活なのだから皮肉なものである。

——流石に疲れたわね。

肩を落とし、とぼとぼと街灯の下を歩く。官舎まではあと僅かの距離だが、妙に長く感じた。

昏睡病対策の新プロジェクトの進捗が最終段階に差し掛かり、文科省はデスマーチ状態にあつた。そのトップたる文部次官の自分の仕事量たるや、この三日間職場に缶詰め

で家に帰ることすらできない有様だつた。

疲労が自然と背中を丸める。

——昏睡病なんて、ほんとにどうにかなるのかしら。

疲れているのは身体だけではなかつた。

りだ。

人類は二世紀余りもこの難病に立ち向かつてゐるが、一向に成果は上がつていない。今日も進行中の計画を総点検したが、昏睡病に効果があるものは見受けられなかつた。

二年前、蓬萊テレビによる『唄子の部屋』が放送された折には、わずかに新規の昏睡病患者が減つた。

政府は勢い込んだが、その効果はごく一時的なものだつた。今となつては『偶然だつたのでは?』と考へる者も少なくない。視聴率の低迷から打ち切られたのも、そんな意見が支配的となつたからだろう。

最終回くらい見ようと思つたのだが、激務でそれもかなわなかつた。音楽は好きだつたが、最近は聞く暇もないのだ。

——わたし、いつまで昏睡病と戦わなきやならないんだろう。

不意に、人生がひどく虚しいものに思えた。

危険な兆候だつた。

考えを振り払うように、慌てて首を横に振る。

——だめだめ！負けてらんないんだから！

凛は自らの頬をぴしやりと叩くと、むんと胸を張る。空元気も元気だ。弱気は昏睡病の深刻化を招く。

今出来ることは、目の前のプランに全力を尽くすことだけだ。

『アイドルスター』。政府肝入りの蓬萊テレビ新番組。大規模なオーデイションを行つて、メインキャストは選りすぐりの人材を用意できた。大きな予算をかけた一大プロジェクトと言つていい。テレビ業界のみならず、様々な業界を巻き込んだ大仕掛けになる予定だ。

同僚たちのみならず、テレビ業界にも随分無理を聞いてもらつた。皆が皆、少しでも番組をよくするために死力を尽くしてくれた。関係各所に必死の根回しもして、アイドルスターは来週いよいよ華々しいスタートを切る予定だ。

——だけど、もし。

それでも、何の意味も無かつたら——

嫌な想像が心に入り込もうとしてくる。

聞き覚えのある声がしたのは、その時だつた。

「ハイ、凛。浮かない顔ね」

白シャツにタイトなスカートを着こなした女性が、街灯の下に立つていた。

「……遙？」

友人の名を口にしながら、しかし凛は眉をひそめる。

目の前の女性の雰囲気が、自分の知つてゐるそれとは違つたからだ。

「遙、よね？」

「そうよ。誰か他の人に見える？」

打ち合わせで先月会つたばかりじやない、と小首を傾げる遙に、凛こそ首を傾げる。  
どこからどうみても白柳遙だ。

しかし、違和感があつた。

こんな時間に突然訪ねてくるというのも、これまでの遙には存在しなかつた行動。パ  
ターンだ。

「……何かトラブルでもあつた？ 悪い報告はお腹一杯なんだけど」

「トラブル、つていうか……ねえ凛、一昨日の唄子の部屋の最終回つて、見てない？」

「気にはなつたけど、そんなヒマあるわけないでしょ。アイドルスターの諸々と男性保護法の改正が合わさつて大わらわよ、こつちは。今日の新聞だつてこれから流し読みするところよ」

「道理で」

肩を竦める遙に、凛はジト目を向ける。

「アンタねえ、アポくらいとりなさいな。私自宅に泊まらないことの方が多いの知つてるでしょ？」

「わたしもここ二日間はアポ取る時間も無いくらいだつたのよ。でも、相変わらず文部次官様も激務みたいね」

そう言つて微笑を浮かべる女の様子は、やはりおかしかつた。

遙という女性は、こんな魅力的な笑みを浮かべる女性だつただろうか。

「……アンタ、危ないクスリにでも手を出したんじゃないでしょ？」

眉間に皺を深くして、凛は問う。

「なんですよ」

「なんか、いやに元気じやないの。目の光が違うわ」

キラキラつていうかギラギラしてるわよ、と続けた凛の言葉を聞くと、遙はころころと笑つた。

「うふふ、そう？ ギラギラ？」

「ええ。何かあつたの？」

「そうねえ。私の目に光があるとしたら、それは——」

遙はそこで言葉を切ると、凛をまつすぐに見据えて続けた。

「輝くものを見たからよ」

きらめく瞳が、凛を引きつけた。

「——ちよつといいお酒持つてきたの。久しぶりに付き合わない？」

遙は手に下げる紙袋を持ち上げる。高級そうなボトルが見えた。

我知らず遙の顔に入つていた凛は、そこで気を取り直した。

「え？ あ、宅飲み？ 私の家何もないの知つてるでしょ」

大して飲みもしない酒のつまみを常備しておくほどマメな性格なら、固形栄養食など買ひ込まない。冷蔵庫に入つているのは飲料水程度のものだつた。

「ビデオデッキはあつたわよね？」

「ビデオデッキ？ あるけど、テープは国会とかのだけよ」

「大丈夫、そつちは自前で持つてきたから」

「テープを？なーに、酒のつまみになるほど面白い番組でも出来たわけ？」  
 「それは見てのお楽しみ」

遥は意味深に口角を釣り上げた。

「ふうん。貴重な睡眠時間削るんだから、ちょっとは期待させてもらうわよ」「少しひねたことを言いながらも、凛はどこかほつとしていた。

遙に会う直前、良くない思考に陥っていたようだ。だけど今は気が紛れていた。  
 友人とは得難いものだ。

——うん、そうね。テープに期待をするわけじゃないけど、最近は遙と飲むことも無かつたし。友達との付き合いが仕事だけなんていうのはつまらないわ。

そんなことを考えながら、ちらりと隣を歩く遙の顔を見る。

やはりその表情は明るく輝いていた。

何があつたのかはわからない。しかし、見ているだけで元気をもらえるような顔だ。例えるなら、昏睡病から最も遠い存在である女兒が、とつておきのプレゼントをもらつた時のような。

——なんだかよく分からぬけど、きっと楽しいお酒になるわね。

凛は久しぶりに微笑を浮かべ、官舎の門を潜つた。

そして、三時間後――

「んはあああああああ！シゲル様アアアアアツ!!」

「何度も聞いても最ツ高……！」

凛はエビぞりで悶え、遙はうつとりと目を閉じていた。

「遙ア！『口ケット』もう一回行きましょ！」

「いやいや『マツハカナブン』でしょ！」

『マツハカナブン』は『口ケット』でテンション上げてからでしょ！」

「いいから『口ケット』！わたしのテレビビデオよ！」

「わたしの持ってきたビデオテープよ！」

ふたりはぎやーぎやー言い合いながら巻き戻しボタンの所有権を主張し合う。言うまでもなく、貴重な睡眠時間とやらは丸めてポイされた。

## 第10話

凛は心に鋼鉄の鎧を纏つてその会談に臨んでいた。大砲で打たれてもビクともしないような、重厚な鎧を。

遙に頼み込んで実現したこの会談を、何としても成功させるために。

——だが、手の震えは収まらなかつた。心臓の鼓動は早鐘のようだ。大国アステカの大統領との会食時よりも緊張している。

慣れ親しんだ文部省庁舎の一室であるというのに、幻の中にはいるような非現実感があつた。

何故なら、今日の前にいるのは――

「初めまして、シゲル様。私、駿河凛と申します。蓬莱の事務次官を務めております」

恐らくは救世の英雄となるであろう、櫻崎シゲルその人だからだ。

ごく普通のジーンズとシャツでは、その完璧なスタイルと顔面、あふれ出るオーラとカリスマ性を一ミリたりとも隠せていない。

「おう、俺は櫻崎シゲル。よろしくな！」

「！」

大きな手と握手を交わした瞬間、脳内に走ったスパークで、心の鎧は木つ端微塵になつた。

顔が真っ赤になるのが、自分で分かつた。

「よつ、よよよ、よろしくお願ひいたします！」

手汗は大丈夫だろうか。さりげなくスーツの後ろで拭つてから握手したのだが、上等な仕立てのスーツは吸水性という点では最悪だつた。

くすくす笑う遙が鬱陶しかつた。

——ちくしょう、余裕を見せやがつて！アンタだつてシゲル様と初めて会つたときは絶対醜態さらしたに違いないのに！

シゲルにバレないよう遙を一瞬だけ睨み付け、凛は咳ばらいを一つ。

「ごほん。おおよその話は遙から聞いております。荒唐無稽で、しかし信憑性のある話でした」

「おつ、つてえことは信じてくれたのかい？」

「はい」

凛は即答する。目の前の男性が異世界からやつてきたという話を、凛は一切疑つてい

なかつた。親友である遙から幾つかの証拠と共に滾々と説得されたからというのもあるが——こんな女性の夢と理想をこねて出来上がつたようなファンタジーな人物がこの世界のどこかにいたと考える方がよほど非現実的だつたからだ。

凛はごくりと唾を飲み込み、シゲルを見据える。

——ぐうつ、超かつこいい！ビデオより十割増しでカツコいい！美の化身よ、この方！

だが見とれてばかりもいられない。凛はぐつと歯を食いしばり、本題を切り出すことにした。

「シゲル様、遙からこの会談の目的は聞いておられますか？」

「ああ。俺に頼みがあるつて言つてたな」

「はい」

凛は頷く。

——昏睡病撲滅。眼前の英雄の全面的な協力があれば、その夢物語が現実のものとなるかもしれませんなかつた。

しかし――

「——その上で、シゲル様にお尋ねしたいことがあります」「何だい」

「貴方様は、この蓬莱に何をお望みになられますか？」

——労働には対価が必要だ。

しかし、この奇跡のような男性に支払える対価など凛には思いつかない。  
富、名声。昏睡病の無い世界の住人であるならば、あるいは美女ということもあり得るのだろうか。

だが、例えそれがどんなものであろうと、凛は用意する覚悟があつた。自らの命すらも惜しくない。それと引き換えにこの男性の助力を得られるならば、凛は喜んで崖から身を投げるだろう。

凛は文字通り決死の覚悟を表情に滲ませていた。

その凛の様子に、何を感じたのか――

僅かな間をおいて、シゲルは口を開いた。

「――俺にはよ。たつた一つだけど、どでかい夢があるんだ。前世でも、こつちでも変わらずにな」

シゲルはそういうと、窓の外へと視線を映した。

その眼差しは庁舎の中庭を超えて、ここではないどこかを見ているようだつた。

「……その夢とは?」

凛が問う。

その問いに、シゲルは照れたような笑みを浮かべ、  
「——世界中の皆に、俺の音楽を聞いてもらうことさ!」

そう言い放つた。

シゲルが視線を戻す。

その日は鏡のように澄み切つていて、どこまでも真摯だった。

「だからよ。手伝っちゃくれねえか?」

——それ以外に、望みは無いから。

そんなシゲルの心の声が聞こえたような気がした。

「……願つても無いことです」

凛は溢れ出そうな涙を堪え、深々と頭を下げた。

この日、蓬莱とシゲルは手を取り合つた。

蓬莱は翼となり、シゲルを世界へと羽ばたかせていくことになる。

## 第11話

かつて帝という存在は、神と交信することができたという。

太古の昔は神の声を聴いた帝が民を導くことで、様々な災いから逃れることができた  
——というのは、殆ど神話の話だ。

帝の神性は薄れて久しい。現代においては蓬萊の象徴として、国事行為や式典に参加  
することが主な役割となっている。

しかし、今もなお蓬萊人の畏敬を集める存在であることは間違いない。

なにしろ蓬萊は二千年という歴史の中で、一度たりとも帝の血を絶やしたことがない  
のだ。少なくとも、記録の上では。

だが、その二千年の重みをもつ血脉は、今や風前の灯火となっていた。

容態の急変した帝の為に、御典医が呼ばれてから数時間。

ようやく夜御殿から退室した御典医は、暗く沈んだ様子で女官長の命子といくつか言  
葉を交わすと、肩を落としてその場を後にした。

俯いて唇を噛みしめる命子に、高位女官の史が静かに近づいて問う。

「御典医は、何と？」

「——レベル3の後期昏睡病症状に酷似している、と」

血を吐くような命子の言葉に、史はゆらりとふらついた。

「おいたわしい……まだ十にもならぬというのに」

「どうにも症状が特殊で……奇妙に進行が早く、このまま目覚めないとしても何の不思議もない、とのことじや」

「なんという……」

史は涙があふれるのを自覚したが、すんでのところで流れるのを堪えた。

早逝した先代帝に代わって、母親のように帝を育てていた目の前の命子が、必死に涙をこらえているからだ。

「……女官たちには？」

「伝えねばなるまい。誰か外に出ているか？」

「今日は宮子が外出届を出しておりましたが、確かにそろそろ帰宅する予定の筈です。残り十人の女官は、みな局にいるかと」

「うむ。では——」

「——命子さま！」

慌ただしい足音と共にやつてきたのは、高位女官の最後の一人、東であつた。はしたない所作に命子は眉を顰める。

「東、何事じや。夜御殿の前にあるぞ」

「もつ、申し訳ありませぬ！緊急事態ゆえ！今しがた、駿河の使いと名乗るものが参りまして！」

「駿河の使い？文部次官の駿河凜か？……その者は、名を名乗らなかつたのかえ？」

「不思議なことに、そうなのです。色眼鏡とマスクをして、まるで顔を隠すような風体をしておりました。とはいって、文科官僚の鈴木涼子に間違いないように見えましたが……」

「ふむ、面妖な。それでその者が如何したと？」

「こ、これを届けに！」

東が持つてているのは、一本のビデオテープであつた。

「ビデオテープですか？」

「は、はい！信じがたい話なのですが、なんでも『昏睡病に効果のある映像』が収められていると！」

「昏睡病に、効果……!?」

「なんと、まことですか?!」

その言葉に一瞬色めき立つた命子と史だが、すぐに肩を落とす。

悄然とした様子の二人に狼狽えた東は、慌てて口を開く。

「どうなされました！ 早う帝にこのビデオをお見せせねば！」

「そんなもの、不敬を承知でもお起こしし——」

「言いさした東の脳裏を、先ほどすれ違つた御典医の姿が過つた。

蒼白な顔でとぼとぼと歩いていた、その姿が意味するのは——

「まさかっ」

「帝は、もう目覚めぬ可能性があると」

「おおお……」

東はへなへなとその場にくずおれた。

沈黙が辺りを支配しようとしたが、命子は眉根を寄せながらも口を開いた。

「——御典医は帝の症状は特殊じやと申しておつた。もう目覚めぬと決まつたわけでもない」

御典医の言う『特殊』が『重篤化の速度が特殊』であるということを理解しつつも、命子はそう口にする。

仮初でも希望を持っていたかつた。二人の高位女官も気持ちは同じなのか、静かに領

く。

「命子さまの仰る通り。我々が諦めて何とするのです」

「は、はい。その通りですとも！」

東が空元氣を出しながら立ち上がる。

その東がまだつかんだままのテープに、命子は懷疑的な視線を向けた。

「……それにしても、昏睡病に効果のある映像とな？にわかには信じられぬが」「わたしも同感ですが、先方は確かにそう申しました」

「外連では？」

「駿河は信頼できる官吏ぞ。『効果のある可能性』ではなく『効果のある』と申したのであれば、そこには確信があるのじやろう」

「一体どんな映像が收められているのでしょうか？」

「先方はかなり急いでいたようで、詳しい話を聞く間もなくとんぼ返りして行きました。

——ただ、

「ただ？」

「櫻崎シゲルなる人物が映つていると、それだけは」

「ふむ？ 存じておるか、史」

「いえ、寡聞にして……しかし何にしろ、この宮廷には再生機器がございません」

「む？ 確か寄贈品のテレビとビデオが居間に——あ、壊れておつたか」

「はい。使うものもおりませんで、そのまでございます」

「むう。早急に修理を頼まねばなるまいな。帝が目覚められたら即座にお見せせねばならぬ」

「手配しておきましょう」

「あ、ビデオと言えば——宮子なのですが」

「ぽんと手を打ち、不意に史が切り出した。新たに宮廷女官として迎えられたばかりの娘の名を聞いて、命子は首を傾げた。

「あの娘がどうした？」

「何やら先日ビデオがどうこうと申しておりませんでしたか？」

「ああ——うむ。何やら自室でテレビとビデオが使いたいから、屋根裏の配線を弄つてもよいかと尋ねてきおつた。許可は出したぞ」

史が眉を顰める。

「や、屋根裏の配線？ それは電器屋の仕事ではないのですか？」

「相変わらず謎の行動力がありますね、あの娘は。ですが素人の配線工事など危険なのは？」

「別段資格の必要な行為ではないらしい。とはいわらわも心配になつた故、後ほど様

子を見に行つたのじやが、『万事うまくいきました』とのことじやつた。案外器用なよう  
じやのう』

「その器用さを仕事にも活かしてもらいたいのですが……」

史の言葉に、緊迫していた空気が微かに和んだ。命子は僅かに口元をほころばせる。  
「確かにあれは粗忽者じやが、不思議と人を和ませる空気を纏つておる。長い目で見て  
やれ」

「はい」

史も目元を和らげて頷く。

そこで東が、あ、と声を漏らす。話題の女官を、先ほど見かけたのを思い出したのだ。  
「……そういえば、先ほど玄関先に宮子を見かけたのですが、何やら一抱えもある大きな  
荷物を背負つて——」

東がそんな話を口に上らせた時であつた。

「——だれか、おるか」

夜御殿から、声が響いたのは。

「「!?」」

三人は弾かれたように顔を見合わせると、慌てて夜御殿へと突入した。

『——眠れ』

深く静かな声が聞こえる。  
いつもの声だ。

美しい声色の背後に、人智を超えた圧倒的な存在感がある。

『穩やかに』

今は亡き母の声を聴いているかのように、心が安らぐ。

純白の虚無に揺蕩つてゐるこの瞬間が、ずっと続けばいいとすら思う。

『——どこしえに』

逆らう気は、起きない。

『どっこいそはいかないのよね！』

——突如、声が増えた。

わらわは面食らう。

声が聞こえるようになつて二年が経つが、別の声が聞こえたのは初めてだつた。

『——貴様！ どうやつてここに！』

『おーほほほほつ、芸術の神なめんじやないわよ！ 二百年もあれば、依り代に語り掛けるくらいの信仰パワーは集まつちやうのよね！』

『相次ぐ横紙破り……！ 最早許されぬぞ！』

『あんたにだけは言われたくはないわ！』

二つの声が喧嘩を始める。

『大体ネチネチネチネチしつっこいのよあんた！ あの男はこの世界にはいないんだから、人の子を巻き込むんじやありません！』

『ほざくな！ わたしは神としての責務を果たしているだけだ！』

『なーにが責務よ！ ただの八つ当たりでしょ！』

『八つ当たり、だと……！』

大変な大声の口喧嘩だつた。

『ええい、こんな女の言うことに耳を貸してはならん！ 眠れ人の子！』

『眠つちやだめよ人の子！ 起きてれば楽しいこといっぱいあるわよ！』

『いい加減なことを吹き込むな！——人の子よ、浮き世は地獄だ。私の声に従い、眠りに

つくのだ！』

『そんなことないですうー！人の子、送られてきたビデオ見てみなさいビデオ！すつごいの映つてるから！今しがたそこに届いたから！』

『邪神の言うことに惑わされはならんぞ、人の子よ！』

『だあーれが邪神かつ！こうなりや徹底的に邪魔してやるんだから！ほおーらじやんがじやんがじやんがじやんが！』

すごく騒々しい琵琶の音が聞こえる。

『やめよ、やめぬか！ええいやかましい！人の子よ気にせず眠れ！眠るのだ！』

『眠っちゃダメよ！』

二つの声は平行線だ。

どちらの声にもただならぬ神気が漂つてゐる。どちらに従えばいいのかわからぬ。  
だが――

「あの、申しわけございません。うるさくて眠れませぬ」

姦しい口論に加えて琵琶の音。

どちらが正しいのかはともかく、眠りにつくのは不可能だつた。

『――あ！』

『あ、そりやそうよね！や、やつたあ作戦勝ちー！やーいばーかばーか！』

『ぐ、ぐぬぬぬぬぬ！』

二つの声が、だんだんと遠ざかっていく。  
目が覚めようとしていた。

「——だれか、おるか」

見慣れた天井を見上げながら声を上げる。

随分久しぶりに声を出したような気がする。掠れていたが、どうにか聞こえたらし  
い。慌ただしい足音と共に三人の高位女官が入室してくる。

「おお、おお！」

「帝——！」

「お目覚めになられましたか！」

三人とも目に涙を浮かべている。

密かに親のように慕っている命子が泣いているとこちらも悲しくなってしまう。  
涙の理由を問いたいところだつたが、わらわは夢の中の出来事を思い出して  
いた。

「びでおはどこか？」

——そう。たしか——

あのただならぬ神々しさの女性は、何と言つていたか。

## 第12話

日曜日。

目の前にでーんと鎮座する17型のテレビデオを見て、わたしは口元を緩める。

まったく危ないところだつたと言わざるを得ない。昨日から街中の電器屋を総当たりして、ディスプレイ用の一つを必死の説得で売つてもらえたのは最後の一軒だつた。

電器屋さんいわく飛脚便はここ二日地獄を見てるとかで、宅配を頼んでも届くのはいつになるか分からぬとのことだつた。当然そんなの待つてられないでの、わたしはタクシーを使って自分で持ち帰つた。

賭けてもいいが、テレビの品薄は当分続く。買おうと思つても買えない日々が蓬萊淑女を待つてゐる。これは予想じやなくて確信だつた。

それくらい、櫻崎シゲル様の存在は大きい。

木曜日、あの運命の日——私物を取りに実家に戻り、そのまま夕食後までだらだら残つていたのはまさに神懸り的といえた。そのおかげで、ほんの僅かだけ他の人より先を行くことができたから。

職場兼住み込み先である帝居にも寄贈品の大きなテレビはあるのだが、半年前に故障してから直していないらしい。見る者がないのに無駄な出費をする必要はない、というのが理由だそうだ。宫廷はしぶちんである。

ともかく、何も映らないデカい箱になんて興味はない。

わたしにはコンパクトでもビデオデッキ内蔵のこの子がいる！

うーん、機能的なフォルム。ステキ。

テレビデオというのはかさばるテレビとビデオデッキを一体化させた画期的な商品なんだけど、いくつかの問題があつて普及には至らなかつた代物らしい。割と致命的だつたのは、ビデオデッキが壊れて修理に出そうとするとき、その間テレビも見れなくなつてしまふ点だと電器屋さんは説明してくれた。

——しかし！わたしにはそんなの関係ない！

何故なら、修理中は実家にテレビを見に行けばいいだけだから！

職場と実家が近いというのは正義なのだ。

さて、お気に入りの家具には名前を付けるのが宮子流だ。

帝居の居間にある壊れたテレビに比べれば随分小さいその姿を見ていると、すぐに名前が思い浮かんだ。

「命名！ちつちやいし、ティーヴィーだから、チビちゃん！——これからよろしくね、チ

ビちゃん」

チビちゃんを撫でて、わたしはにんまり笑う。

さあ、これで準備は整つた。

女官長様に許可を取り、昨日のうちに屋根裏の映像ケーブルには分配器を取り付けてある。本来電器屋さんに頼むものだけど、それだといつになるか分からなかつたので、わたしは自分で施工した。

電気工事のような真似がわたしに出来るかは不安だつたけど、燃え盛るシゲル様への愛が不可能を可能にした。というか電器屋さんの説明通りやつてみたら案外難しくなかつた。

分配器から自室の押し入れ上まで持つてきた映像ケーブルは、今テレビの傍らまで伸びている。

わたしはケーブルをテレビに、電源プラグをコンセントに差し込むと、いよいよテレビのスイッチに手を伸ばす。

緊張の一瞬だ。

「さあて、ちゃんと映つてねー！」

「ぱちつとな！」

とスイッチを押した瞬間、凄い勢いで自室の襖が開かれた。

えつえつ、何その機能?! テレビのスイッチつて襖と連動してるの?!

とか思つたけど、単に女官長様が襖を開けただけだつた。

だけど普段冷静沈着の四字熟語が服着て歩いているような命子様は、今は目を血走らせていた。

礼儀作法の権化たるお方が、声もかけずに襖を開けるというのもおかしい。

切れ長の眼を今は限界まで見開いている命子様は、がぱっと口を開いて声を発した。

「てれびは、ここかあ！」

金切声だ。

えつ、ちようこわい。何なの?!

「こつ、これは良いテレビですよ?」

ただならぬ殺気に、わたしはチビちゃんを背後にかばつてそう口走る。

しかし女官長様は聞く耳を持たない。迷いのない足取りでずんずん近づいてきて、私の前でぐわっと両手を広げる。

アリクイの威嚇のポーズだ……！

「のけ、宮子！ そのてれびに、蓬莱の未来がかかつてているのじや！」

「えつ?! な、なんで?! チビちゃんそんなの荷が重いです！」

変なもん背負わせないで！ こんなに小さな子なんです！」

「いいからのけい！」

「だつ、ダメですよ・この子に乱暴する気なんですね?!」

恐るべき力で迫りくる女官長様をこちらも必死に押し返す。すると、襖から新たな人影がひょっこり顔を出した。

極めて小さな頭。背中まで伸びた長い黒髪。

人形のように整っているが、長患いで頬から肉の落ちてしまつたそのご尊顔は、まるうことなく――

「帝お!？」

我らが女官の主であつた。

高位女官二人に介助されながらも、帝は自らの脚で立ち、歩いている。

「うわあつ!? 帝が起きて歩いてる!? おつ、おはようございますっ?!」

「おはよう」

あわわ帝の生声聞いちゃつたよ?!

帝は私が研修を始めたころには既にレベル3の昏睡病に似た症状に陥つていて、自ら食事をとることすらできず、一日の大半を眠つて過ごしていた。勿論声を聞いたことなどない。というかほとんどの蓬萊人はラジオを通してしか帝の声を聞いたことはないだろう。

ふふふ、これは真美ちゃんに自慢案件！

——なんてことを考えてる場合じやなかつた。

レベル3の昏睡病患者が自発的に言葉を発するなんて奇跡なのだ。原因は不明だが、今帝の病状は上向いている。この機を逃してはならない。

「女官長様、一大事ですよ！ テレビにかまけている場合ですか？ 早くご典医を！」  
「一大事だからこそてれびにかまけるのじや！ この駿河より託されたびでおを、帝の意識のあるうちにお見せせねばならぬ！」

「ええつなんですかそのビデオ？！」

「知らぬ！ だが、櫻崎シゲルなるものが映つていると——」

「特効薬じやん！」

わたしの手が鞭のよう伸びてビデオを掠め取つた。

呆気にとられる女官長様を放置し、チビちゃんにビデオをセットする。

スムーズにビデオを飲み込んだチビちゃんが、その小さな画面いっぱいに一昨日十回繰り返し見たシーンを再生する。

『唄子の部屋』最終回だ！

「そつかー！ そだよね！ 誰よりもまず昏睡病患者に見せるべきだよ！」

わたしは一人頷きまくる。駿河から託された、っていうのは文部次官の駿河凛さんの

ことだろう。なるほど、文科省ならテレビ番組にも精通してるわけね。

それにも関わらず流石エリート中のエリートだ。シゲル様のことを知つて即座に昏睡病の治療に結びつけるなんて！

わたしはシゲル様のことで頭が一杯でそんなこと考えもしなかつた！

「ミリも！」

「ほらほら早く座つてください！すぐ歌が始まることですから！」

呆然と立ち尽くす四人を八畳の自室に引っ張り込む。

あ、座布団が一個しかない。帝に使つてもらおう。

「はい帝。お座りになつてくださいな」

「うん」

帝は素直に頷いて、座布団にぺたんと座り込んだ。可愛い。

頭を撫でたくなるけど我慢しよう。女官長様の鉄拳が飛んでくる気がする。わたしも腰を落ち着けると、いよいよシゲル様の歌が始まるところだつた。まずは『ロケット』！テンポの速いわくわくする曲だ。

置いてかれないうに気合入れてかなきや！

四人が呆気にとられていたのは僅かな時間だつた。

一曲目で頬を紅潮させ。

二曲目で目を輝かせ。

三曲目で黄色い歓声を上げ。

四曲目で騒ぎを聞きつけた他の女官たちが集まつて――

十曲目が終わるころには私の八畳間は熱狂に包まれていた。

「すつゞい！なんていうかもう、すごい！とにかくすゞくて――ごつ、語彙が溶けてく  
！」

「こんな男性がこの世に存在したのですか？！夢ではありませんの？！」

「宮子ちゃん、もう一回もう一回！」

「ええい、静まらぬか！シゲル様の声が聞こえぬであろう！！」

「めいこ、おぬしもうるさい」

「宮子早く巻き戻してよ！出来るんでしょ？」

「あーはいはい」

この日、女官たちと帝の症状は劇的に回復したけど、チビちゃんは過労死するところ  
だつた。

## 第13話

「採用です、駿河さん」

櫻崎シゲル様のもたらす音楽を国家として強力にバツクアップ——という見出しき見ただけで、蓬莱国首相阿藤寛子は即答した。座布団のように分厚い資料はろくに目も通さない。

「首相。判断が早すぎでは」

凛が苦笑いと共に言うものの、鉄の女の異名をとる女傑は一顧だにしない。

「遅いくらいでしよう。本来であれば唄子の部屋最終回と同時に決定しているべきでした」

ビデオの存在を知ったのが昨日だったのが悔やまれます、と寛子がこぼす。

「とにかく、男性のテレビ出演と肖像権絡みの法律に特例を設けなくてはなりません。——少なくとも、レベル1後期程度の昏睡病であれば、あのビデオは一度で完治させてしまうのだから」

その身をもつて体感したのだろう。ウェリントン型の透明なガラスは、寛子の目に宿つた光を全く隠せていなかつた。

「スピード勝負です。今この瞬間にも昏睡病の進行は進んでいる。患者がレベル3に入る前に、何としても再放送はしなくてはなりません」

寛子の言葉に、凛は力強く頷く。その瞳に決意を乗せて。

「私を含め、首も懲役も覚悟で再放送に踏み切ろうとしている者は多いです。何人かの犠牲を覚悟すれば、再放送自体は即座に可能ですが」

「それをするところの計画は最初の一歩目からケチがつくことになるわ。無法を押し通せば瑕疵が残るもの。あのお方の足跡には一片の曇りすら必要ありません」

凛の提案を、寛子は断固として拒否した。

そもそも政府が大っぴらに法を無視するわけにはいかない。それは悪しき前例となつて、後々の蓬萊を蝕むことになるからだ。

しかし、今が緊急事態であるのも事実。惱ましい問題に、寛子は眉間に皺を寄せる。

「……とはいひえ昏睡病の対策は一分一秒を争っているのも正直なところ。せめて複製したビデオを各地の医療機関に送り届けたいところですが——」

寛子は口を噤む。残念ながらそれは明確な法律違反である。肖像権の侵害に当たつてしまふのだった。

二世紀前までは蓬萊において肖像権を定めた法律は存在しなかつたが、男性保護法が生まれてからは話が違う。肖像権の侵害は立派な違法行為になつた。

とはいえ本来本人の許可があれば抵触しない筈の法だ。しかし、男性保護法が絡むと話が違つてくる。何せ男性は物心ついたころには昏睡病に侵されてしまう。ある程度年齢を重ねると、自らの意思を示すことをやらできなくなつてしまふのだ。

故に、当人の意思に関わらず男性はガチガチに保護される。——その肖像権に関するも。

しかし今は、男性を守るはずの法がシゲルの動きを阻んでしまつていた。

「——皮肉なものね」

「仕方ありません。進んでテレビに出ようとする男性の存在は、我々の想像の埒外でした」

「そうね。特例を設ける必要がありますが、臨時国会を開かねばなりません。……ですが、『軽々に男性を利用するべきではない』と内侍省あたりが声を上げそうですね」

寛子はため息を吐く。帝に侍るという性質上高いモラルが求められる内侍省のみならず、男性の権利を声高に訴える議員は数多い。スムーズに特例が認められるかは疑問だつた。

しかし、寛子のその見解に、凜は即座に口をはさんだ。

「いえ。もしかすると、内侍省は障害にならないかもしません」

「——？ それは、何故？」

「……出本不明のビデオが、今頃宮廷に届いているはずですから」

寛子はびたりと動きを止めた。その言葉の意味するところを瞬時に、正確に理解したからだ。

——国家として公にビデオを配布することができなくとも、『謎の第三者』の仕業であれば。

届けられたビデオをチェックするのは、送り先の勝手だ。

そして、シゲルの姿を見て、その歌を聞いた者がどんな感想を持つか、寛子にはありありと想像できた。

「……なるほど」

両手の指を組んだ寛子が眼鏡を光らせる。

「医療機関や、障害になりそうな議員にも届いたりして、ね？」

「根拠のない勘で申し訳ありませんが、誰かがすでに手配している予感がします」

「その誰かさんにお礼を言つてあげたいわ」

寛子のセリフに、凛は答えず曖昧な笑みを浮かべた。

いうまでもなく、凛が渡つているのは危ない橋だつた。事が露見したときに、いの一

番に責任を取らされるのは凛だろう。

——だが、この若き俊英をここで失うわけにはいかない。その損失は蓬莱にとつて決して無視できない痛手となる。

「国民の為に英断を下した蓬莱テレビや『誰かさん』に割を食わせるわけにはいかないわね」

くいっと眼鏡の位置を正すと、寛子は胸を張るようにして椅子に凭れ掛かる。

「特例は通すし、遡及適用も認めさせるわ」

断固として言い切った寛子の顔は、不敵にほほ笑んでいた。

凛は鉄の女の笑みというものを初めて見た。

その細面には、一国の首相に相応しい淒味が漲つていた。

自国のトップの風格に満足を覚えながら、凛は問う。

「首相の見立てでは、特例が通るまでどれくらいの時間が必要になりますか？」

「最速で月末になるかしら」

——素晴らしい速度だ。恐らくは希望的観測ではなく、阿藤首相はその政治的剛腕で

最速を実現するだろう。

しかし、足りない。

「驚くべき速度ですが、人類には頓服薬が必要です」

「それはわかるけれど——テレビ放送ができない現状、どうやつて頓服薬を用意すると  
いうの?」

「資料の14ページをご覧ください」

寛子は資料に視線を落とすと、小首を傾げた。

「……ラジオ番組?」

凛は頷く。

「検証の結果、ラジオ番組であれば肖像権の問題を潜り抜けることが可能です」  
櫻崎シゲル様をメインパーソナリティに据えたラジオ番組計画——資料にはそう記載されている。

「二世紀の間著作権に関しては手付かずだつたのが幸いした形だつた。ラジオであれば放送の手続きは容易である。

凛の言葉に、寛子はなるほどと呟く。

「確かにテレビの普及率は三割程度。現段階で全ての家庭にシゲル様の音楽を届けようと思えば、ほぼ100%の普及率を誇るラジオを利用するには理に適つているわね」「はい。そもそも電化製品の製造ラインというものは即座に出来上がるものでもあります。これから工場がフル回転するとしても、全ての国民にテレビが行き渡るには少しの時間が必要になるでしょう」

「道理だわ」

寛子は頷く。

しかし、懸念もあつた。

「——でも、シゲル様のご尊顔抜きでも効果はあるの？」

そのことである。

寛子がビデオを見たとき、まずビジュアルで度肝を抜かれた。あれほど美しい男性というのは、もはや一種の暴力であるとすら感じた。あのインパクトが昏睡病の回復に一役買つたというのは想像に難くない。

だが、凜は力強く頷いて見せた。

「あります。ビデオほどの効果は見られませんでしたが、音声だけでもレベル1患者の回復を確認しています」

検証済みらしい。流石に仕事が早い。

寛子は湧き上がる喜びの念を禁じえなかつた。今のレベル1は将来のレベル4だ。それを回復させることの意味は、果てしなく大きい。

「政府は助力を惜しみません。早急にラジオ番組を開始して頂戴」

「承知しました」

「それと——」

寛子は一つ咳ばらいをすると、さり気ない風を装つて言つた。

「次にシゲル様と会合をすることがあれば、私にも声をかけるように」

——死んでも出るから。

寛子の声なき声を、凛は確かに聞いた気がした。

## 第14話

櫻崎シゲルのお、シゲルラジオオツ！ラジオの前の君、元気してるかい？もしも元気がないのなら、俺のをちょいと持つてきな。お聞きの通り、俺は今日も絶好調だからよ！

さて、早いもんで三回目となつたシゲラジだけど——いやー、ありがたいことに大反響みたいでな。週二回のペースで三回目だから、ラジオ開始から十日ばかりしか経つてねえんだが——お便りの数がすげえんだこれが。ハガキで蓬萊ラジオ局が埋まつちまうんじやねえかって心配だよ、俺は。

おつとそうそう、まずこれ言つておかねえとな。今日、とある質問にようやく答えられるようになつたから、この場で発表するぜ。

質問の内容は、唄子の部屋最終回の再放送はしていただけるのですか、つてえやつだ。滅茶苦茶多い質問だ。大抵のハガキに書いてあるから。

これについてだけど、正式に再放送が決定した！来週木曜午後八時から、蓬萊テレビ

で放送だ！

ちよいと待たせちまつて悪かつたな！なんせ法律の問題が立ちはだかってよお。阿藤首相はじめ政治家の皆が頑張つてくれたから、なんとか放送することができるようになったんだ。いやあ関係各位様に感謝感謝だぜ。

再放送される最終回だけど、先週のラジオでやつた『風の歌』とか『ロケット』はこの時にも歌つてるから、興味があるなら是非見てくれよな。音質もラジオより良いはずだぜ。

さて、じゃあお便り読んでいこうか。えーと、ペンネーム『24歳会社員』さん。  
 ……あのな。前回も言つたけど、ペンネームつてもつと適当でいいんだぞ？なんだつてみんな年齢と職業の組み合わせで送つてくるんだか……

えーと、『毎週楽しく拝聴しております』ありがとな！『一か月前にレベル1の昏睡病を宣告された私ですが、シゲル様の歌を繰り返し聞くようになつてからみるみる症状が改善され、先日遂に寛解と診断されました』おお、おめでとさん！『私を昏睡病から解き放つてくれた名曲【君だけを見つめる】のリクエストと共に、シゲル様に感謝の言葉を送らせていただきます。——本当にありがとうございました、シゲル様。貴方は私の、いえ、きっと蓬萊人全ての救世主です』

……わはは、大げさだなー！おい、24歳会社員さんよ！俺は好き勝手に歌つただけ  
だぜ。お前さんが回復したのは、お前さんの心が昏睡病を跳ね除けたからさ。感謝の言  
葉は手前のハートに囁いてやりな！

——だけどリクエストのほうはきつちり聞かせてもらつたぜ。そういうやこれやるの  
は唄子の部屋以来だつたな。

『君だけを見つめてる』！

』

シゲルのラジオ放送開始から僅か二週間。

蓬萊人はレベル1の昏睡病を克服した。

## 高校教師・座間美智子視点

私、座間美智子にとつて、目覚めは憂鬱なものだつた。

かつて抱いていた教育への情熱は失われて久しい。高校教師としての仕事はルーチンワークと化していて、何をしても心は石のように動かなかつた。

二十代後半に差し掛かり、いよいよ昏睡病の足音が聞こえてきたのだろう。次の定期健診では、レベル1を申告されるかも知れない。

人工授精で設けた一人娘は、まだ八歳だつた。十五歳の成人式を迎えるまでは何とか生きていたいが、今発症すればレベル3まではギリギリだろう。

最近は、目が覚める度に昏睡病が近づいてくる気がする。

だから、憂鬱

——だつたのは、二週間前までの話だ。

「かなめ！ 小学校遅刻しちゃうわよつ」

「んんーつ……」

私は布団をひつぺがされた愛娘は、不満げにむにやむにや言いながら、のろのろと体を起こした。

「おかあさん……うー、もうこんな時間」

かなめは枕元の時計を一瞥すると、明らかに睡眠不足の顔で呟く。

——この娘、またやつたわね。

「かなめ、貴女また夜更けまでビデオ見てたでしよう」

「ぎくつ」

律儀に口に出して、かなめが動きを硬直させる。

ビデオとは、つい二週間ほど前に我が校に齎された、『唄子の部屋』最終回が収められたビデオのことだ。神宮寺真美という一生徒が奇跡的に高画質で録画に成功したそれは、我が校においてペストよりも早く広まつた。

噂が噂、ダビングがダビングを呼び——先週、ついに私もそのビデオ入手すること

ができたのだ。

当然娘と一緒に即座に見た。

——もうね、母娘二人してシゲル様の虜。

真美さんは我が蓬萊第四学校の英雄として表彰してもいいと思う。まあ近々『唄子の部屋』の再放送は決まつたらしいけど——真美さんのお蔭で、我々は普通の蓬萊人より少し先を行くことができた。

そう。ラジオの放送より、ほんの僅かだけ先にシゲル様を知ることができた。この僅かの時間が、黄金よりも貴重だった。

このアドバンテージのお蔭で、テレビ、ビデオ、テープを何とか入手できたという者は多いから。

今電器屋さんに行つても商品棚に並んでいるのは虚無だけだ。シゲル様を知った蓬萊淑女たちがイナゴのように買い漁つた後だから。

関連企業に政府のテコ入れが入つたらしいけど、電気製品がそんな簡単に増産できるとも思えない。品薄はまだしばらく続くだろう。

それについても、教育番組目的でテレビとビデオを購入してあつたのはまさに僥倖だつた。そのおかげで自宅でシゲル様の御姿を拝むことができるのだから。

——とはいへ、小学生がこそそと深夜まで見てるのは大問題！

「シゲル様を見たい気持ちは分かるけど、それでお寝坊なんて言語道断です！次私が起  
こす前に起きてなかつたら、ビデオデッキは封印しますからね！」

「そ、それだけは！それだけはかんべんをー！」

愛娘がベッドの上で土下座する。芝居がかつた滑稽な仕草に、怒り顔が自然と苦笑に  
変わってしまう。

「まつたくもう——ご飯できてるから、顔洗つて早く食べちゃいなさい」  
「はーい！」

「おいしい！やつぱりおかあさんの卵焼きは世界一おいしい！」

パジャマ姿のまま朝食をぱくつくかなめの顔は、見てるこつちも嬉しくなるような笑  
顔だ。

「調子がいいんだから」

そういういつつ、私の口元は我知らず緩んでしまう。

シリアルや完全食に比べれば料理は手間だが、比較にならないほど美味しいし、何よ  
り我が子の笑みを見てしまうとかつての朝食に戻す気は起きなかつた。

実際に三日前、時間がない朝に十日ぶりの完全食を食べることになつたのだが——とても食事とは思われなかつた。

——いや本当、あんなにマズかつたかしら。明らかに昏睡病で味覚がどうにかしてたとしか思えない。なにあれ。土塊でしょ。

今となつてはなぜあんなインスタント食品を食べていたのか心底不思議だつた。食事というのは、こんなに美味しく、楽しいのに。

「じゃあお母さんは先に出かけるからね。きちんと歯を磨いてから登校すること!」  
「はあい。いつてらっしゃーい」

愛娘の声に背を押され、私は職場へと赴く。

外はいい天気。

今日もいい日になりそうだつた。

まだ七時半だというのに、校門前は生徒で賑わつてゐる。

ほんの十日ほど前まで、死んだように静かだった登校風景は、今や浣瀬とした女子高生たちの社交場へと変貌していた。

「おはよー！」

「おはよー！ ねえねえ、昨日のシゲラジ聞いた？！」

「もちろん、逃すわけないでしょー！ 十分前から正座待機してたよ！」

「だよねつ！ わたしもわたしも！」

「ラジオじゃなくてラジカセ欲しいよー。昨日も結局録音できなかつたし」

「永久保存しておきたいよねえ」

「大丈夫！ 2—Aの理子さんに聞いたんだけど、カセツトテープもダビングできるんだつて！ なんかライン出力——入力だつけ？ とにかくそんな機能があるラジカセならテープ増やせるらしいよー！」

「——つていうことはつまり、シゲラジ初回から録音している人は沢山いるから——」「焦る必要ないってことね」

「神の発明品じやん。確かアステカで開発されたんだつけ？」

「そうそう。ジェーン・ホワイトっていう天才さんが、テレビ造る前に開発したんだつて」

「あー、その人何か月か前にニュースになつてたよね」

「昏睡病レベル3になつちやつた、つてのでしょ?『人類の大損失』って書いてあつたの、新聞で見た記憶がある」

「——ちよつと不謹慎かもしけないけど、レベル3になるまでに色んな機械開発していくくれて、本当に感謝だね」

「うん。足向けて寝られないよ」

「ほんとだね。そのラジカセさえ買えば、また初回からシゲラジを楽しめるんだもん」

「……買えればね」

「……」

「……」

「……わたしさあ、直ぐにでも第一回を聞きなおしたいんだけど」

「……そんなの皆そうよ」

「ラジカセ持つてる人のうちにお邪魔するしかないねー」

「唄子の部屋最終回、再放送だつて!」

「ええ、ついに来たわね……! ダビングじやなくて、オリジナルを手に入れる機会がつ

！」

「ダビングって微妙に劣化するもんねー」

「見れるだけありがたいけど、やつぱり画質と音質にはこだわりたい！」

「テープは準備できる？」

「抜かりないわよつ」

生徒たちの声は力に満ちていて、表情は満開の花のように瑞々しい。つい数週間前に比べれば、誰もがまるで別人だつた。

同じ空間にいるだけで幸せになれるような空気を、十代の少女たちは全身に纏つていた。

——そうよね。きっと、今の生徒たちこそ、本来あるべき少女の姿なのよ。

最低限の挨拶をして、人形のように勉強と職業訓練をこなすだけ。そんな生徒を見る教師たちだつて、無表情に知識と技術を詰め込むルーチンワークをこなすだけだつた。

そんなの絶対間違つてるつて、今なら思える。

おしゃべりが大好きで、眩しい笑顔で未来を語る少女たちを、正しく導くことが教師の本分！

「あ、座間先生。おはようございます！」

「おはようございまーす！」

教育の熱意を燃え上がらせ、肩で風を切つて歩く私に、生徒たちが笑顔で朝の挨拶をしてくれる。

それでまたやる気がチャージされた。

私も笑顔で挨拶を返して、校舎内へと入つていく。

——さあ、バリバリ働くわよー！

蓬莱淑女は眞面目だ。授業中の静けさは数週間前と大差ない。

違うのは休み時間に突入してからだ。生徒たちは礼を終えて着席した瞬間から、早朝の雀の群れもかくやというおしゃべりを再開する。

その内容といえば、ほとんどがシゲル様のことと――

「ううう、職業訓練の給料だけじゃお金たりない！」

「給料の前借できないかなー……」

「安心して、どうせお金があつてもモノが無いから」

「いつになつたら電器屋さんの在庫復活するのよー」

「駅前アーケードは全滅よ。もうどの店舗も『アルバイト募集』の張り紙はしてないわ」「くうう……桜通りに続いて、アーケードもかあ」

「口入屋は？」

「どこの口入屋も口開けたピラニアみたいな学生たちがひしめき合つてるわ。整理券配  
られるくらいよ」

「歩行者天国で手作りアクセサリーでも売る？」

「むりむり。ぜーつたい材料費ペイできないつて」

「やつてみなきやわかんないでしょー」

「いーえ、わかるわ。だつて今この状況で、貴女だつたら学生が作つた路上のアクセサ  
リーにお金使う？」

「うつ」

「そんなお金があつたらテレビ貯金かビデオ貯金。もしくはラジカセ貯金でしょ。みー  
んなそよう」

「ううつ、世知辛い」

「金！金！金！だつた。

淑女として恥ずかしくないのか！と一喝するものなど、影も形も見えない。いま女子たちには金が無く、しかし確かに『元気』に満ち溢れていた。

——私には、それが何よりも得難いもののように思えた。

「あ、先生！ちょっと質問いいですか？」

次の授業の為に教室を去ろうとする私を呼び止める声があつた。

振り返れば、そこにいるのは神宮寺真美さん。

「あら真美さん。もちろん、どうぞ」

聾員といわれようが、彼女になら大抵の質問には答えるつもりだつた。生徒たちだけでなく、教師たちのためにもダビング作業に骨を折つてくれた彼女を無下にするなど、蓬莱淑女としてあるまじき行為だ。

「あの——職練のコマが増えるって噂、本当ですか？」

真美さんが質問した瞬間、教室内のおしゃべりがぴたりと止んだ。

——なるほど。そんな噂があるなら、そりやあ気になるわよね。

別段内緒にすることでもないので、私は即座に答えた。

「耳が早いですね。本當ですよ。文科省から通達がありました」

中学、高校には『職業訓練』——略して職練——とよばれる授業が存在する。

将来の勤め先候補に訓練生として勤め、そこで実務のイロハを教わるのが職練だ。午後の授業は丸々職業訓練に充てられている学校も多く、この蓬莱第四高等学校においても例外ではなかつた。

ちなみに職練の時間には、ちゃんと給金がでる。もちろん仕事によつて金額は変わること、全額ではないけれど。

つまり真美さんの質問は、みんなのお財布事情に直結しているのだ。

「ほ、ほんとなんですか!? やつたあああ！ お給料増えるう！」

私の答えに、真美さんは飛び上がって喜ぶ。他の生徒たちも次々と喜びの声を上げ、教室は沸きに沸いた。

……うーん、次のセリフを言うのが心苦しい。

「まあコマが増えるのは来学期からですけどね」

「「なんでええええ!?」」

生徒たちは喜びの勢いをそのまま悲しみに転化した。すごい感情の振れ幅だ。シゲル様登場以前だとあり得ない。

はたから見てる分には——悪いんだけど、ちょっと面白い……

「職業訓練先の体制も変更しないといけませんし、学校側も学習指導要領の変更とか授業時数の調整なんかがありますからね。一朝一夕にはムリです」

「じゃ、じゃあわたしのラジカセ購入資金はどうしたらいいんですか?!」

「半泣きで真美さんが詰め寄つてくるけど、私は目を逸らすしかない。  
「休日にバイトする、とか……」

「求人募集なんてものは、今やテレビの在庫くらい珍しいんですよ!」  
真美さんの悲痛な叫びに、教室中が賛同の声を上げはじめる。

「そうです! 真美さんの言う通りなんですよ!」

「もうどこ探してもないんです!」

「職練では仕事にも慣れてきました。幾つか資格も取りました。一千万円の機材すら任せられました! でも日曜になつたら——駐車係の仕事すら無いんです!」

「財布の中身が見つからない……見つからないんですね——テレビを買うまではちゃんとあつたのに……」

「テレビ買つたからでしょ! とはとても言えない愁嘆場が目の前に繰り広げられている。」

私は慌てて声を張り上げた。

「安心してください! 確かに今は求人が尽きていくようですが——断言します。今だけです」

「え?」

「（）く近いうちに——百パーセント、確実に、あらゆる分野で人手が足りなくなります」  
これは間違いのない情報だった。

蓬莱には今、シゲル様が起こした風が吹きはじめた。今はまだつむじ風で、家電の需要急増という分かりやすい現象に留まっているようだが——この風がその程度で収まるわけがない。いずれ蓬莱中を、いや世界をも巻き込む大旋風となる。

恐らくこれから訪れるのは、空前の好景気。需要が需要を呼び、雇用側は人手がいくらあつても足りなくなる。

つまるところ、じきに完全な売り手市場がやつてくるから安心してください——と、私はそのようなことを述べた。

一瞬沈黙した真美さんはなるほどと呟いて——くわっと目を見開いた。

「でもわたしたち、今お金が欲しいんですよ！」

もつともだつた。

私はやつぱり無言で目を逸らすしかなかつた。

## 第15話

この一世紀の間、世界中のGDPは緩やかに、しかし確実に右肩下がりを続けていた。あらゆる国家はこの状況を打破すべく協力し合い、それでも解決することが出来ずについた。

——櫻崎シゲルが登場するまでは。

凛は部下の鈴木涼子に手渡された資料に視線を落とし、わあお、と小さく声を上げた。記載されているのは去年からのGDPの概算。そこには直近一ヶ月——つまり櫻崎シゲルが登場した後——のGDPも計上されていた。

無論、本来データの集計には時間がかかる。この直近の数値は正確なものではなく、かなりの割合で予想も含まれている。

——それを踏まえたうえでも、そのグラフは異常だつた。

「すつごいわねー。V字回復っていうレベルじゃないわよこれ」

「下り坂に突然壁が出来たみたいなものですからね」

「オマケに壁の高さは今をもつて上昇中、と」

凛はにんまりと笑みを浮かべる。

シゲルの登場はテレビ、ビデオのみならず、様々な物資への需要を急増させた。食料もそのうちの一つで、ほとんどの食材食品が飛ぶように売れている。結構な事だつた。消費の活性は景気の活性である。

しかし、中には逆のグラフを書くものもあつた。

「——完全食の売り上げ、大分落ちたわね」

資料の中にある右肩下がりのデータを見て、薄々予想はしてたけど、と凛は呟く。

完全食。昏睡病に対抗すべく世界中の企業協力の元に生み出されたプロツク状の食品である。生産性、保存性に優れ、栄養面でも文句の付けようがないという三方良しの食べ物だが、味は塩を振った粘土に近かつた。コスト面でも優秀なこの食料は、しかし今蓬萊において急速に支持を失いつつある。

「はい。それに代わるように、やや高価な食品が飛ぶように売っています」

涼子の補足説明に、凛は「でしようねえ」と返す。

——昏睡病は味覚を鈍らせる。これは間違いない事実だつた。

戦前から『気鬱の病は味覚障害を引き起こす』というデータは存在したが、昏睡病も例にもれなかつた。完全食の味が変わつた気がする、と言つて検査を受けに来た人が昏

睡病を宣告されるのはままあることである。

——そもそもこの世界の人間は、例外なく昏睡病に侵されていた。それは男女を問わず、生まれたときから昏睡病に罹り患しているのだ。昏睡病と診断されていない子供も、医師に発見できないだけであり、それはいわば『昏睡病レベル0』なのである。ところがシゲルの登場によつて、本当の意味で健康体を取り戻す人々が急増しだした。

それが何を意味するか——

「無理もないわよ。私も最近は完全食齧るたびにむなし気分になるもの。たまに炊くごはんの美味しいこと美味しいこと」

「わかります。塩むすびにするだけで無限に食べられる気がしますからね……」

「そうなのよ。それでスーパーに米を買いに行くんだけど——」

「品薄ですよ。どこも」

「残念ながらね」

つまるところ、味覚の正常化による『まともな食材』の需要急増である。

「……ぜつたい米不足になるわよコレ。小麦はまあ、アステカからの輸入で何とかなるかもだけど」

「いえ、アステカにもシゲル様の存在を広めることを考えれば、下手すれば小麦も危うい

のでは

「小麦粉は完全食の原料なんだから、多分余るはずなのよ。完全食のシェアが縮小していけば、加工前の状態で店頭に並ぶことになるわけだから。おんなじ理由で卵とか大豆なんかもセーフね」

「なるほど。では、生鮮食品は……？」

涼子の質問に、凛は眉を顰める。

「……涼子。最近、スーパーでその手の品物買ったことがある？」

「仕事終わりに向かうと、鮮魚、青果、精肉コーナーには『本日は売り切れました』のプレートしか置いてませんよ」

「それが答えよ。……諸々のデータ、早急に農水省にも共有させといて」

「承知しました」

凛は農水省の面々が急増する仕事量に頭を抱える姿を幻視しつつ、次の懸念点を涼子に問うことにする。

「インフレはどうなつてる？」

「制御下にある、と言つていいでしよう。労働量自体が急増していますから」

これまで高級な嗜好品として位置づけられていた生鮮食品や、家電。それらを手に入れるために、蓬萊民たちはこぞつて口入屋に走っていた。

「過労の問題は?」

「厚労省によれば、平均労働時間で見れば過労死ラインには幾分か余裕があるとのことです。全体的に見れば問題ない範疇かと」

「ふ」む。まあ、蓬萊としても今が踏ん張りどころなのは間違いないからね。ちょっとくらいの無理は仕方ないか」

「……しかし、個人個人で見れば明らかにオーバーワークをしている者も見受けられます」

じろりと涼子の目が凜に向く。

「うつ……し、仕方ないでしょ。もう滅茶苦茶な仕事量なんだから。立場上、任せられな仕事が多すぎるのよ」

「……睡眠時間だけはしつかり確保してくださいね。今凜さんに倒れられると様々な事業が躓くことになります」

「だいじょーぶだいじょーぶ。シゲル様の音楽聞くとね、疲れが吹っ飛んで目が冴えるから」

「危ないクスリじゃないんですから……」

「ま、最低限の睡眠はとつてるわよ。——で、昏睡病の方は?」  
いよいよ本題に移った凜にむかって、涼子は微かに笑みを浮かべて胸を張った。

「レベル1は最早脅威ではありません。ラジオを聞いたレベル1の昏睡病患者は、全てが寛解しました」

「重度のレベル1も？」

「全て、です。それどころかレベル2にも改善の傾向がある、と」

耳を疑うような良いニュースが次々と上がつてくる。凛は小躍りしたくなつた。

希望。まさにその二文字が、絶世の美男子の姿を象つて蓬萊に現れたのだ。

「加えて興味深い報告が上がっています」

「なにかしら」

「同程度のレベル1昏睡病患者にラジオを聞かせたところ、その回復速度に格段の違いがみられた、とのことです」

「单なる個人差……ではないのね」

「はい。聞かせたラジオの内容は同じだったのですが、明確に違う点が一つ。『音質』です」

「音質？」

「ご存じの通り、電波は距離や遮蔽物によつて減衰し、場所によつてはラジオが殆ど聞き取れなくなる場合もあります。山間の病院で雑音混じりのラジオを聞かせた患者と比べ、クリアな音質のラジオを聞かせた患者の回復速度は、最大で三倍の開きがあつたそ

うです」

「……地価が動きそうな情報ね」

「そして、凛さんもご覧になられたあのビデオ」

「唄子の部屋最終回のことね」

「はい。——『音質、画質共に最高の状況にある』という条件でなら、あのビデオはまさに『特効薬』です。レベル1患者は一撃で治ります。レベル2も軽度なら僅かな時間で回復し、重度であつてもはつきりと改善の兆しが見られます。そして一度改善方向にさえ向かつてしまえば、後はラジオなどの治療で寛解まで持つていけます」

一か月前であれば質の悪いジョークとして一笑に付したであろう報告を聞いて、凛は遠い目をする。

「——やっぱリシゲル様つて神だわ」

「異論はありません。しかし、やはり最大の効果を發揮するのは初回です。その後は効果が薄れていく傾向にあるようです」

「ま、初回のインパクトはそりや強いわよね」

凛も遙に初めてビデオを見せられた夜のことは強烈に覚えていた。そのまま死ぬんじやないかと思うほどの興奮だった。

流石に今ビデオを見直しても、当時ほどの命の危険は感じない。

「効果が薄れるつていっても、一度回復傾向にもつていけばあとはこつちのものなんでしょう？特に問題はないんじゃないの」

「おっしゃる通りですが——問題なのは、昏睡病の原因が今をもつて不明だということです。不明であるがために、どうしても再発の二文字が頭に浮かんでしまいます」

一理ある話だつた。今のところ昏睡病が再発したという情報は無いが、これからもうだとは限らない。

「ですでので一刻も早く、シゲル様にテレビ出演をしていただくべきなのです。シゲル様

が新たな番組に出るたびに新薬が開発されるようなものなのですから」

「安心して。ちょっと予定よりは遅れたけれど、アイドルスターは来週には始まる予定よ。シゲル様をメインキャストに加えたうえで、ね」

「見事な速度かと。——ですが、そうなると問題は一つに絞られますね」

「そうね」

「レベル3」

二人は声を合わせて、忌々しげに呟く。

「——既にレベル3患者へのビデオ治療は開始していますが、残念ながら回復した患者は現れていません。……もし、回復の見込みがあるとすれば、」

「シゲル様の生演奏しかない、わね」

「——はい。シゲル様の生演奏は、別格の破壊力を有しているものと思われます。是非、レベル3の患者に聞かせるべきです」

「ええ、その通りよ。とはいえ……」

凛は眉根を寄せた。

レベル3の昏睡病患者は、レベル2までとは隔絶した状態にある。

自発的な食事が不可能という点だけでその異常さが分かるだろう。生きようとする意志を軒並み奪われてしまうのがレベル3なのだ。

「……治せるとと思う?」

「……可能性は、低いと思われますが」

「ゼロではない、か。そうね、シゲル様なら」

二人は遠い目をすると、英雄の活躍を祈つた。

ところで、昏睡病はレベル4まで存在する。にもかかわらずレベル4の存在が口の端にも上がらないのは、レベル4の患者が『深昏睡』に陥るからだ。

脳波はフラットで、音は勿論痛みにすら何の反応も示さない。

40歳になるまでは治療法の研究の為に専門の施設で生命維持がなされるが、それ以降は装置を外される。無論家族が望めばその限りではないが、その場合は十割負担で維持費を支払い続けることになる。大半の者はその出費に耐えきれない。

生命維持装置をもつてしても衰弱に耐えきれなくなつた時。あるいは、生命維持装置を外される時。それがこの世界の人間の『寿命』である。

「生演奏については、シゲル様に既に打診してあるの。あの方は極めて前向きよ。いつでも行けると太鼓判を押してくださいさつたわ」

「でしたら試すのは早い方がいいかと。レベル3患者であれば十人や二十人は直ぐにでも集められます」

「そうね、スピードは大事だわ」

「では、さつそく手配に移ります」

「——いえ」

涼子が勢い込むのに、凛は二本の指を立てて待つたをかける。

「二日だけ待ちなさい」

「二日? 一体なんの時間ですか?」

「アステカとの交渉が上手くいったつて外務省から連絡があつたの」

「アステカと?」

突如飛び出した大國の名に、涼子は首を傾げる。

「僅かでも可能性があるなら、早急に治療に参加させたいアステカ人がいてね」

「アステカ人を、ですか」

疑問符を浮かべたままの涼子に、凛はにやりと笑つて見せる。

「上手くいけば——シゲル様が世界に打つて出る時に、大きな弾みをつけてあげられるかもしないのよ」

## 第16話

ジェーン・ホワイト、二十二の若さで昏睡病レベル3に進行。

数か月前、世界中に伝えられたこのニュースに人々は揃つて肩を落とした。今後の科学分野にかかるであろう、暗い影を思つて。

アステカの若き天才科学者ジェーン・ホワイトの残してきた輝かしい足跡は、それほどまでに大きかつたのだ。ここ十年ばかり、コンピュータ関連の特許の大半がこの鬼才によつて取得されているという事実が、その功績の凄まじさを物語つている。

近代科学においてその名を無視することはまず不可能。最近注目を集めテレビやビデオの原型もジェーンの発想によるものだつた。

——だが、さしもの天才も昏睡病には抗えなかつた。

彼女は今や、然るべき施設で一日の大半を眠つて過ごしている。研究者でありながら活動的で、魅力的な笑顔を浮かべていた彼女はもういない。かつて好奇心に輝いていた大きな碧眼は、いまはどんよりと濁つてゐる。

車椅子に乗つた彼女の活動範囲は、精々が医療施設の中庭までだ。

しかし、この日。

ジエーン・ホワイトは空港に居た。

施設のスタッフ、アステカの外務次官、そして蓬莱の役人と共に。

「最後にもう一度尋ねるけれど、画期的な治療法が見つかったというのは本当なのね？」  
アステカの外務次官、キヤサリンが念を押すように蓬莱の役人——駿河凜に問う。

凜は躊躇うことなく頷きを返した。

「まだ試験段階ではありますが、事実です。我が蓬莱では既に幾人もの昏睡病を完治させました。とはいっても、今のところ完治したのはレベル2までの患者のみですし、確固たるエビデンスのある治療法ではありません。一種の賭けにはなりますが」

「死神の鎌から逃れる方法があるなら、どんなにか細くともそれに賭けるわ」

キヤサリンは凜に向けて手を伸ばした。期待と共に突き出されたその手に、凜は力強い握手で答える。

「——ジエーン・ホワイトは稀代の天才よ。昏睡病さえ治ればこの娘はきっと世界を変えてくれる。それだけの閃きが、この小さな頭には詰まっているの。だから——どうか、お願ひね」

「最善を尽くします」

フライトの準備が完了したというアナウンスと同時に、二人の手は離れる。

飛行機へと乗り込む直前に、凛はキヤサリンに小包を手渡した。

「ミス・キャシー、こちらは手土産です。中身はこれまでの治療の詳細なデータと——ビデオテープが入っています。取り扱いには注意を」

「ビデオテープ?」

「ギリギリで法の問題をクリアできました。是非ダビングし、ご随意にお使いください。アステカ語の字幕を付ける時間は無かつたので、その作業はそちらのほうで——」

凛はそこまで言うと、淡く微笑んだ。

「いえ、やはり通訳は必要ないかもしませんね。国境を超える、なんていわれるくらいですか？」

「よく分からぬのだけれど……これには、一体何が?」

「『音楽』ですよ」

小さなコンサートホールには、三種類の観客が集められていた。

レベル3の患者。その付き添いである施設職員。そして駿河凜を含めた数名の役人と医療関係者である。

コンサートホールに集められた患者たちを見て、シゲルは息を呑んだ。

死んだように静かな患者たちが、光を失った瞳で虚空を見ている。明らかに人種の違う女性が一人混じっているが、その虚ろな碧眼も何も映していないようだつた。

——重度の昏睡病つてのは、こんなふうになつちまうのか。

事前に説明を受けていたとはいえ、ショッキングな光景である。

だがシゲルはぐつと歯を食いしばると、努めて威勢のいい声を上げた。

「——逢いたかつたぜえっ！」

患者が、その声に反応した。

のろのろと視線を上げて、シゲルをぼんやりと見つめる。

極めて薄い反応だ。しかしシゲルはにやりと笑つた。

声が届いている。それなら十分だ。

——ちなみにこの瞬間、もつとも衝撃を受けていたのは医療関係者であつた。人の声に反応してそちらに視線を動かす、という行動は、後期レベル3患者には不可能なはずなのだ。

そんなことはつゆ知らず、シゲルは口上を続ける。

「俺は櫻崎シゲル。ミュージシャンだ！」

「今日はよ、みんなに俺の音楽を聞かせたくてここに来たんだ！ 悪いんだけど、ちょいとだけ時間をくれよな」

シゲルの言葉に、患者たちは反応を示さない。

だが、シゲルは語り続ける。

「昏睡病ってのは厄介だよな。俺も話に聞いたんだけどよ、今の今まで本当の意味での実感てのは湧かなかつた。——レベル3のみんなの姿を、こうして目の当たりにするまでは、な」

「……医者のセンセイに、さつき言われたよ」

『心が死んでしまうのがレベル3なんです』『だから治療の効果がなくても、決して気に

病まないでください』って

「氣イ使つてくれたんだろうな。まつたくありがてえ話さ」

「——だけどよ！」

「心が死んじまつた、つていうお前さんたちに——あえて今、約束するぜ！」

「今日！俺はみんなに、こう言わせてやる！」

「——『やかましくて、死んでる場合じやなかつた』ってな！」

声はやはり返つてこない。

だが、そんなものは関係ない。シゲルは迸る情熱をギターに叩きつける。

——伝えたい思いは、一つだけ。

同情じやない。

激励じやない。

鼓舞じやない。

音楽に触れるときにつだつて感じる、たつた一つの感情だけを伝えたかつた。

——シゲルは願う。

神にではなく、自らの歌声に。

かき鳴らすギターに。

紡ぎあげる音楽に、願う。

——届けてくれ。

届けてくれよ。下向いちまつて、前も見えねえこいつらに。

——俺の、喜びを——！

「いくぜ、皆！——レベル3の昏睡病は、チケット代わりに置いてきな！」

口上は終わりだ。準備万端、整つた！  
さあ！いつも通り！

「——楽しんでいこうぜえつ！」

いつもの、このセリフから！  
最高のライブを、始めようじやねえか——！

文部次官・駿河凜視点

——なにこれえ!? 天国にいるみたいっ!!

シゲル様の生演奏——シゲル様曰くライブ——を目の当たりにして、私は『レベル3患者への効果の確認』という自らの職務を完全に忘れていた。周囲の職員も単なるファンと化している。どいつもこいつも最前列に張り付くようにしてシゲル様を見上げていた。

画面の中ではなく、シゲル様がすぐそこにいるという事実。テレビ越しではない、生き

た演奏と声が直に全身を叩く。

脳が沸騰しそうだつた。この感覚は、遙が持つてきただビデオを初めて見たときに近い。

いや、信じがたいことだが、その数段上を行つてゐる。

身体が勝手にリズムを刻む。心が叫びたがつてゐる。

思わず黄色い声を上げそうになつて——だけど心の中の声が、見境なく燃え上がろうとする脳髄に待つたをかけた。

『ダメよ凜！貴方は官僚としてここにいるの！ライブの前に医師も言つていたでしよう？検証のノイズどころか治療結果にも影響を与えるかねないので、くれぐれも静聴を心がけてください、つて！』

そう言うのは天使の羽が生えた私だ。

なるほど、理に適つたセリフだ。

しかし心の中にもう一人の私が現れると、おもむろに口を利いた。

『うるせえ知るか』

と。

『素晴らしい説得力だ。わたしは悪魔の翼が生えた私のセリフに、全面的に賛同した。  
あなたなんてことを言うんですか！』

諦め悪く天使の私が悪魔の私に食つてかかる。

だけど悪魔の私は『ばかめ、アレを見ろ』と言つて人差し指をステージ側に向けた。  
指さした先にあるのは、最前列で拳を振り上げ、「シゲル様アアアアッ！」と奇声を発  
する医師の姿だった。

ライブの前に静聴がどうのと講釈を語つていたヤツだ。

『——じゃあいいですね！』

天使の私は光よりも早く手のひらを返すと、即座に満面の笑みとなつた。

『それいけ私ー！最前列にかぶりつけ！』

『そういうことよ！ほかのヤツに後れを取るな！』

意見の一致を見た二人の私が、脳内で肩を組んで私をけしかける。

逆らう理由は一つもなかつた。

最前列のあるかなしかの隙間に、私は身体をねじ込ませた。

七曲目——名曲『Everybody』をやり終えたシゲル様が、眩い汗を輝かせながらマイクに唇を寄せる。

「——ノッてきたかア!?」

ノッてないわけがない！全力の歓声で応える！

もちろん周囲の皆も同じだった。だけど、久しぶりに声帯を使つたと言わんばかりの掠れたような歓声が多い。

もつと気合入れていきなさいよ！まあでも許しちやう！紛れもない喜びの声みたいだし。

観客の反応を確かめるように全体を見渡したシゲル様は、自分こそが一番幸福だと言わんばかりの笑顔を浮かべた。尊い。悶死しそう。

「いいねいいねー・だけどよお、もつと行けるぜ！さあて次の曲はなんだか妙に人気な『君だけを見つめる』だ！」

げえつ、このタイミングでラブソング！そんなのダメよシゲル様！観客皆シゲル様しか見えなくなっちゃう！

——別にいつか！今更だつたわ！

七色の声を持ち、女性の声すら出すことができるというシゲル様が、飛び切り甘い声で歌い出す。

あーダメダメ。鼻血が出る。

興奮で意識を飛ばさないようにだけ注意しながら、私は更にライブにのめり込んで  
いつた——

そして、それから更に小一時間が経過して——

「——センキユーツ！」

アステカ語で歯切れのいい感謝を述べてから、シゲル様が舞台袖に引っ込む。

——ライブが終わつた今、というかライブが始まつてからずつと、私たちは歓喜の渦に叩き込まれていた。完全な躁状態で、黄色い声以外を上げられない。観客席はさながらサル山だ。

最高の時間だつた。もう間違ひなく、人生で最高の体験だ。

だつてどの曲もテレビ越しに聞くより最高の最高で——あれ？ つていうかよく考えてみたらさつきのライブ、聞いたことの無い曲入つてたわよね？！何曲か！ どれも脳ミソとろけるくらいの名曲だつたわよアレエ！ ホントヤバい、役得つてレベルじやないわよ！

——ん？ 役得？ 役？

……わたしつて、なんの役目でここにいたんだつけ？

ぜーんぜん思ひ出せない。

まあいつか。取り合えずこの幸せを、周りのみんなと分かち合おう！

滅茶苦茶密集して騒いでたから全員汗だくだけど、全く気にならない。とにかく隣の人と肩を抱き合つて、笑顔を向け合つて喜びを確認し合う。

眩しい笑顔だ。何か妙にやつれてて、まるで病み上がりのような人だけど、満面の笑みは見てるこつちまで嬉しくなる。

ええと、誰だつけなこの人。役人でも職員でもないような——

……。

患者さんじやん！

「み、みんなちょっと待ったア！」

正気に戻つた私は、慌てて声を張り上げた。

## 第17話

一時間後――

医療機器、分析機材の揃つた別室内は、狂騒の最中にあつた。

「すつ、凄まじいとしか言いようがありませんっ！ 軽度レベル3の全員が医学的寛解……！ なんなら体力的に問題の無い患者は、即座に帰宅許可を出せますよ！」

「重度の患者に関しても、劇的な改善が見られます！ あとはビデオ治療を統ければ、恐らく社会復帰が可能に！」

「奇跡だ――！」

集まつた医療関係者や研究者たちは、次々と上がつてくるデータに狂喜乱舞してい る。

凛は両手を組んで天を仰いだ。

――神は人々を見捨ててはいなかつたのだ。この末期的な世界に、櫻崎シゲルという名の救世主を遣わしてくれださつたのだ。

いや、あるいはシゲル様こそが。

そう、シゲル様なら、この世界全ての――

「ああ、シゲル様……」

凛は熱っぽく咳くと、この瞬間、とある覚悟を決めた。

厚顔無恥な——どんな鉄面皮でも耐えられないような願い事を、かの英雄に頼み込む覚悟だ。

勢いよく部屋のドアが開いたのは、まさに凛が覚悟を完了したときだつた。

「よう！上手くいつたんじやねえか？！」

そんなセリフと共に登場したのは、まさに櫻崎シゲルであつた。

その姿を目にした凛の行動は素早かつた。

凛はしゅばばつとシゲルの元へと駆け寄ると、

「シゲル様！はい、上手くいきました！これ以上もないほど、上手くいきました！ありがとうございます！」——そして、「

そう言つて、シゲルに返答の隙も与えず土下座したのだ。

「おわっ?!突然どうし——」

「ふ、伏してお願ひいたします！」

——とてもシゲルの顔を見ながらは言えない願いを、凛は口にしようとしていた。

「どうか、どうか世界中のレベル3患者の元で、貴方様のライブを行つてくださいませんか！とんでもない大仕事になるでしょう——どんな報酬でも、きっと用意して見せま

す！ですから、どうか――！」

面食らうシゲルに、凛は思いのたけをぶつける。

室内がざわめいた。

理由は、凛の土下座に驚いたからではない。

凛のセリフがどれだけ無茶なのかを理解していたからだ。

地面に頭をこすりつけながら、凛自身も自らがどれだけ厚かましいお願ひをしているか自覺していた。

レベル3の患者が世界にどれほどいるか。レベル3から4への進行速度は劇的に速くなるため、全体からすれば少数ではある。

だがそれを踏まえたうえでも、その数は恐らく五百万人をくだらない。

大きなコンサートホールのようなものに集めることができれば負担は軽くなるだろうが、その為に必要なコストは想像もできないほどだろう。一人の患者を運ぶだけでも医療スタッフの付き添いが必要で、片手間には行えないのだ。  
となれば、シゲル本人が医療施設に足を運ぶしかない。

世界中のレベル3受け入れ施設を、一つ一つ。

――労働生産性は人口密度に比例する。高密度な人口集積は昏睡病に侵された世界における常識であり、どの国家においても患者を含む国民は一つの地域に集まつてい

る。だがその前提があつたとしても、想像を絶する重労働となるだろう。その作業だけに集中しても、人生をまるごと費やす大仕事になるかもしない。

つまるところ——『貴方の人生全てを、見ず知らずの患者の為に捧げてくれ』——凛は、そう言つたのだ。

「」

無言のままのシゲルに、土下座状態の凛は身体の震えを抑えられない。

だが——

シゲルは凛の前に膝を突くと、その肩を優しくたたいた。

凛が顔を上げる。

目の前に、神様のように笑うシゲルの顔があつた。

「ワールドツアーセさせてくれるのかよ。こっちが金払いたいくらいだぜ！」

凛の両目から、ぽろぽろと涙がこぼれた。

レベル3患者の面倒を見るのは容易ではない。

何せ食事も口の中まで運んでやる必要があるのだ。無論、重度になれば点滴に頼ることになる。軽度であれば着替え、入浴、排泄は一人で行える場合もあるが、病状の悪化に伴つてそれもできなくなつていく。

故に、専門の施設が存在する。特別介護療養型医療施設——通称特療とよばれるその施設は、この世界における社会保険料の半分を食いつぶしているだけあって、レベル3以上の昏睡病患者を手厚く介護してくれる。

親がレベル3以上になつた蓬萊人は、ほとんどがこの特療を頼る。その為に保険料を支払つているのだし、労働しながらレベル3以上の介護をするのは物理的に相当難しいからだ。

何も憚る必要はない。厚労省は積極的な施設の利用を勧めている。共倒れになるこ

とこそ避けなくてはならないからだ。

—— そうは言つても、割り切れないのが人間だつた。

### 16歳会社員・柏原律子視点

レベル3になつてしまつた母を特療に頼んでから三か月が経つ。

歌が好きな、優しい母だつた。他人に任せたくなんてなかつた。

子どものころ怖い夢を見て泣いていても、母に抱きしめられて子守唄を聞けば、あつ  
という間に穏やかな気持ちになれた。

最初は何とか頑張つて面倒を見ていたが、どんどんやつれていく私を心配した職場の  
先輩が民政課に連絡。すぐにやつてきた職員さんの真摯な説得に、わたしは首を縊に  
振つた。

辛かつた。でも、当時はその辛さすらどこか他人事だつた。

今思えば私も昏睡病にかかつっていたのだと思う。職員さんの判断は、きっと正しかつた。

シゲル様の音楽がなければ、今頃レベル2には到達していたかもしれない。

——櫻崎シゲル様。

現代を生きる英雄である。ビデオに収められたその歌声は、なんとレベル2までの昏睡病患者を治してしまうというのだから、英雄視されるのも無理もない。

わたしもシゲル様に救われた蓬萊人の一人として、感謝の念は絶えない。隙あらば聞くシゲル様の音楽と、たまに手に入る白米だけが、私の人生の楽しみだ。

昨日幸運にもお米を二キロも買ったので、今日もまた白いご飯が味わえる。炊きたての馥郁たる香りと噛みしめたときの米の甘味を想像すると、期待と共にじんわりと唾液が滲んだ。

今日も仕事を終えて帰宅中。陽はもう沈みかけで、わたしのお腹はペコペコだ。

昏睡病から解放されたことによつて正常化された味覚は、私に生の喜びを与えてくれる。完全食には殺意を覚えるようになつたけど。

——生きることを楽しめるなんて、一か月前ならとても信じられなかつた。シゲル様は本当に、蓬莱の救い主だ。

ああ——でも。

財布から取り出した鍵をドアノブに差し込みながら、どうしても考へてしまふ。

もう少しだけ早くシゲル様の音楽を聴くことができたら。まだレベル2だった母さんに聞かせることができたら。

きっと今頃、私のアパートには電気がついていて。

こうやって玄関のドアを開けると、夕飯の匂いがしてきて。

歌を口ずさみながら炊事をしている母さんが、振り返つて優しく声をかけてくれたはずなんだ。

「りつちゃん、お帰りなさい」

——そう。こんな風に。

……こんな風に？

靴を脱いでいた私は、つむじにかけられた声に反射的に顔を上げた。

お味噌汁の、いい香りがする。

「——それとも『ただいま』って言つた方がいいかしら？」

そこに立っていたのは、生まれてからずっと一緒だった人だ。先週見舞いに行つたばかりで、見間違うはずもない。

おかあさん。

「おかあさん……？」

「はい、おかあさんですよ」

十六年も一緒に暮らした母の顔を忘れるわけがない。

でもその顔に浮かんでいる飛び切りの笑顔は、生まれて初めて見るほど嬉しそう。

「ふふふ、驚いた？ 特療ですつごい治療を受けてね、もうあつという間に退院の許可が降りちゃったの。レベル3完治ですって！」

ぴーす！とブイサインを突き出してくる母さんの姿が、ぼやけてよく見えない。

まるで夢を見ているみたい。

いや、ほんとうに幻なのかもしれない。私はふらふらと母さんに近寄つて、その存在を確かめるように背中に手を回した。

暖かい。

命の温度だ。

おかあさんは、間違いなくここにいる。

「おかあさん」

もう一度呼びかける。

「なあに？」

優しい声が返つてくる。

「おがあざんつ」

嗚咽を漏らして、わたしは母さんの胸に縋りついた。

あとはもう言葉にならなかつた。

お母さんはむいーんと泣く私の頭をそつと撫でてくれる。

「あらあらこの子つたら。泣き虫さんに戻っちゃつたのかしら」

困つたように言う母さんだが、わたしの涙は枯れる気配が無い。

「もう。また子守唄が必要かしらね」

そう呟くと、母さんは歌い出す。

私は引っ付き虫のように母さんの胸にくつつきながら、子供の頃のように嬉しかつた。母さんの歌は何でも大好きだつたから。

安らぎと共に、条件反射のように眠気が襲つてくるのが分かる。

ああ、何を歌つてくれるんだろう。

大好きだつた『夜霧』かな――

――『ツノも無けりやハサミも無いが！メタルに光つてマツハで飛ぶぜ！』

マツハカナブンじyan！

目え覚めるよ！

## 第18話

新番組メインキャスト予定・辯崎朱里視点

ぼくには弟がいる。

辯崎樹つていう、五つ年の離れた男の子。

生まれたときから天使のように愛らしかつたけど、二歳くらいになると更に磨きがかかつた。

母さんはその頃にはレベル3になつちやつて特療にいたから、ぼくは家政婦の伸子さんと一緒にいつくんの面倒を見た。

いつくん、と呼びかけると、にこつと笑つてよちよちよ近寄つてくる。歌を歌つてあ

げると、ぱちぱちと手を叩いてもつともつとせがむ。

こんなに可愛い生き物がこの世にいたのかと思つた。

当時七歳だったぼくの手伝いなんて、できることは限られていて、ままごとみたいなものだつたけど——いつくんを喜ばせるために、一生懸命色々なことを覚えた。だつて、ぼくはお姉ちゃんだから。

……男性つていうのは貴重だ。

何せ現代じや二十人に一人しか生まれないし——

昏睡病の進行速度は、女性の比じやない。

だから——男の子が元氣でいられる時間というのは、本当に僅かなんだ。

「ただいま、いつくん」

家に帰つたぼくは、いつものようにいつくんに声をかける。

この間十歳になつたいつくんは、ぼんやりとした視線をこちらに向けて、あるかなし

かの笑みを浮かべたように見えた。

いつくんは現代男子の例に漏れず、同年代の女の子よりも線が細い。触れたら壊れてしまいそうな華奢な身体は、ベッドの上だとより優げに見えちゃう。

「お帰りなさい、朱里さん。樹さんは、今日はお加減が良いですよ」

いつくんの傍らに立つ家政婦の伸子さんの言葉に、ぼくは「そうだね」と返す。

最近は、ぼくの呼びかけに反応を見せることも少なくなってきたから。

「いつくん。お姉ちゃんのテレビ出演、来週に決まったよ。新番組で、歌を歌うんだ」

いつくんがぼうっとぼくを見る。ぼくの言葉、ちゃんと伝わっているかな。

『——お姉ちゃんの歌を、もつとたくさんの人人に聞いてもらいたいな』

一年前、いつくんはぼくにそう言つた。

ぼくが歌を趣味にしたきっかけは、赤ん坊だったころのいつくんだ。幾らあやしてもむずかるいつくんに、ぼくが歌を歌つてあげたことがあった。そうしたらいつくんは途端に泣き止み、にこにこと笑いだしたんだ。

それから、いつくんをあやす時は歌が定番になつた。いつくんはいつまでたつても飽

きる様子もなく、ぼくの歌を喜んでくれた。

とはいえばぼくの歌は、そんなに大層なものじゃない。

専門的に勉強したわけじやないし、趣味のレベルを超えてないと思う。将来歌手になろうなんて考えててもいなかつたし、いつくんが聞いて喜んでくれるなら、それで充分だつた。

だから、蓬莱テレビが新しいテレビ番組のオーディションをやる、と知つても、別段参加しようとは思わなかつた。

——レベル2の昏睡病になつてしまつたいつくんに、その言葉をかけられなかつたら。

もつとたくさんの人聞いてもらいたい。そう言つたいつくんは、後に続く言葉を飲み込んだように見えた。

『自分の代わりに』つて。

——昏睡病はレベル3にもなれば、音にもほとんど反応を示さなくなる。そうなつてしまつたら、音楽を楽しむなんて不可能だ。

ぼくは、いつくんの願いを叶えたいと思つた。

それがどんな願いだろうと構わない。弟の願いを叶えるのは姉の役目で、ぼくはずつとそうしてきた。

だから、ぼくはオーディションに応募したんだ。

結果。

倍率千倍ものオーディションを、ぼくは奇跡的に突破した。

ぼく以外に受かつたのは二人。年齢こそぼくとあまり変わらないけど、どちらもすごい芸の持ち主だった。

なんでぼくが受かつたのかはイマイチわからなかつたけど、これでいつくんが喜んでくれると思うと嬉しかつた。

——正直な話、その時のぼくは、新番組に対する情熱というものをほとんど持つていなかつたと思う。いつくんにさえ歌を聞いてもらえれば充分だつたから。

だけど——レッスンを受けているうちに、だんだんと考えが変わつていつた。

番組に関わつてゐる人たちは、誰もがすごい本気だつた。

お役人さんもテレビスタッフも、悲壯ともいえる覚悟をもつてこの計画に望んでいたんだ。

プランは綿密に、一分の隙も無く。レッスンには超一流の面々を集めて、それぞれの芸のクオリティを限界まで高めていく。かかつてゐる費用は莫大だ。

そして皆が皆、全身全靈をもつてそれぞれの仕事に臨んでいた。

——皆、なんとなくわかつていたんだ。今この時が分水嶺で、この計画が失敗したら後は無い、つて。ここで昏睡病に歯止めをかけないと、もう取り返しのつかないことになる、つて。

新番組の名称は『アイドルスター』に決まった。ぼくはそこに、蓬萊政府の願いが込められているような気がする。

アイドルスター。

偶像の、星。

——神様は存在するか、と尋ねられたら、ぼくは『いない』って答える。帝の存在を考えれば不敬かもしれないけど、でも、そう答える。

だって二世紀もの間、苦しみぬく人類に神は手を差し伸べてはくれなかつたんだ。

昏睡病こそ神の下した罰なのだ、つていう人もいるけど——そんな神様なら、こつちから願い下げだ。世界中で宗教への関心が薄れてきているつていうのも、無理はないと思う。

——だから蓬萊は、人々の心の拠り所を自分で造り上げることにしたんだ。  
それがアイドルスター。

一年近くのレッスンを経て、ぼくは心から皆の力になりたいと思うようになつてい  
た。

皆というのは、番組関係者だけじやない。番組を見るであろう、蓬莱に住む皆だ。

——例え偽物であつても、いつくんだけじやなくて、皆の願いを乗せる星になりたい。

今は本当に、そう思う。

ふと時計を見れば、丁度『唄子の部屋』の最終回が始まるところだつた。

唄子さんには、レッスンで随分お世話になつた。天才の呼び名は伊達ではなくて、そ  
の歌唱力たるや蓬莱どころか世界一なんじやないかと思つた。基礎から優しく教えて  
もらつたぼくの歌唱力も、大分向上したと思う。唄子さんは指導者としても一流だつた  
んだ。

でも、その唄子さんも、昏睡病には勝てなかつた。

この間レベル2になつてしまつた唄子さんは、もうレッスンには来てくれないらし  
い。

寂しかつた。

——こうやって、櫛の歯が抜けるように、大事な人が段々いなくなつていくのかな。

つい、弱気が顔を覗かせる。

——違う。

ぼくは拳を握りしめた。

——そうさせない為に、ぼくたちは頑張るんだ！

「いつくん、一緒にテレビ見ようか！唄子の部屋はじまるから、さ」

悪い考えを振り払うように、ぼくは大きな声でいつくんに語り掛けた。

恩師である唄子さんの番組は毎回欠かさず見てるし、録画してるんだ。ビデオデッキはレッスン用に蓬莱テレビ局がくれたからね。

「」

いつくんは声を返してはくれなかつたけれど、微かに頷いたように見えた。  
テレビとビデオのスイッチを入れて、あつという間に準備は完了。

唄子さんのバストアップから、いつも通り番組が——

——あれ？

——えつ。

——えつえつ。

——ちょっと待つて。

……  
……

……………神様は存在するか、と尋ねられたら、どう答えるかって？

ぼくは『いる』って答えるよ！  
だってテレビで見たもん！

神さまを目撃してから一週間後。ぼくは蓬萊テレビ局に呼び出されていた。

アイドルスターに関しては、唄子の部屋最終回の翌日、マネージャーの鈴さんから『蓬萊テレビが修羅場と化しました！アイドルスターの件は少々お待ちを！取り合えずまた連絡するまで自主レッスンをしていてください！』って電話が入つて、それからなしのつぶてだつた。

まあ修羅場と化すのは当然かなー、とか思う。なんでも唄子さんはシゲル様をサプライズで登場させたとかで、番組放送後連絡がとれなくなつちゃつたらしい。シゲル様となんとかコンタクトを取るために、蓬莱テレビはあらゆる手段を使つてゐるんじやないかな。

ぼくは歌の自主練——もつぱらシゲル様の歌を真似つこで歌つてただけだけど——をしたり、いつくんと一緒に例のビデオを見たり、何だか妙においしくなつた伸子さんの料理を感謝しながらもりもり食べて日々を過ごしてた。考えてみたらここんどこず一つと張りつめていたから、こういう穏やかな日々は至福の時間だった。

で、ようやく電話がかかってきたのが今朝がた。

後ろでラジオがどうのこうのという怒号のような声が飛び交う中、鈴さんは『今日十時に局の第五会議室に来てください！』とだけ言つて、慌ただしく電話を切つた。よくわかんないけど、修羅場はまだ継続中みたい。

この一年何度も使つた会議室に入ると、もうメンバーが集まつていた。椅子に座つていたのは二人の女の子。

一人は藍葉蒼子ちゃん。

ぼくより一つ上の16歳。170センチの長身で、きりっとした顔立ち。クールに見えるけど、ほんとはとつてもあつたかい。

蒼子ちゃんの特徴は、なんといつてもその運動神経！身体を動かすことならなんでもござれ。アイドルスターではスポーツやダンスを担当するはずだつた。リズム感も良いんだよね、青子ちゃんつて。

もう一人は、金枝浅黄さん。

ぼくより三つ上の18歳。金枝財閥っていう世界有数の大財閥の娘さん。やや垂れ目の、可愛らしい顔立ちをしていて——すごく穏やかで、気品にあふれてる人なんだ。礼儀作法や茶道や華道に精通してて、ピアノもすごく上手！コンクールで賞をとつたこともあるんだつて！アイドルスターでは芸道を披露するだけじゃなくて、ぼくの歌にピアノ伴奏をつけてくれることになつてた。

一年間一緒に頑張つてきたけど、もうみんな親友だつた。一つの目標に向かつて、皆で歯を食いしばつて頑張つてきた。

辛いことも苦しいこともあつたけど、皆で助け合つて乗り越えてきたんだ。一生の友達。

二人ともきつとそんなふうに思つてくれてる。だつて、ぼくがそうなんだもん！

そして、ぼくは今、一週間ぶりに会ったその生涯の友達と――

「もう、何回言わせるんだよ！『マツハカナブン』が最高なの！以下反論不要っ！」

「ハア？！一曲だけ選べっていうならどう考えても『ロケット』でしょ！」

『君だけを見つめてる』以上にどきどきする曲はないと思うんですけどねー。子供には  
ちょっと分かりにくいのかしらー』

「子供だつてえ！」

「聞き捨てならないわねっ」

「あの良さがわからないうちは子供ですよー」

——教義の違ひから、聖戦を起こすところだよ！

「——いいかしら！『口ケット』はね、シゲル様が一番最初に奏でられた曲なのよ！？一番自信のあるものを一番先に持つてくる——小学生でも判る、単純な理屈でしょ！」

「それはおかしいと思いますよー。だつてフルコース料理でも、一番最初に出てくるのはオードブルじやないですか。物事には順序があつて、メインは一番盛り上がるであろうタイミングに出すものですよ？」

「誰が何と言おうと『マツハカナブン』なの！？だつてあれが一番カツコいいつていっくんも言つてたし！？ぼくもそう思うし！」

「あのねえ、カツコよさだけで曲の善し悪しが決まるわけじや——え？誰が？？いっくん？」

「え？うん」

「いっくんって、弟の樹さん？」

「そうだよ。忘れちやつた？」

「よく覚えてるわよ。でも——後期レベル2の昏睡病、だつたわよね？」

「——！？そう！？そなんだよ！？聞いてよ！？いっくんね、いっくんね、シゲル様の音楽を聞いたらなんだか眼がキラキラしてきて——またお話ができるようになつたの！」

今朝なんて、「行つてらつしやい、おねえちゃん」って言つて送り出してくれたんだ！  
につこりとほほ笑みながら！

蒼子ちゃんが目を丸くした。

「えーっ!? ほ、ほんとに?! えつと、その、なんて言つたらいいかわからないけど——とにかくおめでとう！」

「まあシゲル様でしたら、そのくらいの奇跡は起こせますよねー。おめでとうございます、朱里さん」

「ありがとー！」

「今度樹さんに会いに行つてもいい？」

「あ、わたくしもご一緒したいですー」

「もちろん！ いつくんも喜ぶよー！」

以前一人をうちに招いたこともあるけれど、その時いつくんはもう大分昏睡病が進んでたから、反応らしい反応もなかつた。

でも今なら、天使みたいな笑顔で二人を骨抜きにしちゃうだろうな！

そんな感じにいつくんのお蔭で話がそれで、とりあえず聖戦は回避された。

「——でさ。今日ぼくたちが呼ばれた理由って何だと思う?」

「ぼくが尋ねると、蒼子ちゃんは「あー……」といつて気まずげに目を逸らし、浅黄さんは困ったように微かな苦笑を浮かべた。

「あれ?なんか察しがついてる?」

「うーん……普通に考えると、番組打ち切りの通達じゃないかしらー」

「うん。その可能性は結構あるよね」

「えっ?! そうなの!?!」

二人の言葉に、ぼくは目を丸くする。

「だつて、考えても見てください。私たちのやりたかったことつて、シゲル様が一晩で達成しちゃつたじやないですかー?」

「正直、そうなのよね」

「あ……」

浅黄さんの言葉に、ぼくも頷かざるを得ない。常識的に考えて、ぼくたちがどんなに頑張つてアイドルスターをやつても、レベル2の昏睡病を治してしまいうような効果はないと思う。

「番組を始めるまでにすごいコストがかかってますけど、今打ち切つてしまえば被害は最小限ですからねー」

金枝財閥はアイドルスターのメインスポンサーだ。浅黄さんはそこの娘さんだから、言うことにも説得力がある。

——そつかあ……レツスン、すごく頑張ってきたんだけどなあ。

ぼくはほんのちょっとだけ落ち込んでしまう。

でもその感情は、あつという間に、こみ上げる喜びに上書きされちゃった。  
だつて、これつてとつても幸せなことだよ！

泣きそうな顔で頑張ってきた皆の願いを、神さまが叶えてくれたんだもん！

「——ぼく、自分が『用無し』になることが、こんなに嬉しいなんて思わなかつたよ！」

ぼくのその言葉に、蒼子ちゃんは何故だか目を丸くして——なんだかすぐ優しい眼差しで、ぼくを見た。

「——そうね。シゲル様に感謝を。……それにね、朱里。これまでやつてきたレツスン

は、きっと無駄にならないわ。今後の人生に役立つていく筈よ」

「その通りですよー。——でも、そうなると私たちは今後の身の振り方を考えないと  
けませんねー」

浅黄さんの言葉に、ぼくはなるほどと思う。お仕事見つけて、今後の人生のプランも  
しつかり立てなきやいけないよね。

だつてきっと——人生は長いから！

『おばあちゃん』になつた時のこと、考えておかないとね！

「そうね。その辺りも鈴さんから話があるかも。……朱里は、今後どうしたいって考へてる？」

青子ちゃんの言葉に、ぼくはちょっとだけ考へて、結論をだした。

「……うーん。ぼくは、できればテレビ業界に残りたいなあ」

「あら？ ちよつと意外ですね。朱里さんはテレビ業界自体にはそんなに興味が無いと思つてました」

「うん、その通りだよ。でも——多分シゲル様つて今後もテレビに出るでしょ？」

「そりやーそうでしようね。局長があらゆる手を使つてでも依頼すると思うわ」

「だからさ、ぼくたちもテレビの仕事してたら——いつか局内では会えちゃつたりして！」

ぼくの目論みに、ふたりは口元をほころばせた。

「あはは、なるほど」

「ふふ、それは夢のある話ですねー」

ぼくたちが穏やかに笑い合つた瞬間だつた。

だだだだだつ、つていう猛烈な足音が会議室の外から聞こえて——扉の前までくると、どがんつ、とすごい音が響いた。

「うわあ！」

「何かしら」

「ノックにしては随分派手ですねー」

もちろんノックのワケが無い。勢いあまつて扉にぶつかつたような音だ。

一瞬の間を置いて、ドアノブががちゃつと音を立てる。すぐに飛び込んできたのは、小柄な人影——ぼくたちのマネージャーの鈴さんだつた。

鈴さんは、部屋に飛び込んでくるなり派手にすつころんで、顔面を強打した。

——鈴さんは普段ちよつとそそつかしいところがあるけど、さすがにこれは異常事態。ぼくたちは呆気に取られて鈴さんを見る。

鈴さんははもつれる足でなんとか立ち上がりながら、ぶるぶる震える手でずり落ちた眼鏡の位置を正し、開口一番言つた。

「おっ、おおっ、落ち着いて下さい!!」

鏡をもつてきてあげたくなるセリフだつた。

「鈴さんこそ落ち着いて?!」

「何があつたんですか?!」

「あらあら鈴さん、鼻血が……」

浅黄さんがティッシュ片手に鈴さんに近づく。鈴さんは受け取つたティッシュを慌ただしく鼻に突つ込むと、声を張り上げた。

「お、お待たせしました皆さん！ちょっと、ちょっとだけ残念な話と！信じられないくらいハッピーな話があるんですが、どつちを先に聞きますか?!」

ぼくたちは顔を見合わせる。

なにか異常事態が起こつてるのは一瞬でわかつた。今の鈴さんは、さながらコンロにかけられたまま忘れ去られたヤカンだ。

いずれ火が出るよ。

「じゃ、じゃあちょっとだけ残念な話で」

すこしでもクールダウンしてもらうために、ぼくはそつちを選んだ。

「分かりました！えー、アイドルスターですが、放送延期が決定しました！放送は来月になります！」

鈴さんの言葉にぼくたちは驚く。ちょっと予想外の展開だ。

「えつ？ 延期ですか？」

「放送中止じやなくて？」

「はい、延期ですっ！」

「なんだ、それじやあいいニュースじゃないですか！」

「本当ね。レッスンの成果を発揮できるのは、素直に嬉しいわ」

「うふふ。私たちの目標は、もうシゲル様が達成してくれたけど——娯楽なんて、いくつ

あつてもいいものねー。テレビの前の皆さん、楽しみの一つくらいにはなりませんと

「そうだね！ちょっとでもみんなの幸せの足しになるように、頑張ろうよ！」

「おーっ！」

と、皆で声をそろえたところで、ぼくはふと不安に駆られた。

「あれ？ つてことは『ハッピーな話』のほうは逆に悪いニュースだつたりして……？」  
「そんなわけが！ そんなわけがないじゃないですか！！」

「す、鈴さん、ちょっと興奮しそぎですよ。ホント落ち着いてください」

「簡単に落ち着け落ち着けいいますけどねっ！ これ聞いて落ち着いてられる人いたら大したもんですよ！ 多分その人は死人ですよ！」

ヤバい。鈴さん目の焦点が合つてない。

「鈴さんが良くないエキサイトをしていますねー」

「なんだか知らないけどこのままじや脳の血管キレちゃうよ。一度当身で落とす？」

蒼子ちゃんの思い切ったセリフに、鈴さんが完全に据わった眼を向ける。

「落ち着いてもいられないですが、落ちてもいられないんですよ!! いいですか、信じられないくらいハッピーな話しますからね！」

「う、うん。どうぞ」

とにかく全部吐き出してもらつて落ち着いてもらわなきや。鈴さんほんとに頭から湯気出でるし。

「来月から始まる！アイドルスターは！その形態を大幅に変更し！」

「は、はい」

圧が凄い。

「——『バンドミュージック』を取り扱う、音楽番組として!!」

鈴さんはそこで言葉を切つて、息を荒らげて心臓を押さえた。

小休止が必要みたい。

話の中に聞きなれない単語があつたので、ぼくは浅黄さんに尋ねる。

「浅黄さん、バンドミュージックってなに？」

「バンド……樂団のことですかねー。今は随分下火ですけど、オーケストラのこと、かしらー？」

「参つたな。私樂器はできないわよ？」

「ぼくだつてできないよ。あ、ぼくたちがそれを覚えていくところをテレビにするんじゃない？」

「需要あるの？それ」

「さ、さあ……」

「お静かに一つ！」

復活した鈴さんが一喝する。ぼくたちは素直に黙つた。

いまの鈴さんに逆らうのは得策じやない。

鈴さんは一言一言に渾身の力を込めるようにして続ける。

「えー、音楽番組として！」

「あなたたち三人と！」

「——あの『櫻崎シゲル』様を、メインパーソナリティに据えることとなりました!!」

「——はい？」

今、なんて？

——えつ。

——えつ。

「シゲル様を、メインパーソナリティとして?」

「そうです!」

「つてことは、毎週?」

「そうです!」

「会えるのですか? シゲル様に?」

「そのとおりですう!!」

会議室の中に爆弾が炸裂した。

爆発したのは三人分の喜びで、爆音は歓喜の怪音波の三重奏だった。

ぼくたちは自らが死人でないことを証明してから、喜びの余りしめやかに失神した。

## 第19話

蓬莱での初ライブの後、シゲルはギターひとつだけを担いで、  
「準備万端だ！世界一周と洒落込もうぜ！」

と言い放つたが——さすがにそれは拙速すぎた。そもそも国内でレベル4直前に  
なつてしまつている患者を優先して治療しなくてはならないし、法整備や各国との折衝  
抜きに事を起こすわけにはいかなかつたからである。シゲルのライブは国内の施設で  
行われるにとどまつた。

その代わり、蓬莱での治療実績と共にシゲルのビデオは各国に配布された。

『蓬莱の奇跡』と呼ばれることになるこのビデオは、全世界で爆発的にダビングされ、順  
調にレベル1と2の昏睡病を駆逐した。

当然のように世界中で凄まじいシゲルフィーバーが起きることになる。シゲルは  
あつという間に『ワールド・ヒーロー』の名を冠することとなつた。

——しかし、ビデオにはレベル3患者を治療する効果はない。

そして、一度レベル4になつてしまえばその患者はもう手遅れなのだ。

一刻も早くシゲル自身が世界に打つて出る必要があつた。非効率的であろうが、各国のレベル4直前の患者の元へ優先的に赴いて対処をする必要がある。二度手間、三度手間になつてしまふのは避けられないだろう。とにかくあらゆる国と国を行つたり来たりしなくてはならない。

移動時間のせいで救えない患者も出てくるだろう。そしてその患者の数は、手をこまねいているうちにどんどん増えるのだ。

にもかかわらず、様々なしがらみのせいでシゲルは動くことができない。

人々は歯噛みし、各國がなりふり構わず超法規的措置を決断しかけたところで——  
——やきもきする人々を、とある情報が救うことになる。

それは世界中の多数の施設において、『この一か月の間、レベル4へと進行した患者が一人も出ていない』というものだつた。

各國政府はすぐさま調査に乗り出し、あつという間に答えを得た。該当する医療施設は、どこも同じ行動をとつていたのである。

それらの施設は藁にも縋る想いで、重度レベル3患者に『シゲルの高画質ビデオを定期的に視聴させていた』のだ。

このことで、新たに驚くべき事実が判明する。

——櫻崎シゲルの存在は、それが機械越しであつてもレベル3の深刻化を食い止める効果がある。

この情報は即座に全世界に共有され、各国の再生機器製造ラインはさらなる修羅場に陥つた。

無論、その効果が永続的なものかは不明だ。明日にでもレベル4になる患者が現れるかもしれない。

だがその最初の一人が現れるまで、各国に猶予期間が生まれたのも事実だつた。

アステカにおいて、前例のない規模の工事が行われていた。

工事の目的は首都の数か所にとある施設を作ることだ。しかしその為だけに、各現場には職人だけでなく、もはや数えることすらできないほどのボランティアが詰めかけている。

『アステカの威信にかけて！この箱物を速攻で完成させるツ！』

『『うおおおおッ!!!』』

怒号のような賛同の声が返つてくるのに、とある現場の監督は満足げに頷いた。

現場の士気は最高潮に達していた。職業として現場に入っている者は勿論、ボランティアとしてその手伝いをするものも、テンションは上がり切っている。

全ての人間が、持てるポテンシャルを限界以上に發揮し、工事は凄まじい勢いで進んでいく。

——この一連の流れは、各地の工事現場全てで同時多発的に進行していた。

蓬萊からビデオを届けられてから、僅か一ヶ月。しかしもはやアステカの民の中に櫻崎シゲルを知らないものはいない。アステカは持てる国力を駆使し、驚異的な速度でシゲルのビデオや、その歌声が収められたカセットテープを無償配布しまくったからだ。近々届けられる予定の『アイドルスター』なる番組のビデオは、アステカ政府主導の元即座にダビングされて医療機関に配布されることが通達されていた。同じものは市

場にも安価で卸される予定で、ビデオのある家庭であればどこでも楽しむことができ  
る。

ワールド・ヒーローの名は、今や大国アステカにおいても神聖視されていた。

——そのヒーローが、レベル3患者の治療の為に世界各国へ旅立とうとしている。もちろん、その各國の中にはアステカも含まれている。

この情報を聞いて、アステカ国民の心は一つになつた。

——少しでも力になりたい、と。

### 『ヒーローだけに働くせるな』

それがアステカのスローガンだつた。

アステカが造り上げているのは、レベル3患者の大規模収容施設である。医療施設でありながらコンサートホールの併設されたこの建造物は、ひたすらに『櫻崎シゲルの負担を減らす』ためだけの存在だつた。

各地に散らばつた施設を巡つて、精々数百名の為にライブを行い続ける——それが実際に非効率的なのは言うまでもない。だが予め患者が大量に集まつていて、そこに大きなコンサートホールもあれば、手間は大幅に省ける。

そんなわけで、アステカは今公共事業としてこの建設を行つてゐるのだつた。

——アステカとしては、こういつた施設をいち早く完成させれば、シゲルがいの一番にアステカを訪れてくれるのではないか、という思惑もあつたりする。

こういつた動きはアステカのみならず、世界中で進行してゐた。シゲルを迎えるための準備は各国で着々と進んでいたのだ。

——しかし唯一、シゲルを『送り出す』為の準備をしなくてはならない国家があつた。いうまでもなく、蓬萊である。

ジェーン・ホワイトを治療に参加させたのは、もし治療できるのであればセンセーショナルなニュースとなるだろう、と凛が判断したからだ。世界の至宝といつてもいい天才を治療した英雄ともなれば、シゲルが世界を巡る際に各国は下にも置かない歓待を見せるだろう。蓬莱人だけでなく外国人にも効果があるということを証明できるのも大きかった。

無論ジェーンはアステカの至宝だ。治療が済めば即座にアステカに返還するはずだった。

はずだったのだ。

凛の目の前にあるのは、無線電話の前で浣瀬とアステカ語を話すジェーンの姿。

相手方はアステカ外務大臣のキヤサリン。流石に先方の声は聞こえず、ジェーンの生き生きとした声だけが室内に響いている。

『だから言つてるでしょ。昏睡病昏睡病。うん、蓬莱の極めて画期的な治療のお蔭でレベル1にまでさがつたんだけど、まだ完治はしてないのよねー。え？ 嘘つけ？ 何の根拠があつてそんなこと言うのよ。全部ホントよホント。だから治療の為にまだ蓬莱にい

なきやならないのよねー』

『え？ 未定よ未定。昏睡病に聞いてよ』

『し、診断書出せつて……？ ななな、なによ、私を疑うのキヤシー！ 酷いわ 酷いわ！ あー、今キヤシーの心無い言葉で昏睡病が一段階進行しました！ レベル2、レベル2です！ めでとうございます！』

『——正論はやめなさいよ！』

『うるさいわね！ しようがないでしょ、シゲル様は蓬莱にいるんだから！ シゲル様がないアステカが悪いのよ！』

叩きつけるようにしてジェーンは電話を切った。

振り返ったジェーンは、凛と目が合うと、につこりとほほ笑んで片言の蓬莱語を口にした。

「——オーバーステイの件、カンペキにセツトクできましタ」

「そうは聞こえませんでしたが！」

冷や汗を垂らす凛は、ジェーンの肩を掴んでがたがたと揺さぶる。

「み、ミスジエーン！ 事は外交問題に発展しつつあります！ はよ帰つて！」

「チョットくらいダイジョウブでース！ ワタシもうチョットだけホウライに居たいですよー！」

「ちよつととはどれくらいですか！」

「ホンの五十年くらいでース」

「ダメに決まってるでしょ！ちよつと誰かー！誰でもいいから手を貸してーーこの娘飛行機に縛り付けてでも返品——もがむが！」

声を張り上げる凜の口を、ジエーンの手が慌てて塞ぐ。

「お、お願イですヨー！グリーン・カード下さいヨー！ワタシホウライ語もできますシ、とても役に立ちます！」

必死の懇願だった。ジエーンは涙目だ。

ジエーンの手を引きはがすと、凜は少しばかり気の毒そうに口を開く。

「……シゲル様の傍に居たい、という気持ちはわかりますが、こればかりは……」

「傍にいるだけ、違いまース！ワタシ、シゲル様の力になれるでス！」

「力に？」

どういうこと？と首を傾げる凜に、ジエーンは胸を張つて言う。

「グリーン・カードをくれるなら、タブレットの解析に手を貸せまス！」

凜は息を呑んだ。どこからタブレットの情報が漏れたのか。

シゲルによつて快く提供されたタブレットの解析は遅々として進んでいなかつた。

変圧器自体は即座に開発できたのだが、そこから先はどうにもならなかつたのだ。シゲ

ルから操作方法を教えてもらつたものの、当然一点ものを分解など出来るわけがない。自然とタブレットの操作もシゲルに教えてもらつたものに留まつていた。

シゲル自身がタブレットなどのデバイスに精通していないこともあり、今のところ解析班は前世のシゲルのライブ映像を見て、失神したり黄色い悲鳴を上げるだけの装置と化している。

ごくつぶしである。

しかし、この稀代の天才が手を貸してくれるというのなら話は別だ。

タブレットはまさにオーパーツ。一朝一夕にコピーできるとは到底思えないが、中にとんでもないお宝が収められている可能性は高かつた。何せ、この世界にとつては未知の技術の塊だ。映し出される美麗すぎる映像がそれを裏付けている。

前世のシゲルのライブ映像に収められている音声は、そもそもは相当の高音質であるらしい。しかるべきスピーカー群に接続すれば、『驚きの体験ができると思うぜ』とシゲルは太鼓判を押していた。

高画質な映像と、高音質の音声。それは昏睡病の根絶にも関わる重大な案件である。そしてこのタブレットは、その二つを兼ね備えたデータを、小さなボディに収め切っている。

映像、音質、記録媒体。どれか一つだけでもいい。その製造法に近づくヒントがあれ

ば。

高画質なシゲルの映像。あるいは高音質なシゲルの音楽。それを個人で楽しめるようになれば——シゲルが蓬莱を離れている間、国民の活気を保つための鬼札となるかもしれない。

葛藤する凛に向かつて、ジェーンは更に言葉を重ねる。

「……グリーンカードくれないなラ、ワタシの昏睡病進みます。仮病使つて病院から一歩も動かないでス」

「そんなことしてもアステカがベッドごと飛行機に乗せますよ」

「そしたらアステカでボイコットでース。ホウライに戻すまで仕事しないつて主張します」

凛の顔がひきつる。この天才を遊ばせておくのは人類の損失であるのだ。

「アステカと軋轢が……」

「ダイジヨーブダイジヨーブ。ホウライはタブレットを独占しようとはしてないんでしょう？ 成果さえ共有できるのなラ、アステカは文句無いハズでース」

「う、うぐぐ」

凛はしばし頭を抱えると、やがて大きなため息を吐き、ジェーンが叩きつけた電話とは別の電話へと手を伸ばす。

国内用の電話だつた。

——ごめん、外務省の皆。しばらくの間えらいことになると思うけど、差し入れはするから。

心中で謝罪しながら、凜は外務省の番号をプツシユした。

アステカとの話し合いは、さぞ胃を痛めることになるだろう。  
丸投げするつもりだつた。

解析班と面通しを済ませたジエーンは、あつという間に研究室の主導権を握つてい  
た。

何せ世界にその名を轟かす天才である。研究者にとつても憧れの存在だ。

「オーウ、これ確かに現代じや作れませんネー」

未知なる機械に目を輝かせたジェーンは、物怖じせずにタブレットをいじくります。

「取りあえず情報を得まース。アイコンをタップタップネー」

「だつ、大丈夫ですか?! データが消えてしまつたりしたら——」

はらはらする解析班だが、ジェーンは意に介さない。

「そんなこと言つてたら何も出来ませーン。シゲル様はゴラク用と言つていたのでしょウ? 表示されるテキストさえちゃんと読めばチメイ的な操作には繋がらないはずでス。分からぬホウライ語があつたら聞きますネー」

ジェーンは大胆にタブレットをタップし、解析班が見たことも無い画面を出し続けている。

「フンフン。w e b ブラウザ? インターネットにセツゾクされていません? んー、分かりませんネ。こつちのアイコンは——ああ、下のレイヤーにリンクしてるですか? ナルホド、一つの画面に收まるアイコンは限りがありますからネー」

ジェーンはあつという間に解析班が見たことも無い画面にたどり着くと、あるアイコンを見て不意に指を止めた。

「——みなサン。これ、なんて書いてあるですか？」  
「は、はいっ。ええと——」

「電子書籍リーダー、と書いてありますね」

ジエーンの碧眼が、鋭く細められた。

天才の直感が『お宝』を嗅ぎ分けた瞬間だつた。

## 第20話

皆には、シゲラジで何度も何度も愚痴を聞かせちまつたよな。  
「エレキギターが欲しい」「ドラムセットが欲しい」「ベースが欲しい」「キーボードが欲しい」つてよ。

みんなにとつちやあ何の楽器かさっぱりだつたろうにな。——ま、今んところ俺の頭の中にしかねえような楽器が多いから、そりやそんなんだが……でもよ、言わざにはいられなかつたんだよ。

逢いたかつたんだ。ソイツらに。

だけど——安心してくれ、もう二度と言わねえ。  
だつてよ……

へへ。へへへへへ！

ついによお、ついに！

そいつらが出来上がるんだよー！！

長かつた……！長かつたぜ！えらいぞ蓬莱楽器さん！あとで感謝のハグしてやるか

らな！——いらねえか！はははは！

なんかよお、最近になつて、音楽を皆に届けるための設備がとんでもねえ速度で整つて来てるんだ！

だつて楽器だけじやなくて、アンプとスピーカーも一新されるつてんだぜ！？収音マイクもクオリティアップ！ほんとすげえことなんだよ、これ！

——いやー、正直初めて唄子の部屋に登場させてもらつたときもな、もうちょい音響周りなんとかならんかなー、つて思つてたんだが——この進化の速度はちよいと信じられねえよ。

何か聞くところによるとすげえ助つ人がアステカから——え？何？あ、これダメ？そつか、悪イ悪イ！

なんか技術屋さんたちが滅茶苦茶頑張つてくれてな、ありがてえ話だぜ！  
おつと。なんで俺のテンションがこんなに上がつちまつてるか、皆にはさつぱりどうから、分かりやすく説明するか。

楽器が完成したことで！俺の音楽、特に『ロツク』がとんでもねえパワーアップをする！

これを聴いたらよ、昏睡病なんざ——分厚い雲を巻き込んで、空の彼方にかつ飛ぶぜ

！

へへ、ラジオの前の君も、これだけしつこくアピールされたら、どんな音楽になるか聞きてえだろ？

——俺もずっと、聞かせたかつたぜ！

そんなわけで蓬莱テレビに無茶を聞いてもらつた結果、新しい音楽番組『アイドルスター』が放送されることになつた！この番組の中で、俺のやりたい『バンドミュージック』——そして『バンドとは何か』つてことについて触れていきたいと思う！勿論それ以外の古今東西の音楽にもガンガン触つしていくからな！

放送日は再来週の金曜夜八時！

音楽好きのキミは勿論、そうでないキミも、ちょいとだけチャンネルを合わせてくれると嬉しいぜ！

おつと、ついつい喋りすぎちまつたな！じゃあ、この辺で一曲——

』

「真美。何度時計を見ても、早く進んだりはしないわよ」

お母さんの苦笑いに、わたしは唇を尖らせる。

「わかってる。わかってるけど——待ちきれないのつ」

時刻は夜七時四十分。遂に『アイドルスター』が始まろうとしている。

シゲル様がシゲラジでその存在を宣伝してから、もう蓬莱中がその話題で持ちきりだ。

だつて——ただでさえ最高なシゲル様の音楽が、これ以上パワーアップするつていうんだもの！賭けてもいいけど、今蓬莱中の人がテレビの前で正座してるよ！あ、夜勤の人は血の涙を流している可能性があるね。まあ大丈夫大丈夫。どうせ明日にはダビングされたビデオが出回るよ。

テレビの無い人はどうしてるつて？そりや友達とかの家に押しかけてるよ。

「もー、真美ちゃんはせつかちだねえ」

このお姉ちゃんみたいに。

「……なんでお姉ちゃん、うちにいるの？」

私は姉に白い眼を向ける。

宮廷女官は基本自らの局に住み込んだ。外出にも届け出が必要だつていうし、テレビデオを買つたつて自慢していたお姉ちゃんが、わざわざ実家に帰つてくる必要はないと思つんだけど。

お姉ちゃんはわたしの疑問を聞いて、眉間にぐーっと皺を寄せて——どんつ、とテレビルを叩いた。

「聞いてよ！ 酷いんだよ女官の皆が！」

……あ、なんかしようもない話がはじまりそう。

帝居の一角から、女官たちの楽しきな声が響いていた。

「ねーねー、お煎餅あるからたべよー」

「あ、田中せんべいの揚げせんだー。ここのおいしいよねー」

「安いのがいいよね」

「失礼します。お茶を入れて参りましたよ」

「おー、ありがとー真名美。入つて入つて」

実に平凡な、なんてことのない団らんの風景だ。しかし昏睡病が治癒する以前では考えられない、明るい光景だった。

宮子もそれ 자체に文句はない。同僚と仲が良いというのはとっても素晴らしいことだと思う。

——ここが居間ではなく、宮子の部屋であることを除けば。

「なんでみんな私の局に集まるの?!」

八畳間に六人目が登場したところで、限界を迎えた宮子は大声を上げた。

しかし、女官たちは驚きもしない。全員が全員『だつてしようがないでしょ』とでも言いたげな目を宮子にむけて口を開く。

「だつてチビちゃんがいるし」

「テレビかビデオ見ようと思つたらここになつちやうんだよねー」

「そうそう」

「居間にもテレビあるでしょ！でつかいのが！」

宮子の言葉に、女官たちはそつと目を逸らす。

「だつてあつちは高位女官様と帝が使うし……」

「リラックスできる環境かといえば、あまり……」

「皆のせいでのわたしがリラックスできないよ！」

「わたしたちは出来るから大丈夫だよ」

「うん。安心して」

「あ、あれ？わたしの蓬萊語通じてる？」

実際女官たちはリラックスしていた。枕までしてねそべつていてる者すらいる。

憩いの空間を侵食されている宮子ばかりが怒り狂っていた。

「——まあまあ。ほら、チビちゃんの視聴に関しては命子様から許可が下りてるし。『遠

慮せずに見るがよい』って」

そのセリフに宮子はぎょっと目を剥いた。聞いたことの無い情報だった。

「当の私が初耳なんだけど?!なつ、何で勝手にそんな許可出すの?!わたしのプライバシーは?!」

「あんまり重要視されてないんじゃない?」

「うおおおおつ!」

宮子は激怒した。

かなならずやあの邪知暴虐の女官長を除かねばならぬと思つたが、怖かつたのですぐやめた。

代わりにあんまり怖くない女官たちに怒りをぶつけることにした。

「そろそろ一人くらいテレビ買ったでしょ!電器屋さんはまだまだ地獄の工事を続けてるらしいけど——わたしみたいに、自分でつければいいじやん!っていうか確か誰かやるつていつてなかつた?!」

「——ええ、テレビ買った美奈子がもう試したわよ!ダメだつたのよ!貴方のせいだ!カウンターで怒りを喰らつて、宮子はのけ反る。

「わ、わたしのお?!」

「ここのつて電波強度がぎりぎりで、三分配すると全部映らなくなるのよ!」

「テレビ映らなくなつた瞬間の命子様の顔、貴女に見せたかつたわ。……わたし、危うく淑女の尊厳を失うところだつたんだから」

「全部抜け駆けした貴女のせいよ！」

女官たちは畳みかけた。

宮子はたじろぐ。確かに抜け駆けと言われればその通りかもしけなかつたから。しかし宮子は踏みとどまる。レッサーパンダの威嚇のポーズで応戦の構えをとつた。

「——だからつて常識わきまえてよ！」

おそらくは女官の中で最も常識を知らない女は吼える。

だつてもう限界なのだ。宮子の私物は全部押し入れに突っ込まれて久しいというのに、見たことの無い私物はどんどん増えていく。八畳はそのほとんどが女官たちに占有され、持ち主である宮子が簾笥の隣に押しやられる始末。

翌日非番の連中が深夜までビデオを見ているのももう日常だつた。

「貴女結構団太く寝てましてよ」

「時々いびきもかいてるよ」

「文句は女官長様に言つて下さいまし」

「そうそう」

「言えるものならね」

八畳のどこにも味方はいなかつた。宮子のストレスは限界に達しようとしていた。

「うう、こがねまる、こがねまるーー！みんながいじめる！」

最早心の支えはこがねまるだけ、と宮子は愛用のぬいぐるみの姿を探すが、どこにもない。誰かに押し入れの中に突っ込まれたのかしらん、と押し入れも覗くけど、やはりない。

「ねえ、こがねまるしらない？」

大き目のテーブルを囲んで——こんなテーブルも一か月前までは無かつた——お茶請けをぱくついていた女官たちは「さあ？」と首を傾げたが、寝そべつて雑誌を読んでいた一人が「あ」と声を上げた。

その女官はちよつと申し訳なさげな顔で身体を起こすと、頭の下に敷いていた枕を宮子に差し出した。

「ごめん、サイズが丁度良くて」

「こがねまるだつた。

「こつ、こがねまるがあーー！」

「こがねまるは伸びていた。

愕然とする宮子に、女官たちは容赦なく告げる。

「そうそう。アイドルスターの時もお邪魔するから」「お茶菓子もつてくるからねー」

「もういやだーっ！」

「そんなわけで外出届出してきたの！」

「そう」

わたしはビデオの録画スイッチを押しながら生返事を返す。

どうでもいい話を聞いていたら20分経つてた。そこだけは感謝だね。

ついに——待ちに待つたアイドルスターが始まるんだ。

時計が八時を示すと同時に、テレビから女の子たちの声が響いた。

「「はじまりました、アイドルスターっ！」」

きたきたきたきた！

「メインパーソナリティはぼく、緋崎朱里と！」

まずバストアップが映つたのは、ショートヘアの快活そうな娘。『元気いっぱい』、そんなフレーズが頭に浮かんだ。声もキヤツチーな感じ！

「藍葉青子と」

次に映つたのは、切れ長の眼が特徴的な美人さん。手足も長くて、シルエットが素敵だ。

「金枝浅黄とー、」

次に、『これぞお嬢様』つて感じの気品漂う女性が映る。下品にならない程度にメイクもバツチリで、柔らかな垂れ目が印象的。

三人は全員が満面の笑顔だ。当然だよね。シゲル様と一緒に空間に居られるなんて、

多分それ以上の幸せってないよ。

でも、当時ニュースでやつてたけど、一年前に倍率千倍とも言われたオーディションに合格した娘たちだもんね。やつぱり嫉妬より先に『大したものなあ』って思っちゃう。

「そして——」

金枝浅黄さんが視線を向けた先に、カメラが切り替わる。

最後に映るのは、もちろん——

「櫻崎シゲルでお届けするぜっ」

——シゲル様。

あー、やつぱり、もう、何度見ても絶世の美男子。こんな男性きっと有史以来存在していなかつたよ。

いつまでもシゲル様のアップを見ていたかつたのだけど、無情にもカメラは直ぐに引いて、スタジオを広く映した。ちえつ。

——あ！後ろに見たことの無い楽器がある！あれがシゲル様が言つていた楽器たちかな？どんな音を鳴らすのか、もうわくわくが止まらない！

そしてその私の期待に、シゲル様もすぐに答えてくれる。

「ま、とりあえずバンドミュージックつてのを聞いてもらうか！」

余りにも唐突に、シゲル様はそう言う。シゲル様らしくて、わたしはちょっと笑ってしまう。唄子の部屋でも『自己紹介なんざ名前だけで充分だろ！』って言つてたもんね。音楽さえ聴いてもらえれば、それでいいんだろうな。

——まあ、そもそも蓬莱人にシゲル様の自己紹介が必要な人間はいないし、効率的だよね！

「事前にベースとドラムの音は収録済みだ。リズム隊が録音つてのは、正直不服ではあるんだが——ま、ないものねだりをして仕方ねえし、逆よりはマシだ。今回はグルーヴ感にはちよいと犠牲になつてもらう」

「だがよ、このパワーアップしたアンプならそれを差し引いてもすげえ音楽になるはずだぜ！ エフェクターもバツチリだしな！」

「まあテレビの前の皆にとつちやあ、テレビスピーカーの性能に依存しちまうのが残念なところだが——最新技術が用いられたテレビつてのも、今開発中らしいからよ！」

立て板に水、つて感じで、シゲル様は嬉しそうに語つている。正直分からな単語もあるけど、全然気にならない。シゲル様が嬉しそうにしていればオーケーです！  
「それじゃあ唄子の部屋でやつた時と同じように——『ロケット』から、始めるぜ！」

「どんだけ違うか、その耳で確かめてくれよな！」

イントロが始まる。

太鼓の軽妙なリズム。この音がドラムの音なんだろうな。確かに色んな打楽器の音が聞こえる。

うん、なんだかワクワクしてくるリズムだ！そつか、ホントは口ケツトつてこんな出だしなんだ！

「——楽しんでいこうぜつ！」

次の瞬間、シゲル様がエレキギターっていうのを——

## 第21話

「——どうだつた？」

最後の音を鳴らし終えたシゲルが問う。

三人娘は興奮に頬を紅潮させ、鼻息荒く前のめりになつていた。

「——最高でしたっ!! 最高の、最高でした!!」

「わたし、今死んでも悔いはありません！」

「さい、こう、でし、た……！」

「あつ、浅黄さんがついに持ちこたえた！」

「三回目の演奏にしてようやく……」

朱里と蒼子の言葉に苦笑いを浮かべたシゲルが、カメラ目線で説明を始める。

「あー、多分カツトされてるから視聴者の皆さんに伝えておくぜ。こいつら最初に『ロケット』聴いた瞬間気絶しちまつてな！ 感想を聞くために蘇生を繰り返して——今三回目やり終えたところだ！」

「お手数をお掛けしてしまつて、ほんとうにごめんなさい、シゲル様！」

「すみませんでした！」

「うう、わたしが悪いんですー。二度目もサビで失神してしまいましてー……」「氣イ失うほど喜んでくれたのは、まあ嬉しいけどな。ちよいと大げさだぜ」シゲルは照れくさそうに笑つてから、話を続ける。

「——たつた一曲だけよ、『バンド』の魅力は伝わつてくれたか？」

三人の返事は、頭がちぎれんばかりの首肯だった。

シゲルは「ありがとよ！」と幸せそうに言うと——楽器群に指を向けた。  
きよどんとする三人に、シゲルは告げる。

「よし！じゃあ選べ！」

と。

「「はい？」」

揃つて首を傾げる三人に、シゲルは良い笑顔で言い放つた。

「——これから三人でバンドを組んでもらう！」

突然のシゲルの言葉に、三人娘は『えーっ！？』と声を揃えた。  
「色々考えたんだが、それが一番いいかと思つてな！プロデューサーにも許可はとつて

あるぜ？」

「き、聞いてないですよ?!」

「し、シゲル様の『バンドミュージック』を伝えるための番組ではなかつたのですか？」  
「だからだよ。バンドは一人じやできねえだろ」

「い、いえ、先ほどの『ロケット』を拝聴するにお一人でてきてましたー！リズムセクションは確かに録音でしたけど、音質は驚くほど良かつたですしー！シゲル様の歌とギターは完璧にリズムに乗つてましたしー！」

「そうです！ぼくたちが真似つこしても、とてもテレビの前の皆に届けられる音楽になるとは思えません！あんなにカッコいい音楽に追いつこうと思つたら、まず輪廻転生を極める必要がありますよ！——だつて浅黄さんはともかく、ぼくたちは楽器に触つたことなんてほとんどないんですよ?!」

「そ、その通りです！」

「——だからいいんじゃねえかよ！」

三人の言葉に、シゲルは力強く答えた。

「テレビの前の皆だつてそうさ。楽器を触つたことがある人のほうがすくねえ

そこで一旦言葉を切ると、シゲルはカメラへと視線を向けた。

「音楽つてのは聴いてるだけで最高なものだ。だから、この番組を『聴く』ためだけに見

ていてくれる人、本当にありがとな！これからも色々な音楽をどんどん紹介してくれよ、今後も見てくれる嬉しいぜ！」

「でもよ、『音楽を自分でもやつてみたいな』って思ってくれる人をちょっとでも増やしたいつてのが、俺の目論見の一つでもあるんだ。俺はこのアイドルスターが、そのきつかけになればいいと思つてる！」

「素人だつていいんだ。だれでも最初は素人。歌つてみたら、音を出したら、なんか楽しい。それでいいんだ。樂しけりや、それが最高の音樂なんだよ」

「どんな樂器でもいい。調子はずれの歌でも上等だ！騙されたと思つて、俺の口車に乗つてみてくれ！」

「——きっと、楽しいからよ！」

紡がれるシゲルの思いに、スタジオの誰もが口を閉ざして聞き入つていた。

「……つと、力み過ぎたな。まあそんなに大袈裟な話じやねえんだ。樂器でも歌でも、やってみると案外面白いぜ、つて、それだけさ」

言葉に熱がこもり過ぎていたことに気付いたシゲルは、ちょっと気まずそうに頭を搔くと、

「ま、成長してつたほうもつと楽しいのも事実だけどな！だからお前さんたちも、番組のなかでちょこつとずつ上達していくぜ！一曲でもセツションできるようになつた

日にや、そりやあもう天国味わえるからよ！」

そう言つて、照れくささを誤魔化すように笑つた。

「「——わかりました！」」  
その子供のよくな笑顔は、三人から『断る』という選択肢を奪い取るには十分すぎた。

示し合させたように声を揃えた三人は、上達の決意を込めて、力強く頷いた。  
シゲルはそれを嬉しそうに見て、再度楽器群を指さす。

「よおし！じゃあ第一印象でいいから、どの楽器をやりたいか教えてもらえるか？」

シゲルが再度問う。

「「「はい！」」

返答は早かつた。

三人娘は一斉に、即座に同じ楽器を指さした。

「「「ギターです！！」」

——シゲルの抱えるエレキギターを。

「こうなるんじやねえかと思つたんだよなあ……」

シゲルは頭を抱えた。

しかし即座に立ち直ると、声を張り上げる。

「色んな楽器の良さを伝えようつて番組なのにギター三人でどうする！ギターは禁止だ

禁止！フライングVちゃんは俺のだ！これまだ一本しかないし！」

「「ええー……」」

三人はしょんぼりと肩を落とした。

「——で、でも、そもそもギターの旋律抜きで曲が成り立つんですか？」

ふと顔を上げた朱里が、不安そうに言う。

ギターのメロディは、シゲルの弾き語りを散々聞いてきた者からすれば必要不可欠の要素に思えたからだ。

しかしシゲルは当たり前のように頷いた。

「おうよ。お前さんたちに組んでもらうのは、すばりキーボードトリオだ」

「キーボードトリオ？」

「ベース、ドラム、キーボードで構成されるバンドだな。まあギターが入ることもあるんだが」

そこまで聞いて、浅黄がぽんと手を打った。

「あつ、なるほどー！ピアノ——キーボードが主旋律を担うんですねー？」

「正解。そういうことだな」

「うーん……でしたらわたしはキーボードを担当したいですねー。初心者にこそ楽器に触れてもらいたい、というシゲル様の思惑には添えないかもなのですがー……」

「そういや浅黄ちゃんはピアノ弾けるんだつたな。大いに結構だぜ。初心者担当は二人もいるからな！——へへ、それにな。クラシックピアノの経験者って、結構バンド組むと躊躇したりするんだぜ？・リズム隊と息を合わせるつてのは、また別のテクニックが必要になるからな！」

少しだけ意地悪そうに言いながら、シゲルは心底楽しそうだ。

「お、脅さないでくださいませー」

浅黄は顔を赤くしながらうつ向いてしまう。

「——さて。残るはベースとドラムだが……」

シゲルの言葉に、朱里は蒼子と視線を交わすと、そつと手を上げた。

「ちょ、ちょっと話をさせてもらつてもいいですか？」

「その、できれば一人で……」

「おう、もちろん。じっくり悩んで相棒を決めてくれよな！」

二人はシゲルの言葉に曖昧な笑みで応えて――

顔を突き合わせるや、視線から火花を散らした。

「ぼく、ベースがいい」

小声だが、断固たる口調で朱里が言つた。

「私もそうよ。ギターと似てるから、将来ギターをやる時にもテクニックが役立ちそう」  
同じく小声で、蒼子は譲らない意思を表明する。

「……」

「……」

不退転の視線が互いを射抜く。

「「じゃーんけーん!!」」

小躍りしながらベースを手に取る朱里と、ドラムセットの前で露骨に肩を落とす蒼子を見て、シゲルは苦笑する。

「なんかドラムが不人気みてえだが、打楽器つてのも魅力的な楽器なんだぜ?」

「そ、そうは申されましても! できればシゲル様のギターと同じ弦楽器を触つてみたかったのが本音であります!」

「はは、まあそう言つてくれるのは嬉しいが——どれ。本職には敵わねえが、ちよいと楽しいとこ見せてやる」

「え？」

「んー、イントロに使うソロでいいか」

そんなことを言いながら、シゲルはドラムスローンに座り込むと、軽くステイックを握り——軽妙にドラムを叩き出した。

シンプルなフレーズだ。キックのダブルから、スネア、ハイハットへ。それがタム回しに挟まっている。

しかしそのシンプルなフレーズは、一瞬でスタジオ中の心を驚掴みにしてしまった。ドラム。ギター・やキーボードとは違つて、ひたすらリズムを刻むだけの楽器。

だがメロディの存在しないこの楽器が奏でているのは、間違いなく音楽だつた。

——それも、とびつきりの。

何かひどく期待感を煽るリズムが、しばしの間鳴り響いて——不意に止まつた。

「——どうだ、楽しそうだろ？これ実は結構簡単なんだぜ！キックだけちょいとコツが必要だけだな」

「「シゲル様あーっ!!!」」

三人娘の黄色い歓声があがつて、シゲルは照れくさそうに手を振つた。

全身を使って演奏する楽器というのは、見た目のインパクトからして満点であった。おまけに長い手足を操っているのは絶世の美男子なわけで、ドラムセットはまさに『格好良さ』の権化と化していた。

「ぼ、ぼくドラムやるよ！」

「ダメよ！さつき決まったでしょ！」

「ずずいっ、と詰め寄る朱里に、蒼子は両腕をクロスして応戦する。

「落ち着け落ち着け。当然ベースも最高の楽器だから安心しろ。大当たりしかないクジ引けたんだから幸せモンだぜ、お前さんたちは」

そう言いながら、シゲルは今度はベースの魅力を伝えるべく、朱里へと近づいていつた――

朱里はシゲルのベースソロを聞いた後、二度と離さないと言わんばかりにベースをかき抱いていた。

「が、カツコいい……こんなカツコいい楽器がこの世に存在したなんて……」

その言葉に、シゲルは我が事のように喜ぶ。

「だろお?! 最高だよな、ベースも!『マツハカナブン』なんかも、やっぱリベースがねえと——」

「ま、マツハカナブン、ベースがあればもつとカツコよくなるんですか?!」  
興奮状態の朱里が食い気味に尋ねると、シゲルはサムズアップで答えた。

「おうよ。エレキとベースとドラムがあれば、カナブンが空飛ぶぜ!」

「か、カナブンが空を飛ぶなんて……!」

朱里は愕然とつぶやく。

「カナブンは飛ぶものでは……?」

「飛びますよねえ……」

蒼子と浅黄の突っ込みも聞こえないほど舞い上がった朱里は、シゲルの「来週のアイドルスターで『マツハカナブン』の完成形を聞かせてやるよ!」というセリフに収録を忘れてはしゃぎまわり——

次のカットでは、申し訳なさそうな顔で椅子に座っていた。

悄然とする朱里の肩を、蒼子がぽんと叩く。

「大丈夫よ朱里、生放送じゃないから。興奮で鼻血だして、少々撮影がストップしたこと  
はバレないよ」

「それ言つたら意味ないでしょ！弟も見てるんだからね？！」

歯をむき出して怒る朱里に、蒼子が含み笑いを漏らす。

シゲルは苦笑いを浮かべた後に、やれやれといつた風に肩を竦めると、  
「——そういう、折角だからキーボードの良さも伝えてえな」

そんなことを口にした。

三人の目が期待に輝く。またしても超絶技巧を披露してくれるのか、と。  
だが、シゲルはキーボードに近づく前に、まず浅黄に近寄ると、

「——つてことで頼んだ！浅黄ちゃん！」

「うえっ？！」

素つ頓狂な声を上げる浅黄の手を取り、問答無用でキーボードの前へと連れてきてしまった。

「ちよいとタツチは違うが、元はピアノさ。一曲やつてみてくれよ！」

シゲルの『頼み』を断れる蓬莱淑女は存在しない。

「は、はいい」

浅黄は震える手を鍵盤に乗せ、恐る恐る押し込む。

「ででで、では、僭越ながらー、良く弾く曲の一部をー……」

キーボードがきこちなく音を紡ぎ始める。

——しかし、浅黄が震えていたのは最初のうちだけだった。

浅黄の指が、広い範囲の和音を完璧に奏てる。しかも、ただ音階を正確になぞつているだけの演奏ではなかつた。

その調べは、キーボードの電子音にもかかわらず、実に『感情的』だつた。

いつしか、浅黄の顔には緊張の色ではなく微笑みが浮かんでいた。「自分の好きな曲を、みんなに聞いてもらえて嬉しい」——言外にそう言つてゐるような表情で、浅黄は精一杯の演奏を披露してゐる。

——とはいゝ無論、シゲルの前世であればもつと優れたピアニストは山ほどいる。シゲル自身も、今の浅黄には恐らくテクニツクで勝ててしまうだろう。

だが、この演奏に、シゲルは目を輝かせた。ピアノの演奏が終わるまで、リズムに小さく頷きを合わせながら微笑みを浮かべ——演奏が終わるや、『今日これ以上嬉しいことはなかつた』とでも言いたげに、立ち上がつて拍手を送つた。

「最ッ高だつたぜ!! 上手いじやねえかよつー今のは何て曲なんだ?!

手放しの大絶賛に、浅黄はもじもじと指を絡めながら答える。

「あ、ありがとうございます。畏れ多いですー。……曲名は『雨音戯曲』と申しまして、

一番好きなピアノの曲なんですよー！」

「へえー！いやいい曲だな！中盤の、和音が広がつてちょっとずつクレッシャンドになつてくるところ、痺れだぜ！」

「嬉しいです！うー、でもちよつと歯がゆかつたですー！まさにそこなんですが、うちのピアノならもつと表現できるのに、つて思いましてー！」

「ははは、分かる分かる！クラシックだからなあ……まあキーボードの性能が上がつていけば不満もちよつとずつ解消されてくだろうから、勘弁してくれよな！たまつたフランストレーションは、家にいる相棒でたっぷり解消してくれ！」

「もう帰つたら早速弾いやおうと思います！」

音楽談議に花を咲かせる二人をよそに、朱里と蒼子はちよつとした衝撃を受けていた。

「浅黄さん、そんなにうまかつたつけ……？」

「うん。浅黄さんのピアノは聞きなれてるはずだけど、今のちよつと感動したよ」

二人の賛辞に、浅黄は表情をほころばせる。

「ふふ、ありがとうございます。最近、確かに自分自身ステキな表現ができるようになつたとは思うんですよー」

「へえー！でも、急にそんなにうまくなるものなの？何かきっかけが？」

朱里の質問に、浅黄はシゲルに視線を向けながら答えた。

「——それは勿論、シゲル様ですー」

「……俺か？」

きよとんとするシゲルに、浅黄は嬉しそうに両手を合わせた。

「はい！シゲル様の音楽を聴いてから、私自身音楽が、ピアノが楽しくてしようがなくてですね——次第に、今まで理解できなかつた発想標語がなんとなーくわかるようになつたんですー！」

「発想標語？なにそれ？」

「ピアノの楽譜にかけてあるんですよ。『活き活きと』とか、『表情豊かに』とか、『勝手気ままに』、とか」

そこまで説明すると、浅黄は一瞬遠い目をして、

「——きっと二世紀前までは、それが普通だつたんでしようねー」

僅かに寂しそうに言つた。

しかし朱里はそんな浅黄の様子には全く気付かない。目を輝かせて口を開いた。

「へえー！じやあ『これから』は、もつといろんな発想標語が増えるかもね！」

と。

——その言葉に、浅黄は一瞬だけ目を丸くして、  
「ふふ、そうですね。わたし、ピアノを——『これから』は、もつと楽しめそうですよー  
！」

その日一番の笑顔で、胸を張った。

二人のやり取りを見て、シゲルは眩しそうに目を細めた。

「で、その発想標語を理解できるようになつたおかげで、とつても上達したってことでいいのかな？」

朱里が確認すると、浅黄は曖昧に頷いた。

「うーん、表現力はちょっとアップした、とは思うんですけど——」

しかしそここまで言うと、浅黄は首を傾げてしまう。

「——でも、技術的にここまで上達した、って気はしないんですけどねー」

「んー、でもぼくはとつてもうまくなつたように聞こえたけど」

「——聞き手の問題かも」

蒼子がぽつりと言つた。

「聞き手の問題？」

おうむ返しする朱里に、蒼子は自らの考えをまとめるように話し出す。

「えつとさ、皆言つてゐるじやない。『シゲル様の音楽を聴いてから、ごはんがとつても美味しいくなつた』つて。——これつてもしかして、他の分野にも——例えば音楽にも適用されるんじやないかと思つて」

その言葉に、スタジオは静まり返つた。

注目を集めていることに気付き、蒼子は慌てて手刀を切る。

「す、すみません、素人のつまんない憶測です！ここカットしてください！」

しかし、待つたをかけるものが居た。

「いや！蒼子ちゃん、良いこと言つたぜ！」

やおら立ち上がつたシゲルである。

「そう。そなへどよ！いいか、テレビの前の皆！今ならきつと、前よりずつと前向きに音楽を楽しめるはずなんだ！」

「俺は『どんな楽器でもいい』つて言つたよな？あれつてよ、もちろん今日ここに紹介した楽器に限らねえんだぜ！」

「世界にはこの番組では紹介しきれない楽器や音楽が山ほどある。そりや皆よく知つてゐるだろ？——このタイミングで、ちよつともう一回見直してみてくれねえか？昏睡病なんてのがなけりやよ、その楽器とか音楽の魅力つてのがもつともつと伝わつてくるは

「なんだよ！」

「何かこないだシゲラジに届いたハガキにあつたんだが——『もしギターが販売されたら、ヴァイオリンをやめてギターを始めようと思います』ってヤツ。——俺はよ、そりやちよつと待つてくれ、って言いてえ！」

「色んな楽器や音楽に触るのは、そりや楽しいから結構！でも、それまでやつてた音楽を止めるこたねえんだよ！」

「もう一回落ち着いて、自分の相棒を見直して——ちよつと演奏してみてくれよ。きっと今なら、ソイツの新しい魅力が伝わってくるはずだぜ！」

シゲルの『新しい音楽』の宣伝であるはずの番組で、シゲルは以前からある楽器や音楽について熱弁しだした。

本来予定に無いハズの展開だった。収録を見守っていたプロデューサーが焦りを見せる。

収録時間には限りがある。何せシゲルは多忙を極めている。蓬莱での治療ライブはまだまだ終わる様子を見せていない。今日のアイドルスターだつて、リハーサルの時間すらどれなかつたくらいだ。

創刊される音楽雑誌に寄稿もしなくてはならない。量産前の新楽器の最終調整もある。これがただの人間の肉体であれば、どうの昔に過労で入院しているだろう。

その点、シゲルの肉体は神の手によるもので、頑丈さは折り紙付きであり、常軌を逸したハードワークをこなしながらもまだまだ健康を維持していた。

その頑丈さにものを言わせ、シゲルにはこの収録の後も治療ライブの予定が入つていたのだ。遅刻させるわけにはいかない。

「——えつ？ 何？ 卷け？ ちくしょう、この話はシゲラジでもしてやるからな！」

シゲルは尚も思いの丈をぶちまけようとしていたが、プロデューサーがペコペコ頭を下げながらハンドサインを出してくるのを見て、渋々腰を下ろした。

その後、番組はテンポよく進んでいく。

幾つかの宣伝があつた。

今日紹介された楽器が、来月には販売されること。簡単な教本も同時に販売されること。音楽、楽器の紹介などを行う世界初の月刊音楽雑誌が創刊されること。

ポジティブな話題だらけのアイドルスター第一回は、最後にシゲルの新曲『終わらぬい旅』が披露されて終幕となつた。

——テレビの前に、無数の失神者を量産して。

女子高生・神宮寺真美視点

『次のニュースをお伝えします。』

——はっ!?

覚醒したわたしの目に飛び込んできたのは、おなじみのニュースキャスターの顔面だった。

「へっ!?あ、アイドルスターはどうしたの?!」

思わず大声が出てしまう。

何が起こっているのかさっぱりわからないわたしは、狼狽えて辺りを見渡して——私の大声に身体を起こした母と姉、そして『9時15分』を刺す時計を見つけた。

——は？

九時十五分つて——九時十五分つてこと？

あ、あわわわわわわ！！

こ、これつてつまり——！

「じ、時間が、時間が消し飛ばされてるう！」

わたしのがのけ反りながら叫ぶと、お姉ちゃんは両こぶしを握り締めて立ち上がった。  
「なつ、何か超常の力が働いているよ！わたしわかるもん！女官だから！」  
「によ、女官つてすごい！だけど何の解決にもなつてない！」

そんな感じにぐるぐる目のわたしたちがあわあわしていると、静かな声が響いた。

「……現実を見ましよう。気を失っていたのよ、私たちは」

母さんが見たくない現実を突きつけてきた。

そう。うつすらと覚えている。口ケツトのイントロに、シゲル様がエレキギターつて  
いうのをかき鳴らして——

そうだ。あまりの衝撃に、破壊力に、わたしたちは意識を飛ばされたんだ。

——そりやそりや！口ケツトに跳ね飛ばされて氣絶しないで済む人間がいたらお  
目にかかりたいよ！

シゲル様！素晴らしい音楽をありがとうございます！でも口ケツトの操縦はもう少

し慎重にしていただきたかった！せめて事前に気つけ薬を用意しておくように注意していただければ、完全食を口に含んだまま聞いたのに！

「うつ、ううつ、うぐうううううつ……！」

嗚咽が漏れる。後悔の念が後から後から押し寄せてくる。

……なにもかも後の祭り。過ぎ去った時間は戻らない。

わたしは顔面蒼白になつて、自然と四つん這いになつてしまふ。

「見つ、見れなかつたつてことだよね……シゲル様の、新番組が……」

お姉ちゃんからも、母さんからも、答えは無かつた。

死んだような沈黙の中、ニュースキャスターの声だけが虚しく響く。

やがて、母さんがぽつりと呟いた。

「——辞職しよ」

母さん？！

ヤケになつちやだめだよ！

でも慰めの言葉すら思い浮かばない。そんなの私がかけてもらいたいくらいだ。

——だけど、捨て鉢になっちゃった母さんを、

「ちょっと待つて！——ビデオは？！録画！」

そのお姉ちゃんの一言が救つたのだった。

「あっ!!」

私と母さんはハツとして、ビデオデッキに目を向ける。

——二年前にプレゼントしてもらつたビデオデッキは、誇らしげに『REC』のランプを点灯させていた。

「あああああ！信じてたよわたしのビデオデッキ！ありがとうジェーン・ホワイト！」

「あの曲聴いて失神しないとは見上げた精神力だよ！あとで名前を授けてあげるからね！」

「えらいわね、本当にえらいわね！いい子いい子！」

母さんが聞いたことも無いような猫撫で声を出してビデオを撫でまわしてゐる。

とにかく望みは絶たれていなかつたんだ！リアルタイムで見れなかつたのは少々残念だけど、もともと生放送でもないし些細なことだよ！

私は直ぐに録画を停止すると、巻き戻しボタンを押した。

「さあ二回戦だよ！今度こそ新曲の正体を掴むんだから！」

「おーっ！」

——即座に始まつた二回戦目、やつぱり私は1ラウンドKOされた。

でも、その程度でくじける私じゃない。

この夜、我が家から明かりが消えることは無かつた。

## 翌朝・神宮寺宮子視点

早朝、わたしは大きな欠伸をしながら局へと続く廊下を歩いていた。

結局一家全員でまた徹夜してしまった。翌日に差し障るからなるべく徹夜はやめよう誓っていたのに、その約束は濡れティッシュよりも簡単に破られてしまった。まあ、あんな音楽を聴かされちゃつたらしようがないよね。多分今日は蓬萊中が寝不足だよ。

それにもしても真美ちゃんは大丈夫かな。「エレキギターに吹っ飛ばされた脳みそがどこ探しても見つからない」とかぶつぶつ言いながら朝ごはん食べてから心配だ。通学路にでも落ちてればいいけど。

——お、女官の二人組を発見。美奈子と真名美の仲良し二人組だ。わたしの局から出

てきたつてことは、多分今の今までビデオを見ていたね。

わたしが「おはよー」と声をかけると、二人は揃つて振り返つて挨拶を返してくれた。

「おはよう……」

「おはようございます……」

——その頬を、真っ赤に腫らした顔で。

「うわっ！二人ともほっぺすげえ！どうしたのそれ?!」

「いや、昨日ちょっと突発的にほっぺつねり大会が始まつて……」

「なっ、なんで?!そんな愉快そうなイベント聞いたことないよ！」

私もいたらよかつた！参加はしないけど見るだけ見たのに！

私の疑問に、二人は気まずそうに俯いて答える。

『ロケット』の出だしで失神を免れたものが、失神した人のほっぺをつねつて起こして

……でもそうすると今度はつねつてる人が失神するから、他の人につねられて……

「最後の『終わらない旅』も皆でそうやつて乗り切つたの」

「アクロバティックな乗り切りかたしたね……」

ほかに方法はなかつたんだろうか。

つていうかどうせ録画はしていたんだろうから、後で見たらよかつたのに。

「みんな冷静じやなかつたのです」

「大体貴女はどうなのよ。初見の時、実家でちゃんと落ち着いて見れたわけ？あんな凄まじい音楽を。蘇つた死人がまた死ぬよ、アレ」

「そりやもう、うちは冷静沈着。みんな静かなもんだつたよ」

失神してたから。

私が疑いの眼差しを向けてくる女官たちから目を逸らしていると、

「む、宮子か」

背後から命子さまの声が響いた。

びくーん、と私の背筋が伸びる。

振り向けば、なんと高位女官のそろい踏みだ。

「おつ——おはようございま、す……？」

反射的に振り返って挨拶を返した私は、思わず目を丸くしてしまった。  
だつて——

「うむ、おはよう。——宮子、おぬしは少々外出が多すぎるぞ。許可を出したのはわしじやが、今後は少々控えるがよい」

「口うるさくはしたくないのですが、『ちょっと実家に帰りたいから』くらいの理由での外出があまりにも多すぎますからね」

「昨日の外出理由に関しては察しがついていますが——あまり音楽にばかりうつつを抜

かさず、仕事に励むのですよ」

えらそうなことを言つて去つていく三人のほつぺは、赤く腫れていたから――

## 第22話

女官にも休日はある。交代制ではあるが、およそ週に一度のペースで一日の休みをとることができる。

平女官のたまり場と化している宮子の部屋には、外出届を出さなかつた女官たちがたむろしていることが殆どなのだが、その日に限つては部屋の主ともう一人しか存在しなかつた。

原因はその『もう一人』にあつた。

なにせ今、愚痴をこぼしながら宮子と肩を並べてテレビを見ているのは――

「めいこは頭がかたい」

帝だつたから。

いつものように宮子の部屋にお邪魔しようとしていた女官たちは、その姿を見るや平伏して去つてしまつた。

だが昏睡病回復以来並々ならぬ図太さを發揮するようになつた宮子は、大して気にもとめない。突然現れ、『チビちゃんを見せてくれ』という帝を、どうぞどうぞと気軽に招いてしまつた。

「それだけ帝が大事なんですよー」

「……わらわはもう十歳になるのだぞ。いつまでたつても赤子のようにあつかわれては、たまらぬ」

帝は小さな口をへの字に曲げて、不満の意を表す。

しかし、まるで人形のようだつた頃の帝を知つてゐる宮子としては、命子の小言に愚痴をこぼす今の帝が実に微笑ましかつた。

ある意味健全な『子どもそのもの』の様子に、宮子は口元をほころばせる。

「まあまあ。あ、おせんべい食べますか？」

宮子は既に封を切られた煎餅袋をひよいつと差し出す。

特別な品ではない。実家の近所の『田中せんべい』で十二枚入りが二百円で購入できる。

ハツキリ言えば帝の口に入るような代物ではない。おまけに既に封を切られている。この場に上級女官が——いや、宮子以外の女官がいれば激怒間違いなしの行為だ。

当の帝は「うむ、もらう」と頓着せずに手を伸ばしたが、小さな手は煎餅をつまみ上げると、困惑したように動きを止めてしまう。

「……どうやつてたべれば良いのだ?」

「どうもこうも、こうですよ」

宮子はいつものように煎餅を手に取ると、ぱきりと齧り取った。

ぱらぱらと小さな破片がテーブルにこぼれる。

「うーん、やつぱりおいしい。これがまたちよつとぬるくなつたお茶と合うんですよねえ」

下品にも口の中に煎餅を放り込んだまま喋る宮子に、帝は目を丸くする。

「……よいのか？ そんな食べ方で」

「煎餅の食べ方って他にあるんです？ ささ、帝もどうぞどうぞ」

「——うむ」

帝は恐る恐る煎餅を口元に運ぶと、小さく齧り取り——目を見開いた。

昏睡病から解き放たれた帝の味覚は、香ばしい醤油の香りと、米の甘味を正確に捉えていた。醤油は少々控えめに使われている一品だつたが、普段薄味に慣らされている帝にとつては鮮烈だつた。

子どもの舌は、いつだつて分かりやすく濃い味を求めているのだ。  
ちよつと驚くような硬さも、とても面白い。

「よいな、これは。ごようだしにしよう」

「わあ。田中せんべいきっと驚きますよ」

下手をすれば心臓麻痺クラスだ。

暫しの間、安物の煎餅と安物の茶を啜る音が響いていたが、長くは続かなかつた。

「ありや、なくなつちやつた」

宮子が二枚食べ終えると、煎餅袋は空になつてしまつたからだ。  
ちなみに帝は一枚食べ終わつたところだつた。

「えつ……」

帝は一声漏らすと、目に見えて落ち込んだ。

宮子は姉という生き物である。自分より小さな女の子がしょんぼりするところを見て、反射的に「なんとかしてあげなくては」と思つた。

自分だけ二枚食べてしまつたのもちよつと気まずかつた。

だから宮子の口を、自然と言葉がついてでた。

「帝」

「む？」

「——皆に内緒で、ちょっとおでかけに行きましようか」

——と。

かくして、宮子は帝を街に連れ出した。

置手紙一つで。高位女官に断りも無しに。

露見は早かつたが、その時すでに二人は行方を晦ましていた。

命子は激怒した。

かならずやあの邪知暴虐のポンコツ女官を草の根分けてでも探し出し、有史以来最大の雷を落とさねばならぬと思い立ち、即座に実行に移した。

その怒りつぶりたるや凄まじいものだつた。事が事だけに当然と言えば当然なのだが、昏睡病が蔓延していた数か月前の蓬萊においてはあり得ない怒りつぶりだつた。

命子が怒りを爆発させるさまを目の当たりにした女官は、後に『人間は口から火を吹ける』と震えながら述懐した。

古着として売り払おうと思つていた子供時代の服が、押し入れの奥に眠つていたのは、二人にとつては幸運だつた。

帝は白無垢の着用が常だが、古着をきた上でつば広の帽子を目深に被れば、帝だと気づく者はまずいだろうと思われたからだ。

宮廷とは言え、別段警備員が常駐しているわけではない。悪漢というものは二世紀前の概念であるし、女官の大半は何らかの武術を修めている。現代蓬萊において、帝の護衛は女官で事足りているのだ。

帝を連れたままタイミングを見計らつて宮廷を抜け出すのは、さして難しいことではなかつた。

外出先に宮子が選んだのは、実家の近くにある商店街だつた。

折角の休日なので歩行者天国に行こうかと思つた宮子だつたが、流石にそれは踏みとどまつた。昏睡病が遠のいた今、ホコ天の活氣たるや凄まじいものがある。万一帝の存在がバレれば大パニックに陥るだろう。

平日の午後ともなれば学生で賑わう商店街だが、日曜は歩行者天国に人をとられる為大分閑散としている。

中々に都合の良い環境だつた。宮子と帝は人目を憚ることなく団子の歩き食いをしている。

「……」んなことをしてよいのだろうか

帝の咳きに、宮子はのほほんと答えを返す。  
「私は外出届ちゃんと出しましたし。帝は外出届なんて必要ないでしよう？たぶん問題ありませんよ。ちゃんと置手紙もしてきましたしー」

「そうか」

とても問題がないように思えない帝だが、口には出さない。

——置手紙とはメモ一枚に『ちょっと帝とお出かけしてきます。夕暮れまでには戻ります』とだけ書かれたあれのことなのだろうか。あんなものを見つけたら命子は魔神に進化してもおかしくはないと思うのだが。

帝はそんなことを考えつつ、命子自慢の薙刀が宮子を問答無用に両断する映像を幻視したが、口には出さない。

中止を申し出るのは躊躇われるほど、帝のテンションは高まっていたからだ。

おでかけは健全な心身を取り戻した九歳の少女にとつて、極めて魅力的だった。

「うーん。それにしてもここのお団子いけますねえ。昔より一段上がりましたよ」

買い物食いする宮子を犯罪者を見るような目で見た帝も、もはや過去にしか存在しない。

「うむう。餡がよい」

共犯者となつた帝は表情の動きにくい顔にほんのりと喜色を浮かべ、歩きながら団子をぱくついている。

「さて、この後どうします？何かしたいこととかありますか？」

「わからぬ。まかせる」

「うーん。じゃあ水天宮にでもお参りに行きます？ちょっと歩きますけど、団子の腹ごなしに丁度いい距離ですよ。それからどこかでお昼ご飯を吃るのはどうでしょう」  
水天宮では府内ではそれなりにメジャーな神社である。安産、子授けを司る神は現代蓬萊においては重要視されており、神への信仰が薄れつつある今も参拝客は少なくない。

とはい歩行者天国と被つたこの時間帯であれば、さして問題はないはずだった。

「うむ。よきにはからえ」

「ははーっ」

そんなやり取りをしながら、二人は水天宮へと足を進める。

二人を呼び止める声があつたのは、その時であつた。

「そこのお一人さん、ちよいといいかい？」

二人が振り向くと、そこには見知らぬ人物が居た。

ハスキーン声をしたその人は、大きなマスクをしていて、帝と同じように帽子を目深

にかぶつっていた。長い黒髪は輪郭を隠している。

身長が高い。無駄な肉はついていないが、力もありそうだつた。

「はい？ なんでしょ？」

さり気なく帝を背にかばいながら、宮子が答える。

「道を尋ねなくてね。この神社にいきたいんだけど」

「えーと……ああ、水天宮ですかー。もう近いですよ。この道を——」  
差し出されたメモを覗き込んだ宮子が口頭で案内をする。ふむふむと頷きながら聞いていた相手は、やがて小さく頭を下げる。感謝の言葉を述べる。

「サンキュー。よく分かったよ。やつと参拝できる」

アステカ語での感謝の言葉に、宮子も笑みを浮かべる。蓬莱においてもアステカ語は義務教育に含まれているが、通常感謝の言葉としてチョイスすることはない。

いや、なかつたというべきか。ごく最近においてはそうでもないのだ。

何しろ、櫻崎シゲルが頻繁にその言葉を使うから。

——きっと、この人もシゲル様のファンだ。

そう判断した宮子は僅かに持っていた警戒心を投げ捨てて、礼を述べて立ち去ろうとしていたその人物と話を続けようとする。

「いえいえー。それにしても水天宮に参拝ですか。実は私たちもこれから参拝予定な

んですよ。子宝大目当てです?」

「へ?いやいや、水天宮といつたら弁天様じやないの?」

その人物は宮子の言葉に足を止めると、ハスキーナ声を返してくる。

「え?弁天様……ああ、境内の宝生弁財天!」

ぽんと手を打つ宮子。その存在は、現代蓬萊の水天宮においては添え物に近かつた。

「弁天様とは扱いどころ突きますねえ」

「そうかい?音楽の神様だろ?」

その人の言葉に、宮子はあつと声を上げる。確かに弁才天には芸術の神としての側面もある。

「なるほど、言われてみればタイムリー!シゲル様という音楽の申し子が現れた今、弁天様ブームがきてもおかしくないですね!」

「お、そうなれば嬉しいな」

「嬉しい、ですか?へえー、今時珍しい敬虔な方ですねえ。何か音楽関係の願掛けですか?」

「ま、そんなとこさ。それと弁天様には恩があるもんだから、お礼も伝えに行きたくてね」

「あら、既に何かお願ひが叶ったんですか?うらやましい話です。——あ、そうだ!折角

だから水天宮一緒に行きませんか？賑やかな方が楽しいですし！」

人が多い方が帝もばれにくくなるだろうし、という思惑も込めて宮子は提案する。目の前の人には帝の正体が露見するかもしれないが、もしされても一人くらいなら頼み込んで内緒にしてもらえばいいし、という楽観的な思考回路が働いていた。

だが宮子の提案に、その人物は言葉を濁した。

「ん……あー、いやちよいとそれはどうかな。流石にボロがでそうだ」

「へ？ ボロ？」

「えーと……」

「一緒に行けば絶対迷いませんし、ナイスアイデイアですよ！——ねえ、」

そう思いますよね、と言おうと帝を振り返つて、宮子は首を傾げることになった。

帝は大きく口を開けたまま、目を見開いて硬直していたからだ。

「——どうなさいました？」

謝しんだ宮子の問には答えず、帝は言葉を発する。

「しげるさま」

「は？」

突如飛び出た英雄の名前に、宮子は首を傾げる。びたりと動きを止めたのは目の前の人だ。

一瞬の逡巡の後、その人物はちよつと肩を落とし——

「——ありやま、バレちまつたか。そっこそこ女声に自信はあつたんだが」  
凛ちゃんは太鼓判押してくれたんだけどなあ、と呟くその声は、先ほどまでのハスキーな女声とは一変していた。

聞き覚えの有りすぎるその声に、宮子は団子の串を取り落としていた。  
その背格好、その声。帽子から伸びる長髪は、よく見ればウイッグで。  
帽子の下から微かに見える目は、全蓬萊乙女が憧れている涼やかさ。

——櫻崎シゲルがそこにいた。

「——し、しつ、しげつ」

金魚のように口をパクパクさせ、次の瞬間には大声を上げそうな宮子に、シゲルは『しーつ』と人差し指を立てる。

宮子は慌てて両手で口を押えると、こくこくと頷く。

閑散としているとはいゝ、人通りが全くないわけではない。

ここにシゲルが存在することがバレれば辺りはパニックとなり、芋づる式に帝がいることも露見するだろう。

そうなれば、明日の新聞を賑わせるのは間違いない。女官長命子の怒りの炎は、宮子を灰になるまで焼くだろう。

辺りをキヨロキヨロと見渡し、ひとまず周囲の視線を集めていないことを確認した宮子の全身に、冷や汗がぶわっと噴き出た。

帝と神に挟まれているという、ありがたくも恐れ多い状況にあることを理解したからだ。

宮子はぐるぐる目でシゲルに詰め寄ると、小声で声を荒らげるという器用な芸当を見せた。

「だつ、ダメじゃないですか！ 神族がこんなところ歩いてちゃダメじゃないですか！ ちゃんと天国におられませんと！」

「あの世は何度も行きたくねえなあ」

「みやこ、おぬしめちゃくちや失礼なことを言つているぞ」

「そつ、そんな馬鹿な!? わたしこのお方を誰よりも敬つておりますよ!! 帝より上です!!」

「えつ。女官とは一体……」

シゲルは何やら慌てふためく宮子の仕草を見て小さく笑うと、

「——櫻崎シゲルだ。よろしくなつ」

と名乗りを上げた。

「あ、ああっ！し、失礼しました！神宮寺宮子と申します！」

宮子はぺこぺこと頭を下げながら自らも名乗り、「そ、それとこちらにおわすのは——」

と帝を紹介しようとしたところ、袖を引かれて制止された。ちよいちよい、と手招きする帝に、宮子は顔を近づけた。

「——どうなさいました？」

「帝ということはないしょだ」

帝はぐく小声でそう言う。

「何故です？」

「もし変にかしまられでもしたら、『畏れ多い』

二人の内緒話に、シゲルはどうかしたのかと首を傾げている。

宮子は慌てて帝の肩に手を置くと、とつさに言い訳を捻りだした。

「えーと、ミカ、ミカちゃんです！親戚の子供で、今は街に遊びにきたところなんですよ！」

「へえ、そうかい。ミカちゃん、よろしくな！」

「はい」

帝は頬を紅潮させ、ぐくぐくと頷いた。

「ばれちまつたもんはしょーがねーな。一緒に行こうぜ！」とシゲルが言つたので、宮子はこの世の春を謳歌していた。

シゲルの背中をみつめながら、宮子はほぼトリップしている。

——こんな幸運が舞い込むなんて！きっと模範的な女官として日々頑張っているわたしを、神が見ていてくれたんだ！

命子以下女官一同が目を血走らせて町中を探し回つてることを知らずに、宮子は呑氣にもそんなことを考えていた。

「それにしてもよく分かりましたね、帝！」

シゲルに聞こえないように小声を出す宮子に、帝は領きを返す。

「わらわの背丈だと、目元がよく見えた」

宮子はなるほどと手を打つと、足が止まっていたことに気付いて慌ててシゲルを追う。

確かに帝の身長は小さく、帽子の下から覗き込める。

——だが。帝がシゲルを見抜いたのは、何も視覚からの情報だけではなかつた。  
「……それと、」  
帝は誰にも聞こえないほどの小声でささやく。

「人のまとめる神氣ではない」

帝は眩しそうに目を細めると、先を行くシゲルの背を合掌で拝んだ。

## 第23話

一緒に歩けるだけで幸せの絶頂だつた宮子だが、折角なら会話の一つでも楽しみたいのが人情だつた。

「シゲル様、やつぱり願掛けとはワールドツアーハーの……？」

帝の手を引きながら、宮子は恐る恐る気になつていてことを切り出してみる。  
シゲルがレベル3患者の治療に成功したこと。その結果世界各国を巡つてレベル3患者の治療に回ることは、既に世界中の人々が知るところだつた。

「そうそう。成功祈願つてとこだな」

シゲルが気さくに答えてくれたので、宮子の顔はだらしなく笑み崩れた。勢い込んで言葉を重ねる。

「シゲル様でしたら成功間違いなしです！願掛けの必要も無いですよ！」

宮子のセリフに、シゲルは「ありがとよ」と返したが、

「——でもよ、急がなくちやならねえからな」

そう言つて真剣な目をした。

「急がなくちや、ですか……」

「ああ。一応、ビデオはレベル3で進行を止めてくれてるらしいけど——ずっとそうかはわからねえだろ?だからその辺も含めて、神様にお願いだ」

そう言つて肩を竦めるシゲルに、宮子は不安を覚える。

シゲルが殺人的なスケジュールをこなしているのは、少し考えれば分かることだつた。何せシゲルはこここのところ『ライブを行っていない時間のほうが少ない』という異常事態に陥つていたから。

各国が受け入れの準備を整えるまでに、蓬萊のレベル3患者たちを完治させてしまう、というのが最も効率的な動きだ。それを実現させるためには、現状とにかくシゲル自身が動き回るしかなかつた。

シゲルはそれを実行に移していた。超人としか言いようのない体力と精神力を発揮し、驚くべき速度でレベル3患者を治療して回つたのだ。

録音されたリズムセクションとエレキギターは追い風となり、レベル3患者はライブに参加さえすれば僅かな時間で回復した。

「治療は終わりです」の言葉に患者が「もうちょっと聞かせてーっ!」と慟哭を上げるようになるまで十分とかからない。

素晴らしい順調に治療が進んでいたのだ。

——シゲルの負担を考慮に入れなければ。

「どうか休んでください」「御身に何かがあれば世の破滅です」と嘆く凜たち関係者一同の声を聞き入れ、初めて半日ばかり休みをもらつた、というのがシゲルの現状だつた。

「——シゲル様」

「なんだい?」

「どうか、ご自愛くださいね。レベル3患者が手遅れになつたとしても、それはシゲル様のせいじゃないんですから。シゲル様がもし倒れでもしたら、それこそ本末転倒です」「……心配すんな。俺は絶好調さ」

「でも——」

尚も言いつのろうとする宮子に、シゲルは悪戯っぽい目を向けた。

「——宮子ちゃん。俺はよ、欲張りなんだ。急いで皆を助けたい、つてのは手前の都合なんだよ。だから気にすんな、好きでやつてんだ」「……欲張り、ですか?」

「俺は、俺の観客を一人だつて減らしたくねえんだよ」  
幻滅しただろ!と言つて笑うシゲルを、宮子は涙目で拝んだ。

い。

水天宮にはほどほどに人が入っていた。

しかし参拝客の殆どは子宝大や本殿を目的としており、宝生弁財天前には人がいな

子に反論する者はおらず、三人は速やかに手水を済ませると、社殿に並び立つた。

二礼、二拍手、一礼。

三人は目を閉じ、祈りを捧げる。

——次の瞬間、シゲルと帝の精神は神域へと招かれていた。

「おおう?!」

「！」

突然辺りが真っ白になり、シゲルは面食らつた。帝は目を見開く。帝にとつては馴染の、シゲルにとつては二度目の空間であつた。

「ここは——

「神域……」

「お？・ミカちゃんもいるのか？」

「シゲルさま。やはりあなたは、神の——」

帝が疑念を確信に変えたとき——

『依代のおかげで道が繋がつた』

不意に、女性の声が響いた。

帝は息を呑む。

聞き覚えのある声だった。

自らを眠りに誘おうとしていた、あの声だ。

「この、声は——」

「……弁天様、じゃあ、なさそ娘娘な」

二人が声の方角を振り向けば、そこには一塊の闇があつた。

「——どちらさんかい？ 見た目の割に、キュートな声をしてるけどよ」  
シゲルは軽口をたたく。

『——お前の陽気は、極めて邪魔だ』

声が告げるや、闇は神域の白を塗りつぶすかのごとく膨張した。

「しげるさま！ お下がりください！」

「おつと。そりやあ男の面目が立たねえな」

帝はシゲルを守るように闇に立ちはだかるうとしたが、当のシゲルに肩を掴まれて逆

に背後に庇われた。

その様子を見て、何故か闇は更に悪意を募らせたらしい。漆黒が更なる広がりを見せた。

『櫻崎シゲル。永久の眠りにつくがよい』

見上げるほどの大さになつた闇は、巨大な手のような形をとると、一人に向かつて押し寄せた。

闇は一人に逃げる暇すら与えず、その身体を包み込もうとし——  
「——そうはいかないっての！」

美しい声と共に一閃された剣に、真つ二つに斬り払われた。  
二人の前に、眩い輝きと共に、絶世の美女が顕現していた。

『弁才天……』

闇が憎々し氣に声を発する。

セミロングの髪を残心の動きに靡かせ、女性はやりと笑う。

「ふふん、いかにも——遊芸武芸なんでもござれの弁天様よ。まつたく、アンタやりたい放題もいい加減にしなさいよね」

そういうと弁才天は、手にした剣を闇に突きつけた。

「——私のお膝元で、そんな無法が通ると思うわけ？」

見得を切る弁才天に、闇は再度攻撃を仕掛けた。

しかし迫りくる闇の腕を、弁才天は舞うような剣技で完璧に迎撃する。

「……強硬手段に出たところを見ると、あんたにとつても予想外だつた？たつた一人でこんなに『命の喜び』を伝えられる人間って信じられないものね。おまけに人の死の直前まで届く『音』を使つてるし——特攻兵器ぶつささりつて感じ？」

間断なく振るわれる攻撃を捌きながら、弁財天には長広舌の余裕があつた。  
次第に闇の勢いは弱まつていく。

「——その辺でやめときなさい。流石にここでは私の方が上よ」

『——』

事実なのだろう。闇は攻撃の手を止めた。

『……弁才天。あくまでその男を庇うか』

闇の言葉に、弁財天は一つ鼻を鳴らすと胸を張つた。

「当たり前でしょ。シゲルちゃんは——この死んだような世界を救うために、はるばるやつてきたヒーローなんだから」

——その言葉が、闇の何に触れたのか。

底冷えするような負の感情が、突如として闇から迸つた。

「……何よ、まだやる気？」

『——良いことを思いついたぞ』  
「どーセ陰気なことでしょ」

弁才天を無視し、闇が意識を向けてきたのがシゲルには分かつた。

『櫻崎シゲル』

「……何だい？」

シゲルは警戒しながら答えるが、続く闇のセリフは予想外のものだつた。  
『思うがままに動くがいい。人の子の眠りを覚ましたくば、好きにせよ』  
「……何を企んでるワケ？」

弁才天が眉を顰めて問う。

しかし闇は答えず、その場から静かに消えた。

「なんだかわからないけど退いたみたいね」

剣を鞘に納める弁才天を見て、シゲルは安堵の息を漏らした。  
「ふーつ。助かつたぜ弁天様。これで二度目だな——つとやべ、ミカちゃんの前で言つ

ちやまざいのか、コレ」

いつぞやの弁才天のメモにあつた『禁則』の文字を思い出し、シゲルは冷や汗を流す。だが、弁才天は鷹揚に手を振つた。

「ああ、大丈夫大丈夫。その娘はセーフなのよ」

「え？ そうなの？」

「元々そういう役割っていうか——まあ、例外よ例外。あんまり気にしないでオーケー！」

「あ、でも依り代ちゃん！ ここでのことは他言無用だからね！ ルール破ると私の力が落ちちゃうから、絶対ダメよ！」

帝は自らの口を両手で押さえると、必死に首を縦に振つた。

「わざわざお参りに来てもらつたのに、危険な目に遭わせちゃつてごめんなさいね、シゲルちゃん」

「こちらこそ一度目の感謝を伝えなきやだ。助けてくれてありがとよ、弁天様」

「こちらこそ「ありがとう」なのよ、シゲルちゃん。だつてあなたの動きつて、今のところ百点満点なんだから！」

弁財天は満面の笑みを浮かべる。

「っていうかもう花丸よ花丸！ まさかビデオでレベル3の進行が止まるなんて、わたし

ですら思つてもいなかつたんだから！——まあ、今後も進行が止まつたままかどうかまでは、ちよつとわからないんだけどね』

「——そうか。じゃあ、やつぱり急がなきやな』

「ええ。悪いんだけど、できる限り頑張つてみて。時間をかけると、アイツがまた変なちよつかいをかけてくるかもしれないし』

「さつきの彼女か。——確かにおつかなかつたけど、声はイケてたぜ？きつとガールズバンドのボーカルになれる。ま、ファッショնはちよいと見直す必要がありそうだつたけどな！」

「ふふ。ま、形は勘弁してやつて頂戴。わたしたちがこうやつて決まつた姿をとるのつて、結構気合が必要なのよ。私はここがホームグラウンドみたいなものだから大丈夫だけどね』

ころころと笑つた弁財天は、ふと眞面目な顔になるとシゲルと目を合わせた。

「ねえ、シゲルちゃん』

「何だい？」

「今日のこれは偶発的なアクシデントだつたけど、ある意味丁度いい機会だわ。あの時は時間が無くてできなかつた話を、いくつかしようと思うの」

「——何故、この世界がこんなことになつてしまつたのか。その理由について、とかね」

弁才天の真剣な表情をみて、シゲルは静かに頷いた。

「——そもそも、発端は『神罰』だつたのよ」  
「神罰？」

「そう。二百年前に起つた大規模な戦争に対する、ね。——本当に酷い戦争だつたのよ。このままだと人類絶滅まで行つちゃうんじやないの？つて感じだつたから。なるべくなら人界への干渉を避けている神族が、重い腰を上げるくらいには凄惨だつたの」

「神々は『ちよつと人間を懲らしめよう』って思つたわけね。それが昏睡病の始まり」「……でもよお、二百年経つても『神罰』とやらはそのまで、拳句人類絶滅の危機なんだろ？なんていうか、本末転倒じやねえのか？」

「そこなのよねー……」

弁財天はがっくりと肩を落とした。

「神様にもそれぞれに権能があつて、得意なことが違うの。で、人類を懲らしめるのは誰がやる、つて話になつた時に——手を上げたヤツがいたわけ」

「それが、さつきの？」

「そういうこと。あ、名前は秘密にしておくわね。神々の中には自分への恐れを力に変えるものも居て、アイツはモロにその手合いだから。かなりのビッグネームだから、シゲルちゃんはともかく依り代ちゃんは知らないほうが幸せよ」

「で、アイツは『私の権能なら都合がいい』って言つたのよ。確かに理に適つたセリフだつたわ。結構な大仕事だつたから、わたしたちは神力をアイツに集めて、実行に移したの。頼んだわよー、つて」

そこで弁才天は遠い目をすると、しばし沈黙し——

「——そしたらアイツめっちゃ暴走したわ」

言いにくそうに言つた。

「元々は『ちょっと生命エネルギーを奪い取つて戦争する元気をなくしちゃおう』、つて  
いう作戦だつたんだけど、アイツは『人類全てが死ねば戦争も起こるまい』つて、ヤバ  
めのA-I系ラスボスみたいなこと言い出して——まずいことに諫めようとすると神々は、  
アイツに力を分け与えちやつてたもんだからさあ大変。なんていうかアイツつて、元々  
世界の半分を支配してゐるような力のある神だつたから、余計に手が付けられなくつて——  
一二百年間手をこまねいていた、つてわけ」

「……なんだつてあの神様は、そんな暴走を?」

「まあ、なんていうか、恐らくは割とパーソナルな理由というか……男性への当りが強い  
のもそのせいというか……」

弁才天は「ごによご」と呟くと、肩を落とした。

「そもそも戦争の原因が『条約違反』に端を発していたのが、アイツに刺さつちやつたの  
よね、多分。条約違反が条約違反を呼んで、最終的には不戦条約までビリビリに破られ  
ちゃつて戦争が始まつたんだけど——その時点でアイツのトラウマスイツチがオンに  
なつてたのに、神々は気付けなかつたのよね——……」

——つまるところ神選ミスだつたのだ。

しかし弁才天がそのことに触れる前に、口をはさむものがあった。  
帝である。

「——弁才天様。自らほろびへと向かう人類を、神々がいさめようとしていたのはまち  
がいないのですね」

不敬があつてはならぬと口を噤んでいた帝だつたが、こればかりは確認せざるにはいら  
れなかつた。

弁才天は気にして風もなく頷く。

「そうね。そこは総意だつたわ。——結果論だけど、昏睡病がなかつたら今頃人類は  
もつと数を減らしていただしようね」

「そう、ですか……」

帝はがつくりと肩を落とした。

——結局のところ、昏睡病は自業自得。人類の暴虐のツケを、人類が支払わされてい  
るにすぎない。

そう。昏睡病とは、つまり——

「身から出たさび、なのですね……」

帝は自らを含む人類の愚かさに打ちひしがれる。

——弁才天は、そんな帝の頭を優しく撫でた。

「うーん……まあ仮にそうだったとしても、今を生きるあなた達には何の責任もないわよねー」

はつとして帝が顔を上げると、そこにはまさに慈母のような笑みを浮かべる弁才天がいた。

「マッチポンプって言われちゃつても仕方ないけど……罰を与えようとしたのが神の総意なら、『これはやりすぎ』って思つたのも神の総意よ」「だからこそ、ちょっと無理してシゲルちゃんっていうワイルドカードを切つたんだからー！」

「俯いてないで、顔を上げて！失敗しても、前を向いて、より良い明日を目指して歩いて行けるのが、人間の良いところなんだから！」

「弁才天さま……！」

目をぎゅっと閉じて合掌する帝の頭をもう一度よしよしと撫で、弁才天はシゲルに向き直る。

「シゲルちゃん。あの時みたいになし崩しじやなくて、私は貴方に正式にお願いをしたいと思うの。でも——その前に、これは伝えておかなくちやフエアじやないわね」

「貴方をこちらの世界に転生させることができたのは、貴方が死ぬタイミングとか、わたしの神力の貯まり具合とか——幾つかの条件が奇跡的に重なったからなの。同じこと

はもう出来ないと思うわ」

「神々は今精一杯アЙツの力を押さえてる。援軍は用意できない」

「頼れるのは貴方だけ。だけど、私特製のボディと貴方のメンタルをもつてしても、このライブツアーハはちよつとキツイと思う。——さつきも言つたけど、今日みたいに、アЙツが変なちよつかいをかけてくる可能性もあるわ。出来る限り目を光らせているつもりだけど、その時私が助けてあげられるとは限らない」

「……それでも、私はお願ひするしかないの。この世界に、貴方以上に『元気』を伝えられる人間は他にいないから」

「だから——」

「——どうか世界中の人々に、貴方の『ライブ』を届けてあげて」

弁才天の願いに、シゲルは即座にサムズアップを返した。

一瞬たりとも、迷うことなく。

「望むところだぜ、弁天様。安心してくれよ。なんたつて俺は——遂に死んでも、ライブに穴を開けなかつた男だからな！」

「今度は『サービス』抜きでも、やりぬいてみせるぜ！」

にかつと笑うシゲルに、弁才天もまた微笑みを返し——  
帝とシゲルは、眩い光に包まれた。

——気が付けば、二人の意識は自らの肉体に戻つていた。

帝は辺りを見渡す。隣には、合掌したまま何やら熱心に祈つてゐる宮子の姿があつた。

不思議なことに、殆ど時間は経つていなかつたらしい。

白昼夢のわけはなかつた。

何故なら帝がシゲルの顔を伺うと、シゲルは片目を瞑つてマスクの前で人差し指を立てたから。

——内緒だぜ、と。

帝がこくこくと頷くと、宮子は祈りを終えたのか目を開いた。

「さて！お祈りも済みましたが——し、シゲル様つ、今後の予定などござりますか？！」

「いや。一通り済んだところだよ」

「で、ではお昼ご飯でもいかがでしよう？！おいしいところを知つてるんですよー！」

「お、そりやいいや。ご一緒させてもらおうかな」

「——！」

宮子は拳を握りしめるとびょんびょんと飛び跳ね、全身で喜びを表現した。

——シゲル様と一緒にお昼ご飯！もう現実とは思えない！これももしかしたら弁天様のご利益なのかもしれない！夢ならどうか覚めないで！

とそこまで考えたところで、宮子は手を打つた。

「あ、その前に御守り買わなきやすね！定番ですもんねー」

上手くすればシゲル様と同じお守りを買うことができるかも——という下心満載で

宮子はいう。

——その宮子の横合いから、手を伸ばす者がいた。

「——これで良いか？くれてやるぞ」

恐ろしく平坦な口調とともに伸ばされた手には、弁天様のお守りが摘ままれていた。  
「おお！これですよこれ！いやあ、どこのどなたか存じませんが、ありがとうございます——」

宮子は目の前に差し出されたそれを反射的に受け取つて——

「困った時の神頼みとは、よく言つたものじや。のう、宮子や……」

——即座に取り落とした。

帝はお守りが地面につく前に慌ててキャッチする。

宮子の視線の先には鬼神が居た。

命子という名の。

「めつ、めつ、めいこさま……」

金魚のように口をパクパクさせて、宮子は喘ぐように言つた。

真横にいる鬼神のプレツシャーはそれほどだつた。

宮子とがしつと肩を組んだ命子は、囁くように語り掛ける。

「やつてくれたのう、宮子や……いや、わしが悪いのじや。『その人を勝手に連れ出して  
はいけません』とは規則に書いておらんかつたものなあ」

「はつ、はははつ、え、ええ。そうですよねー。わたしなんにもルール破つてないですよね！」

「ははは、そうじやのう。お主の為に今度から湯舟にも『服を脱がずに入つてはいけません』と書いておいてやるからな？」

「わ、わー。ありがとうございますー。あははははは」

「ははははは」

「——怒つてます？」

——ふしゆるるるる。

鬼神は答えず、蛇のような呼気を吐き出した。

恐怖のあまり宮子は淑女の尊厳を失いかけた。

いや、ちよつと失つた。

無言のまま宮子の襟首をがつりと掴んだ命子は、もう片方の手で帝の手を引くと、帽子を深く被りなおすシゲルに向かつて口を開いた。

「——そこの御仁。仔細は知らぬが、きつとこやつが迷惑をかけたじやろう。すまぬな。これは早急に引き取る故」

「いやあ、楽しかったよ」

見事な女声で返すシゲルに、命子は目礼を送ると、宮子の襟首をつかんだまますんず

んと歩き出す。

「いやーッ！夢なら覚めてーッ!!」

「馬鹿め。お主の悪夢はこれから始まるのじや」

命子に手を引かれながら、帝はシゲルに深々と頭を下げる。

シゲルは帝が見えなくなるまで、ひらひらと手を振っていた。

その日の夜。夜御殿で、帝は一人日中の出来事を思い出していた。

神域での、英雄と神の会話を。

シゲルがどういう存在で、誰によつてこの蓬莱にやってきたのか——そのヒントは、あの会話の中に幾らでもあつた。聰明な帝は、それだけでおおよその事情を察すること

ができていた。

帝はお守りをそつと取り出し、目を閉じて弁才天に祈りをささげる。

祈りはしばらく続いて——やがて瞼が開くと、帝の目には決意の色があつた。

——弁天様は『ここであつたことは内緒』といつた。その言葉に背くことはあり得ない。

だが。

感謝を示すなとは言われなかつた。

帝は静かに立ち上がると、命子の局へと向かつて歩き出した。

自らの腹案を相談せねばならないし——そろそろ宮子を地獄の説教から解き放つてやる必要があつた。

——それにしても最近どうも弁天様が人気みたいじゃねえの！いやあ、俺もなんだか嬉しいぜ！なんせミュージシャンの俺からすれば、音楽の神様ってのは恩人みたいなもんだからな。

流行のきつかけは帝が弁天様のお守りをお買い求めになられたから、つてえ話だつたよな？そのおかげでどうも人気が凄すぎて、なかなか買えないって噂だが——へへ、俺持つてんだよ、そのお守り。おつと、コネとかじやないぜ？ちやあんと水天宮まで行つて買つてきたんだよ。もつとも俺が行つたときは水天宮もあんまり混んでなくて、ささつと買えたけどな。

さあて、そろそろ一曲いつとくか。——今日は弁天様と帝に感謝を込めて歌わせてもらおうかな。ナンバーは――

『

水天宮はとんでもないことになつた。

元々帝がお守りを買つた、ということでにわかに注目が高まつていたところに、噂を聞き付けたシゲルが何気なく触れたそのシゲラジがトドメとなつた。

何せ帝とシゲルが揃つて弁天様をお参りしたということで、そうなればこれは最早国教である。弁才天は自然と大きな信仰の対象となつていつた。

——弁天様のお守りは蓬莱民のマストアイテム。だつて帝とシゲル様とおそろだし。シゲル様が恩人だつていうなら私たちにとつても大恩人だし。

誰からともなく、そんな風潮が急激に高まつていつた。水天宮はあつという間に、歩行者天国と並ぶ蓬莱の人気スポットとなつたのである。

水天宮の宮司と巫女たちは過労死しかけ、平穏な日々が戻つてくることを神に祈つた。

## 第24話

蓬莱楽器はもともと楽器の製造と販売を一手に担っていた。

シゲル登場まではそれでよかつたのだ。なにせ楽器を買う人間というのは補助金があつて尚滅多におらず、音響機材等もさほど需要は無かつた。規模的に問題無かつたのである。

だが、アイドルスターが放送されると、そういうわけにもいかなくなつた。

音楽関連の商品が、急速に売れ始めたからだ。

『蓬莱』と名のつくように蓬莱楽器は国営企業。ここにきて蓬莱は音楽関連の商品販売を引き受ける新企業『弁天堂』を立ち上げ、製販分離でもつて蓬莱国民の需要に応えんとした。

だが、とてもではないが太刀打ちできなかつた。

シゲルのバンドミュージックが蓬莱の人々に与えた衝撃は、それほどすさまじかつたのだ。

——しかし第一回アイドルスター放送直後に限れば、楽器への需要急増はあくまで常

識的な範囲に留まつていた。

あの凄まじい音楽は、あくまで英雄だからできることであつて、そこらの一般人が出来るものじやない。そんな風潮があつたからだ。

しかし、二回、三回とアイドルスターが放送されるにつれ、次第に潮目が変わつていつた。

それというのも、朱里と蒼子が目覚ましい成長を見せたからだ。

朱里たちは、番組内でガールズバンド『トライアングル』を結成。三人とも名前が『あ』から始まるから、という安直な理由で朱里によつて名づけられたトライアングルは、回を重ねるごとにみるみる上達していくた。

その姿は、蓬莱人に「じやあわたしにもできるんじやないの?」と思わせるには充分すぎた。

——あの凄い音楽、私にもできるようになるのかな。

——朱里ちゃんと蒼子ちゃんはどんどん上達していつてるよ。

——何より、シゲル様は絶対出来るようになるつて言つてた。

——じやあ出来るんでしょ。

——じゃあやりたい!わたしも、あんな音楽をやつてみたい!

そんな会話が、蓬莱中で交わされるようになつた。

楽器店には長蛇の列が形成され、楽器や音響機器の代わりに抽選券が配布される。教本は飛ぶように売れ、音楽雑誌『サラスヴァティ』はもつと売れた。

そして——ようやく家電を手に入れつつある蓬萊国民に、再び金欠の嵐が吹き荒れようとしていた。

女子高生・神宮寺真美視点

お昼休みになつて、私たちはいそいそと机をくつつけ合う。特に仲のいい友達同士で、こうやつて談笑しながらお昼ご飯を吃るのは、最近になつてから始まつた楽しい習慣だつた。シゲル様が登場するまで、ごほんつて言うのは基本的に無言で吃るもの

だつたからね。団らんは食後だつた。

礼儀作法に厳格な人なんかは眉を顰めるらしいけど——少なくともうちのクラスにはいないみたい。みんながみんな好き勝手に机をくつつけて、楽しそうに食事中だ。

おしゃべりが好きじゃない女子つていうのは、今となつては希少種だからね！  
とはいっても、どこのグループでも話題はそんなに変わらない。

「じゃじやーん！これを見よー！」

「おおーっ、ピックじゃん！」

「ティアドロップっていうんだつけ、そのタイプ。なんか洒落た名前だよねー」

「ふつふつふ、教本も買ったから、あとはギターを残すのみなのだ！」

「そのギターの抽選確率が問題なんだけどね」

「ぐつ……」

「なにがヤバイって蓬莱電器が新型テレビを発売する予定なのがヤバイ

「あの、なんかごてごてスピーカーくつつける奴でしょ？サラスヴァティに乗つてた」

「そう、あれ」

「ヘッドフォンつてヤツの方がコスパ良くない?」  
「でもなんか新技術がふんだんに使われるとかで、『驚きの臨場感!』って書いてあつたでしょ?」

「あー、あつたねえ」

「現状シゲル様の生ライブを聴く手段が『昏睡病レベル3になる』しかないんだから、アーティストの音質向上するならアリだと思うんだよね」

「……わたしはレベル3患者なんだ……誰が何と言おうとレベル3なんだ……」

「そんな餓狼みたいな目をした昏睡病患者はいないのよ」

「なんでシゲル様の歌入りカセットテープつて販売されないの?」

「大抵の人が自分で作つて持つてるからじゃない?」

「でも元がラジオ音源とかでしょー?ちゃんとレコードティングした音を書き込んだらスゴイ差ができるはずだよー」

「それ言つたらレコードでもいいんじゃないの?」

「レコードはプレーヤー自体が絶滅危惧種レベルだから……でも、カセットテープはぜつたい売れるはずなんだよなー」

「多分滅茶苦茶売れるわよねえ。みんな買うもの」

「今作つてるところなんじやないの？あるいは単純にシゲル様が多忙すぎて手が回らないとか」

「何か政府の方に目論見があるんかもね。今次々と新技術が生まれてるから、カセットよりも良いメディア作つてたりして！」

「……そしたら再生機器も新調でしょ？お金幾らあつても足りないわよ」

「結局シゲル様つてなにものなんだろう……」

「ご本人はシゲラジで、『音楽星からやつてきた』とか『フライングVのV部分から生まれた』とか笑いながら仰つてたけどね」

「じゃあフライングV買つたらシゲル様増えるかな……」

「冗談に決まつてるでしょ」

「常識的に考えれば、音楽分野のジェーン・ホワイト、みたいな？」

「天才つてこと？」

「天才つて言葉で片づけられるかな……」

「まあ、でも——」

「うん」

「「ミステリアスなところもステキ！」」

金！音楽！シゲル様！

これに食事と仕事と身だしなみをプラスすると、現代蓬莱女性の完成だ。  
わたしたちのグループも、当然例に漏れない。

「さつちゃん、今日も完全食？」

「特売日にまとめ買いする完全食こそが、コスパの王だつてわかつたの。わたしの昼食  
は向こう一ヶ月間これだけよ。絶対エレキギター買うんだから」

「すごい。鉄の意志を感じる……」

さつちゃんの覚悟に思わずぐくりと喉が鳴る。完全食の味は未だに改善されていない。  
味覚が正常に戻った今、毎日一食とはいえ完全食で済ませるのは相当の覚悟が必要  
になる。

まあわたしもエレキ貯金中だから、気持ちはわかるけどね。あのカツコいい音が自分  
でも出せるようになるのなら、三食完全食も辞さないよ。

いや、流石にそれは辞すかな……  
「甘いね……」

「え？」

にやりと笑つたのはロングヘアで長身の友達、ヨツシー。

——去年お母さんがレベル3に進行したときから、ヨツシーの笑顔は随分減っちゃつたんだけど——シゲル様の音楽を聴くようになつてからは、今みたいにまた笑うようになったんだ。

そうそう、笑顔がなによりだよ。それにシゲル様が治療ライブを凄い勢いでやつてくれるから、きっと近いうちにヨツシーのお母さんも治してくれるに違いない。心の中で拌んでおこう。

ヨツシーはカバンから取り出した水筒を机の上に置く。

「これこそが真のコスパの王だよ」

「これこそがつて……」

「水筒？なんかスープでも入れてきたの？」

「ふふ」

ヨツシーが水筒の蓋に注いだその液体は完全な無色透明だった。  
わたしたちの背筋を、嫌な予感が這い上がつた。

……よく見れば、今日のヨツシーの笑顔はどこか虚ろな気がする。

「……ヨツシー。透き通つてるけど、それなに？」

「水道水に塩を混ぜたの」

「……」

「コスパ最強の完全食よ」

ヨツシーの目は血走っていた。

「目を覚ましてヨツシー！そんなの完全食じゃない！」

「不完全食っていうかただの生理食塩水です！」

「なんだつてそんなに金欠になつてるの！」

私たちの言葉にヨツシーはちよつとうつ向くと、ぽつりと言つた。

「——当たつちやつたんだ。楽器の抽選」

「「——」」

一瞬の静寂の後、

「「えーっ!?」」

私たちは仰天して、ヨツシーのほうに身を乗り出した。

「ほんと!?すごいじゃん！」

「どの楽器も凄い倍率ですよね?!よく当てましたね！」

「エレキ!? テレキヤスターとフライングVどつちにしたの?!それともベース?!エレアコ?!ねえ今度学校に持つてきてよー!」

ヨツシーは答えた。

「ドラム」

わたしたちは静まり返った。

でもそれも一瞬のことと、すぐにぎやーぎやー声を上げ始める。

「——なんでドラムチョイスしちゃつたんですか?!」

「よりもよつて！シゲル様も『あんまり個人で買う楽器じやあねーな』って仰つてたでしょ?!」

「だつて一番好きなんだもん——それに当たると思わないつて！倍率100倍とかだつたんだよ?!」

「つていうか貴女の家つてアパートじゃない！」

「シゲラジで言つてたよ、あれ値段もすごいけど音の大きさもすごいつて！『集合住宅で

ドラム練習したら8ビートの壁ドン喰らうぞ』つて！」

『多分近隣住民も壁叩きに来る』とも言つてました！」

「そもそも置くスペースどうしたのよ！」

「無理矢理詰め込んだよ！もうあたしの部屋はドラムが住んでるんだかあたしが住んでるんだかわかんないよ！」

やけくそじみた声を上げると、ヨツシーはテーブルの上の水筒をぐいーっと呷つた。  
しょっぱそう……！

「——ドラムと水と塩！残されてるのはそれだけ！もう明後日の給料日までこれだけだよ・アハハ、ダイエットもできて一石二鳥だね！」

「そんなのやつれてるだけですよお」

「きええええ！」

理子ちゃんの冷静な指摘にもヨツシーは奇声を返すだけだ。

——わたしは、ヨツシーの言葉を否定してあげる。

「——残されてるのはそれだけ？違うよ、ヨツシー。まだ残つてるものがある！」

え？とこつちを向くヨツシー。

わたしは自分の卵焼きを一つ、裏返したお弁当の蓋に乗せてヨツシーに差し出した。

「友情！」

「ユウジヨウ……」

ヨツシーが呆然と繰り返す。

「じゃあ私も友情です！」

蓋の上に、理子ちゃんがワインナーを追加してくれる。

「ビンジョウ」

さつちゃんの完全食ブロックが半分だけ追加された。

「どしたのヨツシ一？あ、金欠？じやあこれあげるー」

「わたしのもどーぞー」

「自信作の煮豆を進呈しようじゃないの」

「ビンボー淑女は助け合い、つてね」

「他のグループの皆もあつまつて、いつのまにか蓋の上はおかげで一杯になつていた。  
う、ううつ、ありがとう、みんな……！あたし、あたし……！」

ヨツシ一は涙を拭つて立ち上がりと、

「給料日になつたら、すぐドラムスローン買うからー！」

「「「まずは食費にしなさい」」」

——即座に総突つ込みされて、長身を縮こまらせた。

## 第25話

タブレットに収められていたのはいくつかの技術書と、音楽関連の本だつた。中にはギター、ベース、ドラムの教本も含まれており、『俺が全部書くしかねーよなあ』と言つていたシゲルの負担を大幅に軽減した。

技術書自体の数は少なかつた。それが近代科学に関わるものともなれば、片手に收まるほどしか無かつた。

しかし、昏睡病から解き放たれた天才には、それで充分だつたらしい。

「アイデイアが幾らでもわいてきまース！ボトルネット？ボトルジ」とコナミジンでース！」

鼻息荒いジェーン主導の元、技術革新は恐るべき速度で進んでいく。

健全な資金が研究開発に潤沢に注ぎ込まれ、魅力的な商品が次々と販売される。それによつて更なる経済の活性化が起きて、研究開発資金は雪だるま式に増えていく。「無限の財力でース！それとホウライ人の器用さ、スゴイでース！技術がどんどん形に

なります！」

自らが開発した最新式ヘッドフォンでシゲルの音楽を聴きながら、「ワタシ、イマ、ムテキ！」とジェーンは吼える。

金と人手を存分に使えて——しかも絶好調状態を維持し続ける『天才』。この存在は蓬莱にとつて大きかつた。

——いや、大きすぎた。

特に、一省庁たる文科省にとつては。

『文部科学』の文字が意味する通り、文化と科学技術の振興は文科省の役割だ。

つまり——英雄が齎した『新しい音楽』という文化。そして、タブレットと天才が齎した膨大な『科学技術』。

その二つを管轄するのは、主に文科省ということになる。

それが今、何を意味するか。

終わらないデスマーチである。

「ああ、うん、そう。樹脂の輸入に関しては経産省に——え？ 蓬莱出版から輪転機のスケ

ジユールについて話が？……午後に連絡しなおすつて言つといて」

凛は受話器を置くと、煙を吹きそうな頭を抱えて机に突つ伏した。

——どう考へても、文科省のオーバーワークは限界を突破していた。

それも自明の理であつた。英雄と天才がタッグを組んで積み上げ続ける成果を、文科省という一省庁が捌かなくてはならないわけで——単純に人手が足りないのだ。多少の増員はあつたものの、新人がそんな簡単に使い物になるはずもない。

「あ、あの天才め……」

凛は机に突つ伏したまま、脳内にまで浮かんでくるジェーンの姿に嫌気がさしていた。

天才にも限度がある。到底処理が追つつかない速度で、次から次へと新技術を実用化していくのだ。オマケにそれらのテクノロジーはダイレクトに国民の活気と経済の活性に結びついているものばかりで、英雄が旅立とうとしている蓬萊にとつて決して無視はできない代物だ。

現状、足りない人手は各員の奮戦努力で補つてゐる。人はそれを『無茶』と言い、無茶が常態化している今の文科省は、割と末期的な様相を呈していた。

加えてジェーンはやることなすこと破天荒で、ちよつと目を離した隙にとんでもないことをしてかしたりする。

——研究開発部門に、いつの間にか数名アステカ人が増えていたのもその一例だ。  
凛がそのことについて聞いただと、ジェーンは胸を張つて答えた。

「アステカの私の研究室から助つ人呼びましター。ガイムショウには話を通しましたシ、半年もすればちゃんと帰ル予定だからダイジョーブでース！」  
と。

凛は「ほんとお……？」と疑いの視線を向けたが、ジェーンは「オフコース！」の一  
点張りだった。

凛はそれ以上追及しなかつた。

——だつて研究員が帰りたくないつて駄々こねても、その対応は私の仕事じゃない  
し。外務省が白目むくだけだし。

凛がそんなことを考えていると、またしても電話が鳴つた。

凛は反射的にびくりと震えてしまう。鳴る度に仕事の増加を告げてくるこの機械は、  
もはや凛にとつて恐怖と憎悪の対象になりかけていた。

しかし無視するわけにはいかない。凛が机に突つ伏したまま、恐る恐る電話に出ると

『——凛さん！ グッドニュースです！』

響いてきたのは、涼子の明るい声であつた。

「ホント?!」

信頼できる部下の言葉に、凛はばね仕掛けの人形のように上体を起こした。

『はい!』

「内容は!」

『——シゲル様の治療ライブで復活した患者が、続々と職場復帰しつつある、と!』

「それ待つてたわよー!!」

凛は思わず立ち上がりつつしまう。

待ちに待つていたのだ。

——長い闘病生活で肉体的に衰えた元患者たちがリハビリを終え、それぞれの職場に復帰する瞬間を。

『そして!』

『そして!』

『文科省を退職した先輩方も、近日中に戻ってくるそうです!』

「ホント?! ホントなのね?!」

『はい!』

『——サンキユーツ!!』

テンションが上がり切った凛は、さながらシゲルのような感謝の言葉を受話器に告げ

ると、復帰する先輩方への対応の指示を出してから電話を切った。

「いやつふうううううう！」

凛は右手を突き上げて垂直ジャンプをしてしまうほど、晴れやかな気分を味わっていた。

レベル3の人材とはどういうものなのか。これは中学高校の職練生とはワケが違う。ほとんどの場合において、その道の『ベテラン』なのである。一人で新人何人分もの働きをする場合もあるし、新人を一人前の戦力に変換する教育すらこなせてしまう。

つまり、今一番欲しい『マンパワー』が、高いクオリティで手に入る。これ以上ないハッピーナニュースだった。

「ああ、やつと——」

——これで、一息つけるかもしれない。

凛は椅子にどかつと腰を下ろして天井を仰いだ。

先輩方の受け入れが済めば、休日の一日でもとれるかもしれない。勿論受け入れてから即座に戦力となるわけではないだろうが、元エリート軍団だ。新たな業務にも素早く適応してくれるだろう。

——ああ、休日になつたらどうしようかしら。とにかく力いっぱい寝るのは確定とし

て——もうずいぶん見れてない『アイドルスター』をお酒飲みながら消化して、ショッピングにでも出かけたいわね。楽器店を冷やかして、活気にあふれる人々を見て楽しんで、ちょっと高い飲食店で食事をするなんていうのはとてもいいプランに思える。あ、遙にも連絡しよう。もし奇跡的に休日が重なつたら、一緒に遊びに出かけてもいいし。

凛の心は既にまだ見ぬ休日へと飛んでいた。

事実、昏睡病で退職してしまった先達が戻つてくれれば、問題なく休みはとれるはずだった。

——そう。とても無視できない重要な何かの開発に突然成功するとか、そういう突発的なイベントでも起こらない限り大丈夫。

「……大丈夫、よね」

ちょっとだけ不安そうに凛は呟くと、考え込む。

——いや、大丈夫なはずだ。確かに目下研究開発部が取り組んでいるのはCDとそのプレーヤーの開発。あのジエーンですら「ピックアップ・レーザー回りがチヨツトむずかしいですネー」とこぼしていた。そのレーザーとやらがなんのかすら凛には理解不能

だ。新たに記録メディアや再生機器など、そう簡単に形になるはずがない。

凛は椅子に深く腰掛けたまま、ふーっと静かにため息を吐く。久しぶりに眉間の皺が抜けた気がしていた。

その時、またしても電話が鳴り響いた。

「はい、もしもし?」

『機嫌の凛は素早く受話器を取る。

『ジエーンでス!』

嫌な予感がした。

『リン! グッドニュースでース!』

「ほんとお……?」

『オフコース！』

『——プロトタイプですが、CDとプレーヤー、出来ましたヨー！』

凛は泡吹いて白目をむいた。

## 第26話

文部次官・駿河凜視点

ライブや収録をしていない間も、シゲル様の仕事は終わらない。

昼食を終えた後、シゲル様は即座に机に向かつて書き物を始める。

シゲル様が凄い速度で書き上げているのは、タブ譜と呼ばれる楽譜だ。ギターやベース用の、普通の楽譜よりも分かりやすい楽譜らしい。

「これがあれば俺がいない間にも練習ができるだろう?」と言つて笑うシゲル様には、もうただただ頭を下げるしかない。確かにシゲル様の楽譜があれば、蓬莱人の音楽への情熱は更に燃え上がるだろう。

——あの音楽を自分でもやれたらいいな、って思つてゐる蓬莱人は、山ほどいるから。おつと、仕事仕事。

「シゲル様。大変遅くなりまして申し訳ございません。こちら、シゲル様の通帳になります」

私はシゲル様に『蓬莱銀行』と印刷された通帳を手渡す。

「え、通帳？ いつの間に？ 僕銀行とか行つた記憶がねえんだけど」

「まことに勝手ながら、こちらで用意させていただきました。シゲル様への印税や報酬、各国からの寄付金が凄まじい額になつておりましたので」

「へー……でも俺こつちの世界には戸籍もないだろ？ よく作れたな、通帳」

「……何を仰つてるんですか。シゲル様は昔から身元の確かな蓬莱人じやないですか……戸籍もバツチリですよ。全ての国家が認めています。何なら十種類くらい用意しますよ」

「身体そんなにねえよ」

苦笑いするシゲル様は、通帳をぱらぱらと眺める。とんでもない桁の数字が並んでいる筈なんだけど、明日の献立表を見るくらいの関心しかなさそうだつた。

——想像してたけど、やつぱり。このお方、お金になんの興味もないんだ。

だつてシゲル様は「うん」と呟くと、通帳を私に差し出したから。

「よーし、じゃあこれは普段頑張つてる凛ちゃんにプレゼントだ！」

そんなわけわからないセリフと共に。

「こんなドデかいプレゼントだめですよ！アステカでも買えっていうんですか？！」

「ポケットマネーにしちまいなよ」

「しつ、シゲル様の前世だと、ポケットつて異次元に繋がつてたりしたんです？！」

「ものによつてはな」

「残念ながらこちらにはそんなポケットございませんので！」

私は両手をばつてんにして受け取りを拒否する。

「つつてもなあ。正直使う時間もねえし、買いたいものもないんだよなー」

シゲル様の言葉に、私としては言葉を詰まらせるしかない。

時間がないのも、買いたいものがないのも、こちらの世界の都合だ。

きつとシゲル様のいた世界には、こちらよりも進んだ、魅力的なもので溢れてたんだろうな……

私が思わず肩を落とすと、シゲル様が慌てたように語り掛けてくる。

「つと、言い方悪かつたな。勘違いしないでくれよ。時間が無いのは俺が好きでやつてんだし、欲しいものはもう持つてんだ」

シゲル様はそう言うと、傍らにあつたギター・ケースに手をかけた。

「起きて半畳、寝て一畳。天下とつても二合半。——俺にやコイツがあればいい、つてな

！」

そう言つてギターをケースを撫でるシゲル様に、私は深々と頭を下げる。

「——そんなシゲル様だからこそ、なにかの形で恩をお返ししたいのです。物でなくとも構いません。何かお金を使ってやりたいことなどはございませんか?」

「そうは言つてもなあ、俺の欲しい音楽関係の道具なんかは国策として開発してくれるんだろう?それで充分すぎるんだが……あ!」

シゲル様はそこで手を打つた。何か思いついてくれたらしい。

「そうだよ!あれがあつた!レベル4患者の支援!」

「——レベル4患者、ですか」

私は目を伏せる。

シゲル様がその存在に執心していることは知っていた。

——シゲル様は、まだ諦めていないんだ。

「俺の我儘聞いてもらつて、延命措置に金だしてくれてんだろう?この金も使つてくれよ!何とかまたリベンジするまで持たせてほしいんだ!」

シゲル様は、既にレベル4患者の治療に失敗していた。

レベル3患者を治療した後、シゲル様はレベル4患者の治療に臨んだ。

レベル3患者と違つて、生命維持装置に繋がれたレベル4患者は動かすことは容易ではない。シゲル様は病室にて何度も熱唱したが、その声に患者は反応しなかつたのだ。

でもこの結果に、私たち関係者は失望しなかつた。

だつて、レベル4——深昏睡に陥つた人間というのは、音を知覚できないのだ。

レベル4患者が生かされているのは、治療法を探すためというお題目や、かつて熱病から深昏睡に至るも回復したという稀有なケースを鑑みてのことだし——準備期間とすることもある。

そう、準備期間だ。

遺族が、死を受け入れるための。

レベル4とはそういうことだ。治る見込みは、シゲル様の奇跡のような音楽をもつてしても——はつきり言つてほぼゼロだ。

レベル3患者のように、『音が聞こえているけど反応がない』んじやない。『そもそも聞こえていない』んだ。

いかなる音楽も無意味なのは、自明の理だ。

だからこの結果に肩を落としたのは、当のシゲル様だけだった。シゲル様はどうしてか私たちが思つていてる以上にレベル4患者を気に掛けていたらしく、その後も激務の隙間に幾度かライブを試みてくれていた。でも当然、結果は同じ。

——だけど、シゲル様の目は諦めていなかつた。

今に至つても。

「シゲル様のお金です。シゲル様の望むように使います、が……」  
私は言葉を濁してしまふ。

ハツキリ言えば、資金の無駄であると思えたからだ。  
でも、口ごもる私にシゲル様は語り掛ける。

「……凛ちゃん。俺の経験から、一ついいことを教えてやるよ」

「はい？」

「悪あがきも悪かねえ！」

きつぱりと言つたシゲル様は、堂々と胸を張つた。

「悪あがき、ですか？」

「おうよ！——たとえどう考へても詰んでるような状況だろうが、あきらめちやダメなんだよ！どんなに絶望的だろうが、力の限り強がつて、『絶好調だぜ』って言い続けなきゃダメなんだ！」

シゲル様の言葉には、不思議な確信が込められているようだつた。

「どうさ！」

「いいか、凜ちゃん。死ぬまでじたばた悪あがきをしてるとな、」

「——なんと！奇跡が起ることがあるんだぜ！」

——それは、この末期的な世に突如として現れた、目の前の人間のようで——  
悪戯つぼく笑うシゲル様の言葉に、私は心が震えるのを感じた。

——そう。そうだ。

シゲル様が登場するまで、私たちはずっと『悪あがき』を続けてきた。昏睡病という絶対の死神に対して、何とか対抗しようとじたばたしていた。結局昏睡病はどうするともできなかつたけど、人類が今まで何とかまとまつた数を残せていたのは、先人たちが積み上げてきた悪あがきのおかげだ。

その悪あがきの先に、シゲル様という奇跡が訪れた。

シゲル様はそんなつもりで言つたんぢやないだろうけど——私たちの頑張りは無駄じやなかつたと言われている気がして、自然と目が潤んでしまう。

「——シゲル様も、悪あがきを？」

涙を誤魔化すように、私は尋ねる。

「おう！そりやすげえ悪あがきだつたぜ！あがきにあがいて、遂に世界もはみ出しちまつたくらいだからな！」

からからと笑うシゲル様に、私も微笑んでしまう。それなら、悪あがきに感謝感謝だ。

零れる前に涙を拭つて、私はシゲル様から通帳を受け取ると、静かに領いた。

「レベル4患者の延命措置に、全力を尽くさせていただきます」

「サンキュー！」

——ああ。この笑顔をみていると、いつか本当に奇跡が起ころる気がしてくる。いつまでも見ていてなくなる、ステキな笑顔だ——

「……あ」

……けど、今からその顔を曇らせる報告をしなくてはならないことを思い出した。  
う、どうしよう、言いたくない。

でもいつも報告することを、今回だけは報告しないっていうのは不自然だ。いつまでも誤魔化したままでもいられないし……  
ええい、しようがない。

「えーと、シゲル様、前回のアイドルスターの反響なのですが……」

「おお！ どうだつた?!」

前回のアイドルスターは、シゲル様の要望によりこの世界の『クラシック』をメインに据えた回だった。放送にはゲストに神奈唄子さん、そしてクラシックに使われる楽器のスペシャリストを招き、万全の態勢で行われた。

シゲル様は非常に喜んだ。それはとつても素晴らしいことだ。ゲストの皆さんには

感謝状を贈りたいくらい。

でも――

「その――ふるいませんでした!」

私は頭を下げて正直に言つた。

「うそオ!?

シゲル様が目を丸くする。

うう、心苦しい。

「いえ、視聴率はいつも通り九割を超えていたのですが――一番組に寄せられたお便りは『もつとシゲル様の作った音楽が聴きたかった』が大半でして……『でもシゲル様が幸せそうだったのでOKです!』って書いてあるから、それはそれなんですが……」

「いやマジかよ? ヒルトスタンインの名曲渝いだつたんだぜ? 唄子さんの歌もゲストさんたちの演奏も、流石プロって感じだつたじやねーか。ありや今後もつと上手くなるぜ。最高だつただろ!」

「……『クラシックのすばらしさを再認識できました、ありがとうございます』という意見は『唄子さんの歌にうつとりして朱里ちゃんが可愛かつた』と同率で全体の五パー セントほどです」

「もうちょっとあつただろ!?

「残念ながら……」

首を振る私に、シゲル様は露骨に肩を落とした。

「——ヒルトスタインはマジで天才だぜ？俺の前世の偉大な作曲家にも全然引けをとつてねえよ。みんな何も俺の曲ばかり聞いてるこたねーんだよ」

そうはいつても、と私は思う。

蓬莱民にとつてシゲル様はいわば神様なのだ。思考停止でその音楽を聴きたがるのも無理はないと思う。実際に、わたしもシゲル様の音楽ばかり聞いているし。

——それに、他の理由もある。

何故みんなが、シゲル様の音楽ばかりを聞きたがるか。

「——みんな、不安なんです」

「不安？」

「はい。今は人々に、過去を振り返る余裕が無いんです。前を向いていないと、心配でたまらないんですよ」

「何だつてそんな——」

「——だつて、『クラシック』を聞いても、昏睡病は治らなかつたんです。二百年間、ずつと……」

「……」

「だから出来る限り、シゲル様のもたらした楽器や、音楽に触れていたいんですよ」

——だつてもし、また昏睡病が発症してしまつたら。

私が飲み込んだその言葉に、シゲル様は察しがついたみたいだつた。

「——そうか。まあ、そうかなあ」

シゲル様は視線を落として呟く。

『音楽』そのものを愛しているシゲル様にとつて、自分の曲ばかりがもてはやされる現状には言いたいところがあるのだろう。

でも、シゲル様が俯いていたのはほんのわずかな時間だつた。

「——じゃあさつさと昏睡病を退治しねえとな！昏睡病なんてのが影も形も無くなつちまえば、辺りを見渡す余裕もできるだろ！」

そう言つたシゲル様は、勢い良く立ち上がるとギターケースを担いだ。

「よし、行くか！」

「ど、どこへですか？」

「ライブに」

「またですか？！午前中目いっぱいやつたじやありませんか！少しくらいお休みになつてください！」

「机仕事に疲れたからライブにいくんじやねえか」

「だ、ダメだ、話が通じない……！」

私は必死にシゲル様を引き留めたが、その足を止めるることはできなかつた。今日も順調すぎるほどの速度で、蓬莱から昏睡病が消えていく。

## 第27話

女子高生・神宮寺真美視点

『——今日は皆に、ちょっと報告があるんだよ』

わたしはぼうっと夜空を見上げながら、シゲル様の言葉を聞いていた。  
空を見上げているのは、涙がこぼれないように。

だって、シゲル様がこれから何を言うか、蓬莱人はみんな察しがついているから。  
『こないだのアイドルスターでも言つたんだが——ついに、諸外国の準備が整つた！』  
『そして、蓬莱での治療ライブも、いまさつき全行程が終わつた！』

——その言葉が意味するところは、まさに偉業だ。

シゲル様はついに、蓬莱の全レベル3患者を治してしまつたということだから。  
そして、それはつまり——

『つまり、いよいよ俺のワールドツアーガ始まるわけだ！』

シゲル様の、旅立ちを意味していた。

『つてことで、シゲラジは今回でちよいとお休みになる。俺が帰つてくるまでな』  
『ま、そんなに長くはからねえさ！世界中が準備に骨折つてくれたからな！今までと同じペースでライブをすれば、なんと一年少々で終わつちまうつてよ！』

一年。

蓬莱という一つの国にすら半年もかかつたのだから、これはきっと破格の短期間なんだろう。各国は余程頑張つて体制を整え、システムを組んだに違いない。あるいはシゲル様のライブ頻度が常軌を逸してゐるのかな。そのどちらもって気がする。

ああ、でも、一年は長いよ。

今は十一月。これから蓬莱には本格的な冬がやつてくる。シゲル様という太陽抜きで冬を乗り切らなくてはならないと思うと、身体だけでなく心まで冷え込んでくるみたい。

本音を言えば、どこにも行つてほしくない。

でも……

私は友達のことを思い出す。

ヨッシー。ドラム好きの女の子。ヨッシーのお母さんはレベル3の昏睡病で、特療に

入っていた。入ったのは、ほんの一年前だつたかな。ヨツシーは随分落ち込んで、わたしたちは頑張つて慰めた覚えがある。

だつて、誰にとつても他人事じやなかつたから。

昏睡病という名の死神は、いつか必ず訪れる、避けられない終わりだつた。

——シゲル様が現れるまでは。

ヨツシーはこのあいだ、一晩泣き明かしたような真つ赤な目で報告してくれた。

——お母さんが、帰つてくるつて。

もちろん、シゲル様のライブのお蔭で。

まだちよつとりハビリは必要みたいだけど、それも直に終わるらしい。ヨツシーは泣き笑いのような顔で、「ドラムの置き場所探さなきや」つて言つてた。

——心底嬉しそうに。

うちの高校だけでも、そんな生徒は沢山いた。

治療の日取りを今か今かと待つていた生徒は、数えきれないほどいたんだ。

じやあそれが世界全部なら?

帰つてこれないお母さんは、帰りを待つ子供は、一体どれくらいいるの?

——もし私が外国人で、レベル3の母が居たら。

そう考えたら、とても甘つたれた我儘は言つていられない。

私たちにできるのは、シゲル様を声援と共に見送ることだけだ。

『——でもな、俺はこの一年、皆に期待してるんだぜ！』

ラジカセから響くシゲル様の言葉に、私は首を傾げてしまう。

……期待？

シゲルさまが、私たちに？

『一年経てば、蓬莱も結構変化があるんじやねえかと思うからよ！』

『帰つてきたら、俺の知らない最高の音楽が流行つてるかもしねえだろ？』

『そう考へると、ちよいと長旅に出るのも悪かないかも、つてな！』

シゲル様が楽し気に言う。

私は苦笑してしまう。賭けてもいいけど、シゲル様の音楽はず一つと流行しつぱなしだと思う。そう簡単に新しい音楽なんてものが生まれる筈がないし、それがシゲル様の音楽並みのクオリティを持つてるだなんてことはあり得ない。

でも、もし、シゲル様が帰つてきたとき——シゲル様の曲に並ぶほどの『最高の音楽』が蓬莱に響いていたら。

きっとシゲル様は飛び跳ねて喜ぶだろう。そういう方だもん。

『だから——ちょっとだけサヨナラだ、蓬莱の皆！』  
 『俺の音楽で、世界中の憂鬱を蹴つ飛ばしてくるぜ！』

シゲル様の別れの言葉に、堪えきれずに涙がこぼれた。

私はぐいっとその涙を拭つて、もう一度空を見上げて——  
 それを見つけた。

「あ——」

「——流れ星」

大きな流星は、凄い速さで暗い夜空を断ち切つて。  
 空の彼方に飛んでいく。

——シゲル様みたい。

そうだ。シゲル様は行くんだ。

皆の願いを乗せて、真っ暗闇を真っ二つ。

「——頑張つて、シゲル様」

私は目を閉じて小さく呟くと、星に願いを乗せた。

どうか貴方の最高の音楽で世界を救つて、そして——

——無事に、帰つてきてください。

眼を開くと、もう流れ星は見えなかつた。

わたしは寂しさを振り払うように買つたばかりの相棒に視線を向けた。

テレキヤスター。ぴかぴかのボディを見てると、自然と喜びがこみあげてくる。  
——うん。この子がいれば、シゲル様のいない一年も何とか乗り切れそうな気がしてくる。

まだ、教本とにらめっこをしながらいくつかの簡単なコードを覚えただけだけど——  
それでも、音を出してるだけで最高に面白い。パワーコードをかき鳴らしてるので、  
この子は私を天国に連れて行つてくれる。

いくつかのコードを適当に組み合わせて、何となく曲っぽくするのがマイブームだ。  
しつかり上達したいなら、バレーコードとかをちゃんと弾けるように、もつと基本的な  
練習をするべきなのかもしれないけど——しようがないんだよ。すぐ弾けるコード弾  
いてるだけで楽しすぎるんだもん。

そう。とにかく今は、この相棒と一緒に音楽をやるのが嬉しくてしようがない。

『最高の音楽』なんかには及びもつかないけれど、ひたすら楽しいんだ。

....。

……あれ？

……最高の、音楽？

そういうえば、シゲル様はアイドルスターの第一回で言っていた。

楽しければ、それが最高の音楽なんだ、つて。

——じゃあ、今私がやつてるのって——

閃くものがあった。

その閃きは急速に形を成して、ひどく私を魅惑した。

どうやつても、目を離せないほどに。

「……作れないかな」

口に出してみると、その閃きはますます私を引きつけた。

——私にそんな知識なんて全然ないけど。ただ音楽好きってだけだけど。  
作れないかな。

——私にも、新しい曲が。

人が聞けばあり得ないっていうかもしれない。不遜だ、っていう人だつているかもしない。素人にそんなこと出来るわけない、っていう人がほとんどかもしれない。

でも――

馬鹿馬鹿しくて、無謀なことかもしれないけれど――これって、なんだかとつても『樂しそう』！

じゃあそれって、『最高の音樂』つてことじゃない！？

――そうだよ！ついこの間まで素人だったはずの朱里ちゃんと青子さんは、もう滅茶苦茶成長してる！あつという間にぐんぐん伸びて、とつても楽しそうに音樂をやつてる

！  
じゃあ、私にだつて――！  
一年間も、あつたらさ――

「可能性くらい、あるよね！」

私は、シゲル様を見送ることしかできないけれど――

待つっている間に、できることがあるかもしれない！

一年後、私の作った曲が奇跡的にシゲル様の耳に入つた時、ほんの少しだけでも喜んでくれるかも知れない！

……ううん。違う。

シゲル様の為に、とか、そんなおためごかしは無しだ。  
これはもつと単純な話で――

こんな楽しそうなこと、見ないフリはできないってこと!

「よおしー!」

私は急いでノートとペンを引っ張り出すと、さつき頭に浮かんだフレーズを書きな  
ぐった。

# 第28話

藍葉青子視点

—— イドルスターの収録は、もう慣れたもの。最初のころこそ緊張して上手く話すこと

すらできなかつたけど、今はそんなにミスもしなくなつた。

……でも、今日は勝手が違つた。

収録は上手くいつていない。

つもと違うことは、一つだけ。

—— ひとり——たつたひとりを欠いたまま、番組を造り上げなくてはならないというこ

と  
方の存在の大きさを知つた。

シゲル様のいない収録現場は初めてだつた。

思い返してみれば、先週までリハーサルにはあまり時間がかからなかつた。  
だつて、シゲル様がタイトすぎるスケジュールに忙殺されていたから。メインパーソナリティの一人が参加できないのだから、リハーサルも全体の流れを確認するくらいで終わつていた。

それで何の問題も無かつた。だつて、進行に多少の手違ひが起きてても、シゲル様が笑つて音楽を披露してくれれば丸く収まつてしまふんだもの。

シゲル様はその人柄と音楽で、番組を引っ張つてくれていた。  
でも、そのシゲル様は、もういない。

メインパーソナリティは、いまスタジオに全員が集まつている。

——今週からは全員が揃つた状態でリハーサルが行える。それも、入念に。  
収録時間だつて長くとれるから、ちょっとくらいミスがあつても大丈夫。撮り直す余裕がある。

でも——こんなに不安になる収録は、初めてだつた。

誰も彼も、迷子の子供のよう顔で、俯きがちに収録に参加している。  
……きっと、私も。

ああ——シゲル様一人がいなideだけで、まるで火が消えたみたい。

マネージャーの鈴さんも伏し目がちで、いつもの元気はない。  
番組スタッフの皆さんにもちよつとしたミスが続く。

浅黄さんも珍しく演奏ミスを繰り返し、スタッフの慰めの言葉に涙を浮かべた。  
私もセリフをどちつてしまふ。あれほど練習したエイトビートが、何故だか上手く決まらない。

朱里は——奇妙なほどに口数が少なく、何かを考えこんでいるようだつた。

休憩にしましよう、と、スタッフの誰かが言つた。  
反対する人はいなかつた。

わたしはスタジオの椅子に腰かけて、気分転換の為に私物の楽譜を眺める。

シゲル様が手ずから残してくださつた、十曲ほどが記載されているバンドスコアだつた。キーボードトリオ用に編曲されたものとは別に、ギターが加わつたバージョンも記載されている。

——俺が帰ってきたとき、どれか一曲でもセッションできるようになつてたら嬉しい

からな！

シゲル様はそんなことを言つて、激務の合間を縫つて書き上げてくれたらしい。  
有り難い話だ。もし本当にシゲル様とセツションできたら、きっと夢のような体験に  
なるに違いない。

ああ、だから。シゲル様の期待に応えるためにも、頑張らなくてはいけない。  
頑張らなくては、いけないので――  
どうしても、力が湧いてこない。

それはきっと、この場の誰もが同じで――

――いや。

一人だけ、違うみたいだつた。

ばちん、と乾いた音が響いた。

何事かとそちらに目を向けると、そこにあるのは自らの両頬をひっぱたいた朱里の

姿。

思つたよりも勢いがあり過ぎたのか、朱里はぎゅつと目を閉じて痛みに堪えると、

「——よしつ！」

ベース片手に、かつと目を見開いて立ち上がつた。

「——みんな！俯いてちやダメだよ！」

突然、スタジオに朱里の大声が響きわたつた。

皆目を丸くして朱里を見つめる。

「こんなところをシゲル様に見られたら、きっと悲しませちゃう！『音楽のイロハのイを忘れちまつたのかよ』ってさ！——元気出していこうよ！」

朱里が力説する。

ああ、きっとシゲル様はそう言うわね。

だけど朱里、それは言つても――

「でも、シゲル様がおられないと……」

「——二百年!!」

私の弱氣を、朱里はその言葉で遮断した。

「二百年だよ!? 二百年、人類は歯を食いしばつて頑張つてきた！ シゲル様なんていなかつたのに、必死に――」

「だつていうのに、ぼくたちはたつた一年すら頑張れないの?!」

「——そんなわけないよ!」

「半年前を思い出してみて!」

「ぼくたちは、シゲル様がいなくとも前に進もうとしていたよ!」

朱里の言葉に、わたしははつとする。

——そうだ。私たちは弱くなつた。

だつて、あんまりにもシゲル様が頼りになるから。

全部、任せてしまえたから。

わたしたちは、寄りかかるだけで——

落ち込み続ける私たちに、朱里はそれでも言葉を投げかける。

「シゲル様が蓬莱に、希望の火を灯してくれた!」

「ぼくたちはシゲル様が帰つてくるまで、背中を丸めてその火に当たつてるだけなの?!」

「違う!」

「そだてなきや!」

「シゲル様が、びつくりするくらい!」

「帰ってきたときに『すげえな、お前ら!』って言っちゃうくらい!」

「ほくらで『音楽』の火に、薪をくべ続けるんだ!」

その言葉に、わたしは心が動くのを感じた。

もし、音楽の火に薪をくべて——炎にできたら。

シゲル様がそれを目印に帰つてこられるほどの、篝火にできたら。

蓬莱中に音楽が溢れるようになつたら。

それは、なんだかとつても——

——楽しそう。

……でも。

「できるかしら、私たちに……」

まだ弱音を吐く私に、朱里は、

「できるよ!」

力強く答えてくれて——

「——あ、ごめん、ぼくたちだけじや無理かも」

即座に前言を翻した。

わたしはずつこけそうになつてしまふ。

「あのねえ……」

「だ、だけど、蓬莱の皆を味方にするはいいんだよ！」  
朱里が慌てて言い繕う。

「皆を？」

「うん。ぼくたちだけじゃ、薪を運ぶのは大変かもしれない。でも、蓬莱にはこんなに人がいるんだよ？ちょっと力を借りちやおうつ」

——私たちだけで無理ならば、みんなで。

いや、それは道理かもしれないけれど……

「でもー、どうやって助けを借りれば……？」

浅黄さんの口から出た疑問は、まさに私も考えていたものだった。

だけど、その疑問に、朱里は胸を張つて即答する。

「簡単だよ！音楽のすばらしさを、皆さん伝えてあげればいいんだ！」

「い、いえ、ですからその方法を——」

「それこそもつと簡単！シゲル様が言つてたじやない。ほら、楽しければ——？」  
樂しければ……：

「それが最高の音楽……？」

「それ！」

私の答えに、朱里は力強く頷く。

「最高の音楽を聞かされたら、興味を持たずにはいられないでしょ？そしたら音楽仲間の出来上がり！みんな喜んで音楽の火を育ててくれるよ！」

……朱里の言っていることは、分かる。私だって、シゲル様の最高の音楽を聴いて、興味を持たずにはいられなかつた。

でも……

「それはそうかもしれないけれど——問題は、シゲル様抜きの私たちに、最高の音楽がで  
きるかつてことよ」

それこそが、最大のネックのはずだ。

だけど、朱里はあっけらかんと答えた。

「何言つてるんだよ。あつたりまえじやん！」

——えつ？

私も、浅黄さんも、スタッフさんも。あまりにも自信満々な言葉に、みんな驚いて朱里を見る。

「だつて、音楽つて——こんなに、楽しいんだもん！」

そんなセリフと共に、突然演奏を始めた。

シゲル様に比べれば、とても拙いベースソロ。

当然だ。きっと才能も違うし、練習量も違う。

でも――

精一杯の音楽を披露する朱里の顔は――その笑顔だけは。

「ほらー・勝手に『最高』になっちゃう!」

まるでシゲル様のように、光り輝いていた。

シゲルが旅立った直後、『アイドルスター』の視聴率は一気に半分以下まで落ちた。  
しかし、トライアングルは、番組スタッフはくじけなかつた。

彼女たちは、ひたすら音楽に向き合い、楽しみ、その魅力を発信し続け――

徐々に回復していくたる視聴率は、十か月後には遂に全盛期の八割に迫る数字をたたき

出すことになる。

## 第29話

ステカの新聞『アステカ・タイムズ』より

『ワールドヒーロー、アステカに到着!』

や知らぬ者のいない偉大なミュージシャン、シゲル・サクラザキがアステカにやつてきた。その目的は『生演奏によるレベル3患者の治療』である。

知らないジョークだと、ミスター・シゲルを知る前の私ならそう言つたであろう。ついで怒りの一つも表明していたはずだ。『ぬか喜びはもう沢山だ』と。数々の治療が悉く失敗に終わっているのは、歴史が証明しているからだ。

しかし今回に限つては、わたしは感謝と喜びの意を示さねばならない。

既にご存じの方が殆どだと思うが——海を隔てた蓬莱において、ミスター・シゲルの音

樂は既にレベル3を治療しているからだ。

これは政府から通達された情報であり、眞実である。

無論人種の差はあるど、我がアステカのレベル3患者にも効果を發揮するという期待は、決して希望的観測では無いはずだ。何しろ皆様もご存じの通り、アステカにおいてもミスター・シゲルの音樂は昏睡病を治療しているからだ。

これを読んでいる方、周りを見渡してみてほしい。

レベル1、あるいは2の昏睡病患者がいるだろうか？

いよいよ筈だ。もしいるのなら、速やかに公衆衛生局に連絡を。CDプレイヤーを引っ提げた局員が乗り込んでいくので、それで解決する。

そう。蓬萊政府の全面的な協力と、アステカ政府の尽力、そしてボランティアの皆様の手助けもあり、ミスター・シゲルの音樂はアステカ中に鳴り響いている。

その結果が、低レベル昏睡病の根絶。そしてレベル3の進行停止である。

録音された音樂ですらその効果。これが生演奏であればどうなるか——その結果は、既に蓬萊国民が証明している。

加えて、とある政府関係者の話によると、アステカが誇るかの天才ジエーン・ホワイトが一足早く治験に参加し、その昏睡病は既に治りつつあるという。政府からの公式な発表はまだないが、これはかなり確度の高い情報だ。アステカ・タイムズも今裏を取つ

て いる 最 中 の で、 続 報 は 少々 待つて いた だき たい。

そ れ に し て も、 シ ゲ ル・サ ク ラ ザ キ の 生 演 奏 と は い か な る も の の ん だ が。 コンサート ホ ー ル で 聴く 生 の 音 楽 が、 録 音 さ れ た も の と は 比 較 に な ら な い 感 動 を も た ら す と い う の は ご 存 じ の 方 も 多 い と 思 う が——そ れ が 稀 代 の 音 楽 家 に よ つ て 行 わ れ れ ば、 き つ と 死 人 も 目 覚 め る よ う な 感 激 を 与 え て く れ る の で は な か ろ う か。

——ま つ た く 不 謹 慎 だ と 言 わ れ て も 仕 方 の な い こ と で あ る が、 わ た し は 今 に 限 つ て は レ ベ ル 3 患 者 が う ら や ま し い。

恐 ら く、 今 後 ミ ス 特 サ ー シ ゲ ル の 生 演 奏 を 聞 く た め に は、 奇 跡 の よ う な 幸 運 が 必 要 に な る と 思 わ れ る か ら だ。

---

ある 日 の 『ト ラ イ ア ン グ ル・ラ ジ オ』 よ り

---

『みんな！ぼくたち、今日はいいニュースを持ってきたよ！』

『シゲル様の音楽を聴くようになつて、きっとみんなも歌を歌うことつて増えたと思うんや！でも、中々大声で力いっぱい歌う、っていうのは難しいよね』

『場所が問題なのよね』

『人の声は思つたよりも大きく響きますから、集合住宅などで大声を出すのは難しいですものねー』

『そうそう。そこで！蓬莱政府肝入りで、『カラオケボックス』が造られることになつたんだ！』

『このカラオケボックスっていうのは、簡単に言うと『思いつきり歌を歌える場所』！』  
『皆さんも、街のあちこちに『カラオケボックス建設中』みたいな看板とか、工事現場を見たことあるんじやないかしら。今一斉に作られてるカラオケボックスは、一部で完成を迎えてつあるの』

『ぼくたちトライアングルは、一足先にそのカラオケボックスを体験することができたんだ！あ、ずるつこだつて言わないでね？一応蓬莱政府から、音楽に慣れ親しんだ人の意見を聞きたい、つて要請があつたんだよ。そんなわけで、実際にお店に行つてきたん

だけど——』

『——いや、すごかつたわね。カラオケボックス』

『はいー。ほんとに……』

『二人の盛り上がりはすごかつたねえ。ぼく目を丸くしちゃつたよ』

『だつて貴女はボーカルとしてスタジオなんかで力いっぱい歌えるでしょう？でも私は案外機会がなかつたのよね』

『私もどちらかと言えば演奏に注力していましたからー。もちろんシゲル様の歌はしょっちゅう口ずさんでいましたけど——大声で、本気で歌うというのは、本当に久しぶりの体験でしたー』

『そうだつたんだね。……で、感想は？』

『最高!!』

『あはは、そうだろうねえ。じやあ青子ちゃん、ラジオの前の皆に、どんな施設なのか説明してあげてよ』

『了解。——簡単に説明すると、施設にはいくつもの個室があつて、その個室の中にテレビと機械、スピーカーとマイクがあるの。その機械に番号を打ち込むと、番号に対応した音楽がスピーカーから流れる仕組みになつてるわ。なんと、テレビにはリアルタイムで歌詞も表示されるのよ』

『そうそう。——でも、シゲル様の歌声は流れないんだよね』

『そうなの。伴奏だけ。だから、マイクを握つて歌を歌うのは自分なの!』

『防音設備が整つた部屋で、気の置けない友達と一緒に、周囲を気にせず伴奏つきで歌を歌う——あの体験は、ほんとうに素晴らしいものよ!』

『そなんです! 『楽しさ』をぎゅっと詰め込んだような空間なんですよー』

『家で鼻歌を歌うのと何が違うの? って思つたそこの貴女! お願ひだから一度だけでもカラオケボックスに行つてみて! 絶対、ぜーつたい! その魅力がわかるから!』

『青子ちゃんがこれだけ熱くなるのも珍しいね』

『あ、それと楽器の練習をしてる皆さんにも朗報だよ!』

『なんと! 一部のカラオケボックスに楽器の練習室を設けるんだつてさ! この練習室には音響機材なんかもバツチリ完備されてるんだよ!』

『それどころか、私たちが見学に行つた店舗にはドラムセットまで置いてあつたわ。——イメージトレーニングに明け暮れているドラマーの皆。魂を解放する時が来たつてことよ。ドラムに興味を持つてる貴女は、触れてみるチャンス!』

『大きすぎる楽器でなければ、持ち込みも大丈夫だつてさ! ヴァイオリンやフルートなんかの練習場所に困っている人にもおススメだよ!』

『店舗によつてはキーボードが置いてある練習室もあるみたいですよー。そのあたりは、各店舗に確認してみてくださいねー』

『——そんなわけで、バンドミュージックに憧れて音楽をやつてる皆！メンバーを集め  
て練習室に行ってみて！演奏の息を合わせるのって、とつても難しいけど——』

『お手くいつた時、天国だよ！』

女子高生・近衛麗佳視点

「??: カラオケボツクス?」

弁当箱を片づけながら、わたくしは眉を顰める。

曜日は大抵の学校が半ドン。蓬莱第四高校もその例に漏れず、午後は職練のコマがない。だから大抵の高校生はアルバイトに勤しむか、どこかに遊びに出かける。

たくしを誘いに来た雪子さん、美月さん、明日花さんの三人組はどうやら後者の  
よ？？？？？ですわね。

「そうそう。本当は2Aの真美ちゃんと四人で行くはずだつたんだけど——」

「練習室のキヤンセルが取れちゃったの、ゴメン！」って言われちゃって。ベース担いだ理子さんとヨツシー連れて行つちゃったのよ」

「真美ちゃんは練習本気勢だからねー」

「……それでわたくしを誘いに？」

「そうそう。麗佳ちゃんとはまだ行つたことなかつたなーって思つて」

「どう？」と笑いかけてくる雪子さんに、わたくしはそっぽを向いてみせる。

「わたくしは遠慮いたしますわ」

「えーっ」

「どうして？」

「一緒にいこうよー」

三人が不満そうに声を上げるので、わたくしはキツと睨み付ける。

「シゲル様の歌を歌うなどそもそも不遜なのです！あの完璧な歌を一般人が歌うなど、まさに冒流！許されざる行為ですわ！」

わたくしは熱弁するけど、三人の反応は冷ややかだった。

「どう考へても行き過ぎた原理主義だよ」

「だいたいアイドルスターで朱里ちゃんが歌つてた時、シゲル様めっちゃ嬉しそうだつたでしょ」

「……シゲル様はお優しいから。きっと心では泣いていたのですわ」

「なんでそんなにシゲル様を好きな貴女が、一番シゲル様を理解できていないの？」

「そもそも麗佳ちゃんがたまに鼻歌歌つてるの知つてるよ。『終わらない旅』が多いよね」

「う、うそおっしゃい！」

「本当だとしても多分無意識だからセーフですわ！」

「まあまあ、ものは試しだよ。一回だけ行つてみようよ麗佳ちゃん」

「お断りです！——そもそもわたくし、午後は外せない用事が入つていますの」

「用事？ どんな？」

「買つたばかりのCDプレーヤーで『君だけを見つめてる』を無限ループするという崇高

な用事が——」

「めちゃヒマじやん」

「連行しよう」

「な、何をいたしますのー！」

両脇を抱えられたわたくしは、抵抗虚しくカラオケボックスへと連行されてしまいま  
した。

「はい麗佳ちゃん、一番手でどーぞ」

八畳ほどの個室に連れ込まれたわたくしに、明日花さんはそう言つてマイクを差し出す。

「歌わないと申し上げたでしよう」

「まあまあ、いいからいいから」

わたくしは半眼を向けるけれど、友人は意にも介さずマイクを押し付けてくる。

「ほら、『終わらない旅』いたから。麗佳ちゃん大好きでしょ？」

何やら端末を操作していた雪子さんがそう言うと、テレビ画面に『終わらない旅』のタイトルと、『作詞・作曲 櫻崎シゲル』の文字が映る。

——『様』をお付けなさい！機械風情が！

「ねえ、麗佳ちゃん。とにかく一曲だけでも歌つてみない？鼻歌を聞いた限り、麗佳ちゃんつてすつごく歌うまい気がするの」

美月さんのそのセリフに、ついにわたくしは根負けした。

「……ふう。まつたくもう」

マイクを手に取ると、イントロに耳を澄ませる。

——ふん、チープな音だわ。シゲル様の演奏に比べたら子供だましね。

……ま、まあ？

仕方ないから？

歌うだけは、歌いますけどね。一曲だけ。

二十分後――

「――センキューツ!!」

何度もかの『終わらない旅』を歌い終えたわたくしは、人差し指を天に突き上げてシャウトする！

――最高！カラオケって最高！これを知らない人は人生の半分を損していますわ！  
さて、ではもう一度『終わらない旅』の曲番号を入力して――

「いやセンキューじゃないわよ！麗佳ちゃん何回連続で歌うのよ！これ以上はノーセンキュー、ノーセンキューよ！」

「もう勘弁してよ！『終わらない旅』なんばほど終わらないの?!」

「仕方ないでしよう終わらない旅なんだから」

時間いっぱい続きますわよ。

「ダメだこいつ！ツツキー、マイクむしり取つて！」

「了解！」

「ああっ何をしますの！やめて！わたくしのマイクちゃんよ！」

「店のマイクだよ！」

熾烈な戦いの末、マイクちゃんは奪い取られてしまいました。

誠に遺憾ですわ。

「あー、もう終わっちゃった。二時間なんて一瞬だよね」

「誰かさんの独壇場が随分続いたからね！その後もちやつかりローテに混ざるし…」

「ほほほ。わたくしの美声に感謝してくださつてもよろしくてよ」

「面の皮の厚さがすごい……！」

「まさしく鉄面皮だね」

「実際上手だつたけどさあ」

部屋を出たわたくしたちは、そんな会話をしながら店内を進む。カラオケボックスはなかなかの広さで、部屋の場所次第では出入口まで少々歩くことになる。

——それにも二時間の時間制限は不満ですわ。本当なら丸一日貸切りたいところですが……これほどの広さがあつても、今カラオケボックスは予約でいっぱいらしいです。我儘は申せませんね。

……まあ、皆さんのが歌を聞くのも？なかなか？悪くはなかつたですし？

歌つていない間も、それなりには楽しめましたわね。それなりには。

——絶対また来ますわよ！近日中に！

「——あ、練習室」

ふと、美月さんが声をあげる。その視線の先にあるのは、少々造りの違う扉。噂に聞く練習室というものですね。

「お、ほんとだ。造りが違うんだね」

「防音かなりしつかりしないといけないもんねー」

皆の言う通り、練習室はかなり機密性が高いようにみえますわね。

にも関わらず微かに音が聞こえるのだから、やはり楽器の持つパワーは凄いものです

わ。

……わたくしも、嗜んでみようかしら？

練習室を通り過ぎるわたくしは、なんとはなしに漏れ聞こえる音楽に耳を澄まして——  
首を傾げる。

……あら？——これって、ロツクのように聞こえるけれど——

なんだか、聴いたことの無い曲のような？

## 第30話

駿河灘視点

ゲル様がいなくとも時は流れる。季節は巡る。

ケボツクスをはじめとして、政府の打つた手はほとんどが成功。阿藤寛子首相率いる蓬萊政府の力強さをまざまざと見せつけられた。私も一員として鼻が高い。

春になると、嬉しい誤算もあつた。トライアングルの大活躍だ。

本来、シゲル様を欠いたテレビ業界はかなり活気を失うことが予想されていた。でも業界関係者は腐ることなく発奮。一致団結した彼女たちは、トライアングルを主軸にして業界を盛り立てた。

今やトライアングルの人気は凄まじく、まさにテレビスターと言つても過言ではな  
い。

夏が来ると、政府はシゲル様が残して行つてくれた楽曲のうちから、いくつかのサマーソングを新譜として売り出した。

シゲル様が旅立たれてから隔週くらいのペースで販売されていた新譜は、元々「これもうほとんど税金じゃないの?」つていうくらいの売れ行きを見せていたけれど――夏の新譜は更にとんでもない大反響となつた。

去年はシゲル様降臨のショックで狂騒のうちに過ぎ去つていた夏だけど、今年は蓬萊民にも余裕がある。夏は人を解放的にさせる、とは古代の詩人の言葉だが、あれはホントだつたらしい。シゲル様の新譜に触発された人々は、昏睡病が蔓延していた頃には考えられないアクティブさで、海に新たな楽しさを探しに出かけた。

結果、海水浴場はマリンスポーツと水遊びを求めて押し寄せる蓬萊民によつて芋洗い場と化した。関連企業は大いに儲けたらしい。

そして秋になつた今。私に奇跡が起きていた。

――そう。なんと今日は奇跡の定時退院!

相変わらず忙しい毎日を送つているけど、一時の死にそうな激務はもはや過去のものとなつたのだ。定時で上がれるとか、ハツキリ言つて学生時代の職練でしか記憶にない。

私はるんるん気分でちよつといい夕食を済ませ、今は自室でシゲル様の音楽を聴きな

がら趣味に興じている。

目の前には海外の新聞がずらり。

各国から出来る限りの速度で送られてくる新聞の一面記事を読むのは、今の私にとつて楽しみの一つだ。

十か月分もあるから読みごたえは十分。もう何度も繰り返し読んだ記事ばかりだけど、やっぱり見出しをみるだけでも笑みがこぼれてしまう。

現代の英雄、櫻崎シゲルの大活躍。

手元にあるどの新聞も、見出しにそのことを伝えている。

これでもかというほど希望にあふれた文章を一面に載せて。

『アステカ大熱狂！驚異のシゲル・ミュージックとは』

『レベル3患者、続々回復』

『奇跡の三か月。アステカ、予定より大幅に早くレベル3撲滅の見込み！』

『サンキューヒーロー』

『弾丸ツアーダゼ！シゲル・サクラザキウロペへ！』

『東の果てから希望が飛んできた！エウロペ女王、ヒーローと蓬萊政府に感謝の意！』

『爵位は結構、拍手で充分』——女王、英雄に全力の拍手で応える！』

『女王両手内出血』

『オーソニア女教皇、新たな教派《シゲル派》の誕生に黙認の構え』  
『人か!? 神か!? ヒーロー様だ! 櫻崎シゲル、15時間連続ライブ!』

『超特急ワールドヒーロー号、昏睡病を跳ね飛ばす!』

『シゲル・サクラザキ 快進撃!』

『レッドリスト入りか! 昏睡病絶滅間近! なお保護団体は存在しない模様』

そして、今日届いた新聞の一面には――

『さらばレベル3! ワールド・ヒーロー、任務完了!』

待ちに待つた吉報が記載されていた。

シゲル様が、帰つてくる。

一機のプライベートジェットが、この蓬萊国際空港に到着した。

取り立てて変わったところのない機体だけど——あのジェット機に誰が乗っているかが知れれば、この空港は殺到する蓬萊民によつて倒壊するかもしれない。

だつて、救世の英雄が帰ってきたのだから。

しかし夜七時現在、空港内にはほとんど人影が無い。

今日この時間に、国際線も国内線も飛ばないことは確認済みだつた。本日のフライトはとつ々くに終わつていて、空港内にただの客は一人もいない。

それというのも、シゲル様の帰還はまだ伏せられているからだ。

蓬萊国民の為を思えば一刻も早く通達すべきなのかもしれないけれど、もつと優先しなくてはいけないのはシゲル様のことだ。

周囲に騒がれる前に、静かに休憩できる時間が必要だと思うから。

——シゲル様の帰国を目前にした今、わたしの胸にあるのは、喜びじやなくて不安だ。シゲル様は確かに、神話のような偉業を成し遂げた。

世界全部で立ち向かつてもどうにもならなかつた『昏睡病』という名の化け物を、たつ

た一人でやつつけた。

でも。

シゲル様は英雄だけど、神話に出てくる神様じやない。

ご飯は食べるし、睡眠もとる。嬉しければ笑うし、悲しければ肩を落とす。

多少『特別』かもしれないけれど、人間の体と心をもつていてる。

そして、シゲル様がこなしたスケジュールは、到底人間には不可能なものだった。  
なにしろ、今は十月に入つたばかり。

シゲル様は本来ならたっぷり一年以上はかかると試算されていたライブツアーや、十  
か月少々でこなしてのけたのだ。

周囲の心配を押し切つて。

——無謀なスケジュールをこなすシゲル様に、わたしは何度も電話で休憩をとるよう  
に具申した。私だけじやなく、各国の要人たちも同じことを言つてくれた。

でも、本人に『心配すんな』と言われてしまえばどうしようもない。

シゲル様のおつしやる通り、レベル3患者がいつまでレベル3患者でいられるかはわ  
からない。その事実も、シゲル様の強行軍を後押ししてしまつた。

……積み重なつた疲労は、心身を容易く蝕む。

私も一時は危ないところだつた。激務に次ぐ激務で入院一步手前まで行つてしまつ

た。

なんとか持ちこたえることができたのは、頼りになる先達が職場に復帰してくれたからだ。

だけど、シゲル様に『先達』はいない。

世界を滅ぼそうとする死神と、孤独に戦わなくてはならなかつた。

そんなの——たつた一人の人間に背負える負担だとは、到底思えない。胸騒ぎを押さえきれない私の目の前で、ジエット機にタラップが架設された。いよいよ、シゲル様が降りてくる。

——心のどこかに、『でもシゲル様ならば』、という考えがあつた。

シゲル様なら、常人なら過労で百回は死にそうな数のライブをこなして尚、眩しい笑顔で『よう！ただいま！』と言つてくれるのではないか——

だけど。

シゲル様の姿を見て、私は死にたくなるような後悔に苛まれた。  
一年ぶりにみるシゲル様は、一回り痩せたように見えて——  
「よう。——久しぶりだな、凛ちゃん」

疲労の色が濃い笑顔に、あの太陽のような輝きは無かつた――

――ひとつ頼みがあるんだよ。聞いてくれるかい――

車に乗り込むやそろ口にしたシゲルに、凛はもちろんと何度も首肯し――即座にその首を横に振ることになった。

「お願ひですシゲル様！今じゃなくともいいじゃないですか！」

車中で、凛は必死にシゲルを引き留める。

「少しだけ休んでから、それから考えましょう！」

「何も今、レベル4患者の治療に向かうことはないんですね！」

——今からレベル4患者に、もう一回だけチャレンジしたい。

その頼みだけは、聴くわけにはいかなかつたから。

凛は必死に訴えるが、シゲルの意志は固かつた。

「……生命維持装置に繋いでいても、レベル4患者つてのは衰弱してくんだろ？早い方がいいさ」

「数日後でも変わりません！まずはシゲル様自身が回復してから、万全の態勢で治療に臨むべきです！」

「頼むよ。その為に、俺はこんだけ急いできたんだ」

「う——」

シゲルにそう言われてしまうと、凛の語氣は弱くなる。

「……心配すんな」

ヘッドレストに頭を預け、シゲルは口角を上げる。

「へへ、どんでもねえ場数をこなしたからな。俺のテクニックは、いまちよいと凄いことになつてんだ」

「リズムセクションも収録しなおした。音質もバツチリさ。これ以上はできねえ」

「今なら、完璧な音楽ができる」

「——これで太刀打ちできなかつたら、あきらめもつくさ」  
シゲルは強行の構えを崩さない。

「……でもっ！」

だが、凛はそれでも食い下がる。

「でも、でも、せめて明日になつてからでもいいじゃないですか！一晩くらい、ゆっくり  
眠つて——」

「いや、今が良いのさ。張りつめてるんだ、今の俺」

「すげえ集中力なんだよ。今なら絶対にミスしねえから」

静かに、しかし完全に覚悟を決めたシゲルの様子に、凛はついに俯いた。

最後の挑戦には、小高い丘の上にある特療が選ばれた。

生命維持装置を動かすのは容易ではないため、ライブは広めの病室にて行われることになった。

スピーカー等のオーディオセットは小型でも最新のものが用意され、医師が病室にスタンバイ。ごく小規模なライブの為の準備は、瞬く間に整う。

観客は、たつたの数名。凜、医療スタッフ、そして患者だけだ。

「さて――やるか」

小さなその呟きと共に、ライブが始まった。

凜はシゲルの演奏に息を呑んだ。

それは文字通り、鬼気迫る音楽だつた。

『凄絶』の一文字が頭に浮かぶ。

それは一人の天才が命を捧げて作り上げる芸術品だつた。全てのものを圧倒する技量が、完璧な完成度で作品を組み立てている。

テクニックというテクニックが駆使された演奏には一切のミスが無く、広大な音階を

行き来する歌声は一音たりとも外れない。

畏怖すら覚えてしまう音楽を耳にしながら、凛はただ一つのことを願っていた。

——お願い、目を覚まさないで！

だつて、これでもしも患者が目を覚ましたら、シゲル様はまた『行ってしまう』！  
休憩なんか考えずに、一直線に——また、世界中の患者の元へ。『心配すんな』って言  
いながら。

自分の体の事なんか、考えもせずに！

——果たして、凛の願いは叶つた。

患者の脳波は平坦なまま、目を覚ますことはなかつた。

当然と言えば当然の結果。だが、かつてのシゲルはこの光景を前に「また来るからな

！」と気を吐いたものだつた。

しかし今回、シゲルは落胆の色を見せるることはなかつた。

「——そ、うか」

「参つたな」

ただ一言そう言つて、天井を仰いだ。

## 第31話

翌日。

シゲルはいつもの変装をして、街を歩いていた。

だが、変装中はなるべく持ち歩かないようにしているギターを、今日に限つては背負つている。

一年前であれば危険な行為だつた。シゲルの長身とギターが合わされば、いくら変装していても感づくものが現れかねなかつたからだ。

だが、今となつてはギターケースを背負つた者は決して珍しくない。何よりシゲルはまだ海外にいることになつていて、シゲルの長身は、人波に埋没していた。

「どうか休んでください」という凛の涙の訴えにシゲルは素直に頷き、今日を休日とした。

目的もなく街をうろついているのは、マイナス思考から逃れるためだ。

ベッドに横になつていると、考えたくもないことを考えてしまう。

演奏の予定も無いのに相棒を背負つているのも、そんな弱気が影響していた。帽子の鍔で出来る限り顔を隠しながら歩みを進めていると、ふと肩の重みが気になつ

た。

疲労が抜けていないのだろうか。

いつもより、ギターが重く感じた。

——思えば、お前さんとは長い付き合いだな。

何せ、前世からの付き合いだ。

今となつては、そんな相手は背負つたギター一本だけだつた。

——いや、もう一人いたか。

シゲルの脳裏に、美しい女神の姿が浮かびあがつた。

当て所なくさまようシゲルの足は、気が付けば水天宮へと向いていた。

誰かに縋りたかつた。

下ばかり見ながら歩いていたからか、シゲルがその異変に気付いたのは境内に辿り着いてからだつた。

今日は日曜日。本来であれば水天宮は歩行者天国並みの賑わいを見せている筈だ。だが、境内には誰の人影もなかつた。

——ただ一人を除いて。

「おまちしておりました、シゲルさま」

特徴的な白無垢に、シゲルは目を丸くする。

如何に激務で世間に疎いといえど、その服を着た人物ばかりは見間違いようもない。帝であつた。

何かを手に持つたまま、宝生弁才天前に佇んでいる。

「……新聞で見た顔だな。跪いたほうがいいかい？」

「とんでもございません」

そう答える帝に、シゲルは首を捻る。

「……あれ？」

「どうなさいました？」

「やつぱり——聞き覚えがある声なんだよな。どこかで会つたことなかつたか？」

帝はにこりとほほ笑むと、手にしたものを目深に被つた。

見覚えのある帽子だった。

その姿が境内と結びつき、シゲルに一年前の記憶を呼び起こす。

「……ミカちゃん？」

「おぼえていてくださつたのですね。あの時は正体をかくしていてもうしわけございま

せん」

「お互い様さ」

帝は微笑を浮かべると、しずしずとシゲルに近づき、その手をとつた。

「神託がありましたので、内侍省のほうで人払いを済ませておきました」

「神託？」

「どうぞこちらへ。弁才天さまが、待つておられます」

「……弁天様、が」

優しく手を引く帝にされるがままに、シゲルは宝生弁才天の前に立つ。

二礼、二拍手、一礼。

——気が付けば、眩い光が純白の空間に浮かんでいた。

「……弁天様かい？」

『ええ、そうよシゲルちゃん。今日は省エネモード失礼するわね。少しでも神氣を貯めておきたいのよ』

「なーに、どつちの姿も眩しいぜ」

『ふふ、ありがと。……他愛ない話を続けたいところだけど、ちょっと事情があるから、早速本題に入らせてもらうわね』

「……本題、か」

『ええ。——シゲルちゃん、貴方がここに来た理由は、大体察しているわ』

「……」

シゲルは目を伏せた。

そんなシゲルに、弁財天は静かに語りかけた。

『シゲルちゃん。……ごめんなさいね』

まず、そんな謝罪の言葉を。

「……なんだつて謝るんだ？謝らなくちゃならねえのは俺のほうさ。俺は結局、昏睡病患者を助けることはできなかつたんだ」

『そんなことないのよ。ちゃんと助けてくれたわ。——あの時ハツキリ言つておくべきだつたわね』

「……ハツキリ？何を？」

『以前わたしはここで、貴方に『百点満点』つて言つたでしょ？あれつて言葉の通りなのよ』

『レベル3患者の治療こそが、わたしの最終的な目標だつたの』

『最終的な？だけど、レベル4患者が——』

『レベル4は、最初から勘定に入つてないの』

「……え？」

『レベル4つていうのは、人間が定義した状態で——神々にとつて、あれはもう『抜け殻』なの』

『レベル4つて、アツイが魂を取り終えた後なのよ。昏睡病で弱り切つた魂を、自らの領域に持ち去つてしまつた。その後に残された身体が、人間たちの言うレベル4患者』

『機械の助けで、辛うじて生命反応を維持しているだけで——中身は、もうないの』

シゲルは呆然と立ち尽くす。

弁才天の言葉は、残酷なまでに一つの事実を明らかにしていた。

——つまり、レベル4患者は。  
最初から、手遅れだつたのだ。

『だからね、シゲルちゃん。もういいのよ』

『人々は力強く、生きる力を取り戻したわ』

『ここから再び昏睡病を蔓延させるのは、アイツといえども容易じやない』

『それに私も、お陰様でかなーりパワーアップできたわ』

『だから——アイツをわたしたち神々が押さえておけば、もう昏睡病患者は現れないはずよ』

『……貴方は間違いなく、この世界を救つてくれたわ』

弁才天の言葉は真実なのだろう。その声には真心がこもつっていた。  
だが、シゲルは頷くことができなかつた。

「——だけど、だけどよ！弁天様、俺は——！」

そう食い下がるシゲルの形相に、何を見たのか。

弁才天はいぶかしげに声を上げる。

『シゲルちゃん、ちよつと待つて』

『——この気配——貴方から……!?』

弁才天が、何かに気付きかけた瞬間——  
突如、虚空から闇が伸びた。

鞭のようにしなる一筋の闇が、一切の反応を許さずシゲルの身体を捉えようとして——

『このつ!』

眩い光に払われた。

あつけなく、闇は跡形もなく消える。

『——?』

『アイツ、様子を伺っていたわけ?』

『気配はそのせい……?』

『今のは……』

『例のアイツよ。牽制っぽかっただけど……なんだか違和感があるわ』

『違和感?』

『意味不明な攻撃だつたもの。あんな気の抜けたような一撃だけを送り込んでくる手合  
いじやないハズなのよ。……何かを企んでいるのかもしね』

『やつぱり、神気は出来る限り使わないほうが良さそうね。いざという時に、対応しきれないかもしないから』

『——でもシゲルちゃん。最後にこれだけは言わせてもらうわね』

不意に、弁才天は厳かな空気を纏うと、

『櫻崎シゲル。貴方が以前この水天宮に訪れたとき、私はお願ひしましたね。『貴方のライズを、皆に届けてあげて』と』

『——ありがとう。依頼は果たされました』

真摯な感謝を、シゲルに届けた。

終わりを告げる言葉だつた。

『わたしが頼んだ、貴方のライズはお終い。貴方は最高の結果を齎してくれたわ。百点

満点よ！』

『その身体に残された時間は、報酬としてプレゼントするわね』

『後は——貴方の人生を、どうか自由に生きて頂戴——』

優しい言葉を最後に、弁才天の気配が遠のいていく。

「弁天様——！」

声を上げるシゲルだったが、周囲は眩い光に包まれて行き——

気が付けば、シゲルの意識は現実へと帰っていた。

どうやつて水天宮を後にしたのか、シゲルは覚えていない。  
上の空のまま、気付けば目の前には立派な車があつた。

「シゲルさま」

声をかけられ視線を向ければ、そこには女官三人と並び立つ帝の姿。

「……何だい」

「——世界を救つていただきて、ありがとうございました  
帝が深々と頭を下げる。女官たちもそれに続いた。

「——サンキュー」

シゲルは、絞り出すようにそれだけを言つた。

女官たちに付き添われ、帝が車に乗り込む。

「シゲル様。よろしければお送りしますが」

女官の一人が言うのに、シゲルは首を横に振る。

「……いや、いいよ。ちよいと歩いて帰りたいんだ」

女官は再び頭を下げると、車に乗り込んだ。

去つていく車を、角を曲がるまで見送つて――

シゲルは、ふと空を見上げた。

曇天だ。

太陽は見えなかつた。

当て所なくさまようシゲルは、いつの間にか人通りの殆ど無い道に迷い込んでいた。

孤独と静寂が、考え方には丁度良かつた。

シゲルは一人、己の心と向き合つていた。

——人にも神にも、心から感謝された。

手から零れ落ちてしまつたと思つた人々は、最初から死体も同然の状態だつたらしい。気に病むことは無い。

どれほどのレベル3患者を救つたことか。もはや数えるの億劫なくらいだ。  
誰にもはばかることなく、胸を張れる結果だ。

——だというのに、なぜ今、自分はこれほど落ち込んでいるのか。

シゲルは考える。

……俺は、音楽をやれるだけで満足だつた。

前世から——こつちの世界に来てからも、ずっと。

だけど最近になつて、不思議と前の世界の音楽ばかりを思い出しやがる。

ああ、そうだ。色んな音楽があつた。ロック、ポップス、ヒップホップ、R&B、レゲエ、ジャズ——他にも沢山、数えきれないほど。

あつたんだよ。あの世界には。

——タツヤ、武一、麗。みんな元気でやつてつかな。あれだけのプレイヤーなんだ。きっと今頃、すげえライブの一つや二つこなしてるとかもしれねえ。

もう俺には、聴きようもないけど。

ああ、チクショウ。

もう少しだけ、時間があれば。

あんな病気にさえ、からななければ——

「……あ」

そこまで考えて、俺は気付いた。

俺が何故だか無性に助けたかったレベル4の患者。その特徴に。

——精々40歳手前で、ベッドに縛り付けられたまま、やりたいことを何一つやれなくなってしまう。

思い当たるヤツが一人いた。

——俺だ。

ああ、そうか、俺は……  
皆を救いたい、なんて聞こえの良いことをいいながら、結局のところ——

……そうだ。

俺は。

俺は！ 俺を救いたかったんだ！

死にたかなかつた！ あつちの皆に聞かせたい曲が、まだまだ山ほどあつた！ 世界中に溢れかえるあらゆる音楽に、いつまでだつて触れていたかつた！ 駐染の面子で、もつともつとライブをやりたかつた！

死に際のアンコールにだつて応えてねえよ！

これからだ！ —— これからだつたんだ！

—— だからせめて、こつちの世界で、同じような奴らを助けようと思つたんだ！

そうさ！ 音楽しか頭にねえ俺が、柄にもなく、使命感に燃えてたんだ！

俺は、俺みたいな奴らを助けてやつて——「見ろよ、俺が死んだおかげだぜ」って、俺に言つてやりたかった！

「あの世界の音楽に触れられなくなつたことには、ちゃんと意味があつた」と！

代償行為に過ぎなくとも——

俺は！神様の勘定に入つてなかつた奴らこそ、救いたかった！

あの日の俺こそを——！

「ははは……！」

乾いた笑いが漏れる。

「笑えるぜ、弁天様……！」

百点満点？

こんな、テメエのことしか考えてねえヤツが？

「こんなクソ野郎の——どこが、百点満点だ！」

自己嫌悪が、シゲルに衝動的な行動をとらせた。ギタリストの命とでも言うべき右手に拳を握らせて、手近なプロック塀に叩きつけようとする。

止めるものはいない。

振り上げた拳が、勢いよくプロック塀に振り下ろされる——

——その、直前に。

前世から続く経年劣化に、急激な動きがトドメとなつたのか——

ギターケースの金具が、嫌な音と共に弾けた。

ショルダーストラップを繋ぎ止めていた、最も頑丈で——まず壊れることのないハズの部分が。

「——ッ!」

結果、シゲルの拳が振り下ろされることはなかつた。

それどころではない。

咄嗟に動きを止めたシゲルの視線は、宙に投げ出されるギターケースに釘付けとな

る。

ギターケースは勢いよく宙を舞うと、ざりざりとアスファルトを舐めた。

「わ、悪い！」

殆ど反射的に、シゲルは謝罪の言葉を述べて、ギターに駆け寄った。

不自然なほどに吹き飛んだギターケースは、そのネット部分を電柱にぶつけて止まつていた。

シゲルは顔面蒼白となつた。もはやヤケを起こそうとしていたことは覚えていない。

ギターは無事か、と、その一心であつた。

慌ててケースを開けたシゲルは、ギターに傷が無いかチェックしようとして——不意に動きを止める。

ケースはしつかりギターを守ってくれたのか、パツと見て分かる損傷はない。安堵に胸を撫でおろすかと思われたシゲルは、しかし訝し気には眉を顰めていた。

〔〕

シゲルはなぜか、ギターに手をかけたまま硬直している。

——そして、ほんのわずかな時間をおいて、

「……誰、だ？」

シゲルは困惑と誰何の声と共に、どうしてか辺りを見渡した。

薄暗い路地裏には、当然誰の人影も無い。

やがてシゲルの視線は、エレアコへと戻っていた。

シゲルはじつと、前世からの相棒を見つめると――

声なき声に耳を澄ませるかのように、目を閉じた。

――やがて。

「……前を？」

シゲルはぽつりと呟くと、導かれるように視線を上げた。

ネックが指し示す方向を見れば、そこにあるのは何の変哲もない電柱だ。少しだけ変わっているところをあげるとすれば――手作り感満載の張り紙が一枚。

『蓬莱第四高等学校・第一回文化祭のお知らせ！』

そう書いてある。

日付は今日だつた。

## 第32話

神宮寺真美視点

「どうでしたか……？」

「…………テージ裏に仮設された控室——といつても四方に横幕の付いたただのテントだけど――に帰ってきたヨツシーに、理子ちゃんが恐る恐る尋ねる。

「…………いやー、スゴイ盛り上がりだよ。あたしのドラムセットも大活躍」

観客席の偵察に行っていたヨツシーは笑いながら答えたけど、その笑みは誰がどう見て?も引きつっていた。

引きつった笑みの理由は明白だ。盛り上がれば盛り上がるほど、それはそのまま後続へのプレッシャーとなつてのしかかつてくるから。

そう。校庭の仮設ステージは、今大盛り上がりを見ていた。正直偵察なんかに行か

なくても、歓声の大きさでわかつちやう。

今日はわたしたちにとつての大一番。蓬莱第四高校における、記念すべき第一回目の文化祭の日。

昏睡病から解き放たれ、エネルギーを持て余していた私たち学生によつて提案され、糺余曲折の果てに府まで巻き込んだ大イベントとなつた文化祭本番の日だ。

半日が経過して、文化祭は今のところは大成功といつても過言ではないと思う。

クラスごとに模擬店を開いたり、創作物を展示したり、楽器の演奏を披露したり——そのどれもが活況で、『祭』の字に恥じない盛り上がりを見せている。

お祭り効果が提供される軽食なんかの売り上げはかなりのものみたい。府肝入りのイベントになつたから、かなりの予算があつたのもクオリティアップの一因かな。

模擬店も凝つた造りに出来たし、食材も良いものが仕入れられた。目玉イベントに使う放送機材に関しては、なんと蓬莱テレビから最新のものを借りることすらできた。来場者を増やすためにあちこちの媒体で宣伝もされて、驚くべきことにトライアングルラジオでもちよつとだけ触れてもらえた。

私たちもあちこちのお店にお願いして張り紙をさせてもらつたりしたから、それも効果があつたと思いたい。

お姉ちゃんも「張り紙手伝うよ!」って言つて休日に張つてきてくれたんだけど——

後で回収に行かなくちゃならないから場所確認したら、狭い路地とかだった。心当たりのお店にはとっくに張り紙がされていたらしい。

野良猫くらいしか見ないよあんなとこ。自分で回収してもらおう。

とにかく学校ぐるみで予算たっぷり、宣伝バッヂの歩行者天国をやつてるようなものだから、そりやー盛り上がる。

生徒たちも来場者も力いっぱい楽しんでるみたい。うんうん、大変結構！

でも、人生最大の緊張を迎えてる面々もいる。

具体的には、文化祭の目玉となるイベント、学生による『ライブ』。その出演者で

「なんで、なんで大トリを務めるハメになっちゃったんですか……」

「真美が悪いんだよ……」

「た、確かにくじ引いたのはわたしだけど！ 今更そんなこと言つてもしようがないでしょ！」

——厳正なるくじ引きの結果、大トリを務めることになつたわたしたちのことだね！

「——ま、まあそんなに緊張することないって！ 所詮学生のパフォーマンスだつてことはお客様みんな分かつてるんだから」

肩を落とす理子ちゃんと、じとつとした目を向けてくるヨツシーカラ視線を逸らしながら私は言う。

「で、でも、ライブの反響次第で来年以降『文化祭』が開催されるかが決まるつて噂が」「いやあ、流石に素人ライブの出来でそんな大事なこと決めないでしょ」「でも府からの予算がなくなる、なんてことはあり得るんじやないの？」

ヨツシーカの疑問の声を、私は笑い飛ばす。

「あはは、大丈夫大丈夫。文化祭自体がこれだけ盛り上がってるんだからさ、」

「——あつたとしても、予算の減額くらいでしょ」

「それ充分大ごとじやん！」

ヨツシーカがそう突っ込んで頭を抱えて、理子ちゃんは涙目で詰め寄つてくる。

「わ、わたしたちのせいで来年の文化祭がしょっぱくなっちゃうなんてやだよ！・どつ、どうしよう真美ちゃん」

理子ちゃんががくがくと私を揺さぶつてくるけど、

「どうするもこうするも……練習してきたことするしかないでしょ！」

私としては、そう言うしかない。

「今からでもコピーにするつて手もあるよ？ほら、口ケツトあたりは皆やれるでしょ？」  
「ゆるせーん！」

ヨツシードの逃げ腰にはもちろんノーを叩きつける。

高校生活最後にやつてきた、こんな大舞台！一步でも退いたら女がすたるつてもんでしょう！

「でも真美ちゃん、観客さんつてきつとシゲル様の曲だからこれだけ盛り上がってるんだよ？ここで私たちが『オリジナル楽曲』なんてやつたら……」

「大滑りしそうだよね」

「大トリで大滑り！ド派手で結構なことじやない！」

私はそう言つて胸を張つてみせる。

「確かに、私たちの作つた曲は拙いかもしない！っていうか比較対象がどうしてもシゲル様になつちやうから、ハツキリ言つて拙いよ！演奏する私たちだつて、楽器練習してまだ一年経たないし！」

「じゃ、じゃあ——」

「でも！」

「皆で曲作るのも、歌詞書くのも、練習するのだつて、最高に楽しかつたでしょ?！」

「それは——」

「否定できない、けど」

「シゲル様は言つてたよ。『上手い下手は関係ない。樂しければそれが最高の音楽だ』つ

て

「みんなで『ほうき星を捕まえて』を練習してた時間が、わたし、最高に楽しかった！だからきつと、出来栄えなんか関係なくて——」

——熱弁の最中、私の脳裏を過ったのは、三人で曲作りを始めた時のこと。

『ねー真美。このタイトルよく分かんないんだけど……なんでほうき星を捕まえるわけ？音楽と何の関係があるの？』

『え？ だつて、ほうき星——流れ星ってのは願いを叶えるものでしょ？』

『あー、うん。まあ迷信だけどね』

『で、今世界中の人の願いを叶えてくれたのは、シゲル様の音楽だよね』

『そうですね……昏睡病をなんとかしたい、という人類共通の願いを、シゲル様の音楽は叶えてくれました』

『そようそよう！ だから、タイトルのほうき星っていうのは——』

「これが私たちの、『最高の音楽』なんだよ！」

「こーんな大舞台なんだよ？私たちが掴む『ほうき星』を、みんなに見せつけてあげようよ！」

私は二人の目を見ながら、本心だけを語った。

——バンドは一心同体。一人欠けたら成り立たない。  
だから、私は二人を信じるしかない。

「……やれやれ。真美は言つたら聞かないからなあ」  
ヨツシーゲ肩を竦める。

「——うん。そうですよね、真美ちゃん。その為に、頑張つてきたんだもんね！」  
理子ちゃんが、ぎゅっと拳を握りしめる。

よし、二人とも覚悟を決めてくれた！  
これで——大滑りしたとしても、ダメージは三分割されるだろう。

私が心中でやりと笑うと同時に、ステージで鳴り響いていた曲が止まり、大きな

拍手の音が響いた。

いよいよ私たちの前のバンドが、曲をやり終えたんだ。

「あー、緊張したね！」

「ホントに！」

よろめくようにして控室に引っ込んでくるのは、明日花ちゃん、雪子ちゃん、麗佳ちゃん——見慣れた友人たちの顔だった。

「おっ、嘔吐しそうでしたわ……！」

ふらふらしながら机の上にフライングVを置いて、麗佳ちゃんがすごい台詞を吐く。「おつかれー。ボーカルもギターもすごかつたよ麗佳ちゃん。テクニックは第四高校一だよね」

「ふ、ふふん。もっと褒めてくださつてもよろしくってよ？」

麗佳ちゃんはおほほと笑つて胸を張る。

でも、その顔色はまだ白いまだ。

「……やつぱりプレッシャーすごい？」

私の問いかけに、三人は揃つて頷いた。

「嘘吐いてもしようがないから言うけど、もう足ガクガクになるよ」

「観客席のツッキーの笑顔が恨めしかつたわよ」

「……シゲル様の楽曲を芸として観客に披露するのですから、ミスは許されませんもの」「そこまで思い詰めてるのは少数派だと思うけどね」

麗佳ちゃんのセリフに、明日花ちゃんと雪子さんは苦笑いを浮かべる。

まあでも、麗佳ちゃんの言つていることは一理あるんだと思う。校内で行われたりハーサルとは比較にならないほど、出演者の皆はガチガチだつたから。

……流石の私も、出番を目前にしてかなり緊張してきちゃつたよ。

そんな私の様子を見て、麗佳ちゃんはつんとすました顔で腕組みした。

「でも――貴方は精々リラックスしてやればよろしいのですわ。だつてシゲル様の曲じやないし。どれだけミスしても「そういう曲です」って言えばまかり通りますわよ」無茶苦茶なことを言う麗佳ちゃんに、私はちよつと笑つてしまふ。

ふふ、でも確かにそう考えたら気が楽かも！

それに、曲を披露するのも今日が初めてつてわけじゃない。しょっちゅう学校の体育馆で練習してたし、リハーサルもしたから、校内の皆には結構聞かれたりしている。

その時の皆の反応から考へるに、完全に無謀な挑戦つてわけではないはず！

……多分、きっと。

でも、シゲル様の曲と比べたらなあ……

ちよつと顔を覗かせた弱気がまた表に出ていたのか、麗佳ちゃんは私の表情をちらりと伺つて、

「……わたくし、結構好きですわよ。『ほうき星を捕まえて』

そっぽを向いて、小さな声でそう言つてくれた。

「——ありがと！」

「ふん！」

麗佳ちゃんは顔を赤くすると、慌てたように足早に去つていく。テーブルにフライングVを置き忘れたまま。

ふふふ。すごい照れ屋さんだよね、麗佳ちゃんつて。  
でも、最後に最高の弾みをつけてくれた！

「あー、麗佳ちゃん待つて待つて

「頑張つてね、真美ちゃん！また今度一緒にカラオケ行こうね！」

「うん！楽しみにしてる！」

控室を去つていく皆を見送つて——いよいよ、私たちの出番がやつてくる。

ヨツシード理子ちゃんが真剣な表情で立ち上がる。うーん、これだけシリアルスな顔をした二人は珍しいよ。やる気に満ちていて期待できる。

——でも、ちよつと足りないものがあるよね！

えーと、どうしたらいいかな。どうやつて引き出せば——あ、そうだ。

「ねえ二人とも。——あのセリフ、言つてみない?」

「え?」

「あのセリフ、ですか?」

「ほら、シゲル様つてよく言つてたでしょ。曲を始める前にさ!」

私の言葉に、二人ともピンときたみたいだつた。

「あー、あれね!」

「なるほど、今にぴつたりのセリフですね!」

二人はそう言つて、花咲くような笑みを浮かべた。

——良し、やつぱり困つた時のシゲル様だよ!これで足りないものは一つもない!

——私たちは手を重ね合わせると、力強くその言葉を口にする。

「[?]楽しんでいこうぜ!」」

何となく足を向けてしまった蓬莱第四高校の校庭で、俺は後悔していた。文化祭。思い出深いイベントだつた。大勢の前で演奏したのは、文化祭が初めてだつた気がする。

——あの時、俺は何を考えて演奏していたんだつたかな。

古い話だ。どうにも思い出せない。

高校生たちが、初々しい演奏を披露している。

それ自体は、素晴らしいことだと思う。たつた一年足らずの経験しかないとは思えないほど上手な女子高生もいる。

よほど熱心に練習したんだろうな。音楽に夢中になつてくれたことは、素直に嬉しい。

だが――

「……俺の曲、俺の曲、俺の曲か」

どこまでいっても、そればかりだ。

プレイヤーが違うわけだから、そりやあそれなりの楽しみ方はある。

だが、結局のところは聞きなれた、やり慣れた曲だ。

どの曲をとつても、この一年でうんざりするほど演奏したから——初心者らしいちよつとした拙さが、妙にひつかりやがる。

こんなつまんねえこと、考えたことなんてなかつたはずなのに。

『終わらない旅』をやり終えて、ほつとしたように頭を下げる女子高生たち。

確かに目立つたミスはなかつた。そう。ミスはなかつた。結構難しい曲だからな、大したもんだ。

——だが。

……。

気が付けば、次で最後らしい。

ステージに上がつたのは三人組。オーソドックスなスリーピースバンドだ。取り立てて、変わつたところは無いように見える。  
きつとまた、俺の曲をやるんだろう。

……。

ああ、なんだか――

俺は、生まれて初めて、音楽が――

「えーと、演奏する前に、皆さんに謝らなくてはならないことがあります！」

――急に、ギターの女の子がそんなことを言い出した。

これまでの出演者は、こんな風に口上を述べることはなかつた。観客たちも首を傾げていて。

「シゲル様の曲を楽しみにしていた方、申し訳ありません！これからやる曲は、私たち三人が考えた『新曲』です！」

――え？

「最後の最後に肩透かしになつてしまふかもしませんが――精一杯頑張りますので、聞いていただければ幸いです！」

……新曲？

新曲つて――マジで？

「いきます！『ほうき星を捕まえて』！」

——マジかよ!!

三人の女子高生たちは、元気いっぱいに演奏を始めた。

知らねえナンバーだ。

知らねえイントロだ。

当たり前だ——『新曲』なんだから!

ははははっ!」

鼓動が高鳴る。

イトビートが魂を震わせる。

ワーワードが力をくれる。

俺は前のめりになつて、『新曲』に耳を傾けた。

楽器たちの音色が、ボーカルの歌声が、俺に色々なことを伝えてくれる。

ドラムは多分今日見てきた中で一番巧いことを。

ベースは平均的だけど、基礎がしつかりしていることを。

ギターはかなり頑張ってるけど、歌も演奏も技術的にはさつきのバンドの娘にちょっと負けちまうこと。

総合的なテクニックを見ると、いくつかのバンドに上をいかれていることを。  
そして――

――細かいこと全部吹つ飛ばす、抜群のグルーヴ感を！

『バレーコードは、苦手なの！』

『明日の私に、任せましょ！』

そんな歌詞に、俺は思わず笑ってしまう。

久しぶりの――心からの笑いだ。

ははは！確かにテクはまだまだよな。

だけどよお、お前さんたちには、そんなの関係ないくらい――

『――今日のところは、』

『自慢のハートで、勝負を賭けるわ！』

！

そう、 そ う だ よ！

何より光る、 そ い つ が あ る ゼ！

お、 サビく る か ！？

肝心要だぞ、 ど う な る ！？

『準備オツケー、 今行くわ！』

『流れる星に、 憧れて！』

『ギター一本担いで、 夜を駆けだすの！』

——いいぞ。

『準備オッケー、今行くわ！』

『流れる星を、捕まえに！』

『パワーコード一つで、胸を張つてやるの！』

いいぞいいぞ！

分かるぜ！今、最高に楽しんでるのが！

音楽が、面白くてたまらないのが伝わってくる！

ああ、痺れちまうよ！

——今のお前たち、

『準備オッケー、今行くわ！』

どんな粗も蹴散らすくらい——

『——流れる星を、追い越して!!』

——ノッてるじやねえか!!

おお、ギターソロ！ははは、やるじやねえか！目いっぱい背伸びしたな！

——あー、おいしい！ブリツジミュート力み過ぎてるんだよお前さん！でもいいぞ、最高だ！

本当に、最高だよ！

つと、そろそろ終わっちまうか！？

多分そろそろ、最後の歌詞が——

『せいいっぱい、歌つて！』

『めいいっぱい、奏でて！』

『いつか！誰かの、願いになるのよ！』

|。

ギターが最後の一音の余韻に震えた。

笑みを浮かべた観客たちが拍手を始める。大きな拍手だが、熱狂的な拍手ではない。微笑ましいものをみた、といった感じの拍手だ。

確かに、曲としての出来栄えは良くも悪くも高校生。楽器を初めて一年と考えれば十分な出来栄えだが、観客を熱狂させるほどの力はまだ無い。

だから、狂つたように手を打ち鳴らしているのは俺だけだ。

——ああ、なんて、なんて楽しかったんだ！

音楽つてのは、やっぱり死ぬほど——いいや、死んでも楽しい！！

心の底から、喜びが溢れてくる！居ても立つても居られねえ！

全身に漲るエネルギーが、弾けて溢れちまう！ラストライブの奇跡の比じやねえ！

——なんてこつた！女子高生が、たつた三分で俺を救つてくれた！

ライブ前のくさくさした気分は、もう影も形もない。最高のロックンロールが、宇宙の果てまでぶつ飛ばしてくれた。

俺は喜びに天まで飛び上がりそうな身体を必死に押さえつけ、俺を救ってくれたヒーローたちの顔を見る。

いつの間にか空は晴れ渡っていた。降り注ぐ秋の陽ざしの下、三人は満面の笑みでハイタツチをしている。

その顔には、使命感なんてものは一切無い。誰かを救いたいだなんて覚悟も見えない。

——ただただ、楽しそうだ。

……そうだ。

そうじやねえか！

それでいいんだよ！

なんで俺はこんな簡単なことを——音楽のイロハのイを忘れちまつてたんだ？

頭の中の霧が晴れたようだつた。

おれはうじうじしていた五分前までの自分に言つてやつた。

ごちやごちやごちやごちやうるせえ！小賢しいんだよ俺の癖に！終わつちまつたこ

とグダグダ言つてどーすんだよ!

『世界中に溢れかえる音楽に、いつまでだつて触れていたかった』だあ？  
確かに俺は死んだ。それはもうどうしようもねえ。今更あつちの世界で復活もでき  
ねえから、向こうの音楽に触りようもねえ。

でもよ！弁天様のお蔭で俺は今ここにいて、心臓が確かに動いてやがる！未来がある  
！わくわくする音楽なんて、次から次へと生まれてくるんじやねえか？!  
だつてよ、ただの女子高生がこんな新曲書き上げたんだぜ？！それも、たつた一年足ら  
ずでだ！

それなら、来年はどうだ？再来年は？五年後は？十年後なら！

きつと、絶対——俺の知らねえ最高の音楽が、世界中に溢れてるぜ！！  
まだ見ぬ新曲が未来で待つてるとと思うと、胸の鼓動が駆け足しやがる！

『馴染の面子で、もつとライブをやりたかった』？

しゃらくせえ！面子はこれからひつつかまえて——今日にでも、最高のライブをぶち  
かましてやるぜ！

レベル4患者相手にな！

そうさ！おれの悪あがきはここからだぜ、弁天様よ！確かに今、患者の魂とやらは『そこ』になくて、機械に生かされてるだけかもしねえ。弁天様が言うんだから、間違いねえんだろう。

——でも、『どこか』にあるつてんなら、取り返してやればいいじやねえか！

例の神様が、どこにあいつらの魂をもつていつちまつたが知らねえが——

今の俺の音樂はきつと、何もかも超えてそこまで響くぜ！

ああ——我慢できねえ！

今すぐにでも、レベル4患者の元へ走つていきたい！

——だが。

今にも特療に向かつて走り出しそうな足を、俺はまだ必死に抑える。

まだだ。まだ早い。

俺の最高の音楽をやるためには、ピースがちよいと足りてない。患者の元へ駆け出す前に、そつちの都合をつける必要がある。

だからまずは、その準備の為にこの学校を後にしなくてはならない。

——とはいえ、だ。

この寄り道を見逃したら、俺はもう櫻崎シゲルじやねえぞ！

ついに俺は駆け出した。  
ステージへ向かって。

## 第33話

神宮寺真美視点

結構盛り上がりつつたじやん！

そりやあ熱狂つてほどのテンションじゃないし、今日一番の盛り上がりかつていうと  
違つかもしれない。

も、皆喜んでくれてる。それだけは確かだ。

わたしたちの作った『最高の音楽』を、みんなも楽しんでくれたんだ。

私たちは顔を見合わせると、会心の笑みを浮かべて——示し合わせたように、力いつ  
ぱいハイタッチした！

うん、満足！出来過ぎなくらいだ！きっと一生の思い出になる！

見てる人たちにとつてもそうなればいいけど、流石にそれは高望みかな。  
でもほら、すつごく喜んでくれてる人も一人いる！

ギターを背負って、目深に帽子をかぶったその人は、口元に喜びの弧を描いて

凄い勢いで、ステージに向かつて走つてくる!!

ええっ、何?! ちょっと興奮しすぎじゃない?!

その人は一足飛びにステージに飛び上ると、帽子を取つ払つて吼える。

「最ツ高だつたぜえーツ!!」

——え?

シゲル様?

……

……

……

あつ、なんだ夢じやん。

もー、そーいうことかー。道理で都合のいい展開だと思った。歌も演奏も観客の反応もちよつと上出来すぎたよねー。

まあリハーサルが出来たと思えばいいか。

ディティール甘いよね、私。だつて今海外にいるシゲル様が蓬莱にいるわけないんだし。ま、夢だと思えばシゲル様が登場するのは当たり前か。

シゲル様は私に向かつて何かを話してくれるんだけど、一瞬でパニック状態になつた観客たちの歓声がすごくてなんにも聞こえない。観客さん、私の夢なんだからその辺は配慮してほしい。

苦笑いしたシゲル様は、ステージ上の予備マイクを手に取る。

「突然乱入しちまつてすまねえな！でもよお、お前さんたちがあんまり俺を痺れさせるもんだから——しようがねえよな！」

うわあああ！シゲル様の生声だ！夢だけど！

観客たちは更に黄色い歓声をあげたので、シゲル様は観客席を向くとにやりと笑う。うおお、笑顔が眩しすぎて直視できない！

「櫻崎シゲルだ！呼ばれてねえのに参上したぜ！」

間違いなくこの日一番の歓声が、会場を揺るがした。

耳をキーンとさせながら、私もマイクを使つてシゲル様に語り掛ける。こうしないと聞こえないんだよ。

「シゲル様！まだ海外におられたんじやないんですか？！」

「へへ、最高の音楽が聞こえたからな！慌てて海を飛び越えてきたんだよ！」

そんなことを言うシゲル様にやられてしまつて、卒倒する観客が現れだした。あー、私の夢とは言え勿体ない。生シゲル様なのに。

あ、でも大丈夫だ。隣の観客が『一生後悔するわよ！』って言つて往復ビンタしてる。直ぐ目覚めるだろう。

「いやあ、みんな上達したな！実は結構最初の方から聞いてたんだが、誰も彼も初めて一年とは思えない腕前だつたぜ！最高だつた！」

「でもよ、ちよいと緊張しすぎてたな！みんなミスをしないように、つて頑張つてたのは分かつたんだが——まだまだミスなんか気にしないでいいんだよ！まずは手前がライ

ブを楽しむんだ！喜びってのはプレイヤーから伝わってくるのさ！」

「その点、この三人は百点満点——いや、百二十点だつたぜ！」

「俺も最高に楽しませてもらつたよ！ありがとな！」

「こちらこそありがとうございます！光榮です！」

シゲル様の手放しの絶賛に、私は頭を下げて感謝を伝える。

うーん、これが現実だつたら私は過呼吸起こして倒れてるね。理子ちゃんとヨツシーが気絶しそうな顔するのがなかなかリアル。

「——で、物は相談なんだがよ、」

おおつ。

シゲル様のその言葉に、私は『きたきた！』と前のめりになる。

これから先の展開は、簡単に想像できる！きっと私の望みそのままに、このステージを使つてシゲル様のライブが——

「さつきの曲、もう一度聞かせちゃくれねえか?!」

あれ？!

「え？!もう一度ですか？」

思わずおうむ返ししてしまう。だつてこんなのは予定はない！

どうなつてるの!? 私の夢なのに私の望まない方向に進みだしてるよ?!

ここはシゲル様が一曲披露して会場どつかーんつてなる筈では?!

「おう、アンコールだ！頼む！」

でもシゲル様は拝み手してまでそんなことを言つてくる。

どういうことよ私！いい加減にしてよ！多分台本にないでしょこんなの！

「さ、流石にそれは緊張しちゃいます！」

だつてシゲル様本人の前で自作の曲を披露するつて——およそ考え得る限り最高の  
プレッシャーじゃない？現実じゃないとはいえ流石に尻込みするよ！  
でもシゲル様は、

「大丈夫だつて！自慢のハートで、勝負をかけてくれよ！」

私の歌詞の一部を引用してそんなことを言つてくる。

うひー、顔から火が出るほど恥ずかしい。夢じやなかつたらとても立つてはいられな  
いよ！

まあでも、ほかならぬシゲル様がそうおっしゃつてくれてるんだ。期待には応えたい  
！どーせ失敗しても現実には影響ないし。  
……だけど、一つ大きな問題があつた。

「いやー、シゲル様の頼みとあれば百回だつてやる所存なのですが、いかんせん……」

私はそう言つて両手をシゲル様に差し出す。

——めつちやくちや震えてるんだよね、私の手。夢なのに。

まるで肉体が何かを訴えかけてるみたい。

「……すっげー震えてるな。ビブラートかかっちゃうぞ」

「あはは、なんかこの調子で。とてもギターが弾けるとは——あ！」

そこまで言つて、私は閃いた。

なるほど、そういうことか！ そういう展開ね！

図々しいけど夢なら許されるってことかあ！

「シゲル様、代わりに弾いて下さいませんか？！私歌に専念しますから！」

私はそう言つて、ギターを差し出す。

シゲル様はちょっと呆気にとられた様子だつたけど、

「——いいのかよお？！」

直ぐにそう言つて、大喜びで私のテレキヤスターを受け取つてくれた。

うーん、すごいことが起きている！ 私たちの作った曲をシゲル様が弾いてくれるなんて——これつて全ての音楽家の到達点なのでは？！ 私の想像力つて私が思つてるよりも氣宇壮大かつ厚かましいみたい！ えへへ。シゲル様がわたしたちの曲をどう料理して

くれるか、こりやもうワクワクが——あ。

——しまつた。楽譜が無い！

いくらシゲル様でも、初見の曲だ。スコアに目は通さないとね。あー、もう、控室まで取りに戻つたんじやテンポ悪いよ。しつかりしてよね私。

「すみませんシゲル様。今控室からバンドスコアを持つてきますので——」

私が頭を下げて謝ると、シゲル様は「わはは」と笑つて——  
「必要ねえって。俺を誰だと思つてんだ？」

説得力の塊のようなセリフを口にした。

——そりやそうだよね！わたしどうかしてた！

よし、じゃあ準備オッケー！さあ行こう、と私はヨツシーザ振り返つて——

顔面蒼白で震えているバンドメンバーたちに気付いた。

「……どうしたの二人とも？ほらヨツシー、カウントカウント」

「「どうしたもこうしたも！」」

二人は顔色を失つたまま食つてかかる。

「わたし今カウンタやつたら16ビートになるよ！」

「なつ、なんで真美ちゃんはシゲル様と普通に会話できるの?!おまけにギターを渡して演奏を頼むなんて——」

理子ちゃんがそんなことを聞いてくる。うーん、いかにも現実の理子ちゃんが言うな常識的なセリフ。

まあ、質問の答えはシンプルだよね。

「だつてこれ私の夢だし」

現実じやないんだから、どれだけ厚かましいお願ひしたつて問題ないんだよ。

「

わたしの答えに、理子ちゃんは何故だか一瞬白目を剥いた。

「——ゆ、夢じやない!夢じやないよ真美ちゃん!」

「こんなの夢に決まってるでしょ!ほら!全然痛くなひもん!」

ぎぎぎ、と自らの頬をつねりながらわたしは言う。ふふふ、なんの痛痒もかんじない。

「アドレナリンが五体を死兵に変えてるんだよ!正気に戻つて真美ちゃん!それ明日超痛いヤツだよ!」

理子ちゃんはそう言つて必死に私の身体を搖さぶつてくるけど、ヨツシーゲそれを止めた。

「いや理子ちゃん、このままにさせ……下手に正気に戻つたら即座にぶつ倒れ

るよコイツ。そしたらライブどころじゃない！」

据わった眼をして言うヨツシーに、理子ちゃんは息を呑む。

「よ、ヨツシーさん、やるつもりなんですか……!?」

「……成功するにしろ失敗するにしろ、一生の思い出になる！だつて、シゲル様と一緒に演奏できるんだよ?!」

「うつ…………そ、それは、そうかもしませんが…………！」

「……それにね、理子ちゃん。これはチャンスなんだ」

「チャンス？」

『私はシゲル様の生ライブ聞いたことあるけどー』とかマウントとつてくるお母さんに逆襲するチャンスなんだ……！」

「……」

なんか理子ちゃんがヨツシーを冷めた目で見てている。多分しようもないことをいうお姉ちゃんを見るときのわたしの目だ。

もし、なんでもいいけどぐだぐだやつてないで始めようよ。シゲル様は今のところ私のギターのセッティングを確認してるみたいだけど、夢の中とはいえお待たせしちゃいけないでしょ。

そんな私の考えが通じたのか、ヨツシーは一度大きく深呼吸をすると「よろしくお願

いします!』とシゲル様に頭を下げて、スツールに座り直した。

理子ちゃんはシゲル様とわたしを交互にみると——自らの両頬をばしんと叩いて、こちらもシゲル様に頭を下げてから定位置に戻った。いざという時に肝が据わるところが夢ながら理子ちゃんらしい。

よしよし、これで本当に準備オッケーだ。

シゲル様に『準備いいですか?』と目配せをする。

ワインクが返ってきた。

心臓が跳ね上がる。現実だつたらときめきで心不全起こしているよ。

ヨツシーのステイツクがカウントを始める。

さあ、文字通り『夢の』アンコールの始まりだ——!

すごい。

すごいすごいすごい！

すごい——楽しい！！

シゲル様の生ギターは、想像以上の破壊力！そもそも私用にセツティングされたギターで、弦高なんかもかなり低めだと思うんだけど——まるで楽器の声が聞こえてるみたいに、完璧以上に弾きこなしている！

そしてそれ以上に驚異的なのが、明らかに二人とは隔絶した技量を發揮しているのに、曲を全然壊していないつてこと！

シゲル様は本当なら一人だけでどこまでも走つていけるはずなのに、ヨツシーと理子ちゃん——いつちやあなんだけどまだまだ稚拙なリズム隊に、喜んで合わせてくれている！

それにしても、初めて一緒に演奏するつていうのに、こんなにぴったり息を合わせられるものなの？！

これつて文字通り『神業』だよ！

だつて、二人の演奏は活き活きとして、まるで一秒ごとに上達していくみたいだもん。「それさつきやつてよ！」って言いたくなるくらい最高の出来栄え。一つになつた音楽

は、天井知らずにクオリティを上げていく。

みんなと肩を組んだシゲル様が、行ける行けると引っ張り上げてくれるんだ！わたしの歌も、間違いなく絶好調。声はどこまでものびる。リズムも音程も外れる気がしない！

つていうか、今ならちよつとくらい外しちやつても問題ない！最強状態だ！パワーで押し切れる！

もう、夢みたいに楽しい！あはは、当然か！夢だもん！  
——サビにも力が入るつてもんよ！

『準備オッケー、今行くわ！』

『——流れる星を 追い越して!!』

んあああああ！

シゲル様がとんでもなく美しくハモってくれる！  
頭の中で弾ける火花のせいで前が見えないよ！

——おつと、そろそろギターの見せ場！

「——ギターソロ、お願ひします！」

わたしはシゲル様に叫ぶ。

「任せとけッ！」

世界一頼もしい声が返ってきた。

満面に笑みを浮かべたシゲル様が、恐ろしいテクニックを発揮した。

一年近くかけて考えたギターソロが、完璧にコピー——いや、コピーどころの話じやない。

べらぼうに痺れるアレンジが施されている！

なにこれ!? 私こんな滅茶苦茶カツコいいギターソロ書いた記憶ないけど?!?

これ私の夢つてことは、こんなすごいギターソロを考えることのできる私の才能はもしゃすごいのでは?!

起きても覚えてられるかな！

再現には100年くらいかかりそうだけど！

——つていうかヤバい！ テレキヤスターちゃんの音色にとろけすぎて腰抜ける！

耐えなきや——アツダメだ抜けた。すぐ抜けた。

ステージにへたり込んでしまった私だけど、マイクは離していない。

ええい構うもんか、あとちよつとだ！このまま歌いきつてやる！

『——いつか！』

『誰かの！』

『願いに、なるのよ！』

スピーカーが、私の歌声を伝え終わると——

観客たちの、大歓声が返ってきた。

そのほとんどはシゲル様に向けられているんだろうけど——  
わたしは生まれて初めて、全身に鳥肌が立つのを感じていた。

ああ、気持ちいい！

最高に楽しかった！！

夢なのが本当に惜しいよ！

「痺れる歌だつたぜ！」

へたり込んだまま余韻に浸っている私の手を取り、シゲル様が立ち上がらせてくれる。

「わわ、こ、光榮です！」

えへへ、夢ならではだ。うーんリアルな感触。起きても洗わないでおこう。

「……いつか誰かの願いに、か

ふと、シゲル様が口ずさむ。

歌詞の最後の部分だ。何か引っかかるところがあつたのかな？と私はちょっと不安になる。

でも、シゲル様は、

「——もう俺の願いだよ」

私の手を握ったまま、そう言った。

「え？」

その言葉の意味をはかりかねて首を傾げる私の背中を、シゲル様はぱしんと叩いて——

「センキューヒーロー、つてことさ！あとでサインくれよな！」

至近距離で、にかつと最高の笑顔を弾けさせた。

夢と言えど死にそう。

でも、サインって署名？流石夢だ、なんかわけわかんないけど——

こんな夢ならずつと見ていいな！

万雷の歓声と拍手の中、私たちはシゲル様を伴つて舞台袖に引っ込む。

そして。

わたしの思いが天に通じたのか——なんと、この夢は控室に戻つても覚めなかつたのだ！

「シゲル様のサインすつげーかつこいい。なにこれ。洗練されたデザイン性を感じる……ダメ元でこっちの楽器にもサイン頼んだのはウルトラファインプレーだったのでは？」

「本当に良く仕出かしたよ真美。だつて量産型の楽器が重要文化財になつたんだもん。大変なことだよこれは」

「えへへ。……ところでヨツシー、ドラムヘッドにサインしてもらつても持つて帰れないんじゃないの？ ドラム置き場所ないんでしょ？」

「いやヘッド引つぺがして持つて帰るよ。家宝にするから」

……それ持つて帰られたらドラマ勢の生徒が困るんじゃない?」

「知らん、元々あたしのだ」

「おお、目が据わっている……まあどうせ夢だし別にいいか」  
「そこそ話す」一人を尻目に、俺は手にしたベースにサインをする。

「——理子ちゃんへ、と。これでいいかい？」

「ああああ、ありがとうございます!! 神棚に安置して毎日拝みます!!」

「弾いてやつてくれよー」

ペコペコ頭を下げる理子ちゃんにベースを手渡してから、俺も自分のギターをケースに仕舞う。

そのボディには、三人の女子高生の名前が書かれている。頼み込んで書いてもらつたものだ。

サインを見るたびに、今日の感動を思い出すことができるだろう。何を遠慮したんだか滅茶苦茶小文字だし字は震えてるけど——ま、ご愛敬つてどこだな！

「——あ！」

突然、真美ちゃんが大声をあげた。

その視線の先にあるのは、机の上に乗つたままのフライング▽だ。

「シゲル様つ。よろしければこちらのギターにもお願ひできますか？」

「ん？構わねえけど……名前はまた『真美ちゃんへ』でいいのか？」

「あ、麗佳ちゃんへ、でお願ひします！麗しいに、佳作の佳で」

「お？友達のかい？おいおい、人の相棒に勝手にサインしちゃマズいだろ？」

「賭けてもいいですけど月まで飛び上がつて喜びます。シゲル様の大ファンですから

！」

「はは、そりや嬉しいな。でも油性ペン消せるワックスとかもあるからよ、嫌がつてたら

消してやつてくれよ?」

「そんなワツクスこの世からなくなればいいのに」

「なんだよ」

サインを書き終えるのはあつという間だ。何年も書いてなかつたが、やつぱり体が覚えてるもんだな。

「ほい出来た。——丁寧にメンテされてるけど、何番目にやつたギターだい?」

「私たちの前に、『終わらない旅』をやつたバンドです」

「あー、ありや巧かつたな! 技術的には今日イチだつた、今後が楽しみだ、つて言つといてくれよ」

「ギター渡す時に伝えておきます! きつと喜びますよ!」

「喜びで絶息しちやうんじや……」

「シゲル様原理主義者だからね。その時が麗佳ちゃんの最期の時になる予感がする」

——さて、これで寄り道も済んだ。

最高のライブのおかげで、俺のエネルギーは満タンを振り切つて溢れ出してる。俺はポケットに突っ込んであつたピックをホルダーに収めようとして、

「——お、そうだ」

「ふと思いついた。

「真美ちゃん。これやるよ」

真美ちゃんにピックを手渡す。

「ピック！こ、このティアドロップテレビで見たことがありますよつ。どこにも売つてないヤツだ！」

「あー、試作の段階で大量に貰つたヤツだからな。確かに市販はされてねえのか？」

「あ、愛用品じやないんですか？！いいんですか手放しちゃつて！？」

「おう。まだまだあるし、そつちの気分じやなくてな」

小さなピックを両手で受け取る真美ちゃんに、肩を竦めて答えを返し、俺はピックホルダーから新たな一枚を取り出す。

「——今は、こつちがいいのさ」

握り込むのは、『トライアングル』タイプのピック。

ゲン担ぎつてのが馬鹿にできないのは証明済みだからな。

さて、上手くいけば蓬莱テレビで捕まえられるか？

「と、ところで、シゲル様。今日はその、お忍びですか？お仕事ではなくて？」

理子ちゃんが尋ねてくるのに、俺は頷きを返す。

「おう、休日でな。完全にプライベートだぜ」

「……だとすると、このままここにいるとまずいかもしません」

「えー、何でよ」

眉根を寄せた理子ちゃんが、ふくれつ面で口をはさんだ真美ちゃんに向き直る。

「だつて、観客たちが押し寄せてくる可能性があるから。シゲル様、休日どころじやなくなつちやいます」

「大丈夫だつて、私の夢なんだから。皆都合よくはけるよ」

「真美はちよつと黙つてなさい。後で目覚めのビンタをくれてやるから。——シゲル様、まだ観客たちは混乱状態でしようし、『不敬を働いてはいけない！』と淑女回路が働いているでしようから、控室に押し入るようなことはないと思いますが——理子ちゃんの言う通り、長居は危険かもしません」

「はい。校長先生あたりが、そろそろ恐る恐る訪ねてきそうです」

「おつと、ソイツはまずいな。いつの世も校長センセってのは話が長いからな」

「あー……シゲル様やつぱり御多忙です？この後も用事が？」

真美ちゃんが問うのに、俺はにやりと笑みを返して口を開く。

「おう。今から俺も、お前さんたちを見習つて——」

——喋りながら、脳裏には弁天様の言葉が甦っていた。

『百点満点』

『あなたのライブはおしまい』

——弁天様。そいつはちよいと違うだろ？

だつて——

「百二十点を、取りに行くのさ」

アンコールが、まだじやねえかよ！

# 第三十四話

崎朱里視点

「黄さんのキー・ボードの余韻に、少しだけ身を任せて——ぼくたちは満足げに顔を見合せる。

「——良い感じだつたよね!」

「ええ。バツチリ決まつたわね」

「それで『終わらない旅』も二バージョンいけますねー」

「事の合間を縫つてバンドの練習をするのは、もうぼくたちにとつては日常だつた。練習した曲は番組で披露できるから、趣味と実益を兼ねた素晴らしい習慣だ。

でも、今練習していたのは当面披露する当てのないバージョン。

シゲル様のギターが入ることを想定して編曲されている『終わらない旅』だった。そう。「一曲でもセッションできるようになつてたら嬉しい」と言つて旅立たれたシ

ゲル様の期待に応えんと、ぼくたちは燃えに燃えているんだ。

その燃え盛る情熱のおかげか、曲を覚えるのはかなりのハイペース、だと思うんだけど……

「……」めんね、浅黄さん。負担凄いでしょ？」

ぼくは浅黄さんに謝る。

ぼくと蒼子さんも曲によつては構成が多少変わるからそれなりに大変ではあるんだけど、浅黄さんはその比じやない。すべての曲で役割が変わつてくるからね。ぼくたち二人のペースに合わせるのは、音楽経験者と言えどかなり無茶なんじやないかと思う。

——でも、浅黄さんの笑みに疲労の色は無い。

「うふふ。楽しくやらせてもらつてますよー」

その言葉の通り、心底楽しそう！

うーん、やっぱりキーボードもかつこいいよねえ。なんていうか表現の幅が広くて、自由自在な感じ。ぼくもちよつと触つてみたい。でも音の管理とか切り替えとか難しそうなんだよなー。

……うん、やっぱり当面はベース一筋、浮気無しでいこう。今蓬莱テレビは日の出の勢いで、バンド練習ができるスタジオも増築されたけど——その分番組も滅茶苦茶増えたから、ぼくたちが練習に使える時間は限られてるし。

「このスタジオ十五時までしか押さえてないんだつけ?」

「うーん、消化不良。今ノツてるから、どこかでもうちよつと練習したいなあ」

「まあ、同感ね」

「カラオケボックスでも行きますー? もしかしたら練習室が空いてるかもですよー」

「かなりの幸運が必要そうだなあ」

カラオケボックスの人気はまだまだ衰える様子が無い。店舗はそこそこ増えたけど、練習室のある人気店はいつも満室だ。

「それじやあとりあえずお店まで行つてみて、練習室が空いてなかつたらただのカラオケに予定変更っていうのはどうですー?」

「あ、妙案だね」

「久しぶりに三人でカラオケっていうのも悪くないわね」

うんうん。有り難いことに最近はぼくたちテレビやラジオに引っ張りだこで、中々三人で遊ぶつてことも少なくなつてたもんね。ま、番組に呼ばれるときは大抵『トライアングル』としてだから、ほとんどいつも一緒なんだけど。

でも出来れば練習室が空いてるように祈つておこう。なむなむ。

——ぼくがそんな風に、適当に祈りを送った瞬間だつた。

突然、どがん、とスタジオの扉が開いたのは。

ぼくたちはびっくりしてそちらを見る。なんだかデジヤヴだ。いつかみたいに、また鈴さんが突っ込んできたのかもしれない。

でも、違つた。

今回飛び込んできたのは——

「よう！久しぶりだな！」

世界の英雄だつた。

「「——シゲル様?!」」

薄つすら汗をかき、息を荒らげたシゲル様が、につと笑つて近寄つてくる。

あ、あわわわわ！

ほ、本物?!なんでシゲル様がここに?!ツアーハは予定より早く終わりそうだとは聞いていたけど、まだ海外の筈じや?!

色々な疑問が頭に浮かんでくるけど、ぼくたちは久しぶりの生シゲル様の破壊力に言

葉が出ない。完全に不意を突かれたこと也有つて金魚状態だ。

それに——なんか笑顔が以前にも増して眩しい気がする！っていうか物理的に輝いてない？！久しぶりに会ったからそう感じるだけなのかな？！

でもとにかく、きらきらオーラに圧倒されて身じろぎもできない！

「色々話したいことはあるんだが——その前に一つ聞かせてくれ！」

「は、はい！」

突然現れたシゲル様の突然のセリフに、金縛りから解放されたぼくたちは揃つて首を

縦に振る。こちらも聞きたいことが沢山あるけど、シゲル様の質問が最優先だよ！

「俺が残していくたバンドスコアあるだろ？！十曲くらい書いてあつたヤツ！どれでもいいんだ！通しで出来るようになつた曲ねえか？！」

そのシゲル様の言葉に、ぼくたちは視線を交わし合う。

通しで。クオリティを問わないというのなら、その答えは一言で済む。  
だって、今しがた——

「「全部いけます！」」

最後の一曲をやり終えたから。

シゲル様は、ぼくたちの言葉に一瞬目を丸くすると、

「——すげえな、お前ら！」

最高の笑顔で、そう言つてくれた。

ぼくたちは、その言葉に思わず笑みを浮かべてしまつて――  
「愛してゐるぜ！」

予想外のおまけに、ゆでだこ三姉妹になつた。

駿河凜視点

『――ってわけでおろしく頼むぜ！俺はちよいと三人と合わせてみるからよ！』

「万事お任せください！」

『サソキュー！』

『――晴らしく弾んだ声を最後に、電話が切れた。

私は一度受話器を下ろすと、深呼吸。

ゲル様からの突然の電話。

『凛ちゃん、リベンジだ！押しかけアンコールだ！』

そんな滅茶苦茶なセリフから始まつた会話を要約すると、つまり——  
シゲル様は、昨日の今日でまたレベル4に挑むということだつた。

それも、トライアングルを引き連れて、ライブの規模を拡大して。

疲れ切つたシゲル様を目の当たりにした私としては、本来なら昨日のように引き留めるべきなんだろうけど……

気が付けば、私は二つ返事でその頼みを引き受けていた。

……だつて。

何があつたのかは知らない。

打ちのめされたシゲル様を見てから、たつた一晩しか経つていない。  
でも、とにかく——

シゲル様は、完全復活してる！

空元気なんかじやない！電話越しだけど、それは絶対に間違いない！  
だつて、声を聴いてるだけで、元気を貰えたから！

私はシゲル様の望みを叶えるべく、下ろしたばかりの受話器を上げると、親友の電話番号をプツシユする。

——良し！繋がった！

「遙あ！坂見台の特療に、野外ライブ用の機材一そろい用意できる?!」

『……なによ、藪から棒に。アレって数が少ないし今引っ張りだこなのよ。時間をもら

えれば可能だけど』

「三時間以内に！」

『寝言は寝て言いなさいよ』

「シゲル様の要望なのよ！』

『二時間で手配するわ』

当意即妙！流石親友だわ！「どういうこと?!」とか「シゲル様帰つておられたの?!」とか余計なセリフが一切ない。

恐らく遙は持てる全ての手段を用いて、最速で自らの言葉を実現するはず。詳しい話は現地ですることだけを告げて、私は慌ただしく電話を切る。  
さあて、こつちはこつちで鉄火場よ！

まずは特療に電話ね！

坂見台の特療はコの字型をしている。中央には広い中庭があつて、患者全員に聞こえるような即席のステージを作るとすればここしかない。

今その中庭で、蓬莱テレビの精銳たちが、恐るべき速度で機材を設置している。

休日出勤となつたスタッフも多いが、どいつもこいつも全身に最大限のやる気を漲らせてている。あらゆる予定をキャンセルして馳せ参じたスタッフたちの顔に浮かんでいるのは、「日も暮れたつてのに休日に勘弁してよ」の憂鬱ではなく、「よくぞ私を選んでくれた！」という喜びだ。

当然よね。私だつてそうよ。

シゲル様のお役に立てるのは勿論——役得も待つてゐんだから。

「——ところで遙、最新のP.Aをよくもまあこんな速度で用意できたわね」

無茶な注文に想像以上のクオリティで応えてくれた親友に、私は感謝の眼差しを送る。

「タイミングが良かつたのよ。今日つて第四高校で文化祭があつたでしょ？ 機材はウチから貸し出していたから、撤収を早めてこちらに持ってきたつてわけ」

「へー。そういうえば府の肝入りでそんなイベントやるつて言つてたわね」

なんか学生たちがライブやつたりするつて言つてたけど、上手くいったのかしら。

「それにもしても、久しぶりにシゲル様にお会いするけど——」

PAスピーカーの角度についてスタッフと話をしているシゲル様を見て、遙はうつとりと目を細めた。

「——更に輝きを増しておられるわね」

「——！」

その言葉を聞いて、私は無意識のうちに遙の肩を掴んでガタガタ揺さぶつていた。

「ど、どうぜつ、当然でしょ！ だつて——」

「シゲル様だもの！」

何故か、涙がこみあげてくる。

「なつ、なにをそんなにいきり立つての凜つ。ちよつとやめて、目が回る！」

「——あつ、ごめん」

思わず力が入り過ぎたみたい。

ふらふらする遙に謝罪していると、

「おー、凛ちゃん、遙さん！いやあ、二人とも無理聞いてもらつて悪かつたな！」

シゲル様が、眩しい笑顔で語り掛けてきた。

私たちは即座に姿勢を正すと、頭を下げる。

「とんでもございません、シゲル様！」

「勿体ないお言葉です。シゲル様のお力になれるのであれば、これ以上の幸せはございません。——ですが、」

「誰かさんから昨日のうちに帰国の報を受けていれば、もつとスマーズに事を運べたのですが」

うつ。遙がこちらに『なんで即座に教えなかつた』の視線を向けてくる。

し、仕方ないでしょ。国家機密みたいなもんよ。

「はは、凛ちゃんを責めるのは無しにしてやつてくれよ。俺に氣イ使つてくれたのさ」

うう、シゲル様のフオローが五臓六腑に染みわたる。優しい言葉をかけて頂けるだけで、脳内麻薬がドバドバである。

「空港も大ごとにならねえようについて、出迎えてくれたのも凛ちゃんくらいだったから

|

そこでシゲル様はポンと手を打つた。

「——そういうや言つてなかつたな！」

え？

何のことだらう、と首を傾げる私を、シゲル様はまつすぐに見つめて、

「ただいま、凛ちゃん！」

そう言つた。

その瞬間、様々な感情が、私の心を激しく動かした。

言いたいことが、伝えたいことが沢山ある。

感謝、いたわり、喜び——支離滅裂に全ての言葉を口にしたくなるけれど、私はぐつと堪えて、

「——おかえりなさい！シゲル様！」

胸にこみ上げてくる万感の思いを、その短い言葉に全て込めた。

私の答えに、シゲル様はサムズアップを返してステージへと向かっていく。

「——陽が昇るわ」

その後ろ姿を見ながら、私は呟いた。

「だいぶ前に落ちたでしよう？」

遥が「何言つてんだこいつ」って顔でそう言う。  
当たり前のことを、当たり前のように。

——だけど。

「でも、昇るの」

私は反論していた。

だつて——

「今日はここから、二度目の日の出よ」

今。山の向こうに落ちた太陽が、夜と道理を蹴つ飛ばそうとしている。  
そんな予感があつたから。

全ての準備は整い、病室の窓が開け放たれた。

いよいよライブが始まる。

生睡を飲み込む私の視線の先で、シゲル様はマイクを手に取り、息を吸い込むと――

「――昨日はつまんねえ演奏を聞かせちまつて悪かつたな！」

開口一番、そんな謝罪を口にした。

殆どの人が頭の上に疑問符を浮かべている。無理もない。その言葉の意味が分かる人は、ごく限られているから。

シゲル様が昨日ここでライブを行つたということを知っているのは、私や、施設側のスタッフ数名だけだ。

でも、シゲル様の謝罪は、私たちに向けられたものじやない。

――光も音も届かない人に、語り掛けてる。

「俺はつくづく反省したぜ。あんなライブじや、確かに寝てた方がマシだ」

シゲル様はそう言つて肩を竦める。

私としてはその言葉は否定せざるを得ない。

あのとんでもない音楽を聞きながら眠つたままでいるには、脳死する必要があると思

う。

例外はレベル4患者だけだろう。

そして次にシゲル様は、

「——まあ俺も、時差ボケぐらいはするからよ、  
照れたように冗談めかした言葉を続けると——

「今日のライブで挽回するから、笑つて許してくれよな！」

最後に、そう言い切った。

『笑つて許してくれ』と。

その言葉の意味するところを察して、私は震えを堪えきれない。  
ネガティブな感情からおこる震えじやない。

喜びに震えているんだ。

例え理屈では不可能だろうと——「きっとそうなる」って、体が言つてる。

「——朱里、蒼子、浅黄！準備オッケーか!?」

「「オッケーです!!」」

呼び捨てにされた三人が、即座に、力強く声を合わせた。

「よおし！」

シゲル様が笑う。

夜を溶かすように。

そして――

「さあ――楽しんでいこうぜ！」

いつものセリフと共に、ライブが始まつた。

いよいよ始まつたライブに、私は耳を澄ませて――「ハツキリ言えば、昨日聴いた音楽に比べれば完成度は落ちる」と思つた。

だつてリズムセクションが楽器初めて一年経つてないんだもん。そりやそうよ。トライアングルは素人目にも凄い才能と情熱を持つてるとと思うけど、当然シゲル様には及ばない。

でも、わかつた。理屈抜きに、理解できてしまつた。

ああ——シゲル様のやりたかつたのはこれなんだ。

完璧じやないけど、最高なんだ。

ベースの力強い重低音が。ドラムの軽妙なリズムが。流れるようなキーボードの調べが。

そしてシゲル様のギターと歌が。

活きた音の全てが一つになつて、私に『ライブ』という言葉の本質的な意味を直感で教えてくれるけどイヤもう小賢しいわ！そーゆー話とかどーでもいいから！

とにかくキヤー!!!!

一曲目のサビに差し掛かった時点で、最早誰もこのライブの目的を覚えていなかつた。

患者のバイタルをチェックしなくてはならない筈の医療スタッフは、施設の窓から身を乗り出して、黄色い叫びを上げ続ける。

シゲルの背後で事態を見守っているはずの凜や遙、機材を運び込んだスタッフたちは、『演奏の邪魔にならないように、僅かでも音を遮らないように』という誓いを刹那の間に忘却。「まえからみたほうがよく見えるし、よくきこえるよ!』という溶け切ったIQの意見に「てんさいじyan」と手を打つて、あつという間に中庭へと回り込んだ。止めるものは一人もいない。

もはや猿叫といつても過言ではない歎声を、しかしシゲルの歌声とPAから迸る生演奏は真っ向から飲み込み、最高の音楽を響かせ続ける。

朱里が笑う。相棒のベースをかき鳴らすことが——シゲルと、友達と、観客の皆と一緒に最高のライブをやれるのが、楽しくてしようがないから。

青子が笑う。全身と音が繋がっているような感覚が、たまらなく気持ちいいから。今まさに、夢を叶えているから。

浅黄が笑う。

浅黄はシゲルに「愛してるぜ！」と言われてからずっと笑っている。  
休みなく。

凛が、遙が、スタッフ達が笑う。一秒ごとに『人生最高の瞬間』を更新し続けている  
から。

笑わずには、黄色い声を上げずにはいられない。

シゲルが笑う。

音楽を、やつているから。

夜闇を貫き、最高の音楽が響き渡る。

この日、この時、この場にいる全ての人々が、ライブを楽しんでいた。

——そう。

余りにも楽しすぎて。

患者の脳波が甦つたことに、その場の誰もが気付かない。

「——センキューッ!!」

シゲルの感謝の言葉と同時に。  
患者たちに、朝がやつてきた。

ちなみに翌朝、枕元のサイン入りギターを見た真美は学校を休んで病院を受診した。  
「夢の中の世界に囚われる」と成功したんです！覚めないでいられる方法ありますか  
?!」と尋ねる真美を、医師は白い目で見た。

## 第35話

坂見台でのライブを終えたその日、シゲルは最高の気分で眠りについた。ライブの余韻がまだ全身に残っていたが、心地よい疲労感が速やかに眠りへと誘ってくれた。

そして――

「ありや？」

シゲルは気付けば真っ白い空間にいた。  
枕元にあつたギターを手にしたまま。

「ここは――

ぐるりと辺りを見渡したシゲルの顔に、直ぐに理解の色が広がる。

最早お馴染みと言つても過言ではない空間であつた。

「神域つてヤツか！――つてえことは、」

シゲルは喜色を浮かべると、虚空に向かつて声を上げる。

「おーい、弁天様！見ててくれたか?!俺のライブをよ!」

そのシゲルの問いかけに応えるように――

純白の空間から、闇が滲み出た。

「……おおう。そつちだつたか」

闇は、人の姿をとつていた。

眼前に立つ長い黒髪の女性を見て、シゲルはなるほどなあと呟く。

黒髪と白無垢。そして抜けるような白い肌とどこまでも深い漆黒の瞳が、強烈なコントラストとなつてシゲルの目を奪つた。

弁才天の美貌に匹敵する、この世ならざる美しさを備えた女性だ。

――寒気を覚えるほどに、美しい。

「今回は、気合十分つてわけか」

参ったな、とこぼすシゲルに向かつて、女神は静かに語りだした。

「——櫻崎シゲル。お前の働きで、世界は生きる希望を取り戻してしまった」

「へへ、結構なことじやねえか。それにお前さんが言つたんだぜ？『好きにせよ』つてよ。

——お望み通り、好きにしてやつたぜ！」

開き直つたシゲルがふんぞり返る。

しかし、女神の表情は動かなかつた。

「その通り。お前が人の子を回復させることは、私の目論見通りだつた」「……何？」

眉を顰めるシゲルに、女神は滔々と語りだす。

「確かに今、人の子は希望に満ちている。強い陽気を纏つている」

「だが」

「いま、お前が倒れればどうだ」「世界は希望を失う

「心は弱り、絶望する」

「その絶望は、以前のそれよりもずつとずつと深刻になるだろう」

「——そうなれば、もう一度生命力を奪い取るのは容易い」

「神々の邪魔があつたとてな」

「！」

そこまで聞いて、シゲルは「そういうことか」と手を打つていた。

「お前が倒れれば」という女神の言葉が、シゲルに一つの確信を与えていた。

「なるほどな。ツアー終盤あたりから、なんか妙に疲れると思ったら——神様の仕業だつたつてわけか」

「……」

肩を竦めるシゲルを、神はいやにじつとりとした目で見た。

「……苦労したのだぞ」

「へ？」

シゲルは首を傾げる。

「——お前の心身の疲労につけこみ、鬱陶しい陽気を捶い潜りながら、少しづつ少しづつ生命力を掠め取つて……」

「弁才天の目を欺くために、少なくない神氣を無駄にして……」  
「ようやく、ようやくその首に手が届いたと思ったら……」

女神が俯く。

「素人の音楽聞いて、三分で回復するんだもん……」

「なんかすまねえ……」

思わず謝るシゲル。

だが、女神の愚痴は終わらない。

「……極めつけは、昨夜のアレだ」

「昨夜のアレ?……ああ、あのライブ見てたのか!最高だつただろ!」

「見てはいない。——根の国から突然人の子たちが消えたから、異常に気付いただけだ」

「——え? 消えた?」

「……根の国があちこちに穴が開いて、そこにいた人の子が穴の向こうに行つてしまつたのだ」

「はあ……?」

「お前たちの言う『レベル4患者』が目を覚ましたのは、それが原因だ。お前の音楽が、人の子の肉体を縁として、その魂の所在——私の世界まで続く穴を開けたのだ」「へー?」

自分が何をしてかしたのかイマイチわかつていなシゲルから視線を外すと、女神は虚空を仰いでため息を吐いた。

「……『音』の持つ性質を失念していた」

「遠くまで響き——」

「人を惹きつける」

「——とはいえ限度があろうがつ！」

「突然自分の国に穴が開いた時の気持ちがお前にわかるか?！」

「か、重ね重ねすまねえ……」

吼え猛る女神に、シゲルは思わず二度目の謝罪を口にしていた。

怒りに震える女神は、ふ一つと息を吐いて怒気を収めると、恐ろしく冷たい目でシゲルを見た。

——その全身に、禍々しい闇の神氣を纏いながら。

「だが——もういい」

「迂遠な真似は、もうヤメだ」

「禁則に触れ、多少神氣が失われようが——お前さえ仕留められれば、わたしの目的は達成される」

決定的なセリフを口にする女神に、シゲルは眉根を寄せる。

「……ただの人間一人だぜ。見逃しちゃくれねえか?」

「お前のようなものがただの人間であるものか」

女神は吐き捨てるように言つた。

交渉の余地は無いらしい。漆黒の瞳から伝わつてくるのは、底冷えするような純粹な殺氣だった。

相手は神。それも極めつけの大神だ。

こうして正面から対峙することになつた以上——どう考へても、戦いはおろか、逃げることすら不可能だろう。

絶体絶命のピンチに、しかしシゲルは、にやりと笑みを浮かべると——

「——女神様よ、好きにしな!」

そう言い放つた。

「……なに?」

訝しがる女神に、シゲルは言葉を続ける。

「だがよ、たかが俺一人が死んだだけで『世界は希望を失う』つてのはちよいと考へが甘

いと思うぜ！」

「もう手遅れさ、女神様！俺がこの世に居なくなろうと——音楽は生まれ続ける！俺はそれをちやあんと知つてんだ！」

シゲルは、手にしたギターに視線を落とす。

よれよれの小さな文字が、シゲルに無限の力をくれる。

——動かぬ証拠が、ここにある。

シゲルは更に勢い込んだ。

「——いや、きつと音楽だけじゃねえ」

「旨いもの、おもしれえ本、スカツとするスポーツ、映画やゲーム——おつと、趣味に限つた話でもなかつたな！」

「やりがいのある仕事、家族、友達——えーと、その他諸々！」

「とにかく今この瞬間も！世界のどこかで『生きがい』が生まれてる！」

「きつとみんなこう言うぜ！」

「『絶望なんざ退屈だ』つてよ！」

――

言うことを言つて満足げに胸を張るシゲルを、女神は口を噤んだまま見つめる。

だが、まっすぐにシゲルに向けられている女神の瞳は、肝心のシゲルを映していない。

一切の光を拒絶する色だけがある。

――その目に、シゲルはひどく見覚えがあつた。

そのことにシゲルが気付くと同時に、女神は口を開いた。

「……お前は知らぬだけだ。知らぬから、そんなことを言える」

「希望に、掌を返された瞬間を――！」

「そのときの、絶望の深さを！」

白い世界が、女神を中心として闇に塗りつぶされた。

そして闇よりもなお暗い女神の長髪が恐ろしい勢いで伸びると、シゲルの足に絡みついた。

――

シゲルは一步身を引くことすらできなかつた。黒い髪が、触れた場所から生氣を奪い

取っていくのが感じられる。

ホラー映画のようなぞつとする光景だが、シゲルの頭に浮かんだのは『ツイてるぞ！』の一言だつた。

——上半身が無事だから、最後に一曲くらいやれそうだ！  
不敵に笑つたシゲルが、ギターを構えた瞬間——

「——一度あることはつ、」

——突如、空から降り注いだ光が、

「三度あーるつ！」

シゲルに絡みついた闇を焼き払つた。

「そして——」

「仮の顔も三度まで、つていうわよね。イザナミ」

シゲルの前に立ちはだかるのは、戦装束を身に纏つた弁才天の姿だった。

「弁天様！」

「ハイ、シゲルちゃん。ごめんなさいね、ちょっと遅れたかしら」「いいや、俺も今来たところさ」

軽口をたたくシゲルに、弁才天は片目を瞑つてみせる。

しかし直ぐに眦を決すると、油断なくイザナミへと視線を移した。

「……あつきた。依り代抜きで、夢の世界にこんな直接的な干渉を仕掛けたワケ？」  
「こんだ派手な禁則破り——アンタの桁外れの神力をもつてしても、かなりの消耗は免れないわよね？」

どこか挑発的な物言いをする弁才天に、イザナミは暗い瞳を向ける。

「……何が言いたい」

「今やれば、私が勝つってことよ」

弁才天はそう言い放つと、自信満々にふんぞり返った。

「——思いあがるな！」

イザナミが仕掛けた。

しかし迫りくる闇を、弁才天は光を纏う剣で斬り払う。

「やつぱり、出力落ちてるわよ！」

にやりと笑った弁才天が、すくい上げるような逆袈裟で虚空を切り裂く。

剣の間合いではない。しかし剣から迸つた光芒が、イザナミの身体を捉えた。

その一撃は、イザナミへの痛打となることはなかつたが——

「ちょっとだけ、離れててもらうわ！」

「む——!?

衝撃を抑えきることは出来ず、イザナミは遙か上空へと打ち上げられる。

充分に距離を空けたことを確認してから、弁才天はシゲルに向き直った。

「シゲルちゃん。ホント貴方には度肝抜かれたわ！伝えたいことがい一つぱいあるんだけど——今は緊急事態！時間が無いから、状況の説明だけするわね」

「頼むぜ」

「まず、ここは夢の世界。『眠り』と『死』は兄弟みたいなものだから、生と死の狭間の世界と言い換えてもいいわ」

「生と死の狭間……つてことは、俺また臨死体験してるのかい？おつかねえなあ」

「ふふ、心配しないで。人は誰もが、眠る時にこの世界を訪れるのよ。そして目覚めとともに、ここでの記憶を置いて去っていくもののなの。——たまにちょーっと覚えてることもあるけどね」

「——シゲルちゃんの大活躍に業を煮やしたアソツは、なりふり構わず貴方の魂を奪いにきたわ。生と死の狭間の世界という、自らの権能が及ぶ空間を利用して。でも、これってどんでもない禁則破りだし、かなりのギャンブルなの」

「なにせ、シゲルちゃんが現世のほうで起きちゃつたらそれまで！こんな無法を二回も

押し通すのは不可能だもの」

「起きたらそれまで、か。——しかしこ覽の通り真つ暗になつちまつたぜ？ 現実の俺はちゃんと起きることができるのかい？」

「そこは大丈夫。確かに今ここはアイツが無理矢理改変して、岩戸隠れの時みたいに真つ暗になつちやつてるけど——現実のほうでは普通に夜明けが来るし、それで目が覚めるわ」

「へー、つてえことは……俺は夜明けを待つてればいい、と？」

「そういうこと！……とはいえて、アイツに魂を連れていかれちやつたらそれまでだから——えいっ！」

弁才天は気合声とともに、白魚のような指で素早く印を組んだ。

途端に周囲に清冽な神気が流れ込み、不可視の結界を造り上げる。

「これでよし！」

「今のは？」

「辺りに結界を張つたの。流れ弾くらいじゃビクともしない強力なヤツ」

「あの一瞬で？ すげえな弁天様！」

「おほほ、モチロン——と言いたいところだけど、絡繰りがあつてね。ほら、夢の世界つて何でもアリでしょ？ それつて『広大無辺で心のままに姿を変える』っていう特性があ

るからなの。だからこうした改変つて結構やりやすいのよ。——シゲルちゃんをアイツから守る行為つて禁則に抵触しないから、神気の消耗も殆どゼロ。簡単なもんよ「逆に、あつちは今も神気を消耗し続けてるわ。ルール破りまくりだもの」

「だから——」

上空を睨む弁才天は、その美貌に覚悟を漲らせ、剣を構えた。

凛々しくも美しいその姿は、弁才天の武神としての側面が顕在化したかのようだった。

人智を超えた力強さに、まさに全てを『神頼み』にしてしまいたくなるような頼しさがある。

「今なら夜明けを待つまでもなく——私の剣で、暗闇を切り裂ける」

——だが、シゲルはその言葉を聞くや顔色を変えた。

「……剣で？ いや、そりやちよつと待つてくれよ弁天様！」

シゲルは泡を食つて弁才天を引き留めにかかる。

だが——

「ここから先は神話の戦いよ。シゲルちゃんは私の勝利を祈つてて頂戴！」

弁才天は聞く耳持たず、ロケットのように空へと飛びあがつていった。

あー、チクショウ、行つちまつた！

そうじやねえ！そうじやねえんだよ弁天様！

弁天様の依頼は、まだ終わつちやいねえんだ！

——今しがた見つけた、一番重篤な昏睡病患者に、俺の歌が届いてねえんだよ！

俺は焦る。

焦るが、打開策は見つからない。

何しろ、最高の音楽を届けるために必要なピースが、ここには無いからだ。

辺りを見渡しても、イザナミ様から溢れた闇が広がるばかりだ。唯一輝きを放つているのは、遙か上空で飛び回る弁天様くらいなもので、他には何もない。

現実にはあるはずのマイク、ミキサー、アンプ、スピーカー。そして何より大事な——

——待てよ。

弁天様は、『夢の世界』つていつてたよな？

『人は誰もが眠る時にこの世界を訪れる』とも。

じゃあ。

——今眠っているのは、俺だけじやない筈だ。

気が付けば俺は一瞬の閃きに身を任せ、声を張り上げていた。

「朱里！・蒼子！・浅黄！――ライブの時間だぜ！」

ついでに、渾身のファルセットをぶちかます。

——手ごたえがあつた。

ハイトーンシャウトが、無限の距離を飛び越えて――ついでに何かをぶち抜いて、俺

が必要としている人々の元に届いた手ごたえが。

その証拠に。

「へ？あれ？」

「ここは？」

「あらあらー？」

闇から零れるように、まずは寝間着姿のスリーピースが現れた。

## 第36話

シゲルの前に現れた三人娘は、寝ぼけ眼で闇に浮かび上がるお互いの姿を確認する  
と、揃つて首を傾げる。

「あ、二人ともさつきぶり……じゃなくて、どこここ？ぼく、いつくんにさつきのライブ  
の話をしてて——あれ？寝ちゃったんだつけ？」

「わたしも最高の気分で眠りについたはずだけど……何かしらここ、真つ暗で何も見え  
ないけれど」

「わたしもさつき眠つたところなので、普通に考えると夢ですかねー。ええと、シゲル様  
の声が聞こえた気がしたんですけどー」

「おう！悪イな、俺が呼んだんだよ！」

——背後から響いたその声に、三人は弾かれたように振り返つた。

「——シゲル様！？」

「まー。シゲル様が夢に登場してくださつたのはこれで二三百三回目ですねー」

「あつ、ホントだシゲル様！つて浅黄さん、これ夢？夢なの？」

「シゲル様に寝間着姿とすっぴんを見せるのは耐え難いので夢ですねー」

「安心しろよ。すっぴんもイケてるぜ、浅黄」

「ほーら夢みたいなことを仰られてますものー」

「浅黄さん涎たれてるよ」

「確かに、常識的に考えて夢か。なんか不思議な場所だしね」

浅黄の言葉に納得の表情を見せる青子に、シゲルはうんうんと頷く。

「そうそう、夢だ夢。夢の世界だから細かいことは気にすんな。大事なのはただ一つ、これからライブをやるつてことだけだ！」

「——へ？ そなんです？」

「現実世界のほうでやつたばかりでは……」

「良いライブにアンコールは付きものなんだよ。——ほら、観客の声が聞こえるだろ？」  
——シゲルがそう言つた瞬間、周囲からざわめきが聞こえだす。

辺りにいるのは、もはやシゲルと三人娘だけではなかつた。

「え？ あれ？ なにここ」

「電気電気……あれ？ 私の部屋じゃないの？」

「——はつ?! なんですかここは！ ギターを受け取つてからの記憶がありませんわ！」  
「ンー、ヘッドフォンどこいったのですカ？」

「こがねまるがいないー」

「——」

「——ええ、と。わたしは、確か、特療に、入つていて……」

「W h e r e . . . a m . . . I . . . ?」

「……え、が、きこえ、た」

「つていうかこれ夢じゃない？」

「あー、このぼんやりとした感じって夢かあ」

「うーん、夢の中で眠つた挙句に夢の中で夢を見るとか、なかなか出来る体験じゃないよ  
ね」

「あっ！ああっ?!?あそこにいるのつて、シゲル様!?’

「うそ、トライアングルもいる！」

困惑しているような声がほとんどだが、シゲル達を見つけたのかあちこちから黄色い  
声も上がり始める。

「うわっ、ホントだ。流石夢、唐突な展開だなあ」

「——でも確かに、まだまだライブをやり足りなかつたところよ」「  
ですねー。だからこんな夢みてるんでしようねー」

「確かにあのライブ、夢みたいに楽しかったもんね。……そつか、眠つてからもライブの  
続きかあ」

朱里はしみじみとそう言うと、

「——得した氣分！」

弾けるような笑みを浮かべた。

「だよな！」

「はい！観客も増えましたし！」

朱里とシゲルは大はしゃぎだ。

しかし、きよろきよろと辺りを見渡した蒼子は、眉をハの字に寄せた。

「——でもシゲル様、ライブをやろうにも楽器がありません。どうしましょう」

「……あつ」

そこまで考えていなかつたシゲルは間抜けな声を漏らす。

——ワンチャン楽器もシャウト聞いたら飛んでこねえか？とシゲルが無謀な挑戦を試みようとしたが、

「大丈夫ですよー。夢なんですから」

浅黄はそういうと、えいつと虚空に手をかざした。

その瞬間、使い慣れたキーボードがその場に出現する。ついでに衣装も演奏用のもの

に変わつて、顔にはうつすらメイクまで施された。

「うわっ、すごい。そつか、夢なんだもんね！」

朱里も頭上に手を掲げる。その手の中に愛用のベースが現れる。

「ではわたしも」

青子が一つ手を叩くと、周囲にドラムセットが展開される。  
いつのまにか二人の身だしなみも整つていた。

まさに夢ならではの、あつというまの出来事である。

「おー、なるほど！夢なんだから何でもアリか！」

一連の流れを見たシゲルは感心した風に言うと、

「——つまり、こういうことか！」

ぱちんと一つ指を鳴らした。

変化は劇的だつた。

「——、と地響きを上げて、シゲルたちの足元にライブステージが生えてきた。  
スポットライトが、闇を切り裂く。

「うわわ、さ、流石シゲル様、スケールが違う！」

「天地創造ですね……」

「シゲル様ですかねー」

「わはは、こりやあ便利だな。夢の世界も悪くねえ。……えーと、後は、」

シゲルは何か足りないものは無いかと観客席側を眺める。

スポットライトで照らされたステージとは違い、相変わらず闇に包まれている。シゲルの作り出したライトは、どうやらそこまで照らすほどの光量はもっていならしい。とはいえ実際、ステージ側がライトアップされていればライブには支障ない。

しかし、それが悪いとは言わないが、今のシゲルには少々物寂しく感じ——

「——そういうのもあったよな！」

シゲルは、もう一度指を鳴らした。

今度変化が起こつたのは、観客側だった。

「——わっ、なにこれ?!」

「ぼんやり光つてると、懐中電灯?」

「なんかキレイな色」

一人一人の手の中に、ペンライトが魔法のように現れた。

困惑したように揺れ動くペンライトの光が、観客たちが確かにそこにいることを教えてくれる。

その様子を見てシゲルは口角を上げると、マイクを手に取つて観客たちに語り掛け る。

「——よう皆、久しぶりだな！櫻崎シゲルだ！覚えてるか？！」

——答えは怒号のような肯定の返事だった。

一つの言葉に統一こそされてないが、みな口々にシゲルに『待っていた』の意思を伝え、その名を叫ぶ。

シゲルはしばしその答えを全身で受け止めると、

「——逢いたかつたぜ！」

そんなセリフで、更なる歓声を巻き起こした。

シゲルは口上を続ける。

「突然こんなことになつてビックリしてるかもしねえが、安心してくれ！俺も驚いてんだよ！」

「でもまあ、細かいことは気にすんな！何せ夢だ！」

「——肝心なのは、今から俺たちのライブが始まるつてことだ！」

期待通りのシゲルの言葉に、観客たちのテンションは更に高まつた。

躍動するペナライトが野生の動きを見せる。

「それにしても、コイツはラツキーフてヤツだぜ！」

「俺たちは最高のライブをやることができるし——」

「お前さんたちは、チケット代無料だからな！」

観客席から喝采と「お金払わせてー！」の声が巻き起こる。

「へへ、悪いな。今日のところはサービスさせてくれよ！」

「おっと、そうそう。今日はサービスついでに、ペンライトなんていうオマケも用意したんだ！」

「俺のライブで使つたことは無かつたんだけどな！ 今回は特別だ！ リズムに合わせて、適当に振つてみてくれ！」

「なんせ、あたりがちよいと暗すぎるからよ！」

「バツチリ映えると思うぜ！」

「皆で振つたら、眩しくて——暗がりの方が根負けしちまうかもな！」

一通り語り終えたシゲルは、いよいよギターを構える。

誰よりシゲル自身が、長広舌はもう限界だった。

——そうだ。一刻も早く——

「——さあ！」

——ライブを、始めたい！

「楽しんでいこうぜっ！」

——やはり、手強い。

弁才天は剣を振るいながら、そう思わずらを得なかつた。

禁則破りを加味しても尚、イザナミは極めつけの大神。底知れない神氣は暗黒の雷となつて、間断なく襲い掛かつてくる。

守勢に回るしかないので現状だつた。

しかし、勝機はある。

本来ならば全身を覆つているはずの、イザナミの圧倒的な神氣の守り。

それに翳りが見えていて、やはり禁則破りは、イザナミへの大きな負担となつていてるのだ。

全開の神氣を注ぎ込んだ剣を直撃させれば、勝負を決することができるかもしけない。

弁才天は強く剣の柄を握り込む。

——隙が欲しい。渾身の一撃を叩き込む、一瞬の隙が。

蛇のように伸びてくる闇を防ぎ、自らも光芒を放つて牽制を仕掛けつつ、弁才天は機を伺つていた。

しかし、互いに決定打を送り込むことは出来ない。

戦況は膠着状態に陥り——

——停滞した状況を、突如鳴り響いた音楽が打ち破った。

「「?」  
「!」」

二柱は目を見開いて、反射的に音の出所を探る。

激戦の最中に響き渡つたその音楽は、余りにも陽気で、どこまでも場違いで——最高に、ノッていた。

——思わず、女神たちが手を止めてしまうほどに。

「これは——」

「シゲルちゃん……？」

音楽は、眼下に広がる光景から響いてきていた。

一体何があつたのか——地上には立派なライブステージが出来上がつていて、ペンライトを手にした無数の観客がひしめいている。

この短時間になにがどうしたのシゲルちゃん!?と弁才天が仰天している間にも、音楽は響きつづける。

樂神たる弁才天ですら聞きほれてしまうほどの、妙なる樂の音が。

——いや、聞こえてくるのは音樂だけではない。

いつの間にか現れていた人々が上げる、心の底からの喜びの声。その声は、英雄の歌声にも負けないほどに、女神を惹きつけた。やがて、音樂がサビに突入する。

最高潮の盛り上がりとはこのことか。奏者、觀客、音樂、歌。全てが一つになつて、命の喜びを高らかに謳い上げている。

今や、ライブ会場は光り輝いていた。目を奪われるとはこのことだつた。

弁才天はしばしその輝きを堪能して——

——ヤバつ！こつちが隙晒してどうするのよ！

慌ててイザナミに向かつて剣を構え直す。だが、その必要はなかつた。

攻撃は、とつくに止まつてゐる。

イザナミの双眸は、ライブ会場に釘付けだつた。

一面の闇をものともせずに、人々は煌いている。

揺れ動くペンライトの光は、一人一人の命の輝きで。シゲルの歌は、そのまま生への贊歌だつた。

音と光は幻想的な美しさとなつて、イザナミを魅惑していた。

「……ああ」

イザナミはいつの間にか、祈るように両手を組んでいた。

大きく見開かれた両の眼は、本来ならば戦つている弁才天に向いていなければならぬのに。

どうやつても。どれほど頑張つても。

眩いステージから。

シゲルから。

華やぐ生命たちから。

目を離すことが、出来ない。

——ぬばたまの夜の瞳は、今や満天の星空だつた。

「ああ——」

「きれい……！」

うつとりと感嘆の声を漏らしたイザナミは、眼下の光景に手を伸ばす。遠く彼方で輝く星を、かき抱こうとするかのように。

決定的な隙だつた。

——今なら！

弁才天は、握った剣に力を込める。

イザナミはあるでこちらを見ていない。今ならば、間違いなく勝負を決めることがで  
きるだろう。

密かに間合いを詰めて、剣を振り下ろす。ほんの一呼吸で事足りる。それだけでけり  
がつく。

弁才天は口元を引き結ぶ。

そして、構えた剣を――

静かに、鞘に納めた。

「ふふ――」

我知らず口元を綻ばせていた弁才天は、視線を眼下のシゲルへと移した。

そう——そうよね、シゲルちゃん。

遥か神代に、天の岩戸を開けたのは。

つるぎなんかじや、なかつたわ。

弁才天は浮かべた微笑みをそのままに、イザナミの手をそつと握る。

「！」

イザナミは至近距離まで接近を許してしまったことに狼狽しつつ、慌てて身構えようとする。

だが、直ぐにその動きを止めた。

弁才天に、もはや敵意は一片もなかつた。

隙だらけだ。

しかし閃く白刃よりも眩い笑みが、無敵の武器となつてイザナミの抵抗を封じてい

た。

「折角だから、特等席にいきましょ！」

笑顔の弁才天は、弾むような声でイザナミに語り掛ける。

「——きっと、楽しいから！」

最早、イザナミがどれほど——心と体の全てから、絶望と憎しみをかき集めようとし  
ても。

その殺し文句に抗うには、まるで足りなかつた。

弁才天に手を引かれ、イザナミは光の中に飛び込んでいった。

喝采は続く。  
夜明けまで。

# エピローグ

ノ瀬和美視点

世界中がひっくり返った『レベル4患者一斉覚醒事件』から二か月が経ち、ようやく各戻は混乱から立ち直りつつあつた。

端となつたあの日のことは、私も鮮明に覚えている。

朝、私は何故か人生最高の寝覚めで、寝起きからハイテンションだつた。

夢いい夢でも見たんだと思う。

私は人生最速タイムでズバッと布団から抜け出すと、鼻歌を歌いながら顔を洗つて、

いつものように歯ブラシを口に突つ込んで。

いつものようにテレビのスイッチを入れて。

いつものニュースキャスターの顔を見て。

『きつ、緊急速報です！世界中で、レベル4の昏睡病患者が一斉に目を覚ましたという情

報が入りました!』

口の中の物全部噴き出した。

その後もしばらくむせていた記憶がある。

覚醒の原因は、今をもつて不明——とされている。

でも、ほとんどの人は、その『原因』に心当たりがある。

——現代において奇跡を起こせる存在って、限られるから。

『——ですからね、あり得ないんですよ!』

私が本日何度目かの身だしなみと持ち物チエツクを終えたところで、テレビからそんな声が響いた。

『徹底生討論! シゲル様の奇跡!』とテロップを打たれているテレビの中では、脳科学の権威という蓬萊政府お抱えの教授と、神学者、世界的有名な医師の三人が激論を交わしている。

『シゲル様の坂見台特療でのライブの翌日——翌日に、一斉にですよ!?世界中で一斉に、

目覚める筈のないレベル4患者が全員目覚めたんです！坂見台で目覚めた患者の後を追うように——！これが奇跡でなくてなんなのですか？』

『……偶然でしよう』

神学者の振るう熱弁を、教授は本日何度目かの『偶然』というセリフでシャツトアウトしようとすると。

だが、当然神学者は引き下がらない。

『患者たちの主張は、その殆どが「シゲルサマの音楽で目が覚めた」ですよ？まあ、ごく僅かに「音楽が終わつた後、美しい女性に導かれた気がする」と付け足した者もいましたが――』

『……興味深いのは、蓬萊語を知らない患者も多いにも関わらず「シゲルサマ」と口にしたことです。様、を敬称だと知らず、「シゲルサマ」が人名だと思つているものも多かったです』

医師は眼鏡の位置を正し、言葉を続ける。

『――つまり、実際に聞いたのです。誰かが、シゲル様をシゲル様と呼ぶのを。そして、その奇跡の音楽を』

『……坂見台でのライブが物理的な距離を超えて届いたとでも？科学的にあり得ませんね。そもそも、患者は脳死に近い状態だったのですよ？どうやつてシゲル様の名を聞く

『というのです』

『それが説明できなから奇跡なんでしょう？私はですね、現オーソニア女教皇が、一連の出来事を正式に奇跡と認定したのは無理もない話だと思いますよ！十世紀ぶりの聖人認定を蓬萊政府が拒否しているという噂が本当なら、それこそ無理筋です！』  
『逆に教授に答えていただきたい。どうして患者たちが「シゲルサマ」という単語を話すことが出来たのか』

医師の質問に、教授は少々沈黙した後、そつと視線を逸らし——  
『……偶然ということもあり得るのでは？』

極めて小さい声を捻りだした。

『通るか？……！そんな暴論つ……！』

『それしか言葉知らんのかこのポンコツ教授が！』

烈火のごとく怒る二人に、しかし教授も逆ギレで応戦する。

『やかましい！私も通ると思つてない！どう考へても奇跡だろうが！でもシゲル様が「聖人とか奇跡とか柄じやねえよ、勘弁してくれ」って仰るんだからしょーがないだろう

!!』

『うつ……』

『し、シゲル様が仰つているのなら、それは……』

シゲル様本人の言葉となれば、神学者と医師も語気が弱くなる。

畳みかけるように、教授は一枚のフリップを取り出した。

『何故患者が知るはずのない情報を知っていたのか——この件に関しても、シゲル様から直接コメントを頂いているのでこの場で発表する!』

その言葉に、スタジオがざわめく。

無理もない。私も釘付けだ。だつてシゲル様が公式にこの件にコメントをするのつて、多分これが初めてだから。

でも——ぐるりと回転したフリップに書いてあるのは、たつた一言。

『「夢でも見たんだろ」！』

『——以上！解散！』

教授が言い放つが、それで解散するわけはなかつた。

『では何も無かつたことにするのですか?!間違いなく世界を救つたシゲル様に、名誉も報酬も渡さないと?!——いつから蓬莱はそんな恥知らずな国になつたのです!』

『そうだ！シゲル様には然るべき恩賞が必要だ！』

『黙れ黙れっ、一番恩義に報いたいのはこっちなんだ！でも、ないんだよ！あのお方には物欲とかがないんだよ！どうか何らかの対価をお受け取り下さいとこい願つても、「そんなもん、ファンの声援でお釣りが来るぜ」と仰るだけで――』

『――ちよつとお待ちを、教授。先ほどからその口ぶり、もしや貴女シゲル様と直接お話を？！――なんたる職権乱用！許されざる、許されざる行為ですよそれは!!』

『全く！その肩書は大したものですね！政府お抱えというのはそんなに偉いのですか！――教授っ、』

『政府お抱えってどうやつたらなれますか!?』

『……』

まだまだ番組の時間は残つていて、討論？は更に熱を帯びていく。

……ちよつと面白い番組だつたから、最後まで見たいところだけど――私はテレビの電源を落とした。

時間にはまだまだ余裕があるけれど、道中何らかのアクシデントに巻き込まれる可能性もある。早めに家を出るに越したことはない。

そう。今日だけは、遅刻は許されない。趣味のヴァイオリンも中止。

つて、今日は——

余裕?字?ケットの半券を握りしめながら指定の座席に辿り着いて、私はやつと辺りを見渡す

蓬萊の総力を挙げて造られた超大型コンサートホール、「蓬萊アリーナ」。そのお披露目としてこれ以上相応しい機会もそうは無いだろう。

いや、このキヤパー二万人以上を誇る蓬萊アリーナをもつてしても役者不足というべきかも知れない。

シゲル様の、全力のライブには。

二か月前に凱旋を果たしたシゲル様は、「すぐにでもまたライブがやりたい！」と言つ

たらしい。

多分その一言が、関係者に火をつけたんだと思う。

シゲル様の何気ない「すぐにでも」の言葉を実現するために、あらゆる無理を押し通したんじやないだろうか。

だつて、たつた二か月でこんな大規模なライブの準備が整えられるなんて、普通なら考えられない。

でも、現実にライブは今日開催される。

シゲル様の熱にあてられて、皆も奇跡を起こしちゃつたのかも。

もつとも、燃えてるのはスタッフや関係者だけじやない。観客の私たちだつて同じだ。

天文学的な確率を潜り抜けて当選の知らせが届いたあの日から、正直私は興奮しつばなしだ。今日この日この場所にたどり着くまでに高まり続けたテンションは、もはや炎となつて全身から噴き出してもなんら不思議じやない。

だけどこのテンションのままライブが始まると、その瞬間卒倒する恐れがある。少々クールダウンの必要があつた。

わたしは一つ深呼吸をすると、辺りを見渡す。

興奮で視野狭窄に陥つていただけど、改めてアリーナの広さがわかる。

その広いアリーナを埋め尽くす、二万人という人数の凄まじさも。

耳をすませば、今日出会つたばかりであろう観客たちが、まるで親友のように親し気  
に会話をしているのが聞こえてくる。

ああ——どうしよう。

もう最高に楽しい。

この空気が、たまらなくワクワクさせてくれる。

テンションなんか下がりようもない。

落ち着くもの、なにか落ち着くものを……！

私はきよろきよろと視線を動かして――

すぐ隣の二人に釘付けとなつた。

そこにいたのは、セミロングの美女と、大きなカバンを持ったロングヘアの美女。  
どちらもとんでもない美しさだつた。

こんな美女がこの世に存在していいのか、とまで思つてしまふ。

顔や全身のパーツ全てが非の打ち所がないほど完璧に整つていて、それらが神が配置したとしか思えない奇跡のバランスで『絶世の美女』を構成している。

何より印象的なのが、その眼だつた。

セミロングの女性もそうだが——ロングヘアの女性の漆黒の瞳は、ライブへの期待にきらきらと輝いていて、吸い込まれそうな美しさを誇つている。

聞こえてくる二人の話し声も、これがまたとろけそうなほど良い声なので、私はつい耳を傾けてしまう。観客たちのざわめきが凄くて内容はほとんど聞き取れないけど、途切れ途切れの声が聞こえるだけで幸せだ。

「——で、どうなのよ。根の国大改革とやらは進んでるの？」

「順調だ。もはや根の国は、穏やかに眠つたまま来世への輪廻を待つ場所ではない。善き魂が死後の生を謳歌する場所へと変わりつつある」

「ふーん。まあ貴女良い方向へ向かつているようだから、それは結構なんだけど……じやあかなり忙しいんじゃない？こつそり現世に來てるヒマあるの？下手すりやまた禁則に引つかかるわよ」

「——お、おろかもの。これは視察だ。根の国らいぶはうすを作る際参考にするのだ」「……ま、そーゆーことにしどきましょうか」

「……ところで弁才天。べんらいとはどうした」「ペンライト?……あのね。あーゆーのを使うのは、どっちかつていうとアイドル寄りのアーティストのライブよ。ふつーシゲルちゃんのライブでは使わないの」

「えっ」

「……知らなかつたの?」

セミロングの美女の言葉に、ロングヘアの女性はしばし硬直する。

「……そういえばアンタ、そのカバン何が入つてるの?」

「……」

「——ちよつと見せてみなさい」

セミロングの美女は、そう言つてカバンを開けた。

——大きなカバンには、ぎつしり隙間なくペンライトが詰まっている。

「うわっ、なにこれ?!アンタ業者?!」

「持つてない人の子がいたら分けてあげようと思つて……」

「つていうかどうやつて用意したのよ、コレ」

「神氣ででつち上げた」

「アンタ諸々のペナルティ受けて神氣も大幅に制限中でしそうが。無駄遣いするんじやありません」

「……どうすればいいのだとこれは」

「問屋でも開いたら?」

「むむむ……む?」

そこで、ロングヘアの女性は私の視線に気づいたらしい。

こちらを見つめてくるきらめく瞳に、同性なのにどぎまぎしてしまう。

「一本やろう」

女性は突如そう言つて、私に問答無用でペンライトを押し付けてきた。  
「え? あ、ありがとうございます?」

「うむ」

反射的に受け取つてしまつた私を見て満足げに頷くと、女性はステージに向き直つた。

私は手にしたペンライトを見て、何となく懐かしい気持ちになる。

結構綺麗に光るんだよね、コレ。

……あれ?

なんでそんなこと知つてるんだつけ。こんなもの、どこかで売られているのなんて見  
たことない、はず、なんだけど――

首を捻りながら思い出そうとするけど、どうしても思い出せない。

私がもどかしさにうんうん唸つていると――

不意に、照明が落ちた。

観客席からどよめきが起こる。

わたしもちよつとびつくりしたけど、直ぐにそれが演出だと分かつた。

何故なら、少しの時間をおいて、スポットライトがステージを照らしたから。そのライトに浮かび上るのは、今や国民的なスターといつても過言ではない『トライアングル』の面々！

観客席から歓声が巻き起こる。もちろん、私からも。

だけど、スポットライトが照らしているのは、その三人だけ。

あの方は、シゲル様はどこなの？と観客たちがざわめく中――

ステージの中央から、何かがせり上がってきた。

いの一番に黄色い声を上げたのは二階席の観客たちだつた。視点の高さが、『何か』の正体を一瞬だけ早く教えてくれたんだろう。

でも、そのアドバンテージもほんの一瞬。甲高い喜びの声は、あつという間に会場中から響き渡る。

——見紛うはずもない。ギターを手にした絶世の美男子。  
シゲル様。

その瞬間私の思考はスパークし、ペンライトへの既視感ごとどつかに飛んで行つた。  
このステージが下からせり上がりてくる感じも、何かどこかで見たような気がするけ  
ど——そんなことどうでもいい。

だつて、ついに始まるから。

最高の、ライブが！

千両役者のそろい踏み。

全てが揃つたステージで、シゲル様はマイクを手にして声を上げる。  
高らかに。

謳うよう

「楽しんでいこうぜ！」

アンコールは異世界で

おしまい

# 番外編 渋滞知らずの精霊馬

1

かつて一つの世界が滅びの危機に瀕していた。  
蔓延する死病『昏睡病』によつて人類は絶望し、絶滅寸前にまで追いつめられた。  
しかし、そうはならなかつた。

異世界より訪れた一人の人間が、滅びの運命を打ち破つたからだ。

——今、季節は灼熱の夏。完全に昏睡病が根絶されてから初めてやつてくる夏だ。  
憂いのなくなつた世界で、人々は人生を謳歌していく。

そしてその立役者となつた櫻崎シゲルは今――

「そんなわけでシゲルちゃんに『褒美をあげようつて話になつたのよ!』

久しぶりに神域へと招かれ、突然の弁財天の言葉に首を傾げていた。

「……ちょっとまつてくれ弁天様。どんなわけなのかさっぱりわからねえ」

挨拶もそこそこにそんな話を切り出した弁財天はドヤ顔だが、シゲルとしては頭上に疑問符を浮かべるしかない。

戸惑うシゲルに「あらごめんなさい」とはにかんだ弁財天は、話を続ける。

「この間の神議で議題に上げてみたのよ。ほら、シゲルちゃんって完璧な形でこの世界を救つてくれたでしょ？ そのご褒美がその身体だけってんじやあんまりじやないから、つて。——そしたら圧倒的賛成多数で可決されたわけ！ ご褒美追加よ！」

弁才天の言葉に「へー」と声を漏らしたシゲルは、少々考え込んだ後に口を開く。

「……いや、正直充分すぎるぜ」

何しろ毎日音楽ができるのだ。シゲルとしてはこれ以上望むべくもない報酬といえた。

近頃は三人娘もめきめきと腕を上げている。流石に前世のツアーメンバーほどの実力はまだないが、ライブは毎回『最高』を更新し続けている。

二か月後には二回目のワールドツアーも予定されていて、シゲルとしてはこの世の春であつた。

——しかし。

「——やり残し、あるんじゃない？」

弁才天のその言葉には、思わず動きを止めていた。

やり残し。

シゲルは口の中でその言葉を転がす。

それは確かに存在した。この期に及んでも断ち切れない、前世の未練が。

シゲルは前世では様々なジャンルのライブを行つていた。その為クラシックならクラシックの、ジャズならジャズのツアーメンバーが存在する。

だがロックとポップスに関しては、メンバーはほぼ固定だ。加えてシゲルのライブの凡そ半分はこの二つのジャンルで占められていたから、このバックバンドはシゲルにとってひと際特別な面々と言えた。

ドラムの東武一。

キーボードの天ヶ瀬麗。

ベースの安藤達也。

どいつもこいつも超一流のアーティストで、三人と共に行つたラストライブはシゲルの胸を今も焦がしている。

掛け値なしに最高のライブだった。ケチなど付けようもない。シゲルはそう思つていた。

——だが、一つだけ。

たつた一つだけ、やり残したことがある。  
アンコールだ。

あの時シゲルはツアーメンバーにアンコールを約束し、しかし果たせなかつた。

——もしあの約束が果たせるのなら。

それはもう——

「……だけどよ、それは」

シゲルは言いよどむ。

死者の復活。それがとんでもない『撲破り』だということはシゲルにも何となく分かつていた。

そんなに気安く『死』をなかつたことにできるのなら、そもそもシゲルに異世界を渡らせる必要はなかつただろう。

しかし弁才天はにこりと笑う。

——その願い、叶えて進ぜよう！

その力強い言葉に、シゲルは一瞬呆気にとられ——

「弁天様……マジかよ！」

目を輝かせた。

「出来んのか?! アンコール！」

「如何にも!——と言いたいところなんだけど」

「うおい」

肩透かしを食らつたシゲルががくつとなるのに、弁財天は慌てて言葉を続ける。

「だ、大丈夫大丈夫。流石に元の身体で復活、つてわけにはいかないし、二つのルールを守る必要があるってだけよ」

「ルール?」

シゲルが聞き返すのに頷くと、弁才天は人差し指を立てる。

「まずその一。『日付が変わるまでに人目のない場所へ!』

「ほー。そりやまたなんで?」

「今日一日つて約束だから、シゲルちゃん午前零時になるとあつちの世界からパツと消えちゃうのよ。そんなところ人の子が見たら大変なことになっちゃうでしょ?」

「なるほど、そりや確かに」

「ま、このルールに関しては、守るのはそんなに難しくないと思うんだけど——問題は次のルールなのよ」

弁財天は二本目の指を立てる。

「その二。『自分の正体をバラしてはいけない』！」

「……俺が櫻崎シゲルであること気付かれないようにしろ、つて？」

「ええ。人の子たちにシゲルちゃんの正体がバレるつてことは、疑似的な死者蘇生がバレるつてこと。そりやもう禁則に抵触しまくつちやうのよ」

「あー、やっぱそれマズイのか」

「かなりね。死者の復活つて基本的に厄ネタなのよ。世界にもよるんだけど——それで人が死を畏れないことに繋がつちやうから。多分向こうのイザナミとかハデス辺りが大激怒しちやう」

そう弁財天が懸念を口にすると、

「そういうことだな」

可憐な声と共に、美しい女性が顕現した。

長い黒髪に煌めく瞳。その姿を見て、シゲルは気安く片手をあげた。

「おー、イザナミ様。元気してた？」

「うむ。ぼちぼち」

「えつ、ちよつと待つて。何であなたたち顔なじみみたいに会話してるの？」

かつて命を奪おうとしてきた相手に余りにも気楽に挨拶をするシゲルと、同じように

挨拶を返すイザナミを見て、弁才天は待つたをかけた。

「それは——」

「ああ、イザナミ様ちよくちよく夢に出てくんなどよ」

シゲルはしつと答える。

「なにしてんのよイザナミ！」

「……最近少しだけ歌に興味が出たから、時折コツを聞いているだけだ。シゲルは少々特殊だし、禁則には抵触しないだろう」

「……あー、んー、確かにそう、かしら。話だけなら……」

ビミョーなラインだけどセーフ？と眉根を寄せる弁才天を見て、シゲルは「あれ？」と首を傾げた。

——夢の中で、たまに根の国に誘われてライブやつてなんだけど。あれはいいのか？ちらりとイザナミのほうに視線を向けると、「黙つとけ」のアイコンタクトが飛んできたのでシゲルは口を噤む。

シゲルとしては睡眠中もライブが出来るという最高のイベントなのだ。当初は寝起きのような状態だった根の国のオーディエンスたちも、最近はちょっと心配になるくらいノリが良い。うつかり禁止されたらたまたものではない。

「ところでシゲルよ。ぼいすとれーにんぐは続けているが、そろそろもう一段上を目指

したい。何かコツはないのか?」

「んー、歌も楽器もやつぱりかけた時間が正義みたいなところはあるからなあ。あ、でもコンディションは大事だぜ」

「こんでいしょん?」

「そうそう。メンタルのコンディションも勿論重要だけど、体のほうもな。ノド守るために口にバンソーコー貼つて寝る、なんて歌手もいたつけ」

「ふむ、ふむ」

「くくく頷くイザナミの手にいつの間にか絆創膏が現れていた。

「また神気の無駄遣いして……わたしたちが乾燥で喉やられるわけないでしょーが」

弁才天がひよいつとそれを取り上げる。

「それで何しにきたのよ、イザナミ。シゲルちゃんとお話しにきただけ?」

「手を貸してやりにきたのだ。あちらへの隧道を開けるというなら、わたしの神気もあつたほうがよかろう」

「……いいの?一日限定とはいえ疑似的な死者の復活よ?貴方的にはちよつと言いたいところあるんじやないの?」

「無論ある。——良いか。近頃とみに思うが、生の輝きとは死を前提としているのだ。死という絶対の終わりを信じるからこそ、人の子はその一生を閃くことができる」

イザナミはそこまで言うと遠い目をして、

「そう。死にゆく者こそ美しい」

どこかの大魔王のようなセリフを吐いた。

「シゲルちゃん。あつちに戻つたら光の玉ゲットしててくれる？必要になりそう」

「マジかよ。ドンキで売つてるかな」

弁財天とシゲルの会話を華麗にスルーして、イザナミはシゲルへと漆黒の瞳を向ける。

「と、まあそんなわけで——『死』を軽いものにしかねない死者蘇生は人の子の為にもやるべきではない、とは思うが……きちんと隠し通すのだろう？シゲルよ」

「勿論！任せておいてくれよ！」

自信満々に胸を張るシゲルに、イザナミは微笑みを浮かべてみせる。

「ならばゆけ、シゲル。……約束は守るものだ」

イザナミはシゲルが「よつしゃあ！」と快哉をあげるのを見た後、弁財天へと視線を移す。

「しかし、そうなるとシゲルには仮の名が必要になるな」

「あ、そうね。シゲルちゃん、何か名乗りたい名前とかある？」

「んー、いや、別段ねえな。俺芸名も本名だし」

「うーん……じゃあこうしましようか！」

シゲルのギターには『真美』『理子』『央』の文字が並んでいる。ごく小さな文字だ。弁財天はそこに糸創膏を張り付けた。

『美』の字と『子』の字がちょうど隠れる。

残った文字は――

「――真理央！今日だけ貴方はマリオよ！」

「ま、マリオ、マリオか……」

「あら、気に入らない？」

「いや、いいんだけど、なんか配管工が脳裏を過るというか」

「あはは、何わけわからないこと言つてるのよシゲルちゃん。エウロペとかイタリアあたりじやよくある名前じやない」

「……そうだよな、よくある名前だよな」

「ええもちろん。――さて、じゃあ始めましょうか。イザナミ、力を貸してね」

「うむ」

イザナミは小さく頷くと瞑目する。

直後、凄まじい神気がその全身から迸つた。

神域がビリビリと震える。圧倒的な力に悲鳴を上げているかのようだつた。

「——こんなものか。好きに使うがいい」

事も無げにそう言つて、静かに目を開いたイザナミに、弁財天は苦笑を浮かべる。

「ペナルティ受けててこれってんだからとんでもないわね……でもこれなら確定だわ」

弁財天は渦巻く神氣を白魚のような指で絡めると、静かに息を吐きだし眦を決する。

「——じゃあちよつと待つててね、シゲルちゃん。貴方でも渡れる穴を開けるのは結構ホネなのよ」

「巻きで頼むぜ弁天様！」

「ふふ、はいはい」

弁財天は言うが早いが印を結ぼうとして――

「——あ、そうだ。シゲルちゃん挑戦してみる? いけるかもよ!」

不意に手指の動きを止めると、冗談めかしてシゲルに語り掛けた。

「挑戦? 何をだい?」

「異世界へのトンネル開通!」

ちよつとした洒落つ氣から出た弁財天の言葉に、過剰な反応を見せるものがいた。

イザナミである。

「……や、やめよ。万が一があつたらどうする」

「じょーだんよじょーだん。完全な異世界に生身の人間が通れるサイズの穴開けるつて、それ専門の神の業じやない」

いやに深刻な顔で袖を引いてくるイザナミに、弁才天は「できるわけないでしょー」とけらけらと笑つて見せる。

「——あ、そうか。俺がもしトンネルを開けられたら時短になるつてことだよな」しかしいそいそとギターを取り出したシゲルを見るや真顔になつた。

「え？ 本気？」という顔を向けてくる弁財天と「いやな予感がする」という顔で見てくるイザナミに全く気付くことなく、シゲルはギターを構える。

その心は既に別世界へと飛んでいた。

——タツヤ、武一、麗。

それに、ファンのみんな。

「それじゃあいつちよ、」

今から——

「神業に、挑戦といふか！」

——逢いに行くぜ！

シゲルは渾身のシャウトと共にギターを搔き鳴らすと、喜びを爆発させた。

神域に響き渡る大音声が、心を、魂を——そして世界の境界を震わせる。

「——おつ、出来たんじやねえの?」

気が付けば、シゲルの目の前の空間には人間大の歪みが現れていた。

「「オワーッ!?」」

泡を食つたのは女神たちである。

「ほつ、ホントに開いたア!? 一瞬で！」

「だから言つただろ！だから言つただろう！コイツは開けるのだ！」

二柱の女神は身を寄せ合つておののいた。

女神たちは「だつてほんとに開くと思わないでしょ!?」だの「コイツには前科があるだろう！」だのと言い合つていたが、とにかく歪みがどこに繋がつているかを確認せねばならないというところで意見の一一致を見た。

二柱は恐る恐る歪みを覗き込むと、ユニゾンで「はあー」と感嘆の声を漏らした。「すごこつ。本当にあつちの世界と繋がつてゐる……」

「座標は……なるほど、肉体の縁に引っ張られたか。当然と言えば当然の場所だな」ややあつて振り返つた弁財天は、冷や汗を流しながらシゲルに詰め寄る。

「シゲルちゃん、それ勝手にやつちやダメだからね！指名手配されちゃう！」

「お、おう」

「この場に我々の神気が渦巻いていたから出来た……と思いたいな」

「あつそれ！それよ多分！きつとそうハイ決まり！」

イザナミの説に飛びついた弁財天は、ぱんと手を叩いてその話を打ち切つた。  
「さ、さあとにかくこれで準備は整つたわね！いざ出発よシゲルちゃん！」

厄介ごとから目を背けた弁財天は、それを誤魔化すかのようにシゲルを急かす。

「おうよ！」

シゲルとしては異論があろうはずもない。勢いよく答え、歪みの直前まで歩み寄る。

——だが。

「……ん？」

この土壇場になつて、ふと幾つかの懸念がその脳裏を過つた。

——ちよつと待てよ？元の世界つていつても、俺具体的にどこに転移するんだ？あんまり辺鄙な場所に飛ばされたらライブどころじやなくねえか？

そもそも体一つで転移したら、あいつらに連絡とる手段ないんじやねえの？あれ？

加えて前提として正体隠さなきやなら、一日でアイツらとライブまでこぎつけるつて

完璧に無理なのでは？

「いや弁天様、ちよつと待つ——」

シゲルはそのことを弁財天に伝えようとして——

「じゃあはい、行つてらっしゃい！」

「くれぐれもバレることのないようにな」

遅かつた。

振り返る前に、シゲルは背中を押させていた。

# 番外編 渋滞知らずの精霊馬

## 2

安藤達也視点

?????

靈園の片隅に目的の墓を見つけて、俺は足を止めた。

久し振りに持ち出したベースがずつしりと重い。

もうずいぶん弾いていないステイングレイ5を、俺は言い訳のように背負っている。

……俺がベースを置いてしまったと知つたら、あの人はきつと悲しむから。

「今年も来ましたよー、シゲルさん。お盆最終日になつちやいましたけど、まあ早朝なん  
で勘弁してください」

俺は小さく呟いて、目的の墓に手を合わせた。

このシゲルさんの墓はごく一部の関係者を除いて秘密にされている。

遺骨はいたつて普通の墓に、早くに亡くなつたご両親と共に収められている。  
だから俺が花を手向けたときにも、辺りに他の人影はなかつた。

早朝であることも相まって、靈園はひたすらに静かだつた。

シゲルさんの最後のライブから二年が経つて——俺はある日から、前に進めずにいる。

俺は音楽活動を止めていた。

ラストライブから一年くらいの間は、インペグ屋（ミュージシャンの斡旋屋）さんとか知り合いからしょっちゅう誘いがあつたけど……悉くを断つていたから、流石に今はもう殆ど連絡もこない。

有難いことに、もつたいないと言つてくれる人は多かつた。

でも、俺の心は動かなかつた。

武一さんと麗さんも随分惜しんでくれたけど——あの二人が俺を引き止めないでくれたのは、俺の気持ちがちょっと理解できてしまつたからじゃないかと思う。

——あの人の死を受け入れられない。

二年たつた今ですら。

だつてあんまりじやないか。

これ以上音楽を続けたつて——シゲルさんと演るライブの痺れるような興奮も、その後の打ち上げの底抜けの楽しさも、もう二度と手に入らないなんて。

音楽を続けることで、それを『実感』したら。

それを真正面から受け入れてしまつたら。俺は喪失感でどうにかなつてしまふ。

——そして何より。

シゲルさん抜きで音楽をやつたら、俺の中でシゲルさんが「本当に死んでしまう」気がして。

どうしても、ベースを握ることができない。

とはいゝ、完全に楽器を置いてしまつたのは俺くらいだ。

武一さんは今もドラマとして活躍している。あちこちのライブやレコーディング

に参加して、その腕を振るつてるみたいだ。

櫻崎シゲルのツアーメンバーをやつていた、というだけで引っ張りだこだ。武一さんのドラムのファンは多い。

色々なバンドマンから正式なメンバーとして誘われているらしいけど、「これだ」と思う人たちにはまだ巡り合えないらしい。

麗さんは第一線からは退いたものの、今は後進の育成に力を入れているという話を聞いた。

あの人綺麗な見た目の割にエキセントリックな性格をしてるから、まともに先生なんて出来るのか心配だつたけど——意外なことに評判は良いみたいだ。

何にせよ、二人は地に足をつけてしつかりと生活している。

——宙ぶらりんなのは俺だけだ。

前に進めない俺の頭を過るのは、昔の思い出ばかりだった。

「……初めて会つた時のこと、覚えてますか？俺、あの時ホントに嬉しかつたんすよ」

もの言わぬ墓に語り掛け、俺は当時のことを思い出す。

ライブで友達になつた武一さんのツテで、子供のころからずつと憧れだつたシゲルさんに会えて。

「ちょっと弾いてみてくれよ！」つていうシゲルさんに、テンション上がった俺は限界以上  
のボテンシャル引き出して――

シゲルさん、震えるほど嬉しいコメントしてくれたつけな。

考えてみれば、俺がベーシストとして食つていけるようになつたのはあの時からだつ  
た。

……あ、そうか。

俺が音楽を辞めたの、当然と言えば当然なんだ。

だつて俺が音楽を始めたきっかけは、シゲルさんに憧れたからで。

俺が音楽を続けることができたのも、シゲルさんのおかげで。

だからきつと――俺の音楽にけりをつけるのもシゲルさんだつたんだ。

なるほど道理だ。

そのことに不満はない。

――だけど。

だけどシゲルさん。

あの時、言つたじやないですか……

墓石に手をかけて、俺は語り掛ける。

シゲルさん。アンコールはまだですか。  
五分間の休憩、二年経つても終わらないですよ。

答えは返つてこない。

当然だ。

……死とは停滞である、みたいな言葉を残した偉人がいたけど、なるほどうまいことを言うものだと思う。

死者は語らない。歌わない。奏でない。

停まつたままだ。

——不意に、下らない考えが浮かんだ。

死が停滞であるのなら。

今の俺は生きていると言えるのか。

「……また、来ます」

それだけ言うと、俺は墓石に背を向けて、その場を立ち去り——

「げつ、墓地スタート！ ビーすんだよ弁天様、金もねえし足もねえしスマホもねえのに！ ……ギターだけある！ ここでやれってことか？！」

「つ！？」

いきなり後方から響いたその『声』を聞いて、金縛りにあつたように硬直した。

誰もいなかつたはずだ。見逃してた？ 確かに立ち並ぶ墓石はどれもそれなりに大きく、見通しは良くない。どこかの墓石の陰で誰かが屈んでいれば見えないこともあるだろう。だけど確かに何の物音も気配もなかつたハズで――

いや、そんなことは問題じやない。

この、声。

「だけどやり残しやるつたつて、オーディエンスが全員墓の下じゃどうしようも……いや待てよ？ イケるのか？」

ぶつぶつ呟かれるその声は、小さくてよく聞こえない。

「いやでもイケたとしてもアイツら居ねえからアンコールつてのとはちょいと違う……」

でも、この声。このしゃべり方。

「そもそも墓地でライブはマズいよな……」

そんなバカなと思うけど、俺がこの声を聞き間違えるはずがない。

いやまさか。そんな。でも――！

「シゲルさん――?!」

荒唐無稽な直感に突き動かされて、俺は勢いよく振り返った。

「お!？」

——違った。

目が合うなり素つ頓狂な声を上げたその人は、俺の脳裏に浮かんだあの人とは似ても似つかなかつた。

……当然だ。死者が蘇るはずはない。

目の前にいるのは、まつたく見覚えのないイケメン——いやホントものすごいイケメンだ!? なんだこの人!

思わず見惚れる俺を見て、そのイケメンはうれしそうに笑う。

「はは、なんだよなんだよ! オイ、たまらねえな!」

「?」

滅茶苦茶気安く語り掛けてきた彼は、何故かずかずかと俺に近寄ってきて、「——マジで駆けつけてくれたじやねえか、タツヤ!」

バシバシ俺の背を叩きながら、あの人の声でそんなことを言つた。

「——え?」

当然、俺は目を丸くする。

だつて、初対面だ。

自己紹介なんてしてない。

「あの、なんで、俺の名前を……?」

「あつ」

そこで彼は一瞬硬直すると、慌てて言葉を続けてきた。

「えーと、いやお前さん、そりやアレだよ。あんたベースの安藤達也、さんだろ？　はは、有名人有名人。音楽好きなら全員知ってるつて」

「いやそんな馬鹿な。俺そこまでメジャーじゃないよ」

何故か一筋の汗をかきながらまくしたてる彼に、俺はそう反論する。実際そこまで有名じやないと思う。そもそも二年も表舞台に出てないし。

……まあでも、コアなファンがいなかつたわけじやないし、たまたま知つてることもあるのかな。シゲルさんのラストライブ自体は方々でこすり倒されてるし。

ああ、だけど不思議だ。こんなに似てない人なのに、何故か雰囲気がシゲルさんに近い。あまりにも声が似すぎてるからそう感じるだけなんだろうか。

……でも、

「なーに謙遜謙遜。あのスラップは神業だろ！初めて聞いた時、俺はこう思つたね！」

そうやつて俺を褒めるその口調まである人とそつくりで——俺の脳裏に、初対面のあの瞬間が蘇る。

「このベース——」

『お前さん——』

『最ッ高じやねえか！』……つてよー。』

——ダメだ。

——その声で、そんなこと言わないでくれよ』

「あ？」

熱いものが、両目にこみあげてくる。

「泣けて、くる」

「お？お、おいおい、なんだ?! 泣くなつて！」

涙が止まるまで、少しだけ時間がかかった。

「ごめん。……君、声が滅茶苦茶櫻崎シゲルさんに似てるんだよ。俺ツアーメンバーだつたからさ。つい、思い出しちやつて」

「あー……そうか。何か悪いな。声変えるか? 結構色んな声だせるぜ、俺」

「そーゆーところもシゲルさんっぽいなあ。顔は全然似てないけど」

何しろどんでもない美男子だ。シゲルさんも彫りが深くて良い顔してたけど、この彼はレベルが違う。

身長は百八十センチには届かないだろうか。それなりの長身とガタイの良さがあるのに、顔の小ささと長い手足はむしろ中性的な美しさを漂わせている。

顔立ちは整いすぎていて凜々しいけど、目尻は僅かに優し気に下がっていて、見る者に柔らかい印象を与えてている。右目の泣きぼくろはごく小さいが、そこには無限の色気があった。

「君、アイドルとかやつたら世界とれるよ。いや、マジで」  
完璧なスタイルと顔面を見ながら、俺は惚れ惚れと言う。

「興味ねえなあ」

しかし彼はそう言つて肩を竦めるだけだ。

もつたいない、と思つたけど、俺は何となく彼ならそう言う気がしていた。

「はは、そつか。——じゃあ興味あるのは、背中のそれ？」

俺はそう言つてギターケースを指さす。

「まあな」

にやりと笑うその表情に、何故か強烈な既視感がある。

俺は彼のことがもつと知りたくなつて、ついつい話し込んでしまう。

「そのデカさはアコギかな？ エレアコ？」

「エレアコだよ。ま、楽器は何でも好きだけどな！ タツヤ——さんは、ベースだろ？ メイ  
ンはステイングレイ5だつたよな」

「よく知つてるなあ……あ、さん付けないでいいよ。呼び捨てでさ」

「お？ そう？」

「うん」

——その声に、『さん』を付けられたくないんだ。

「はは、オッケー！ 俺もそのほうがやりやすい」

「そう言えば、キミの名前は？」

「おつと、そういうや言つてなかつたな。マリオだ、マリオ」

「……キミイタリア人？ ハーフとか？」

「生まれも育ちも日本だが故あってマリオだ。深く聞いてくれるな」

「そ、そつか。まあ自分の名前って自分で選べないしね。いい名前だと思うよ、マリオ」

「サンキユ」

そう言つた彼がぱちっとウインクすると、泣きぼくろが際立つた。

その瞬間、胸が高鳴つた自分に俺自身がびっくりする。

——ちよ、ちよつと待つてくれ。俺そのケはないのに。何かこのヒト殺人的に色っぽいぞ。

「なあタツヤ。初対面で悪いんだが、ちよいと相談があるんだよ」

勝手にどぎまぎしてると、彼が話しかけてきた。

「え、相談？ どんな？」

俺は聞き返す。

とんでもなく整つた顔面の中、ひと際目を引く両の瞳が俺を捉える。

「今日これから、俺と一緒にライブをやらねえか？」

——もう一度、鼓動が高鳴った。  
今度はさつきよりもずっと強く。

——久しぶりに動いたと、錯覚するほどに。

「——は、はは。突然だね！」

不意打ちを食らつた俺はとりあえず笑い飛ばした。

あまりにも唐突な彼のセリフを、何かの冗談だと思ったからだ。

「ダメか？」

でも、マリオの目はひたすら真摯だった。

「い、いや、ダメってことないけど、初対面だしさ。もうちょっとお互いの腕前とか知つた上で——」

「悪いけど時間がねえんだよ。今日を逃すわけにはいかねえんだ」

「……マリオが今日やる予定のライブに、俺がゲスト的に参加する、つてこと？」

「いや——チケットもハコも他のメンツも、何一つ用意できてねえ。あるのは剥き身の俺とギターだけだ」

俺は眉をひそめた。

無茶言うな、と思う。その条件で今日ライブをやろうと思つたら、無許可でゲリラライブみたいなことをするしかない。普通に違法行為だ。

「あのね、マリオ」

苦言を呈そとした俺だけど、

「無理言つてるのは分かつてんだよ。でも今日だ。今日、お前さんと一緒にライブをやりたい」

そういわれると、否定の言葉が引つ込んでしまう。

くそ、反則だよその声。

「……ちょっと待つて。伝手を当たつてみる」

「頼むぜ！」

表面上冷静を装つてスマホを取り出した俺だけど、何故かその手は小刻みに震えていた。電話一本かけるだけで一苦労だ。

スマホをタップしながら、鼓動がどんどん早くなる。

何かが起ころ。今、起こりかけてる。

俺の心の奥底。理屈と常識を超えたところで、魂が叫んでる。

『来たぞ』と。

その内なる声に突き動かされて――

『おう、タツヤ。なんだよ久しぶり――』

「武一さん！今どこですか！」

俺の第一声は、自分が思つたよりもずっと大きくなつてしまつた。  
『な、なんだ突然。今渋谷だけど』

――よつしや近い！

「俺今近場なんすけど、今直ぐ会えませんか?!」

『今直ぐ!?無茶言うな。俺は今絶望的な修羅場なんだ。久しぶりにお前の顔は見たい  
が、割とそれどころじやねえ。ライブに穴開くかどうかの瀬戸際だ』

「……ライブに、穴？」

俺の言葉に、マリオがびくりと反応した。

『――いや、待てよ？これは天祐か！？タツヤ、お前こそ直ぐ渋谷に来れないか?!』

「え？何あつたんすか？」

『ちよいと込み入った話になるんだが……サラスヴァティってライブハウス覚えてるか

？』

## 「サラスヴァアティイ——」

覚えのある名前だつた。いろんな場所でライブをやつてきてたけど、そのライブハウスは俺の脳裏にしつかりと刻まれている。

なにしろ、そこでシゲルさんと一緒にライブをやつたことがあつたから。

六年前だつたかな。シゲルさんとやつと何回かライブをこなしたくらいの時期で——そうそう。武一さんが助つ人でサラスヴァアティのライブに駆り出されたんだ。それで武一さんが「暇なら見に来い」つて言つて俺と、暇なわけがないシゲルさんにチケット渡してくれて——

マジで来たんだよね、シゲルさん。「こここのオーナーのおっちゃん昔馴染みなんだよ」とか言つて。

どえらい騒ぎになつたのを覚えてる。

なんかなし崩しで俺もステージに上がつて、シゲルさんとライブをやつて——最高に、楽しかつた。

……そいういえば、オーナーさんに頼まれて皆で楽屋の壁にサイン書いたつけ。

「——渋谷の、キヤパ500人くらいのハコですよね?あの雰囲気良いとこ」『そこそこ。あそこ割と老舗で俺も若いころからちよくちよく世話になつてたんだが、オーナーが年でもう店閉めるつてことになつてな。何かとオーナーに世話焼いても

らつてた音楽仲間と「そんなら対バンでお別れライブでもやつたらどうだ」って話になつてよ。そりやいいやつてんで面子集めて——まさに今日がそのライブ当日なんだよ』

「良い話じゃないですか」

——だけど何の問題もなく今日を迎えたのなら、武一さんがこんなに焦つてるわけはない。

『そうだな、いい話だよ。ここまでではな』

『ここまででは……？』

『……どいつもこいつも気ごころ知れた音楽仲間でよ、一昨日景気づけつつてプチ飲み会があつたわけよ』

深刻な口ぶりだつた。俺は何となくマリオに背を向けて、声を潜める。

『そ、それで？』

『——俺以外が全員食中毒になつた』

言葉も出ない。

『昨日の時点できらほら体調不良の報告は上がつてたんだが、今朝もう決定的になつた。全滅だ全滅。全員病院送り。多分俺以外が食つた刺身が下手人だ。——だから一応生モノはやめた方がいいんじやねえかつて俺は言つたんだよ!』

「ぜ、全滅つすか。……ちなみにライブは何時間の予定で？」

『二時間だ』

つてことは少なくともバンドは三組は居たはずだ。それが武一さん以外全滅。刺身のヤツ何人殺したんだ。

「マズイじやないつすか……」

『ああマズイ。これ以上ないつてくらいマズイ。昨日からトラ（エクストラ。代役）探してるんだが、こーゆーときに限つて捕まんねえ』

『このままじゃあ、最悪』

その先は聞かなくともわかる。

最悪の事態——ライブ中止。そうなるだろう。

『そう、最悪俺が二時間ドラムソロを響かせることになる……！』

!?

やる気なのがすげえ……！

『だけど今なことしたらまず客は途中で帰る！だって俺なら帰るもん！結果的にライブに穴開くのと変わらん！——だから何とか頼むタツヤ！お前の気持ちは察してるつもりだが……今日ばかりはそれを曲げて頼む！』

「ちよ、ちよつと待ってください。すぐかけ直しますつ」

俺は電話を切つて考えを巡らせる。

——見ようによつては渡りに船だ。ライブ会場と観客が向こうからやつてきた形だ。だけど、大きな不安がある。

武一さんはただのドラマージやない。凄腕のドラマードだ。今日のライブ、恐らく武一さんを目的にやつてくるお客様も多いだろう。その武一さんがセッショングするはずだつたプレイヤーたちも、おそらく相当の腕前だつたはず。

——つまるところハードルはハツキリと高い。

どこかでゲリラライブを行うのとはわけが違う。せめてチケット代相応の音楽にしなければならない。金をもらつて音楽をやるというのはそういうことだ。

まず、二年のブランクがある俺にベースが務まるのか。

そして——果たしてマリオに、その声に負けないくらいのテクニックがあるのか。逡巡する俺は——ふと「こんな時シゲルさんならなんて言うだろう」と考えた。突然

武一さんが「ライブに穴空きそなんだよ！」と電話をかけてきた。  
……考るまでもなかつた。

あの人なら、きっと――

俺は覚悟を決めると、彼の方を振り返る。

「マリオ！ キミ、ギターは何年やつて――わっ!?」

マリオはえらい至近距離にいた。

「――ライブに穴だあ？」

耳をそばだてて内容を聞いていたらしいマリオは、両目をぎらぎらと光らせて、

「神様が許しても俺が許さねえぞ」

痺れるくらい特大の気炎を吐いた。

# 番外編 渋滞知らずの精霊馬 3

「……帰省中？今九州？あー、そうか。そうか……いや、なんでもねえ。またな」

電話を切つた武一は天井を仰ぐ。

——万策尽きた。もう伝手はない。

「マジで頼むからな、タツヤ……もうお前だけが最後の希望だ」

サラスヴァティの楽屋で武一はそうひとりごちると、スマホを握りしめる。

樂屋を専有していても誰からも文句をつけられない。何しろ一人だ。

それなりのスペースがある楽屋だが、今この場にいるのは武一だけだった。

ハツキリ言つて心細すぎた。こいこいタツヤ早くこい——と武一が念を込めてドアを睨みつけると、ガチャリと音を立ててそのドアが開く。

一瞬喜色を浮かべる武一だったが、入ってきたのはオーナーの髭面だった。

「とんだことになつたな武一」

軽い調子で言いながら椅子に腰かけたオーナーに、武一は半眼を向ける。

「他人事みてえに……この店で大惨事が起きるかどうかの瀬戸際なんですぜ」

「へつ。どうせもう置むから関係ねえ」

へらつと笑つたオーナーは、ポケットから煙草を取り出して——思いとどまつてしまい直した。

「あれ？ 禁煙ですかい」

珍しいものを見た、と言わんばかりの顔で武一が尋ねる。武一の知る限りオーナーはかなりのスマーカーで、そこにボーカルさえいなければ樂屋だろうがスパスパ吸つていた筈だ。

「医者に止められてんだ。長生きしたけりやなるべく吸うなつてよ」

「医者の言うこと聞くようなタマでしたつけ」

「……一つ教えてやるが、歳喰うと死ぬのが怖くなくなるなんてのは嘘つぱちだぞ武一。俺はこの年になつて益々死ぬのが怖い」

「は、往生際の悪いこつて。……その調子でしぶとく店も続けてほしかつたんですけどね」「老後の道楽はもつと大人しいもんに限る。寿命が縮むからな」

つまらなそうにそう言つて、オーナーは背もたれに体重を預ける。

「……で、誰か捕まつたのか」

「取り合はず一人。ベースの達也だけは捕まつたんですが……アイツ多分ブランクあん

だよなあ」

「安藤達也か。ありや本物だ、多少のブランクは問題ねえだろう。……だがドラムとベースだけじやあライブにやならんぞ」

「それが……なんか達也が『ギターなんとかなるかもしません』って電話で言つてたんですよ。もしかしたら助つ人連れてきてくれるのかも知れません。達也結構ボーカルイケるから、ギターの出来次第では何とか形になるかも」

「ほー」

オーナーは相槌を打ちながらも、「それはちよいと難しかろうな」と考えていた。

安藤達也。東武一。どちらも本物のミュージシャンで、超一流と言つて差し支えのないプレイヤーだ。このライブハウスには豪華すぎる面子と言つていい。

だが、そこに一人だけ『並み』のギターが混ざれば、そのライブは酷くちぐはぐなものとなるだろう。

無論、その助つ人が『本物』の可能性もあるが——

「もし助つ人が来たら、オーナーも腕前確かめてくださいよ。耳には自信あるでしう？」

「ま、ソイツが本物かどうかくらいは聞けばわかるが——この商売長いが、本物なんてほんの一握りしかおらんぞ」

そのことであつた。

オーナーの視線の先には、壁に書かれたいくつかのサイン。

どれも名だたるプレイヤーのものばかりだ。数えきれないほどのバンドがこの楽屋を訪れたが、この偏屈なオーナーの眼鏡にかなつたミュージシャンは限りなく少ない。オーナーがこの壁にサインを頼むのは、超のつく一流だけだ。

一番目立つ場所に書かれている櫻崎シゲルのサイン。そしてその下に書かれている自分とかつてのメンバーの名前を見て、武一は肩をすくめる。

「……」の際贅沢言つてられませんぜ、高望みはなしにしましょや。タツヤが居れば、何とか恰好だけはつく

「ふん。で、その頼みの綱はいつ到着するんだ？」

「あー、時間的に多分そろそろ——」

再び部屋のドアが開いたのはまさにその瞬間だつた。

飛び込んでくるのは、パーカをかけたような癖毛が特徴的な童顔の——頼りになるベーシスト。

「お久しぶりです、武一さんつ

「——おう。よく来てくれたな」

電話越しではないタツヤの懐かしい声に、武一は笑みを浮かべて答え——

「よう！ひ——初めましてだな、武一サンよ！」

「お前声がシゲルじやねえか！」

後に続いた『もつと懐かしい声』に、思わず突っ込みを入れていた。

安藤達也 視点

「のつけからなんだよ！」

?????

「あ、いや、すまん。——東武一だ」

もつともな文句をつけるマリオに、武一さんは謝罪して手を差し出す。

「おう、俺はマリオだ。助つ人つてことで参上したぜ。ギターは任せといてくれよ！歌も結構自信あるぜ！」

その手を力強く握り返してべらべら喋るマリオに武一さんは「お、おう」とだけ返したけど、見るからに動搖していた。

その気持ちがよーく分かる。よくあるワンセンテンスだけのモノマネとかじやなくて、マリオの場合喋れば喋るほど似てるんだよ。

「……すげえな。こんなに似てる声の人間がいるのか」

オーナーさんもマリオの声には驚いているみたいだ。まあ誰でもそうなると思う。あまりにもそつくりだから。

「——ん？ おー、おっしゃ……じゃなくてオーナーもいるのか！ はは、今日はよろしくな！」

「あ、ああ」

「……あれ？ なんでマリオはあそこで座ってるのがオーナーって分かったんだろう？」

「ちょ、ちょっとこいタツヤ」

手を引いてくる武一さんに思考を中断される。

武一さんは俺を少し離れた場所まで引っ張つて、小声で話しかけてくる。

「……お前アイドルでも連れてきたの？ カレ顔面偏差値がメーターボリ切つてるけど、どこの何者だ」

「音楽好きのマリオくんらしいです。正体不明です」

「……ギター上手いの？」

「いや知らないです。今日初めて会ったんで」

「なんで正体不明の初対面をこの大一番に連れてくるんだよ……」

「声がシゲルさんだつたんで……ギターも持つてたし」

「それはそうだけど、ギター上手いとは限らねえだろ……」

「おーい、どうした？」

内緒話をする俺たちの背中に、マリオが声をかける。余りにも聞きなれたその声に、思わず俺たちはびくつとしてしまう。

……ホント姿さえ見なかつたら完璧にシゲルさんなんだよなあ。

そう思つたのは、どうも俺だけじやなかつたらしく――  
「なあ、マリオ」

「なんだい、武一サンよ」

「さん付けは無しでいい」

「——武一さんはそう言うと、僅かな沈黙の後に、  
どこか恐る恐るといった風に切り出した。  
マリオはちょっと面食らつたような顔をする。

「……ダメか?」

「いや。——望むところだよ」

優し気に目を細めたマリオは、武一さんの瞳を見ながら、

「——逢いたかつたぜ、武一」

あの人声で、そう言つた。

「——」

武一さんは右の掌で目を覆うと、ぐつと歯を食いしばつて、何かを堪えるように俯いた。

でもそれも数秒のこと。武一さんは両眼をこするようにして手の覆いを外して、少し

だけ赤くなつた目でマリオを見る。

「いやマジですげえ。目瞑つてるとそこにシゲルがいるみたい。お前さんそれ芸にしてメシ食えるぜ」

「はは、メシ食う芸なら別に持つてるよ」

不敵な笑みを浮かべたマリオは、そう言つてギターケースに手をかける。

びくりと武一さんの眉が動いた。

「——自信家だな。その声に見合う芸か?」

「試してみるかい?」

自信満々のマリオは、ケースからギターを取り出す。

ギターケースから出てきたそれを見て、俺はちょっと驚いた。

何しろ、声だけじゃなくてギターまでシゲルさんと同じだつたから。

Taylor T5。シゲルさんのライブで一番登場機会が多くつた名機だ。かなり強気な価格のエレアコで、シゲルさんに憧れて値段を調べて絶望するところまでがギター少年のテンプレだ。

そういうえばシゲルさんが病床に持ち込んでいたのもこれだつたな。

——最後のライブで使つたのも。

「テイラーカ。良いの持つてんな。年季入つてんじやねえか」

「まーな。頼りになる相棒だぜ」

「しかしエレアコか。……確かにシゲルの曲やるなら都合がいい、が」

そうつぶやいた武一さんは、少し考えこむ。

子どもの頃に貰ったギターがアコギだったとかで、シゲルさんの曲は結構エレアコ向きのものも多い。特にポップスは顕著だ。

ロックでもマツハカナブンみたいにバリバリにエレキの音作りが必要な曲以外では出番がある。

「……じゃあ櫻崎シゲルの『Everybody』やつてみてくれ。イントロだけでいい」

武一さんが口の端を挑戦的に釣り上げて言う。

……武一さんも無茶振りするなあ。『ギターが難しい曲』と言われたらぱつと頭に浮かぶ曲の一つだ。

「おいおいEverybodyだつて？そんなの——」

実際マリオもそう言つて眉を顰めて——

「俺が弾けねえワケあるかよ」

全員の度肝を抜く、とんでもないテクニックを見せた。

ギタースラップが完璧だ。

いや、完璧超えて最高だ。

目まぐるしいサムピングとプル。多用されるゴーストノートが、リズムとサウンドを殺すどころかどこまでも躍動させている。

嘘だろ。あり得ない。ホントにT5の生音かこれ。

こんだけネットが普及した現代に、こんなプレイヤーがこの世のどこに眠つてたんだ。

とにかく、すごい。

息もできない。

マリオがスラム奏法まで織り交ぜてイントロをやり終えるのを、俺たちはあんぐり口を開けたまま見つめていた。

「——絶好調！」

太陽みたいに笑うマリオが、歯切れよくそう言つた。

そこでやつと俺たちは呼吸を取り戻した。

——心臓の鼓動がうるさい。

あまりの感動と興奮で、俺は胸を押さえたまま動けない。

オーナーは椅子を蹴るように立ち上がってスマホ片手に部屋を飛び出していく。  
そして武一さんは、震える手で乱暴にスマホをタップして——

「う、うらつ、麗!! 今すぐ渋谷に来い!」

開口一番、そうがなり立てた。

天ヶ瀬麗視点

?????

そこそこ眺めのいい、しかも防音設備の整ったマンション。

七時間ぐつすり眠れて寝覚めはばつちり。カップに入った紅茶はラデュレの最高級。  
グランドピアノは調律したばかりで、僅かな狂いも生じていない。

ついでに予約していた乙女ゲームが先ほど届いた。

完璧な休日の朝だ。

——これから気の乗らないお見合いが待っている、という一点を除けば。

三十歳を目前にして、いよいよ母の「結婚しろ」攻撃は苛烈さを増していた。この攻撃に対しても、ジャズピアニストとして、キーボーディストとして立派に独立していることは何の意味も持たない。

私は無理やり押し付けられたお見合い写真を一瞥し、フンと鼻を鳴らす。

それなりにスタイルがいい男だ。まあ、別段顔立ちが整っていないわけでもない。でも、うすら笑いが気に食わない。

たつた一枚の写真に大仰なハードカバーの台紙付き。

サイズ的にゴミ箱に捨てるときにはひと手間要りそうだ。

気に食わない点は他にもある。

母曰くこの男、音楽活動に対しても「理解はあるほうです」と答えたらしい。

ちょっとイラつとする言葉だ。

好きなら好きと言えばいいし、興味がないなら興味がないでいいのに。

まあでもどこぞの社長の一人息子だとかで、金には困っていないらしい。それは素晴らしい

らしい長所だ。

椅子の背もたれに体重を預け、私はため息をつく。

人生はままならないものだ。乙女ゲームみたいにはいかない。

理想の王子様なんて現実には存在しないし——理想の声をしていた攻略対象は、手の届かないところに行つてしまつた。

だから——適當なところで妥協しようかな、という気持ちは、確かに私にある。

「……ハア」

紅茶を啜り、ため息を一つ。

——電話がかかってきたのはその時だつた。

スマホには少しだけ懐かしい名前が表示されていた。

東武一。

線の細めのゴリラが脳裏に浮かぶ。大体合つてる。

「はい」

『う、うらつ、麗!! 今すぐ渋谷に来い!』

電話に出ると、興奮状態のゴリラの声が聞こえてきた。

「……久しぶりに電話來たと思つたら突然何よ。私は優雅なティータイム中なんだけど」

『大事件だ！ 大事件が起きたんだよ！ 今日お前がここに来ないと俺もお前も一生後悔する！ 絶対だ！』

見たことないくらいのテンションね、コイツ。

「いきなりそんなこといわれても無理。私は今日重大なイベントがあるので。ベターエンドフラグの一つなんだから」

『うるせえ！ いいから来いって！』

『なんだか知らないけど落ち着きなさいよ』

『これが落ち着いていられるか！ 来ねえってんならそこ押しかけて連れてくぞ！ もう、アレだ、殴つてでもな！』

あら武一にしては珍しく強い言葉使うわね。ゴリラ並みのルックスとゴリラ顔負けのドラマチックとゴリラの纖細さを併せ持つ男なのに。

『いいけど私はグランドピアノで殴り返すわよ』

『えつ死んじやう……』

すぐ怯むあたりやつぱりいつもの武一だわ。

『——い、いやこの際今日が終わつたらグランドピアノを俺の墓標にしていい！ お願ひだから来て！』

『戒名ヤマハになるわよ』

『ヤマハだろうがスタインウェイだろうが好きにしろ!』

……らしくない粘り腰だわ。これ本当に異常事態ね。

「ちゃんと説明しなさいな。何があつたの?」

『とにかく——とにかく会つて欲しい男がいるんだよ! 今写真送るから、それだけでも見ろ!』

まるで母のようなことを言つて、武一は電話を切つた。

即座にスマホが鳴る。本当に写真を送りつけてきたらしい。

私は一応それを確認する。

とんでもねえイケメンだつた。

とんでもねえイケメンがピースサインしてゐる。

この私に向かつて。

直後に届いたメッセージには「このツラでシゲルみたいな声しててシゲル並みにギターがうめえ!」とある。

……ふむ。

ふむふむ。

つまり待ちに待つた王子様が登場したと。そういうことよね。

デカいお見合い写真に膝を入れてからゴミ箱にぶん投げて、私は立ち上がりつた。  
トウルーエンドのフラグと共に。

# 番外編 渋滞知らずの精霊馬

## 4

安藤達也視点

????? ドアを蹴破るような勢いで麗さんは参上した。

武一さんの電話から三十分も経たずに。

……麗さんどこ住みだつけ。ワープでもしたのかな。

「——なんだその恰好。お見合いでもする気か」

氣合の入りまくつたメイクとファッショնを見て、武一さんはちょっと引いていた。  
「する気よ」

その武一さんを一顧だにせず、麗さんは一直線にマリオのもとへと進む。

マリオは麗さんを見て嬉しそうに顔をほころばせた。俺を知ってるくらいだから、著

名なピアニストである麗さんのこととも知ってるんだろう。  
なにしろ麗さんは異色の経歴の持ち主だ。元々一流のピアニストでありながら、シゲ

ルさんの音楽に惚れこんでツアメンの座をもぎ取ったというエピソードは、なんとテレビ番組になつたこともある。知名度はかなり高い。

「あの、音楽好きですか？」

その麗さんは自己紹介も無しに、マリオにそんな質問をぶつけた。  
「おう！ 愛してるぜ！」

でもマリオは即答する。

「ありがとう。結婚しましょう」

麗さんも即答する。

「あ？」

「待て待て待て」

麗さんによる会話の超次元ドッジボールに武一さんが割って入つた。

「のけ、武一。こんな都合のいい、私の理想をかき集めたかのような男性——私の夢から出てきた王子様以外にあり得ない……！ 私に所有権がある！」

麗さんは言葉の剛速球で武一さんを場外に吹き飛ばそうとする。

「無茶苦茶言つてんじやねえ！ そんなことのためにお前に声かけたんじやねえぞ！」

でも武一さんは踏ん張る。えらい。

「ハア?! ジャあ何で私を呼んだのよ?!」

「キーボードやらせたいからだよ！お前に他の価値があるか?!」

「ころす」

「うわああああ！」

麗さんが執拗に武一さんの急所を狙いだした。武一さんは鋭い蹴り足から必死に逃げる。

まあ流石に他の価値がないってのは言い過ぎだ。麗さんはかなり綺麗なヒトで、スタイルもいい。

だけどいわゆる『黙つてりや美人』なタイプだからなあ……  
ああ、でも、こんなやり取りもなんだか――

「懐かしいな……」

――その小さな声は、俺の口から出たものじゃなかつた。  
はつとして横を見る。

そこにあるのは嬉し気に――そして本当に、心底懐かしそうに二人を見ているマリオの横顔だ。

なぜかその整いすぎた顔にシゲルさんがダブつて見えて、俺は目をこすつてしまふ。  
――おつと、ライブ前にドラマ一潰されたまんねえよ。おいタツヤ、ぼちぼち止め  
るぞ」

「あ、そ、そうだね」

マリオが麗さんを羽交い絞めにしたところ、彼女は陶酔状態で動きを止めてくれたので、俺たちはやつとりハーサルの話が出来るようになつた。

「——あれ？ ところでオーナーはどこいつたんすか」

「あついねえ。まあイイや」

武一さんがさらりと言う。

「……まあイインすか？」

いいんだろうか。そもそも今回のイベントつてある意味オーナーが主役では？ 世話になつたオーナーへの手向けのライブつてことだつたはずだけど……そのオーナーにリハぐらいは確認してもらわないとマズいんじゃないかな。四分の三がピンチヒッターなんだから。

でも武一さんはあつさり頷く。

「ああ。別にオーナー居なくともライブの出来栄えに影響無いから  
なるほど。武一さんは当初の目的を完全に忘れている。

「そんなことより肝心なのはマリオの歌だ。『歌もイケる』って話だが……あのギターの

後じやハードル上がるぜ。自分自身のギターに負けない自信あるのか?」

「ほんとにアホね武一は。この王子様の歌が下手なわけないでしょ?」

何故か麗さんが答えた。

やれやれと言いたげな様子で口を挟んだ麗さんに、武一さんは半眼を向ける。

「……お前マリオの何を知つてんだよ」

「何から何まで知つてるわよ。私の夢ノートに詳細な設定が山のように描かれてるから。——その声は天上の美声だしその演奏はミューズも裸足だしそのルックスにはアフロディーテが嫉妬してサネルの五番は彼の汗よ」

一息に言つた麗さんは虚空を見据えてポンと手を打つ。

「——あつ、買い占めなきや。サネルの五番」

麗さんの瞳孔は開いていた。

「コイツ過去最大級にキマつてやがる」

武一さんが戦慄している。

俺もこわい。

平然としてるのはマリオだけだ。

「まーとりあえず歌の方もテストしてくれよ、武一」

あの麗さんを前にして普通に話を続けられるんだからすごい心臓だ。

……というかこの人今はライブのことしか頭にないのかもしれない。なんとなくそれが正解な気がする。

「あ、ああ。だけど言つた通りハードル高いぞ。大丈夫なのかよ」

「お眼鏡に叶わなかつたらタツヤに任せりやいいだろ」

「……まあ、そうだな」

「えッ、俺すか」

武一さんはマリオの言葉に頷くけど、俺としては冷や汗なのだ。

正直勘弁してほしい。このギタリストに負けないボーカルは多分現世にいない。「じゃあ適当に歌つてみてくれよ、マリオ。何の曲でもいいぜ」

「ん」。じゃあ『スマーキン・スマーカー』なんてどうだ?』

「またテクい曲を……あの大サビの転調イケるのかお前」

「そいつも聞けば分かるだろ」

「ちつ——その声で音痴だつたら赤つ恥だからな。頬むから笑わせてくれんなよ!」

俺は武一さんのその言葉を聞いて、マリオなら即座に『任せとけ』と答えると思つた。  
だけど、

「あー、そりやあ難しいかもしけねえな」

なんと、マリオが口にしたのはそんなセリフだった。

「何い？」

予想外のセリフに、武一さんはぎょっとした顔でマリオを見る。でも。

「不思議と皆、笑つちまうらしいぜ——」

弱気な言葉とは裏腹に、マリオは自信満々にギターを構えて——

「俺の歌を聞くとな！」

大きく口を——

結果。高いハードルとやらは何の意味もなかつた。スーパージャンプで一発だつた。

一行は即座にステージへと移動し、打ち合わせを始めていた。

「これが今日のセトリ（セットリスト。演奏する曲名とその順番）だ。でも手を加える必要があると思う」

「ほー、どれどれ」

見るからにわくわくしているマリオは、武一の差し出したメモに目を通し——眉を顰めた。

「……なんだこの櫻崎シゲルの多さは！ コピバンじやあるまいしもつとてめえらの曲やれよ！」

「しょーがねーだろ！ アイツただでさえレジエンドだつたのにラストライブで本物の伝説になつちやつたんだから！ 今日やるはずだつたバンドマンは全員アイツのファンなんだよ！」

「言うほど大したことねえよアイツ」

「てめー俺と戦争する気か。……そもそもだな、マリオ。お前その声とギターでシゲルの曲やらねえってのは冒流だぞ冒流。大体『スマーキン・スマーカー』だつてシゲルの曲だし、『Everybody』も弾けるつてんならお前もシゲルの曲好きなんだろ?」

「そりゃあ大好きだけど——いや、そうか。今日に限つちや都合が良いな」

「あん? 都合が良い?」

「ああ。——このメンツで、櫻崎シゲルの曲をやれたら、」

「そいつはもう、言うことなしつてヤツさ」

右手をポケットに突っ込んで、マリオは「ありがてえ」と口にする。

その様子を尻目に、オーナーは呼びつけたカメラマンをせつづいている。

「早くしろ。リハが始まつちまうだろうが」

「あのですねオーナーさん。盆休みの最中に電話一本で呼び出されて、この速度で機材持つてきてセッティングしてる俺に感謝の一言もないんですか?」

「やかましい。あのメンツを撮れるんだ、むしろ俺に感謝しろ」

「……確かに錆々たるメンバーですがね。あの見れば見るほどイケメンの彼だけが不安要素ですよ。ちゃんとしたミュージシャンなんですか?」

「間違いなく本物だ」

断言するオーナーに、カメラマンは少々驚いた。軽々に「本物」なんて言葉を使う人

物ではないことを、それなりに長い付き合いで知っていたから。

「ま、確かにそれなら映像で残しておきたい気持ちもわかりますが……定点カメラで俯瞰で撮つて P A からライン音声もらうんじやダメなんですか？」

「それだけじやあ不満だからおめえを呼んだんだよ。このライブは今後一生の酒の肴になるんだからな。グダグダ言つてねえで仕事しろ」

「してますよ。……あー、スペースちょっと足りねえ。オーナー、カメラ一台減らしています？」

「ダメだ。客のスペースの方もつと減らせ」

「いいですかそんなことして。ただでさえ結構削つてるのに」

「いいんだよ。どーセ埋まらんし、人間はぎゅっと詰めりや結構入る」

「はあ……まあオーナーが良いつて言うならいいんですけど。——言つておきますが、完璧な仕事求められても困りますからね。満足に技打ち（技術打ち合わせ）する時間もないんだから」

「わかってる。ちゃんと給料は出す」

「助手もつれてきたんだから人数分ですからね」「ああ払つてやるさ。……だがな」

「？」

「——賭けてもいいが、おめえは五分後には『金払うんで撮らせてください』って言つてるぜ」

リハーサルが始まる。

安藤達也視点

????? キヤパ 500人というのは決して小さいハコじゃない。だけど、ドームやアリーナなんかの大箱と比べればその差は歴然だ。自然と客全体との距離が近くなる。

だから、観客たちが面白らつてている様子が、この『サラスヴァティ』ではよく見えた。観客の反応も当然と言えば当然だ。何しろステージに上がってきたのは四分の三が代打。つていうか武一さんだつて出番はもつと後のはずだつたから、何なら全員代打だ。「話が違う」と文句の一つも上がりそうな場面だ。

だけど、観客たちは当惑しても不満の声を上げることはなかつた。  
何故なら——

「よう皆！逢いたかつたぜ！」

スターの声で語り掛ける彼のビジュアルが余りにも強すぎたからだ。

女性も男性も等しく釘付けにして、彼のMCが続く。

「俺はマリオ！いきなりで悪いんだが——今日はライブの前に『悪い知らせ』を聞かせなきやならねえんだよ」

「先に『悪い知らせ』からだ！——今日出演予定の面子なんだが、そこの武一を除いて全員病院送りになつちまつた！」

驚きの声がライブハウスに響く。「どうして?!」という疑問の声や、「大丈夫なのか?!」  
という心配の声があちこちから上がる。

「安心してくれ、命に別状はねえらしい」

「原因に關しては——何と刺身にハラ刺されたらしいぜ！だけど刃傷沙汰じやあしょ  
うがねえ。刺身も普段刺されてばっかりだからな、許してやつてくれ」

彼の言葉に安堵した観客たちは、軽口に笑みを漏らす。

「さあてそれじやあ『良い知らせ』だ！」

彼は、なんだなんだと耳を澄ませる観客たちの目の前で——

「——今日の二時間！代打はずっと俺たちだ！」

胸を張つて堂々と、それを『良い知らせ』だと言い切つた。  
俺は笑つてしまふ。

勿論異論はない。

当たり前だ。チケツト代が安すぎると心底思う。

「自信満々だなあ、あのシゲル声」

「マリオ？誰？巧いの一？」

「武一さんが巧いのは知つてゐるけど

「ベースタツヤじやん。久しぶりに見た」

「キーボードの美人誰？」

「天ヶ瀬麗さん。あの人も久々に見る気がする」

「いやこれマジですごいよ。あのライブのメンバーの、四分の三が揃つてる」

「得したな。刺身はずつと刺しとけ」

「おつと、やっぱり結構知られてるな！——つてえことは、皆の懸念は俺だけか？」

「そうだー」

「初めて見るぞー」

「ちゃんとギター弾けんのかあ」

「でもツラと声は完璧だぞー」

「SNSのID教えて!!」

「ホントにただのバンドマンなの? 声的に櫻崎シゲルのモノマネ芸人さんとかじや?」

「芸人にしては顔とスタイルが良すぎる」

「アイドルやつたら一日で天下獲れるぞー」

「つていうかなんでカメラ入つてんの?」

「マリオ、その面子で下手だつたら滅茶苦茶浮くぞーつ」

氣安い声が上がる。距離が近いから聞き逃しようもない。

彼はそれを聞いて、いたずら小僧のような笑みを浮かべながら――

「安心してくれよ! 追い風が吹いてんだ!」

余裕綽々で請け負った。

「セトリ確認したらなんとまあ櫻崎シゲルの多いこと多いこと……分かるか? 渡りに船だぜ! 何しろほら、俺つて声が似てるだろ?」

観客たちは『似てるー!』の大合唱だ。

「だろ? 別に似せようとしてるわけじゃねえんだが、そつくりつてよく言われんだよ」

「へへ」

「——歌もギターも、うり二つだつてな！」

言うが早いか搔き鳴らしたギターの超絶技巧で、彼は観客全員の度肝を抜くと——  
「楽しんでいこうぜえつ！」

痺れる声でシャウトした。

『お決まりの』セリフを聞いて、ぶるりと身体が震える。

——神がかつたギターテクとボーカルだつてことは、ちよつと聞いただけで分かつて  
いた。

でもさつきのリハで新しく分かつたこともある。

例えは、ちょっとした仕草に滅茶苦茶見覚えがある、とか。

こつちが教えた覚えのない個人情報について言及することがある、とか。

演奏のクセが『そんなに似るわけねーだろ』つてくらいとある人に似てる、とか。  
「ちょっと貸してくれよ」つて言つて触つた楽器をどれも一流に弾きこなしてしまつて  
——同じことが出来る世界のバグみたいな人に一人だけ心当たりがあるとか。

——初見でこんなに息が合うなんてのは絶対にあり得ないってこととか。

何故か彼は俺たちの癖を完璧に理解していた。  
何故か俺たちも彼の癖を完璧に理解していた。

そして本番を迎えた今——お互いの考えすらも、手に取るように分かつてしまふ。  
——こここのファイルインから少し走らせたい。

——次の周期でカウンターメロディ。

音から意図が伝わってくる。言葉にしなくとも全てがかみ合つてる。

長いブランクで俺の腕に浮いた筈のサビは、ワンフレーズごとに滅茶苦茶な速度で  
吹つ飛ばされていく。

……うん。我ながら驚異的なスピードで勘が戻つてるとと思う。

戻つてるとは思うんだけど――

正直、まだ少しばかりしつくりこない。

流石に弾いてない時間が長すぎた。

そんな俺のもどかしさに気づいた彼が、音楽を通じて語り掛けてくる。

「おいタツヤ。俺が引っ張つたほうがいいのか？」と。

挑発的な笑みを浮かべた彼は、そんな風に煽つてきた。  
他の誰でもないこの俺を。

——脳ミソのどつかで、カチン、とスイツチが入つた。

舐めてもらつちや困る。

俺を誰だと思つてるんだ。

俺は——超一流だから、ツアメンやつてたんだよ。

誰よりも巧かつたから。

コイツに関しちや、貴方よりも。

俺の手が音と繋がる。勝手に動き出す。

全盛期をなぞるように——いや、超えるように。

一段上がつた俺の演奏に、一瞬のラグも無くギターが合わさる。  
魔法みたいだ。

完全にこちらの呼吸を読んで、完璧に音を合わせてくれる。

それが最高に気持ちよくて、指がどこまでも滑らかに動いていく。  
ああ、懐かしい。

一秒ごとに上達していくこの感じ。

憶えがあつた。

こんなことを出来る人は、三千世界にひとりきりだ。

——どこ行つてたんですか。ずっと待つてたんすよ。

俺も、武一さんも、麗さんも。

観客のみんなも。

ほら。歓声が雷鳴みたいだ。

二年分のうつぶんを晴らすかのようなテンション。

はは。

すげえ。

楽しい。

音楽は、こんなにも楽しい。

そうだ。俺がシゲルさんに憧れたのは、あの人が最高の音楽を演る人だつてのもあつたけど——

世界中の誰よりも、楽しそうにしてたからだ。

俺もあんなテンションで、何かに夢中になれたら——それはきっと、最高の人生だと思つたんだ。

ああ、夢見心地だ。

人生の殆どと一緒に過ごしてきたベースという楽器が、どこまでも頼もしい。二年前俺はコイツを裏切つたけど、コイツは俺を裏切らないでいてくれた。憧れだけで音楽をやつてきたわけじやない。ベースを弾いてきたわけじやない。久しぶりに弾いてみてつくづく思う。

俺は。楽しいから弾いてた。

——愛しの相棒よ。最高だ。愛してる。お前に首つたけだ。  
二年のブランクは、マジで気の迷いだつた。許してくれ。

ありつたけの情熱を両手に込めて五弦を爪弾くこの瞬間が、楽しくて楽しくて——時  
間は弾丸みたいにすつ飛んでいった。

「つたく、二時間が一瞬だな！」  
彼の言葉に、俺はハツと正気に戻る。そうだ今弾いたの最後の曲のアウトロだ。なん  
てこつた。

——だけど、良いライブには『この後』がある。

長い拍手をする人がいる。俺たちの名前を連呼する人がいる。  
もつと直接的に、「アンコール」と叫ぶ人がいる。  
どの行動も意味は同じだ。

もつと続けてくれと、そう願っている。

——そうだ皆。

その歓声で、引き留めてくれ。

今度こそ終わらせないで。

もう少しだけでいいんだ。

どうか俺に、俺たちに、あの日の続きを——

「やつぱりいいもんだな！ アンコールの掛け声ってのは！」

「いくらでも演れる気がしてくるぜ！」

「——お前たちもそうだろ!?」

！

そう言つて振り向いた彼に、俺は首がちぎれんばかりに領きを返す。

麗さんはにつと笑つて、武一さんは返事代わりにスネアを叩いた。

「よおし！ ジャあもう一曲行くか！」

観客たちの大歓声が響く。

数百人しかいないとは思えない音圧だ。

「——櫻崎シゲルの曲はどれも大好きなんだが、中には特別な思い入れがある曲もあつてよお」

そう言うと、彼は静かに目を閉じた。

過去に思いを馳せるかのようだ。

彼の言葉を聞き逃すまいと、観客たちは静まり返る。

「いつか皆の前で演りたいな、って強く願つてたナンバーもある」「

「そう。いつか……」

静かな時間はそこまでだつた。

彼はやにわに目を見開いて、

「——どうやら『いつか』がやってきたぜ！」

その曲名を、口にする。

「いつの日か」！

ああ――

俺の『休憩』が、やつと終わつた。

# 番外編 渋滞知らずの精霊馬 5（完）

ライブは二時間の予定で。

アンコールは四時間続いていた。

もはや何度目か分からぬアンコールを終え、今日の立役者たちは楽屋の椅子に腰かけている。

——今なお響く観客たちの声は、そこまで聞こえていた。

『アンコール！ アンコオオオオオルッ！』

『マリオオオオオオ!!』

『タツヤ、タツヤ！』

『うららさーんっ！』

『もつぺん出てこい武一いいいツ！お願ひだからアアアアア!!』

『ワンモー（o n e m o r e）!! わんもー!!』

『『『わんもー!!』』』

「アンコールが終わらないっすよ」

ブランク明けの体力と諸々のテンションブーストがついに底を突いて、タツヤは今や項垂れていた。

「いい加減ワンモアがゲシュタルト崩壊しそうだわ」

ぼんやり天井を眺めながら麗が呟く。

「オーナー、もう照明つけちまえよ！死ぬまで終わんねえぞコレ！」

全身汗だくの武一が肩で息をしながら言う。いくら凄腕のドрамাと言えど、リハーサルを含めればもう今日何時間ドラムを叩いているかわからない。消耗は激しかった。「やかましい。ライブ終わらせようとするとスタッフが全員俺を阻止してくるんだ。誰も言うこと聞かん」

高い金を出して呼びつけたはずのカメラマンですら、「無給でいいから！お金払うから！」と絶叫しながらオーナーにしがみついてきた。

「だけどこのままじゃ俺たちが死ぬか観客が死ぬかのチキンレースだぜ」

頭を抱えた武一は震えた声を出す。

まとまつた休憩時間も無しに計六時間立ちっぱなしの観客たちは、どうしたことかまだ体力の底を見せずに騒ぎ続けている。叫びすぎて声がカスツカスの者も多いが、それでもテンションは最高潮だ。

チキンレースは分が悪かつた。

オーナーは「そもそもアンコールに応えちまうのが悪いんだろうが」と言いたくなつたが、ぐつと飲み込む。今日という日にそれを口に出すほどオーナーは無粋ではなかつた。

誰もが疲れていて、しかしだだ一人意氣軒高の者がいた。

「——死ぬまでやるのもオツなもんだろ！いいじやねえか、付き合うぜ！」

もちろんマリオである。

こいつだけは当然のように喉も枯れてないし息も上がつてなかつた。最高のパフォーマンスのまま元気溌剌だ。

拳を掌に打ち付けて気炎を上げるマリオを、オーナーを含めた四人は白い眼で見る。「そりやあお前はいいだろうよお前は」「なんか貴方多分死なないし……」

「せめて一時間くらい休憩もらわないと。こつちは人間なんすよ」

「俺も人間だつての！」

「——そいつが人間かどうかは置いておいて、ともかく限度というものはある」  
オーナーはため息をついて、ライブフロアの方角に顔を向ける。

壁越しにも観客の大熱狂が伝わってきた。

「……ながーい経験から言わせてもらえば、ありや見たことないレベルの危険なテンションだ。——いいか。奴らがまだあそこに留まつてるのは、お前らがずっとアンコールに応えてたからだ。一時間どころか三十分も間を空けたら両手振り回しながら楽屋まで突っ込んでくるぞ」

「暴徒じやねえか」

ひきつった顔で呟く武一に、オーナーは「それに加えて」と言葉を重ねる。

「店の外もかなりマズイことになつて。客の一人がスマホで撮つたライブの映像をネットに上げたらしい。それがSNSで拡散されて、この店は包囲されつつある。店の外が人で溢れることになれば最悪警察沙汰だ」

物騒なその言葉を聞いて、むしろ武一は胸をなでおろした。

「……つまりもうお開きの時間つてことだな。ほつとしたぜ」

「えー……なんだよノッてきたところじやねーかよ。だつてまだまだ宵の口——」

そう言つて不満げに楽屋の時計を見たマリオは、そこで「——あつ！」と声を上げた。

「——そうだ俺24時門限なんだつた！すっかり忘れてた!!」

マリオのその言葉を聞いて、オーナーは自らも時計に視線を移す。

——24時門限。なるほどそりや道理だ、とオーナーは思う。

現在19時過ぎ。

——今ならば、名残を惜しむくらいの時間はあるだろう。

「なんにしろ警察沙汰は勘弁なんでな。——ライブはここまでだ」

反論を許さない強さでライブの終了を告げたオーナーに、マリオはがっくりと肩を落とした。

「ぐつ、ちくしょーこれまでか……24時までどうすつかな」

「——あん？」

途方に暮れたように言うマリオに、武一は呆れ顔を向けた。

「どうするか？——んなもん決まつてんだろ、なあ？」

「愚問ね」

武一の言葉に、麗は当然とばかりに即答する。

「ん？」

「ほら。いい時間じゃないですか」

首を傾げるマリオだったが、そう言つてくいと何かを傾ける仕草をしたタツヤを見

て、その顔にも理解が広がつた。

「——なるほど！そりやそうか！」

「ライブの後は打ち上げだよな！」

「「当然!!」」

はしやぐ四人を見て、オーナーは緩んだ口元をぐつと引き締めてから出口に向かつて顎をしゃくつた。

「今ならまだ抜けられるから、さつさと裏口から出ろ。タクシー回しておいた」

「「「！」」」

如才ない手配に、四人は喜色を浮かべて立ち上がる。

「さつすがオーナー！抜かりねえ！」

「ありがとうございます！」

「伊達にジジイじやないわね」

「武一、タツヤ、麗の三人は、そう言いながら慌ただしく楽屋を後にして——

その三人の後に続いたマリオは、最後に扉の隙間から顔を覗かせる。

「——サンキュー、おっちゃん！樂しかったぜ！」

騒々しく閉じられた扉に背を向けて、オーナーは煙草を一本取り出す。

「……けつ」

その視線の先にあるのは、ひと際目立つサイン。

「おめえもおっちゃんだろうが」

にやりと笑つて、オーナーは咥えた煙草に火をつけた。

????  
安藤達也 視点

俺は、いや俺たちはいい感じに出来上がつていた。  
皆で何度も来たことのある居酒屋で、ひたすらくだらない話で盛り上がりしている。

酒が旨い。

ツマミが旨い。

楽しい会話は途切れることがない。

「いやマジかよ?!こんなヘッドフォン出たの!?

「すっげー良いだろコレ。俺二つ持つてるからもってけもってけ」  
「マジ?いいの?!愛してるぜ武一!」

「あーはいはい俺もだよ、シ……マリオ」

「ほら、鶏皮来たわよ。貴方これ好物だつたでしょ」

いちやいちやする二人の間に、皿を持った麗さんが割つて入る。

「おー、コレコレ!パリパリしてて最高!」

「そこにコレ!濃いめのハイボールつすよね!」

にこにこ笑う彼に、俺もすかさずグラスを差し出した。

「わかつてんじやねえかタツヤ!」

ますますご機嫌でグラスを傾ける彼だったけど、それを見る武一さんは少々あきれ顔  
だった。

「……しかし収入のわりに安いモン好きだよなー、お前。もっと高いの頼めよ」

「うるせー。俺の好きなもんくらい俺が決めんだよ」

即答した彼が鳥皮をパクつく。

心底幸せそうだった。

「……そ、うつすよね」

「——あつそ、うだタツヤ！」

小さく呟いた俺に、彼がロツクオンしてきた。あつ、ちょっと怒ってる時の表情。

「リハでも言つたけどお前しばらくサボつてやがったな！」

——ぐつ、何の言い訳もできない指摘が飛んできた。

「いやそれに関してはマジですんません……」

「事情が事情だつたんだよ。許してやれ」

「うるせー！」

武一さんがとりなそうとしてくれるけど、どうも怒りは收まらないらしい。

「何があつたんだか知らんけどベースとドラムはバンドの心臓だろうが！心臓が急げてんじやねーよ！死んじやうだろ！」

「……でもほら、本当に心臓止まつてもライブやつた人だつているじゃない」

麗さんがそんなことを言つたけど、彼は「はあ？」と心底不思議そうな顔をした。

「嘘つけいるわけねえだろそんなヤツ。——漫画の話か？」

「「「……」」

俺たち三人は顔を見合わせる。この人の『演技力』の欄にはでつかいバツが付いているので、本気で言つてるのは間違いない。

——あ、でもそうか！ほんと知らない人もいないくらい有名な逸話だけど、確かにこの人だけは知らなくてもおかしくないのか！

俺たちが「なるほど！」と頷きあうのをこれまた不思議そうな顔で見て、彼はグラスを煽ると一息ついた。

「ふーっ……だけどまあ、お前がベースから離れるくらいだ。余程のことがあつたんだろ？」

うんまあ……大体貴方のせいですけど……

俺の視線に気づかず、彼は腕組みしてしみじみと頷いている。

「ま、人生けっこー長いからな。回むことも、それなりにあるよな」

そう言つた声には実感がこもつていて、

「——貴方にも、あつたんですか」

俺は思わずそう尋ねていた。

「……おう。もう立ち上がりがれないかも、つて思つたことも——たまーに、な」

素直に答える彼を、武一さんも麗さんも面食らつた顔で見る。

「へえ、そりや意外だな」

「ええホント。貴方は死んでも立つてるイメージだわ」

「俺を何だと思つてんだ?」

「……そりやあ」

「ねえ……」

二人は言葉を濁した。

実際のところ「俺を何だと思つてんだ」へのアンサーは一つしかないんだけど、なんというか彼が一生懸命隠してるのはわかるので、直接口に出すのは憚られる。理由があつて隠してるんだろうし——『正体を言い当てると消えてしまう』なんて、結構ありがちな話だ。

訝しがる彼に、俺は矛先を逸らす意味でも質問を重ねた。

「それで、どうやつて立ち直りました?」

「ん?そりやお前コレだよ」

彼はギターケースを手繰り寄せると、修理の跡がある金具部分に触れて顔を綻ばせる。

「やっぱり、ギター?」

「だと思つたぜ」

実に納得のいく答えに、麗さんと武一さんは笑みを浮かべる。

彼は「まあな」と肩を竦めると、言葉を重ねてきた。

「でもギターに限つた話でもないぜ。——つまるところ、俺の『好き』さ」

彼はぐいーっとグラスを干すと、どこか遠い眼をした。

そして静かに語りだす。

「——まあ『好き』のせいでつらい思いをすることも確かにあるんだけどよお。マジで有難みが分かるのは、大ピンチの時なんだよな」

「大ピンチの時、ですか……」

「……ああ。だからベースを手放すなよ、タツヤ。——休んでもいい。ちょっと距離を置いてもいい。でも、見えるところに置いておきな」

優しい眼をした彼の、その痺れる声が、心に直接届くようだつた。

「いつかお前に『絶体絶命』がやつてきたとき——そう、そのときだ！」

「お前の『好き』が！」

「ピンチのお前を、救つてくれるぜ！」

」。

「……つと、なーんか説教臭くなっちまつたな！わはは、ガラじやねえわ！飲め飲め！」

「はいっ」

照れくさそうに酒を注ごうとしてくる彼に、俺は素直に杯を差し出す。

ああ、楽しいな。

夢みたいだ。

この時間が永遠に続いて欲しいと、俺は心底そう思う。

だけど――

「――げつ!? やべえもうてつぺんかよ!」

どんなに楽しい時間にも、終わりは来る。

ふと時計を見るや顔を青くした彼は、慌てて立ち上がった。  
時計の針は、日付が変わる五分前を指していた。

「……それがどうしたんだよ。朝までコースだろ今日は」

「そうもいかねーの！門限あるつていつたろ！」

「零時門限つてシンデレラみたいね」

魔法が解けちゃうのかしら、という麗さんの小さな呟きに気付くことなく、彼はあち  
こちのポケットをまさぐる。多分財布を探してるんだろうけど見つからないらしい。  
やがて彼は武一さんに拝み手すると頭を下げた。

「……悪イ武一、無一文だ！ツケといてくれ！」

「バーク、奢らせろ」

「さんきゅ！」

「六文くらいは持つておきなさいよ」

「俺は何時代の人間なんだよ」

麗さんの謎のセリフに突っ込みを返して足早に店を出る彼を、俺と麗さんは追つかけ  
る。

「今どこ住んでるのよ。タクシー呼ぶ?」

「料金スゲーことになりそうだから無理だ。えーと、ヤベ工な場所が……」

焦つた様子の彼はきよろきよろと視線を動かして——何故か少し先にある店と店の間、路地裏へと続く道に目を付けたらしい。

「あそこでいいか?」

そう言つた彼は振り返つて俺たちを見て、笑顔でサムズアップをする。

「んじや、あばよお前ら!——ありがとな! お前らのおかげで、最高のライブだつたぜ!

!

余りにもあつさりそう告げた彼は、そのまま駆け出そうとして——

「マリオ!」

爆速で会計を済ませたらしい武一さんが店から飛び出してきて、その背中を呼び止めた。

「あ?」

彼は振り向く。

「——

武一さんは何か言葉を飲み込んだあと、再び口を開いて、

「また、逢えるか?!」

それだけを聞いた。

「……」

武一さんの質問に、彼は今日初めて言葉に詰まると――  
「……なあ。お前ら、またライブやるんだろ?」

逆に、俺たちにそんな質問を投げかけてきた。

俺たち三人は一瞬顔を見合させて、それぞれの答えを返す。

「俺は当然、死ぬまでやるけど」

武一さんは当たり前のように答える。

「こんな楽しいこと他にある?」

麗さんが微笑んでそう言つた。

そして、二年もベースを置いていた俺は――

「はい。絶対――絶対、やります」

臆面もなくぬけぬけと。

「近いうちに。何回だつて!」

だけど心の底からそう言い切つた。

「そ  
うか」

彼は俺たちの答えを聞いて、心底嬉しそうに笑つて――  
「お前たちが、精一杯ライブをやりぬいたら」

「――その時会えるように、話つけとくよ」

再会の約束をした。

だけどそれはきっと――とても、遠い再会の約束。

「……なあーにしょげてんだよ！」

俯いてしまった俺の肩を抱き寄せるようにして、彼が顔を覗き込んできた。

「先は長いぜ！ 最高のステージが、きっとお前らを待ってる！」

俺を見つめる彼の眼は星のように輝いていて、自らの言葉を少しも疑っていないのが分かる。

「だからよ――」

「楽しんでいこうぜ！」

ひと際強く俺の背を叩いて、彼は走り出した。  
俺たちを置き去りにして――

「シゲルさん――！」  
俺はもう限界だつた。

ついに叫んで、俺は駆け出す。

あの人の後を追つて、角を曲がる。

だけど――完全な行き止まりになつて いる路地裏には、猫の子一匹いなかつた。

炎のような熱だけを俺の胸に残して、あの人は煙のように搔き消えていた。

「……いつしまつたな」

ややあつて追いついてきた武一さんが、俺の肩にぽんと手を乗せながら言う。

「茄子の牛、案外足が速いのね」

麗さんが呟いて、空を見上げる。

繁華街の夜空だ。星はろくに見えない。

でもきっと、そこにあるんだろう。

「……よし、店変えて飲み直すか！ 近くに知り合いのやつてるダイニングバーがあんだよ！」

武一さんは俺と肩を組むようにしながら踵を返す。

「——そうですね」

少しだけ名残惜しかったけど、俺は逆らわない。

あの人の消えてしまつた路地裏に背を向けて、ネオンの光に向かつて歩き出す。

どんな楽しい時間にも、終わりはくるけど。

きつと終わりがあるからこそ、楽しい時間は楽しくて。

終わりが来るからこそ、新しい喜びを探しに行ける。  
そうだ。

次はきっと、もつと楽しくなる。  
だから――

いつの日か、また逢いましょう。シゲルさん。

「ひゅー、ぎりぎりセーフって感じか！」

神域への移動はあつという間だつた。

最高の一日を終えて、気が付けばシゲルは神域にいた。その顔は達成感に満ちている。

正体をばらさないよう。日を跨ぐその時までには人目につかない場所へ。その約束は何とか守れた――

と本人は思つてゐるらしい。驚くべきことに。

「シゲルちゃん……貴方つてホント、音楽以外はホント……」

「…………ん？ おお、弁天様！」

気が付けばわなわなと震える弁才天が目の前にいたので、シゲルは胸を張つてみせる。

「へへ、どうだつた？ 見事に正体を隠し通したぜ！俺の腹芸も捨てたもんじやねえだろ？」

大根役者はぬけぬけと言つた。

「捨てたもんだわよ！捨てちゃいなさいそんなもん！」

弁才天が吼え猛る。

「なにつ？！」

シゲルは団々しくも「そんなはずは！」と驚愕に目を見開いた。

「飲みの席でのあなたはもういつそ神がかってたわよ！全ての誘導尋問にひつかかり、しかも引っかかったことにすら気付かないぼんくらっぷり……！」

「えつウソ」

「ほんとよ！もう私たちはこれからあつちの世界の神々に謝罪行脚よ！イザナミ貴女もなんか言つてやつてちようだいな！」

そう言いつつバツと振り返った弁財天だつたが――

「――いない！」

そこにあるのは虚無だけだった。

いや、正確にはひらひらと舞い降りてくる紙片が一つ。

『ぼいすとれーにんぐの時間なので失敬する』

そう書いてある。

イザナミは逐電していた。

「あの女ア!!」

弁才天は金切り声を上げながら紙片をビリビリに破いた。

しかしそれで何か事態が好転するわけでもない。

「ウソ、これ私ひとりで行かなきやいけないヤツ!?いやーッ!絶対すごく怒られる!多分向こうの世界のイザナミが今頃怒髪天!今ならハデスもついてくる!」

「な、なんかすまねえ……」

頭を抱えて取り乱す弁才天だったが、気まずそうに謝罪するシゲルと目が合った瞬間動きを止めた。

「――！い、いや逆転ホームランの手がある……！シゲルちゃん、こうなりや貴方もついてきなさい！プロジェクトオルフェウスよ！こう謝罪にかこつけて一曲披露して神々を魅了し、何もかもを有耶無耶にしてしまうの！」

弁才天は割と無茶なことを言った。

「よくわからんねえけど分かつたぜ！」

でもシゲルは二つ返事だつた。

オルフェウスが何なのかシゲルの知識には無い。しかしそんなことは些事だつた。  
確かにことが一つだけあつて、それはシゲルにとつて最大の優先事項だつた。  
シゲルはやりと笑う。

——次のライブが、また始まる。